

転生先はスカさん一家

行雲流水

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジェイル・スカリエツィのクローンとして生まれ変わった、オリ主の話。

目次

本編

第一話：スカさんのクローンとなりまして。	1
第二話：四女さんが激甘です。	14
第三話：青天の霹靂。	27
第四話：ホテル・アグスタ。	40
第五話：使い魔契約。	53
第六話：怒涛のイベント消化。	65
第七話：終わりの始まり。	78
第八話：決戦。	89
第九話：決戦の後。	100
第十話：最終話。	112
第十一話：E p i l o g u e	125
おまけの話	
第一話：機動六課隊長陣視点	135
第二話：機動六課隊長陣視点	149
第三話：機動六課隊長陣視点	162
第四話：六課での一ヶ月間あれこれ。	174
第五話：機動六課解散後の私。	186
第六話：理不尽は突然やって来る。	197
第七話：やらかした後のツケ。	209
第八話：無償奉仕勤務開始。	220
第九話：SLBをパクってみましょう。	231
第十話：例の二人。／なのはさんvsロゼさん。	243
第十一話：模擬戦の後。	254

第十二話：お披露目会にて。

265

第十三話：カゼ。

277

第十四話：善は急げ、急がば回れ。

290

本編

第一話：スカさんのクローンとなりました。

——あちゃー。死んだかな、コレ。

と、呑気な台詞を浮かべながら私に突っ込んで来たトラックと壁に挟まれて自分の意識が沈んでいく事を頭の片隅で理解していた。そうして訪れた先は、二次創作作品や所謂SS投稿サイトでよく見る転生部屋。もちろん転生というのだから私の眼の前には自称神様が居るし、何やら特典もくれるらしい。神様によると私が転生する先は『魔法少女リリカルなのは』の世界だそう。

まあ、その事については文句なんてない。だって主人公たちに関わらなければ日本で平穏な普通の生活を送れるだろうし。仮に管理世界で生まれたとして大きな事件が起こっても、主役の皆様が頑張つて解決してくれるのだから。他力本願と言われればそれまでだけれど、あんな危なっかしい戦闘集団に関わりたくなんてないからね。いや、まあ良い人たちではあるけれど。

「――Reincarnation」

ん、あれ。その言葉って日本語に直すと”転生”って意味だったよね。ちよつと待つて欲しい、転生特典が”リリカルなのは”の世界に飛ばされるだけって聞いた事がない。ほらよくある銀髪オツドアイとかチート魔力とかチートデバイスとか融合機はないのかなー。ないんですねー。あははは。彼女らの物語に介入しなくてもあつたらあつたで便利だから、貰えるものは貰つておきたかつただけね。ま、それはそれでいいか。モブキャラとしてその世界で平穏に生きて行こうじゃない。

そんな私の決意は直ぐに瓦解する。

おぼろげな意識が少しずつ覚醒していき、どうにか目を開ける事が出来た。視界が霞んだままどうにか見えた景色は殺風景だし、なんだかオレンジ色の世界に包まれているし。その理由が分かったのは暫くしてから的事だった。私の眼の前に現れた白衣を着込んだ中年男

性。何処かで見えた事があるけれど思い出せないじれつたさを感じながら、不敵に笑っている男の人に掘りの深いイケメンだなーとか思っ
てしまった私を殴りたい。

混乱していた頭を整理しよう。事故って死んじやった、までは許そ
う。いや、まああんなに簡単に死にたくなんてなかったけれど、死ん
じやったものは仕方ない。仕方ないんだ。

——だけれど、さあ……、ねえ？

なーーんで、転生先がジェイル・スカリエツテイ一味のアジトなん
でしようかねえ。神様。嫌がらせにも程があるんじゃないのかと。
意味不明、と叫びたい所だけれど現在の私は小さい赤ん坊の状態なの
で喋れないし、スカさんやナンバーズの何名かが私の培養槽の前に
立ってお話しているんだけど、何を言っているのか解らないんだよ
ね。

多分ミッドチルダ語で、こりや理解するまでに時間が掛かるだろう
なーって。暫くして培養槽から取り出された私は、赤子として扱われ
て色々私の精神をごつそりと削られている状態で。いやさ、前世で
経験している事だろうけれどその時の記憶なんて消え去っているか
ら。トイレに自力でいけないし、食事も自分で摂る事が出来ない。だ
から誰かの御世話にならなきゃいけないんだけど、これが凄く羞恥
心を煽る。心臓に悪い。

「……………」

時折私の様子を窺いに来るスカさんはイケメン。だけれど無表情
のまま何も言わずに暫く様子を見て私の下を立ち去るだけ。何を考
えているのかさっぱり分かんないし、何が目的なのかもわかんない。
たしかプレシアさんと面識があるから結構な年齢の筈なんだけれど、
見た目が超若いんだよね。ま、リンデイさんや桃子さんも年齢設定よ
りも若く見えるのだから、これはきつと世界の修正力なのかも。

けれどこの世界に生まれた私なのだから、私も同じように彼等と同
じ可能性も捨てられないから老けにくい体質かもしれないし、魔法世
界だから”不老”の技術があってもおかしくは無いから、それにあや
かれると嬉しいなあ。さて私のくだらない悩みはさておいて、アニメ

だとすんごい顔芸を披露しながらスカさんは自分の理想を語ってたけれどその様子はない。あの顔芸を生で観てみたい気持ちもあるんだけれど、残念だ。

体が成長しないまま培養槽から取り出されたので身動きが取れなくて誰かの手助けが必要な私なのですが、その手助けはナンバーズが一番ウーノさんを筆頭に、三番トーレさん四番クアットロさんが主に世話をしてくれてる。

で、二番目のドゥーエさんは居ないのかってなるんだけど彼女は多方面に潜伏張り込み捜査中なので滅多に姿を見ないけれど、時々報告がてらに顔をだしてくれてるよ。皆あんまり表情が多くなくてちよつと怖い雰囲気醸し出しているんだけど、行動は優しいので文句なんてない。……ないんだけれど未だにミッドチルダ語が理解出来ないのは如何なものか。こう、スカさんの超絶技術でどうにか出来ないものかと思うけれど、その事実を知らない彼がどうにかしてくれる筈はなく。英語に近い発音だけれど何かが違うので、分からないむず痒さを感じつつも時間が解決してくれるだろう。だって行くあてもないから逃げる訳にも行かないし、身体も赤ん坊の状態だから何にも出来ないんだもの。

原作アニメだと主人公たちの敵に立つ側だからどんな扱いを受けるのか不安だったけれど、今の所何事もなく普通に生活をしている。よくよく考えればスカさんの身内みたいなものだから、彼等と敵対する事はないだろうから。取り敢えず原作三期になるまでは此処でお世話になろうかと思う。衣食住の心配をしなくてもいいし、次元世界の詳しい知識のない私が此処を出て生活できるとも思えないから。

◇
スカさんの下でお世話になり始めて三年が過ぎました。歩けるようになり、ミッドチルダ語の理解も完璧になったしアジトでの生活に不便もない。でもこの三年で衝撃の事実が一つ明らかになってしまった。

——私、ジェイル・スカリエッティのクローンでした。

テヘペロ☆したい所だけれど、この顔では似合わないので我慢我

慢。そう生まれ変わった私はスカさんのクローンでしかも女性版。スカさんの因子を受け継いでいる人たちもいるけれど、私だけちょっと違う。性別が違うだけで遺伝子はスカさんそのものなんだけれど、スカさんの因子を持っていないからスカさんの考え方は理解してないし、しようとも思わないだよね。原作アニメに存在しないキャラだからどういう意図で造りだされたのかは不明なまま。スカさんの事だから『面白そうだから』で済むような気もするけれど、気にしたら負けだから考えないようにした。

「お嬢様、ドクターがお呼びです」

「あい、うーのおねーたん」

与えられた自室で誰かが来たので振り返ってみれば、扉の傍にスカさん一味の長女ウーノさんの姿が。私が返事をするなり、顔をへらりと弛ませて近づいてきて私を優しく抱き上げる。三歳になった私なんだけれど、何故かミッドチルダ語の発音が上手く言えないでいる。ミッドチルダ語の理解は完璧だと言うのに、発音だけ出来なくて恥ずかしいったらありやしないけれど、身体が成長すれば直るだろう。それまでの我慢だ。

あ、そうそう、スカさんのクローンだからか、ナンバーズの皆様から『お嬢様』と呼ばれている私。ちよつと恥ずかしいけれど、定着してしまっただけだから仕方ない。私がこの場所で生きて行けるのは偏にスカさんのお陰なので、スカさんの命令には逆らえない。といっても無理難題は言われないから、拒否や否定する事はないんだけどね。

「っ……。行きましようか」

手で口元を抑えながら何故か一瞬私と目を逸らしたウーノさん。最近、彼女達ナンバーズの皆様の様子が変である。私に『姉』と呼ぶ事を懇願しその願いを叶えてあげてみれば、ある人は涙を流し、ある人は蹲り、ある人は天を仰ぐ。何をしているんだこの悪人たちは、と思いつつ三年間一緒にアジトで生活しておりスカさんや彼女たちと距離を縮めていつている身としては面白い人たちだなーって。

「おねーたん、じぶんであるけましゅ」

「ドクターの部屋までは距離があります、このままで行きましよう。」

それとお嬢様はもう少し私たちに甘えて下さい」

抱き上げてくれたウーノさんから落ちない様にと、首に腕を廻して落下防止。幼女だから非力で、ちよつと心許無いけれどやらないよりマシだろう。そんな私を見てウーノさんは一度抱き直して、スカさんの元へと長いリノリウムの床で出来た廊下を進む。確かに私はまだ三歳という身だから我儘とかを言いたい放題言つて自由奔放に動き回るのが本当なのだろうけれど、前世の記憶が存在するから子供らしくはない。

その為、なのだろうか。このアジトに居る皆の甘やかしが凄い事になつている。個人差はあるものの、皆、私に甘いんだよね。極甘の人も居るし。理由は本当に不明。あえて理由を付けるなら、私がスカさんのクローンだからだろうか。深く考えると私の未来が真つ暗になりそうなので、あまり考えない様になっているけれど。

「おとうさま」

考え事をしている間にスカさんの部屋、所謂研究室に着いていた。立派なロリータなので、舌がきちんと回わつてくれなくて発音が綺麗にできなくて恥ずかしい。不本意ながら、スカさんの事を”お父様”と呼んでいるのだ。不本意だけれどね、とほほ。だって、此処で生きて行くには彼に媚びなきやならないんだ。不興を買つて、追い出されるわけにもいかないし。

”お父様”呼びに落ち着いた理由だけれど、父さんは違うと思うし、お父さんでもないし、父上……ないわ……パパなんて以ての外で”お父様”に落ち着いた。微妙に他人行儀な呼び方だから、どうかスカさんの事をそう呼べたんだよね、慣れてきて最近違和感があるまりないけど。

「嗚呼、来たか。ウーノから報告を聞いてね。卒業おめでとう、流石私の娘だ」

スカさんが私に気付いて振り返り、私を抱き上げてくれていたウーノさんが床へと下してくれて、スカさんの下に覚束ない足取りで辿り着く。

「ありがとうございます。おとうさま」

この口ちゃんと言が回らないと心の中で愚痴りつつ、ペこりと頭を下げる。スカさんが言った通り私はミッドチルダの首都であるクランガンにある超有名大学を無事に卒業できました。戸籍や経歴を詐称して『最高評議会』の名前をちらつかせて裏入学をした。裏入学と言えど、私が三歳児って事は偽っていなくて良いのかなって思ったんだけど良いみたい。ミッドチルダの学校は飛び級が可能で、三歳児でもちゃんと学力があるのならば大学も大人の人と同じように通えるんだって。どうやら優秀な人間はさっさと社会に出て貢献しろと言いたいそうさ。

第一世界であるミッドチルダへと通う為にはお金が理由で来れない人も居るから、通信教育の方も確りと整備されていて私も大学には通わないまま通信教育で済ませたんだ。ちなみに通った期間は三月という超短期間。日本の大学だと四年間だけけど、それを考えると凄く短い。短いけれど必要な単位や資格を全て取ったし、文句は言わせない。いや、経歴詐称して入学したからバレたら即資格剥奪なんだけれど、私が学ぶ為に通ったので大学卒業資格を取られても問題はないけどね。犯罪者一味だもの私は。でも犯罪者が勉強しちやいけなかって規則や理由はないし、面白かったから全然OKだ。

専攻はもちろん遺伝子工学を選択。目の前に専門の人が居るのだからスカさんから習えばいいんじゃないのかって思ったんだけど論文とか発表するなら大学にいかなきゃねーってなった。スカさんは少し渋い顔をしつつも最高評議会に頼んでくれて、脳味噌三人も了承をくれた。つか最高評議会の権力ってスゴイね。一瞬で大学のお偉いさんの首を縦に振らせたんだもの。管理局の権力の凄さの一面を見た気分だった。

余談はさておき、スカさんのクローンなので頭の回転が速い事早い事。天才ってスゲーって感心しながら知識をどんどんとすんごい勢いで吸収していったよ。もちろん一番の目的である論文も書いたし、科学誌に発表されたりした。前世で遺伝子関係の論文なんて適当で胡散臭いぞ、と言っていた人が居ただけだけど、確かに地球の技術じゃ限界がありもつともらしく書けば通ってしまう部分があつて、結

構誤魔化しの利く分野だったのだろう。

でもこつちの世界は魔法も発展していて、そういう訳にもいかなかった。チートなスカさんのクローンなのできっちり理解してちゃんと手順を踏んで発表したもの。論文捏造なんてヘマは犯していない。とつとと遺伝子工学の履修は済んだので、他の分野にも私は手を伸ばしていた。それは機械工学。ロボットを作ってみたくて遺伝子工学を学んでいる間にちよろつと手をだして、面白かったからそのまま続けて最後まで単位取得しちゃったんだよね。本当スカさんのクローンで良かったと思いつつ、夢に思いを馳せる。

だってスカさんがデザインしたであろうガジェットドローンの外見は、御世辞にもカッコいいとは言えず。本人の前では絶対に口にはしないけれど、関われる事があるのならせめてデザインに関わろうと企んでおります、はい。あと前世のアニメやゲームで出て来てたロボットを作りたいっていう下心もある。夢と浪漫を詰め込んでいざ参る夢の世界へ。って事で二足歩行兵器最高。ふふ。

「さて、卒業祝いには何が欲しい?」

「?」

私の目線に合わせてしゃがみ込んだスカさん。スカさんはこういう所に一応は常識が有るみたいで、上から見下ろしたままとかはしない。スカさんの言葉が一瞬理解出来ずに首を傾げる私。そんな私を見て一緒に首を傾げて可笑しそうに笑うスカさん。

「無限の欲望と呼ばれる私なのだから、君も何か望むものはあるだろう? それは何だと聞いているのだが」

嗚呼、そう言う事なのか。でも生憎と私はスカさんのクローンって事以外は極々平凡な普通の人間だと思っっているから、スカさんみたいに世界征服なんていう御大層な欲望は持ち合わせていない。だから此処で生活が出来ているだけでも有り難いのだけれど、生まれてからの三年間は彼等にお世話になりっぱなしで何も返せていないから。

「おとうたまの おてちゅだいが したいです」

「……………っ!」

目を見開いて私の言葉に驚く様子を見せたスカさんは、暫くすると

高笑いをし始める。なんで笑っているのか分からないまま一人で勝手に納得したスカさんは『そうか、そうか』と嬉しそうに私の頭を撫でて、作業に戻ってしまったから理由は聞けず。さっきの言葉で悪行家業に手を出す事が決定したから作業をしているスカさんを横目にしながら、空中モニターに映された文字を見る。所々に引つ掛かる部分があつて、その内容をスカさんに伝えてみれば褒めてもらえて。またスカさんは高笑い。犯罪に手を出している事になるんだけど、ただで衣食住を提供してもらおう訳にはいかないから原作に影響しない範囲でスカさんたちのお手伝いをしようと決意した。

「はあ……」

隣でスカさんと私の話を聞いていたウーノさんは何故か深い溜息を吐いて微妙な顔をした。そんなウーノさんを余所にスカさんと私は試作品のガジェットドローンの制作を喜々として進めてる。……機械いじり超楽しい。

余談だけどウーノさんの様子が気になつて後で理由を聞いてみれば、私がこの一味の胃袋を支えている為スカさんの研究に加われれば、台所事情がまた元に戻ってしまいそうだから、だそうだ。嗚呼、そうでした。スカさん一家の食事情つてすんごくヤバかった。ナンバーズの生みの親であるスカさん自身が食事に対しておざなりで、腹が膨れて最低限の栄養が足りていれば良いという考え方だ。その影響はナンバーズの皆様にも響いてて。そんな事だから栄養補助食品やサプリメントで食事を済ませるし、スカさんに至っては食事も摂らず点滴を打ち栄養摂取している始末である。前世の記憶が存在する私は絶句した。それはもう真剣に。まともな食事を摂れない事はストレスにしかならないから。

だからスカさんに懇願してアジトの一角に調理場を作ってもらったんだ。それからというものがご飯を作ってた。三歳児が炊事しているって異様な光景なんだろうけれど、そこはハイスペックスカさんのクローンって事で納得して欲しい。大人みたいな力はないけれど知力はそのなりにあるので、色々工夫しながら通常の五割増しの時間を掛けて必死で作ってたさ。

ナンバーズの皆様には好評だったし、時間の空いたスカさんが時折顔を見せるようにもなってきたから。三歳児の身にはちよつとキツイものもあつたからウーノさんにも手伝ってもらつて。だからその事を考えると溜息が出ちゃつたみたい。それは仕方ないと苦笑しながら、研究ばかりに没頭しないとウーノさんに伝えた。

でも時々スカさんは研究に熱を入れると食事を抜いて徹夜を何日するのなんてザラだから、途中で止めに行つたりもしてる。だって原作開始時期にならないまま何かの拍子にお亡くなりになる可能性もあるし、医療技術が発達して治癒魔法もあるからといつてもどんな事態に陥るか分かんないから結構必死だったかも。そんなお蔭なのか最近のスカさんの顔色が三年前より良い気がする。良い傾向だとは思うけれど、これって原作に影響しなかなと思つてたり。でも彼女たちの事だから、少しくらいパワーアップしたスカさんでも倒しちゃう事だろう。主人公補正が掛かっているだろうしね。

◇

そんなこんなでナンバーズの皆様全員が揃い、ゼストさん、ルーテシアさんたちの姿もアジトで見えるようになっていた。アニメを見たのがかなり昔だし、記憶が曖昧だから原作三期開始時期をよく知らないから断言はできないけれど、レジアスさんが中將になつてたしそろそろかなーつて予感がひしひしとしてる。そんな私ですが、原作を余所にスカさんから与えられた自分の研究室で機械いじりに精を出してる。と言うか、一足歩行のロボット作れちゃつたんだよね。てへぺろである。

巨大二足歩行兵器を作れてしまった記念に起動試験をしようと、スカさんと二人で盛り上がり私を抱きかかえて転送魔法を使って喜々として無人世界へと連れて行つてくれた。文字通り無人で誰も居ないので気兼ねなく実験ができるというもの。爆発四散しようが、暴走しようが何が起きてもおールオツケー状態なので有り難い。起動試験で何かトラブルが起きるのは「お約束」だものね。なのでスカさんはデバイスを手に持つていて、何が起きて自分たちの身だけは守れるように用意してくれている。

「さて、そろそろ始めるとしよう」

にやりと不敵に笑って、スカさんは高らかに宣言する。そんなスカさんなだけけれど、二足歩行兵器に操縦席を設ける事は却下されていた。自分で巨大兵器を手足のように動かす事がロマンだというのに、スカさんは危ないからと言って理解してくれない。なので遠隔操作である、ちくせう。でもこつそり後付で設置できるようにコックピット区画を残してあるし、直ぐに換装できるように準備もしてあるし、コックピットも用意してある。天才最高。

「あい、おとうたま」

私の舌足らずぶりは相変わらずだけれど、今はそんな事を気にしている暇はない。そう、心躍る初起動。胸が高鳴るのは仕方ない事。てかこの管理世界って、技術が発展しているにもかかわらず作業用ロボットとかあまり見ないんだよね。人間の手足の様に動くロボットって土建屋さんとか建築屋さんたちに大人気になりそうなんだけれど、現実はどうじゃない。存在していても簡単なものとか耐久性がないとか、どこかに欠陥を抱えていて。ま、悪用しようとすればいくらでも転用できちゃうから、管理局あたりが規制してるのかもね。

タイヤが必要のない車とか走っているのに本当不思議だけれど、質量兵器を禁止しているから巨大二足歩行兵器は“質量兵器”としてとらえられているんだろう。管理外世界である地球の技術や発想に目を付けた人が居れば、直ぐに転用できそうだからきつと厳しい規制を敷いているに違いない。だからこそ、便利なものが普及していないという矛盾に納得が出来る。

巨大二足歩行兵器が駄目で安易に魔導師を超える存在を望むのなら、パワードスーツあたりが適当なのかも。前世で読んだ漫画やゲームあたりを参考にしてみるか。面白そうだし戦闘機人の技術が応用できそうだし。小型化させ携帯可能な電磁投射砲とかレーザーブレードとか、浪漫溢れる兵器が沢山装備できそうだし、考えるだけでも楽しいもの。面白い、楽しいは正義だ。

量産体制が整えば警備とかに丁度良いと思うし、レジアスさんが喉から手が出るほど欲しがりそう。でも、予算面で折り合いがつかなく

て頭抱えそうだなあ、あの人って苦勞人属性持ってるよね絶対。やる事なす事、なんでか邪魔が入ってる。魔力を持つている人が優遇される世界で、魔力を持つていなかったレジアスさんは中將まで出世した努力の人なのだから決して無能な筈はないんだけど、運がない。

予算って言葉で思い出したけれど、目の前に聳える二足歩行兵器には結構な金額がつき込まれている。そんなお金を何処から持ち出したのかというと、スカさんの財布からである。もちろん最高評議会からの予算もあるだろうけれど、こんなものが作れてしまった理由はスカさんが持っている才能とお金とアジトの設備が充実していたからに他ならない。

何年か前にスカさんが開発した傀儡兵のデータもあつたので真っ白な状態から開発をしていないから、それほどの労力は掛かってないんだけど、前世の価値観がこんなにお金を湯水のごとく使っても良いものかと躊躇してたんだけど。スカさんが遠慮なく使つて良いと言つてくれたし、私のロボット魂に火が付いた事もあつて結局作つてしまったのだから笑うしかない。

傀儡兵を元にしてあるので中身は魔法と機械工学のハイブリッド製。外見は某宇宙でドンパチやってる白と赤と青と黄色で塗装された某アレであるのだけれど、一角獣が名前に付いてたヤツをモデルにしたので結構ゴツイ感じ。ちゃんと変形機構もあるのでバツチリと暴走モードも再現できるけれど、流石にあのシステムは再現できず。

ちよつと想像力が足りなくて今回のデザインは模倣させてもらつたけれど、次に作る時はちゃんと自分で考えなきゃね。カッコいいロボット作品はほかに沢山あるし、ネタも豊富だから頭の中でアレもやりたいコレもやりたいって浮かんでくるから忙しい。

動力は核融合で無限に動くのもまた浪漫でもあるけれど炉心融解とか暴走したらとんでもない事になるので、血が騒いだけれど止めておいた。ほら、元日本人だし原発事故とか目の当たりにしてるから、どうにか押し留まれた。時間があれば戦術歩行戦〇機に似たものも作つてみたいと考へてる。機動システムやら兵装は、ガ〇ダムよりも現実的だしなあ。いやはや夢は尽きない。天才に生まれ変わつて良

かったよ、本当に。

手元にあるいくつかの制御スイッチをオンにして、エンジンを点火させる。まわり始めたモーター音が辺りに響き、スラスターには淡く赤く光り熱を持ち始めた周囲の空気が歪にゆがむ。スラスターから吹く熱風に目を細めながら状況を確かめつつ、取り敢えず起動はクリア了。

「ふむ。取り敢えず起動は成功だが、次はどうなるか……」

不敵な笑みを零しながらスカさんが不穏な言葉を述べる。スラスターを細かく動かしてコントロール下にあるかどうか確かめ、取り敢えずは第一段階クリア。あとは関節の駆動域とかアクチュエータやらを色々と段階を踏み確認しながら、飛行テストに入るだけなんだけれど、いくら天才だと言っても初めて作ったのだから不安が無いと言えれば嘘になる。

不安を覚えつつも目の前にある操作盤を緊張しながら、並んでいるスイッチを全てオンへと切り替える。最小限で起動させていたスラスターは、更に音を立てて熱風を巻き上げる。その風で着ている服が帆を張り、飛ばされそうになるけれどスカさんが私の背中を抑えてくれて、どうにかその場に留まる事が出来ていた。

——あ、ヤバイ。

そう思った瞬間には時すでに遅しだった。予想よりも多量に燃料がスラスターへと流れ込んでしまったのか、熱量に耐え切れず爆発。派手に部品をまき散らして二足歩行兵器としての面影を残さないまま四散してる。

スカさんが咄嗟に展開してくれた防御魔法の後ろに居たお陰で怪我はないけれど、丹精込めて作った初めてのモノがこんな結末を迎えてしまうなんて。周辺に響いた轟音がやっと静まって、煤と埃にまみれて壊れた機体を仰ぎ見る。

「はははっ！ 我々科学者には失敗は付き物だ。これを教訓にしてまた次へと進めば良いだけの事だ。なに、君ならば直ぐに出来るさ」私と同じように煤と埃まみれになっているというのに、高らかに笑うスカさんはこの現状が楽しそう。初めて自分自身で設計から製造

まで完全監修で創った機体は、見るも無残な姿になっていた。

つぎ込んだ時間やお金、他にも色々試行錯誤をしながら作ったと言うのにこの結果だ。スカさんみたいに、笑い飛ばせば良かったのだけれど泣けてくる。というかもう既に泣いてる。涙があふれて止まらない状態。溢れ出る涙を、服の袖で拭いながら決意する。次は失敗しない、と。そんな私の様子が気になったのか、スカさんが私を抱き上げて、アジトに戻ろうって。

——泣き顔の私の娘、次元世界一超可愛い可愛い！

と、壊れた思考をスカさんの脳内は発露させていた。超のつく天才の考えている事は理解できないものである。そんな事だから、スカさんの脳内思考を私は知る由もない。

第二話：四女さんが激甘です。

ラボと言う名の自分の研究室に引き籠もってパワードスーツの開発に精を出している時だった。

「やあん、可愛いわあ」

空中にハートマークを何個も浮かべそうな勢いの猫なで声を出しながら椅子に座っている私を抱きしめて頬擦りするのは、誰であろうスカさん一家の四女であるクアットロさんだ。原作アニメ三期の最終話辺りで、スカさんと同様に素晴らしい顔芸を披露し非道っぷりな思考を叫びながらも、あっさり主人公に破れ去っていった憎めない人と前世の私はそう記憶していた。

そうして現在の私の彼女に対しての認識は、時折腹黒さを見せながら飽和状態にもかかわらず愛という名の砂糖を私に更にぶち込もうと邁進する素敵な四女さん、である。戦闘機人な彼女だけれど、柔らかい胸をぐにぐにと押し付けて頬擦りを続行してる。

どうにも抱き癖が彼女たちに付いてしまったようで、私を見るなり抱き上げて頬擦りやらおでこにキスするのは日常茶飯事と化している。もちろん私の事を快く思ってくれていない人も居るので全員という訳ではないんだけど、特にひどいのは長女さんから四女さんまでである。何故だ、解せぬ。

「……やめてくださいやい」

舌足らずながらも、眉間にしわを寄せながら抗議の声を上げる私。未だに上手く喋れないのは如何なものかと思いつつも、まだ三歳児なのだから仕方ないと自分に言い聞かせる。私に頬を寄せるクアットロさんから逃げようとするけれど、抱きしめられている腕の中から逃げられる訳はなく無意味な行為で。

「だーめっ」

逃げようとする私を見て更に甘い猫なで声を出しながらご機嫌な様子で、先ほどの私の言葉は聞き入れてもらえないまま頬擦りも続行。かなりご機嫌な様子で止めてくれそうもないクアットロさんを早々に放置して、私は空中ディスプレイを眺めながらパワードスーツ

の基本データをキーボードを使って打ち込む。空中モニターやキーボードを操る私を楽しそうに眺めているクアットロさんならではの、何がそんなに楽しいんだか。こんな事をする暇があるのならあの見事なやられっぷりを回避する為に、立派な悪役として色々と立ち回り方なんかを考えて欲しいものだけれど、そもそもこのアジトでの生活は悪の秘密組織なんて無縁の生活である。

食料などはとある管理世界の偽装した一般家庭に通信販売で買った荷物として届いて、そこから転送魔法を使用してアジトまで運び込んでいる。もちろん魔法を使っているから、生鮮食品も腐ったりしないまま手に入れられるし。生活必需品も食品と同じ様に手に入れているし。自前で仕入れている物なんてほぼ無し。ちゃんと対価を払って、色々と必要な物を手に入れている。スカさんの研究資材もだ。文明と魔法がミックスされた世界って最高と言いたくなるのは仕方ないのかも。手に入れないなら自給自足をしなくちゃならないし、普通に生活する事も大変だし、そんな事になれば研究や開発どころじゃないだろうし。

そうそう、このアジトの食生活なんだけれどウーノさんと私の二人で調理をした訳なのだけれど、それだと大変なのでただ今ご機嫌なご様子のクアットロさんにも仕込中。二女であるドウエさんにも頼もうかと思っただけけれど、あの人はほとんどアジトには居なくて諜報活動に精をだしているのだから無理。

三女のトーレさんは、と違って一度お願いした所、快く引き受けてくれたは良いものの色々と問題があつて……というか料理センスが皆無だったので早々に諦めようとウーノさんと相談してそうなった。……手にした調理器具をことごとく破壊していく光景は圧巻の一言だった。

生活必需品で思い出したんだけれど、彼女達が着ている通称エロスーツ。スカさんの趣味でそうなったのか、彼女達が選んでそうなったのかは分からないのだけれど、ファッション雑誌とかを手に入れてそれとなく別に服があるんだよとアピールしてみたものの気付いてもらえず。ナンバーズの皆様の普段着は見事そのままエロ

スーツとなつてしまいました。

ま、私は同性だし別にスカさん一家の女性陣たちの裸をみてもなんとも思わないのだけれど、ゼストさんが目のやりどころに困ってるのを見ちゃって、ちよつと可哀そうだったからそれとなく頑張ってみただけけれど、無意味に終わってしまった。ごめんよ、ゼストさん。この一家いろいろと駄目なんだ、きつと。

人様の事を駄目だ駄目だと言いなながらも、自分も駄目な人間にカテゴライズされそうな勢いかもしれない。黙々と研究と開発に精を出して色々制作中だし。でも楽しいのだから仕方ない。巨大二足歩行兵器が作れてしまうくらいなので、今モニターに映し出されているパワードスーツの制作も結構進んでいて順調だ。動力を電池にするか太陽光で蓄電池にするのか、はたまた魔力でそれらの肩代わりにするのか。

前世よりも選択肢が多くて、試行錯誤する日々が続いている。

兵装も考えているのだけれど、どうにも前世の知識故か無意識のうちに質量兵器よりになってしまつていたので気を付けなきゃいけないのが玉にキズ。魔法が主体の世界だから魔法を主としなくちゃいけないのだけれど、これが難しいんだよね。質量兵器寄りになっちゃう事はスカさんには好評なんだけれど、管理世界の人たちには受けが悪いだろうから。管理局法に思いつきり抵触しちゃってるんだけれど、誰かが使う訳でもないし管理局に売る訳でもないし、個人的な趣味の領域だから開き直っている節もあったり。

ふと思つたんだけれど、スカさんはどうして質量兵器や化石燃料とかに手を出さなかったのだろう。管理世界出身の人だからそつちに馴染みが無かつたでも済ませられるけれど、スカさんなら興味持ちそうなんだけれど。わざわざ貴重なレリツクを動力を確保するよりも、通常動力の方が効率的なんだけれどなあ。今度地球の技術を漁ってみようかな。前世はそつち方面に全く興味なかつたし、普及してたものだからその存在が当たり前だったし。パワードスーツにも応用できそうだし。ほら、やっぱりこうして考えて色々試そうとするのは面白い。

「さて、そろそろ行きましようか」

考え事をしながら空中に浮かんでいるキーボードにカタカタと打ち込んでいた手が止まる。声の主に顔を向ければ、にっこりと微笑むクアットロさんが。

作業の邪魔する気配が無かったから抱きしめられたままの状態だったのだけれど、何処に行くのだろうか。というか、何時の間にクアットロさんの膝の上に……。気付かない程熱中していた事に反省しつつ、何処に行くのだろうかと首を傾げる。この研究室以外に行く場所なんてほとんどないし、アジトから外に出た事ないしなあ。この三年間。うん、立派な引き籠もりだなあ。

「お風呂です」

何も言わない私を無視して目的の場所を教えてくれるクアットロさん。そういえばお風呂に入ったのは何時だっただろうか。暫く入っていない気がするんだけど、きつと気のせいだ。

「……二日、ね」

なんで私の心の中を読んでいるんですかーと抗議したいけれど、二日と言い終えたクアットロさんの顔が非常に怖い。笑っているのに非情に怖いのだ。大事な事だからもう一度言っておこう、超怖い。顔芸だなんてからかっていたけれど、これは本気で不味い。背中に嫌な汗をかきながら、どうすればこの現状を回避できるのかシミュレーションしてみるけれど、答え何て思いつかない。そんな慌てた様子の私を見て可笑しかったのか、修羅を宿したクアットロさんだったけれどマリア様の様な慈愛に満ちたような笑顔になる。

喜怒哀楽の高低差が激しいなと思いつつ、彼女の言葉を無碍にすれば私の命があっさりと終了してしまいそうな雰囲気を感じると感じられるので、大人しく言う事を聞かねば。私の立ち位置はこの一家の末っ子的存在なのだから、悲しいかなお姉ちゃんたちには逆らえないのです。

「さ、行きましようねえ」

「……あい」

間延びしたクアットロさんの言葉に頷いて、私が設計監修したお風

呂に着いた。アジトにはシャワーしか無くて、炊事場同様スカさんに懇願して設置してもらったのがこのお風呂。ウキウキで作って貰ったのはいいものの、自分の体のサイズを意識してなくて大人サイズで作っちゃったから一人で入れないっていうミスを犯してしまった。そんな事なので私がお風呂に入るには、誰かの手助けが必要で。本日の手助け担当がクアットロさんだったのだろう。お風呂に一人で入るのは無理なだけけれど、服ぐらい一人で出来るというのに手助けしてくれるのは有り難いけれど恥ずかしい。

私と一緒に風呂に入る当番が、血で血を洗う争奪戦になっていたと知るのもう少し先だった。ナンバーズの皆のメンテナンスをしている時に、やたらと駆動系の摩耗が激しかったので理由を一人一人に聞いた所、正直に私に教えてくれた六番さんと十一番さんには感謝しなくちゃね。七番さんと九番さんは巻き込まれ事故みたいな感じだったそうだから、申し訳ない事をしたなあ。

余談はさておいて。クアットロさんと一緒にお風呂に入っている訳なんだけれども、すべての作業がお任せ状態です。自分で出来るからと伝えても、笑ってスルーされるからどうにもならない。そして他のメンバーもそれを許してくれない。スカさんも一緒に入ろうと誘ってくれた事もあるんだけど、断固拒否。即答で断って隙を見せなかつた所為か、私と一緒に入ろうという裏で画策してたみたいなんだけれど、その目論見はスカさん以外の一家全員にボロ雑巾のようにノされてしまった。

そんなスカさんをちよつと可哀そうに思いながら、流星に成人している男の人と一緒に入るのは私の精神衛生上無理だったので、暴走スカさんを止めてくれた事は感謝してる。不貞腐れて泣きそうになっていたスカさんは貴重だったけれど、暫く臍を曲げていたからご機嫌取りが大変だったんだよね。煮詰まっていた理論を別の角度から見たレポートを渡してみたり、開発が難航していた作品に私も加わってみたりして一緒に居る時間を増やしてみたら、いつの間にか機嫌は直った。マッドな天才でも困る時はあるみたいで、頭を一人で抱えてるんだから見てられないんだよね。愛は無いけれど情有有るのだ

から、つい手を出してしまう。

——家長であり大黒柱であるスカさんの威厳は何処へやら。

そんな事を考えながら、クアットロさんの膝の上で洗髪してもらってただけけれど指の力加減が微妙な具合で、すんごく気持ちいい。二日お風呂に入っていないのなら、たぶんだけれど二徹してると思う。どうにも目の前の物事に集中すると時間を忘れてしまうのはスカさん譲りみたいで、だんだんと私もマッドな領域に入りつつあるのかも知れない。

「……っ」

うつらうつらと船を漕ぎ始めるんだけど、起きておかなければこのまま全自動でクアットロさんに全ての作業を預けてしまう事になっちやうから、頑張つて起きようと踏ん張つてはいたんだけど結局は無理だった。やっぱり三歳児に二徹はキツイ。

「あらあら」

眠ってしまった私を浴槽で溺れない様にと抱きかかえてくれたクアットロさんは、幸せそうな顔をしてたらしい。

——かぼーん。

とレトロな音が響きそうなアジトのお風呂は、シャワー設備しかなかったスカさん一家に好評でした。ゼストさんも時折入りに来ているみたいだから、気晴らしになればいいんだけどね。

◇

パワードスーツが完成して喜々としてさあ初起動だと意気込んでみたものの、被検体として適当な人材が居らず打ちひしがれていた私。だって、ナンバーズの皆様は戦闘機人なので、もともとパワードスーツを装着している様なものだし意味がない。私の実験しても良いんだけど、作つたものは平均的な成人男性に合わせて作っちゃったから無理。それじゃあスカさんが居るじゃんってなるんだけど、この一家の大事な大黒柱にそんな事をさせる訳にはいかないので却下。誰か適任者いないかなーと思ひ浮かんだのはゼストさんだったけれども、あの人は確か病気が何かで無茶を出来ないで話を通すまでもなく諦めた。

——あれ、パワードスーツじゃなくてもよくないかな？

ふと、思う。なんで人間自体を強化する事に囚われてしまっていたのだろうか。別に肉体を強化しなくても、人間型のロボットを量産してデバイスの人工知能を転用させれば結構簡単に組めて、即戦力になりそう。AIならば経験を積ませれば色々と学んでいくだろうし伸び代は結構あるんじゃないのかな。無理にAIを搭載しなくても一定のコマンドを与えて実行するものでも良さげだし、もう少し複雑な事をやらせたいのなら遠隔操作すればいいし。使い方次第で利用価値は出てくるだろうし、色んな事に汎用させられそうだし。でもパワードスーツも人間型ロボットもどっちも浪漫溢れるものだし、こうなったら両方開発しちゃいましょう。

そうと決まればさっくり雛形を作って試作品を完成させなきゃね。ロボットの方は人型に囚われなくても全然OKだし、あとは私が何処まで良いモノに練り上げられるかに掛かってる。高笑いをしたくないりそんな衝動を抑えながら、空中に浮かぶキーボードにべこべことデータや計算式を打ち込んでいく。今の私の顔は三歳児にはとても見えない表情をしていると思う。スカさん譲りの歪な顔をしてるんだろうなあと心の片隅で嘆いているんだけれど、けれどモノ作りの楽しさが上回ってかなりハイな状態でドヤ顔を披露してる。でも、この部屋は私専用の研究室だから誰も居ないので、そんな顔をしてても無問題。

「お嬢様……」

「？」

声に振り返ってみれば、神妙な顔をしたウーノさんだった。一応危ない物もあるので入る時は連絡を下さいと皆には伝えているんだけれど、それがなかったから緊急事態なのかも。ウーノさんがそういう約束事を怠る人ではないからねえ。

「……お忙しい所大変申し訳ないのですが、お願いがあります」

幼女に敬語ってどうよ、と密かに思うけれどスカさんのクローンなんだし仕方ないのかなあ。何度か敬語じゃなくても良いですとは言っているのだけれど、聞き入れてくれる素振りはない。年上の綺麗

な女性から敬語ってくるものがあるから、それはそれで乙なものかもね。前世じゃこういう体験は出来なかつたし。これはこれで萌えるってもん。

で、話の内容はどうかやら研究に没頭しているスカさんを止めて欲しいとの事。部下であるウーノさんは上司であるスカさんに逆らう事が出来ないの、私を頼ってくれたみたい。話を聞き終えて快く了承の返事をすれば、ウーノさんは『ありがとうございます、お嬢様』と言うなり私を抱きかかえてスカさんの研究室へと急ぎ足で目指す。走るだなんて愚行をウーノさんはしない。

「あーはっはっはっはっは！ ふはは、ふはっ、ふははははははははははっ！」

広い研究室では異様な光景が広がっていた。一段高くなったステージ上にはスカさんの姿。そこで大きく両腕を広げて壊れ狂ったように笑ってる。嗚呼、初めて出会った頃にイケメンだなあ、なんて思ってた自分が恥ずかしい。そんな異様なスカさんの前にはつい最近完成したという原作よりもちよつとスマートになったガジェットドローンたちが規則正しく軍隊の兵士の様に並び、上官の言葉を一語一句聞き漏らさない様にと真剣に聴いているよう。……いや機械だし人工知能は搭載されていないから、スカさんの言葉を理解するのは無理なんだけれどね。

どうしてこんなアップパーなテンションに入ってしまったのかは不明だけれど、予測は出来る。最高評議会の三人に何か言われたに違いない。いくら天才といえど、後ろ盾を失えば何も出来なくなるのだから所詮は子飼いのサラリーマンと変わらないのである。スカさんは。だから、まあ、原作のような御乱心を起こしてしまったんだけれど。

その御乱心が近いうちに起こるだろうし、どうしたものかなあ。困ったもんだ。で、最高評議会の爺様たちから無理難題を吹つかけた無茶のストレスを研究と開発にぶつけて発散させようとしたのだらうけれど、五徹か六徹だなんていう異常な徹夜を続けてついに極限まで登り詰めたのだ。ウーノさんはそうなるとスカさんを止める術を持っていないので、私が呼ばれたって訳。いつのまにか無茶をす

るスカさんを止めるのは、私の役目になってた。不思議。
——てい。

「いっしょ」

無言の延髄打ちである。慈悲もなにもない見事なまでの延髄打ちは綺麗に決まり、スカさんの華奢な身体が短い吐息を吐いて垂直に崩れ落ちる。うん、自分でやらかしておきながら百二十パーセントの会心の一撃だった。三歳児の身体だと力が無いから魔法に頼ったけれど。これ、綺麗に決まらないと前か後ろに倒れて頭を打ちやうし、凄く危険なものだから誰彼と簡単に打ち込むものじゃない。下手をすれば死んじゃうので、蘇生技術を持ってないならやらない方が賢明である。

自身を生み出してくれた親に対して物凄く酷い仕打ちなのだけれど、こうでもしないとまだ徹夜を続けてしまうのだから強硬手段に取って出てるんだ。それにこれ以上研究を続けても、効率は上がらない。むしろ下がる一方で後で色々と不具合が出てくるから。

ウーノさんがスカさんに言い聞かせて聞いてくれるのが一番だけれど、いつもいつも言っても聞いてくれないからこうして私が出動して強制シャットダウンなんて無理をしてるんだけれどね。意識を失ったスカさんを魔法で運ぶ。ほら、あれですよ、あれ。アニメでスカさんがフェイトさんを拘束してたあの魔法。その魔法を応用してぐるぐる巻きに縛りつけて空中に浮かせて運んでる最中。スカさんが落ちない様に気を付けて、スカさんの自室のベッドまで連れて行くのが常態化してる。

フェイトさんを縛りつけて、フェイトさん自身のバリアジャケットのデザインセンスも相まってお色気シーンと化してしまっていた原作ですが、今私の目の前に居るのは紛れもない中年男性で。下手をすれば高齢者に入る部類になる人である。お色気も何も無いし、男女を間違えたサービスシーンにもなりやしない。ただただ、動けなくなつたスカさんを簀巻き状態にして、うにようによと触手の様な魔法で自室に送っているのだからシユールな光景である。

ドナドナの曲が流れてきそうなくらい哀愁を漂わせているスカさ

んは、次元世界に指名手配されている大犯罪者にだなんて全く見えな
い。本当に貴方はアニメで犯罪者だったのかと問質したくなるけれ
ど当の本人は夢の中だし、ココでお世話になっている恩もあるから止
めておこう。

スカさんの自室にやっと辿り着いて中へと勝手に入り込んで周り
を見渡すけれど、相変わらず何も無い殺風景な部屋だ。ベットと机し
か置いていないし、設置されているクローゼットの中はスーツだらけ
で他の衣装なんて見た事が無い。

そういえば女性だらけのこのアジトで、スカさんの性欲はどうやつ
て発散しているのやら。スカさんの年齢は知らないけれど、性欲はあ
るだろうし七十歳を過ぎてから子供を授かったなんてニュースも極
稀に見た事があるしね。不思議に思っただけ興味本位でベットの下を覗
いてみるけれど、ストレスを発散させる為の補助製品は何も見当たら
ない。机は簡素なものだから、隠せるような仕掛けは施せないし。
……一瞬、男色に走るのだろうかと思像してしまい、世間様に公表す
るのならモザイクが必要な事を想像してしまったのは私の落ち度で
ある。すかさんかけるれじあすさん……ゲフンゲフン。ま、まあ、パ
ソコンとかあるからデータで持つてるかもしれないし、下種な考えは
良くない、良くないよ私、と言いついて聞かせて想像した映像を消去させ
なかつた事に。

性欲はさておき、なんにしろこの一家の大黒柱なのだから元気で過
ごして欲しいと思う、子供心。

部屋を眺めながらこの部屋の主をベッドの上へと乱雑に転がす。
どうも魔法の術式が甘いのか細かい作業は苦手なんだよね、この触手
魔法は。スカさんにお布団を掛けて上げたいけれど、自分の力じゃ無
理だし触手魔法でも無理で。今度術式をもっと弄って改良してみよ
うと決意。それを見越してか少し私たちに遅れてウーノさんがやつ
て来て、ベッドの惨状を見るなり苦笑いをしながらスカさんにお布団
を掛けてくれた。この辺りは本当スカさんの女房って言われるだけ
あるよねー。微笑ましい光景なんだもん、仕方ない。アツパーなテン
ションを沈め、ついでにスカさん自身もベッドへと沈めた時間は世間

様でいう所のご飯時であった。

そういえば暫くまともな食事を摂っていなかったな、と思い調理場へと足を向ける。辿り着いた先の大型冷蔵庫を覗き込んでみれば、適当な食材がチラホラと。使いかけの野菜やお肉が転がってる。これで海鮮食材でもあればもう少し豪華なものになってたかも知れないけれど、無いものは仕方ない諦めよう。もう一つ必要な一番大事な物があるかどうかを確認して、必要な材料を取り出していると戦闘訓練を終えてお腹を空かせたのか台所にやって来た人たちが数名。

”お腹空いたー!”と私の後ろで吼えているんだけど、この身は幼児なので大人と同じようにテキパキと調理はできないので、やってきたメンバーに手伝ってもらおう。その手伝いの方法が、世間一般のお手伝いの仕方と大いに違うのはスカさん一家だから、と納得してもらうしかない。

「はっー」

気合の入ったトーレさんの声が一つ零れる。一瞬遅れて空中に放り投げたキャベツが千切りとなつてボウルの中へと入る。もちろん切ったキャベツの破片がボウルの外に落ちる事は無い。全てボウルの中に入る匠の技である。そんな神業を見せてくれるトーレさんなんだけれど、まな板の上で包丁を持って千切りが出来ないのはこれ如何に。料理が出来なくて、半ベそをかいていた難儀な彼女なのだけれど投げたキャベツを木端微塵にする姿は様になっているし、これも”切る”という調理の工程の一部なのだから料理をしているという部類にいれてあげて欲しいものだ。

……賛否両論あるだろうけれど。

「うっはー！ すごいっすっー」

丸椅子に座って無邪気に笑って手を叩いているのはスカさん一家の十一女のウェンディさんだ。手伝う気は全くない様子で呑気に自分で用意したお茶を淹れて飲んでい。というのも、食べ終わった後の片づけが残っているから。いつの間にか出来上がっていたルールがあり、ご飯を作らなかつたり手伝わなかつた人は後片付けをしなればならないのである。

だからウエンディーさんは後片付けをするのだろう。手伝わなかったり、サボったりすれば後日食事抜きで刑が待っているから。派手なキャベツのみじん切りを披露している横で、地味に山芋を摩り下ろしていたのは皆のアイドル、クアットロさんだ。いつの間にか台所へとやってきて、私が擦っていた山芋をニコリと笑い奪い取って無言で擦ってくれた。

ここまで言ってしまうえば、日本に住んでいる人たちなら分かってしまっただろう『お好み焼き』である。イカやエビがなかったのは残念だったけれど、代わりにコーンやチーズ、ウインナーが入っているから具が寂しいって事はないかな。

久しぶりにまともにご飯を食べるから、胃が持たれてしまわないか心配だけれどフライパンに火を入れて焼き始めると良い匂いで食欲をそそってきたから平気かな。仮にお腹を壊しちやっても痛んだものを食べた訳じゃないし、気にしたら負けだから満足するまで食べよう。

あ、そういえばお好み焼きは初めて作ったものだから、物珍しいのかナンバーズの皆様がいつの間にか全員集まっていた。二女のドゥーエさんが居ないのがちよつと寂しいけれど。今度帰って来たときにまた作ろう。きつと楽しい食卓になるに違いないから。全員集合しちやつたものだから、皆がお腹一杯になってくれるまで食材が足りるのか心配だったけれど、冷蔵庫の食材を総動員してどうにかなった。

皆美味しいと言ってくれていたし、御残しも無かったから作った甲斐があった。途中、悪乗りしちやつたウエンディさんとセインさんが本来ならお好み焼きに入れない具材を投下しようとして、ウーノさんとトーレさんクアットロさんにしこたま怒られていた、南無。原作だと皆一度は犯罪者として裁かれた人たちだけれど、私にとっては三年間一緒に過ごした人たちだから無碍には出来ない人たちになりつつあった。

——すやあ。

簀巻きから解放されてベッドですやすやと眠っていたスカさんが

目覚めて、後にこの出来事があつた事を知り臍を曲げたのは機嫌を取り戻すのに苦労したのは余談である。

第三話：青天の霹靂。

曲げていたスカさんの臍を真っ直ぐに直した数日後、アジトの食堂で珍しく全員が揃って食事をした。そうしてご飯を食べている訳なんだけれど、どうしてだか私はクアットロさんの膝の上が定位置になつてしまつてて、如何なものか。けれども私が彼女を無視して椅子の上で食べるとクアットロさんのご機嫌が急降下してしまい、その様子を見かねたウーノさんとトーレさんに頭を下げられて、クアットロさんと一緒に食事をする時は彼女の膝の上が椅子代わりとなつてしまった。

食べづらくないのだろうか、と思うけれど苦にならないらしい。そうしてもう一つ問題があるのが、なんでか年少組から年長組へ抗議の声が上がっているらしい。私はその現場を見た訳じゃなくて、話を聞いただけになるんだけど。内容は『もつとお嬢様を私たちにも寄せ』だそうで、ようするに姉たちばかりずるいと言いたいみたい。もちろんその要望はスカリエッティ一家による勝手に出来上がったヒエラルキーによって抗議の言葉は黙殺されている。やはりどの世界でも姉には逆らえないようだ。私としては出来る限り皆と仲良くしているつもりなんだけれど、どうなんだろう。

現状はさておき、皆率先して喋る訳でもないし、私も喋る方でもないから落ち着いた食卓だと思う。食事中に五月蠅すぎるのは苦手だし、かといつてだんまりでも落ち着かないからぼつりぼつりと会話があるくらいで丁度良い。

「……そう言えば、お嬢の事って何て呼べばいいんツスカね？」

と、雲一つない澄み渡った遥かかなたの空からかぱつと弾倉を開いて爆弾を投下してくれやがったのは、誰であろうスカさん一家十一女のウエンデイさんである。お箸を口にくわえたまま喋るのは止めなさいとウーノさんに窘められつつ首を傾げている本人を余所に、周囲には衝撃が走っていた。

——そういえば私に名前つけて付けられてなかったね。

うん。思い出す限り名前を呼ばれた事なんてない。大学に通つて

いたから偽名はあるけれど、それはノーカウントだろう。それにしても、たつて衝撃の事実が判明した事により皆の顔が、面白おかしいことになってる。まるで八十年代の少女マンガの一コマみたいに。一応スカさんのクローンで女として作られたから、皆から「お嬢様」と呼ばれる事に違和感がなかったし、それで定着してしまっていたから気にも留めていなかった。無頓着過ぎると言われてしまえばおしまいだけれど、前世の自分の記憶があるから新しい名前になるのを何処かで拒否してたのだろうか。だからスカさんに名前をつけて欲しいと強請った事はなかったし、自分で考えようともしなかった。まあ、名前が付いていなくても不便がなかった事が一番の理由かもね。

さてさてウエンデイーさんのファインプレーになるのか、それともこの発言が何か問題を引き起こし核弾頭と化して大爆発を起こしてしまうのか。この話題の中心であろうスカさん自身の言葉如何で、私の名前が決まるんだろうなあ。名無しのままは嫌かも。

——碌な事になりそうもないな。

と、割と酷い事を考えていたら、既にみんなの視線がスカさんへと集中していた。このアジトは女性ばかりだから、スカさんが企てている計画以外の所ではスカさんの立場が弱くなってしまう時があるんだけど、まさしく今がその時だろう。冷や汗をだらだらと掻いて耐え忍んでいる姿は、次元世界中に指名手配された世紀の大犯罪者にはとても見えない。一家の大黒柱たる男性一人、立つ瀬が無さそうでも可哀そうに思えて来るけれど、自業自得と言えるので黙っておく。皆の厳しい視線を浴びる、針のむしろの上のスカさんはただただ耐えるだけ。

「……じゅえる」

なにか切っ掛けはないのか、と思い最高評議会の爺様たちが大学入学の折りに用意してくれた偽造IDに書かれていた文字がソレだった。多分、スカさんの『ジエイル』をもじったんだろうけれど、その意味を考えるとちよつと複雑。ジエイル＝監獄だしね。スカさんの名前を付けたのは爺様たちなんだろうけれど、割と酷い命名である。名は体を表す、だなんて言うのだからきちんと考えて付けようよ。そ

んな事だから裏切られるんだよ、スカさんに。色々複雑ではあるものの『ジユエル』なら女性の名前として十分に通用するし、悪くはないかもと思っただけで言葉にしたんだけれどさしてはスカさんは許してくれるだろうか。

「それは駄目だっ！ あの脳味噌だけの凡骨爺共が考えた名前など不愉快極まりないっ！」

無理でした。ちゃぶ台返しをしそうな勢いで両手でダイニングテーブルを叩くけれど、スカさんや……代替え案がないと皆は納得しないよ。スカさんが思いつきり机を叩いた為に飛び上がったお皿を皆が神速の速さで受け取って、冷やかな視線をスカさんに再び浴びせていた。ツンドラ気候のように寒いを通り越して痛いのである。女性陣に冷たい視線を向けられるスカさんの幸せは、文字通りツンドラ平原の彼方に存在するわけなんだけれど、ここ最近の引き籠もり生活ででどんどん虚弱になりつつあるスカさんに辿り着く体力・気力があるのかどうかはスカさんの努力次第。

「では、お嬢様のお名前の候補は御有りなのですか？」

この状況を見かねて助け船を出したのは、ウーノさん。流石スカさんの直属の秘書を長年務めているだけあってナイスフォローと言いたいところだけれど相手がスカさんだしなあ。研究や開発には絶大な信頼を寄せられるスカさんならではの、日常生活の事となると途端に駄目親父臭を醸し出すんだからどうしようもない人である。物理的にも親父臭を醸し出し始めれば皆から避けられる事は間違いなし、なのだけれどそこには至っていない。清潔感は大切だから、その辺りの一線はまだ越えていないし私たちが越えさせない。

「ぬう……い！」

ウーノさんに言われて、スカさんが歯噛みしながら口籠る。スカさんのネーミングセンスが絶望的なのは、皆の名前を見ればはつきりわかるし、名前に頓着していない事が丸わかりで。ただただ自身の能力で生み出した戦闘機人である皆が役に立ちそうだから、便宜上の名前を付けたに過ぎないのだろうし、プロジェクト・フェイトとか命名する割にはナンバーズの皆様の名前は本当に適当である、不思議。

唸りながら必死に何かを考え込んでいるスカさん。流石に家長であるスカさんがそんな様子なので、一応誰も言わずにスカさんの言葉を待っている状態となってしまう。長い沈黙、周囲の視線。目を閉じて考え込んでいるスカさんは真剣そのもの。

——ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

微妙で古臭い擬音を流しそうな雰囲気のスカさんが閉じていた目をカッと開いた。

「ゼロ、はどうだね？」

ドヤ顔を私に見せつけるスカさんだけれど、これまたセンスという物が皆無である。椅子から滑り落ちそうになる人が何名か。でもまあ、私だけ特別にスカさんから命名されるのも皆に悪いしウーノさんたち年長組を差し置いてしまっているけれど、ある意味公平な名前でもある。それでも良いかと思いついてはいる私はこの一家に馴染み過ぎていいのかも。年長組の皆様が若干スカさんに冷たい視線を送っているけれど、忠誠心は薄れていないと信じたい。

そんなこんなで、家長であるスカさんが言った事はこの面子では絶対だから私の名前は『ゼロ』と相成った。でもこの名前、スカさんもナンバーズの皆様もこの名前を呼んでくれる事は極稀で。いままでどおりの『お嬢様』がデフォだった。

◇

さて、普段より皆忙しくしているみたいで何故と聞いてみると、いつの間にかしれっと原作イベントが開始されてた。山岳地帯を走るモノレールに色々と仕掛けて、スカさんがモニター越しに不敵な笑みを浮かべながら眺めてたし。その様子は悪の結社のボスそのもので実に悪い顔をしているし、様にはなってるかなーって。私もスカさんのクローンだから同じ顔が出来るから気を付けないとね。流石に柄が悪すぎるよ。モノレールイベントはガジェットドローンさんのみの出撃なので機動六課に対しての様子見って感じで、ナンバーズの皆様が出撃することも無かったんだけれど。無かったんですけれど、ね。

「ゼロお……」

と、私の服の袖を握るのは、聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの遺伝子を元に作られたクローンのヴィヴィオさんである。

本来なら上目使いで可愛く目尻に涙を溜めながらオツドアイの瞳を輝かせている姿を思いうかべるのだろうけれど、なんとまあ私の方が身体が小さいためにあべこべな光景になっている。だってそれは仕方ない。五歳児と三歳児なのだから、その二年の差は大きい。傍から見れば年上の子が年下の子に泣きついていて弱虫な女の子って感じなんだろうかヴィヴィオさんは。

最近培養槽から目覚めたヴィヴィオさんは寂しいのか、年齢の近い私に懐いていて傍を離れない。他のナンバーズの皆様はその様子を微笑ましく見守るだけでヴィヴィオさんの面倒を見ようとしないうから、面倒事を私に擦り付けたような気がするのは気の所為、気の所為。そんな事だから皆はヴィヴィオさんと私の様子を保護者のごとく微笑ましそうに眺めているだけだ。クアットロさんなんて、高性能ビデオカメラをいつの間にか手に抱えているし。

どうやらスカさんに頼み込んで動画と静止画を撮れるヤツを作ってもらったみたい。原作が開始されたんだからそんな暇はない筈なのに、スカさんも器用な人だ。スカさん謹製カメラで撮った写真を譲ってくれと、クアットロさんに耳打ちしている人までいるのだから、ヴィヴィオさん目当てなんだろう。なんたって、元王様だし。

研究に没頭したいんだけど、ヴィヴィオさんのお相手を務める役は自然と私になってしまったので以前より進行速度が落ちていた。なにしろ小さい子供には危ない物がそこらかしこに転がっているから研究室には居られないし、ヴィヴィオさんの食事の用意から生活面まで殆どの事を一緒に行動しているから、時間の捻出が出来なくて。夜、一人で眠る事も怖いみたいで一緒に寝て、こっそり抜け出そうと試みたけれど三歳児の身だと一度寝てしまうと朝まで目が覚めない始末で。

「……なにをしてあそびましようか、ひめ」

なので、開発やら研究やはすっぱりと諦めて、ヴィヴィオさんのお世話に明け暮れている。ミッドチルダ語の理解とようやく舌が慣

れてきたのか発音の方も大分マシになったけれど、まだちよつとぎこちないのが玉に瑕。時々舌を嚙んだりもしてるから、完璧なミッドチルダ語が喋れるまでもう少し時間が掛かりそうだった。

ヴィヴィオさんの事を名前で呼ばず、固有名詞で呼んでいるのはスカさん一家の影響である。皆ヴィヴィオさんの事を名前で呼ばずに”陛下”と呼んでいるし、子供相手だというのに敬語で喋ってるんだよね。私もそう呼ばなきゃ妙だから一度呼んでみたもののしつくりこなかった。陛下だと男の人みたいだし、それならお姫様になるのかなと思つて一度”姫”と冗談めかして呼んだところヴィヴィオさんが大層気に入った様子だったので、そのままそう呼ぶ事になった。『姫』などと歌舞いたセリフだった為に、後にヴィヴィオさんと再会した時に私の性別を間違えて覚えられていた事は結構ショックだった。

「おままごーとっー」

スカさんから失礼のないようにと厳命されていて、アジトでのヴィヴィオさんの扱いは食客なのだから友人つて訳でもなかったし私の言葉を聞いて、ぱあつと顔が明るくなる。子供の無邪気な笑顔は可愛いものだけれど、ちよつと苦手なんだよね。ささいな事が切っ掛けで機嫌を損ねたりするし、前世でも小さい子供と接する機会なんてあんまりなかったから。でもまあ、彼女の精神年齢は同年代の子供よりも高いようで、子供らしい言動ではあるものの確りとしたものだ。父親と母親を探している様子を見せながらも、宥めすかして納得させて今の状態に落ち着いてこうして私に懐いて遊んでいるのだから大したものだと思う。

「……………」

おままごーと、の言葉に私の口元が引き攣る。どうにも前にやった事が楽しかったのかまたしても同じリクエスト。どうにもヴィヴィオさんはリアリティーを求めすぎて完璧主義者みたいで。私が間違えた台詞を言おうものなら映画監督よろしくカットが掛かるのだから気が抜けない。その知識をドコから仕入れて来たのだろうと疑問に思ったけれど、オリヴィエさんの記憶の残滓でもあるのかなあ

「ちーがーうーのっー」

この調子である。精神年齢的な年長者なんだけれど、尻に敷かれて
いる様な気がするのはどうしてだろう。それとも聖王のクローンだ
から、血管が成せる高貴なる威厳なのだろうか。テイク2を要求され
仕方なく気持ちを切り替えて、しぶしぶおままごを続ける私。そん
な様子を撮影しているクアットロさんとプラスアルファ。

——ま、皆が楽しそうならそれでいいか。

そんなお気楽な事を考えながら、ヴィヴィオさんや皆が笑ってる姿
を眺めてた。

「ちーがーうー!!」

「ごめんなさい……………」

◇

——ちよつと困った事になりそうだ。

と、いうのも私が作った人型サイズの二足歩行ロボットが時空管理
局陸士部隊に配備される事が検討されているそう。取り敢えずは
運用方法も確立されていないから、お試して十体程度を配備して様子
を見たいとの事。その手始めに地上本部の警備の一部を任せてみて、
役に立つようならば後に増台して運用の幅を広げていくと聞いた。

配備自体は嬉しいんだけど、この所為で原作に影響をもたらして
展開が変わってしまう事を懸念しているんだけど起きてしまった
事は仕方ないから、諦める。なのはさんたち主人公の強さは本物だ
し、結構ご都合主義的な展開が多いからきつとなんとかなるだろう。
彼女たちの強さは本物だし、現時点で地上本部の警備程度ならば影響
はそうないだろうし。

「どうぞ、こちらへ」

てなわけで、やってまいりました地上本部。予算が足りない足りな
いと言っている割には、首が痛くなりそうな程高い高層ビルの総工費
を考えながらロビーの受付で偽造IDを見せて身分を提示して、目的
の場所へと進む。スカさんが出向かないなんて何たる怠慢だろうと
思いつつも、あの人は次元世界に指名手配されているから無理でし
た。その事が頭の中から綺麗すっぱりと忘れ去っていた私もどうか
と思うけれど、三歳児に今日の事を了承した地上本部も地上本部だ。

ま、最高評議会の手が入っているから可能だった訳だけど。

私たちを出迎えてくれたのは二女のドゥーエさんだった。ただ今絶賛潜入工作中なので本当の姿ではなく、魔法で変装してらただけだ。美人さんなのは変わらない。偶にしか会えないから、お喋りしたいところなんだけれど無理だった。念話でも出来るけれど、高ランク魔導師が少ない陸といえど勤が良い人が居れば魔力を使用すれば気付いてしまう可能性も有るので自重。

これから私が制作したロボットのデモンストレーションとメンテナンスやら細かい所についての説明を余儀なくされて地上本部へと赴いた訳なんだけれど……。周囲の皆様の視線が痛いです。大人ばかりの地上本部で三歳児が居るのは異常。

「段差がありますのでお気を付け下さい」

一人でいけば間違つて迷い込んでしまった子供、と認識されるかもしれないけれど、先頭を歩くのは管理局の制服を着込んでいるドゥーエさんだし、保護者兼秘書と護衛の意味でトーレさんが一緒について来てるからそれは無い筈。

「社長、お手をどうぞ」

「ありがとうございます」

隣に並んでたトーレさんがエスコートしてくれ、そんな彼女に私は微笑みを返す。なのでトーレさんはいつもの戦闘用ぱつんスーツではなく、ちゃんとしたパンツスーツを見事に着こなしてる。高身長だし、日頃の戦闘訓練で引き締まった体によく似合ってると思う。身内の鼻屑目かもしれないけれど。私も私でスーツではないけれど、どこぞの林檎印のしゃつちよさんみたくTシャツとジーンズだなんて許されないから、説明会の場に相応しいきつちりとした服装にしてるし完全に余所行き用だ。

地上本部の馬鹿高い高層ビル内を歩いて辿り着いた先は、訓練所とミッドチルダ語で書かれた広い部屋。打ちっぱなしのコンクリート壁がもの寂しさを語っているけれど、場所としては適当だろう。これで事前に運び込まれていたロボットが爆発や暴走をしたとしても、防御魔法が設置されてるから被害は最小限で済む。

先に運び込んでもらっていた二足歩行ロボットと分厚い説明書やらを開封して、準備を始めた。ドゥーエさんも手伝ってくれているんだけど、戻らなくていいのだろうか。そんな事を考えていたらにつきりと微笑みを返されたので、お手伝い要因としてこの場所に居る事の許可を上司の人から無理矢理に奪ってきたのかも知れないなあ。

「……よろしく頼む」

準備を始めてしばらく、ぞろぞろと人が集まり始めた。声を掛けられて振り返ってみればかなり恰幅の良い男性と少し後ろに眼鏡を掛けた女性の姿。階級章を見るに中将だから……レジアスさんじゃん、と驚いた。にしてもアニメもさることながらリアルで見るとごつつい人だ。顔も体も。後ろに立ってる秘書というか副官である娘さんと半分血が繋がっているなんて信じられない。本当、遺伝子って不思議だよ。

私の姿を見て驚きつつも、文句の言葉や嘲りが無かったのは長年地上の治安を守り続けてきた立場故の丹力だったのだろうか。レジアスさん以外にも地上本部のお偉いさんたちが姿を見せ始めてるんだけれど、私の姿を見るなり鼻で笑ったり、ヒソヒソ話をしてたりするのが普通なんだけれど、レジアスさんはソレをしなかった。内心はどう思っているのか解らないけれど、そんな姿は好ましいから頑張って結果を出さないとね。

強硬派として運の無い人なのだけれど、本当は出来た人で一児の親なんだしやりたくない事も仕方なくやっちゃった部分もあるのだろうな。これから私が開発制作し納入するロボットが、レジアスさんの胃を更に痛めつけるのか、それとも緩和する事になるのかは今から始まるデモ次第だろう。なのでちよつと気合が入っているのは秘密。前世なら、もう少しデモの為の準備が掛かる所だけれど、ここは魔法世界で技術が大分進歩しているのでその辺りの手間は掛からないから、早速始めようと思う。

がやがやと人が集まり、騒がしくなってきた訓練所。陸のお偉いさん方や技術者、はては総務部の皆様までご苦勞な事だ。興味があり時間のある暇な人は、この部屋にやってきているみたい。先に配ってい

るパンフレットに目を通していたり、ステージの上にならんでいる現物をマジマジと見ていたり反応は人それぞれ。

それならば、やる事は一つである。

——折角作ったものなんだし採用される様に気合をいれて頑張りますか、ね。

ぱちん、と頬を両手で叩いて気持ちを切り替える。さて、まだ少しミッドチルダ語には自信はないのだけれど”声”は大事だ。まずは聞いてもらう事。眠ってしまうような人が居るのなら、それは私の説明がつまらない証拠で聞くに値しないとされているのも同義。だから、きつちりとわかりやすく。最初は基本スペックの説明から。メンテや小難しい事なんてものは技術者に後で説明すればいいから、取り敢えずセールスポイントになる所をアピールしておく。

「何故、わざわざ人型なのだ？ 機械であるならば、人型に囚われず多脚やホバー、方法は他にもあつただろう。バランスや重心の取り難い人間の形を模したものは……」

説明も一通り終えて、質疑応答のターンに入る。開始した途端に手を上げてくれたのは誰であろうレジアスさんだった。他にも手を上げて居る人も居るけれど、流石に最高位の人を後回しにする訳にもいかず、レジアスさんを指名した。レジアスさんの言い分は尤もで、ぶつちやけ安く製作費が済むのは多脚とかホバーに分がある。ただ何故私が、わざわざ設計や修理の難しい二足歩行を選んだのには理由がキツチリ存在する。

このロボットは将来的には街の警備とかにも出張ってもらうつもりで、見てくれも大切なのだ。市民の皆様には恐怖されるような存在だと困るんだもの。犯罪抑止にはなるかも知れないけれど、一般市民の皆様から頼られないようじゃ意味がないし。犯罪が起こり通報したけれど、怖くて近寄れないとかじゃ配備した意味がなくなっちゃうもんね。

管理局へのイメージも悪くなるだろうし、人間って嫌悪感を持つと、どこまでも嫌いになってしまうから出来れば愛嬌のあるデザインにしたかった。犬や猫、動物型のロボットでセラピーを取り入れている

る病院もあるから、やっぱり外見は大事だ。なので多少制作資金が高
くついてしまうけれど、メリットとデメリットを天秤に乗せて考えた
結果の末である。

「ふむ。では、耐久性や稼働時間は？」

流石に便利だとか実用性があるとかで納得してくれる訳は無く。
その辺りもきつちりと突っ込んで来るか。でも大丈夫、心配はいらな
い。だって陸の台所事情は前世で知ってたので、なるべく維持費やメ
ンテ費用を安く上がるようにと最初から折り込み済みで設計してあ
るのだから。なので魔力を最小限の消費に抑えて、別の物で補うハイ
ブリッド方式を選択した。

いやはや前世の地球も環境問題には五月蠅くなっていたから、閃い
た事だ。ようするに魔法と通常動力一緒にすれば良いじゃん、と。そ
もそも管理局が質量兵器を禁止した理由って環境からだったから、受
け入れられやすいはず。ちよつと複雑な機構になってしまっけれど、
壊れなければ良いのである。良い部品を使って、良い物を作り、長く
使う。ものづくり職人としての矜持。

予定として組んでいたデモンストレーションは約半日の予定だっ
ただけけれど、随分と時間をオーバーしていた。みんな真面目で熱心
だから、つつい説明することちもヒートアップしちゃったんだよ
ね。でもその甲斐あつてか当初の予定通り地上本部で警備部隊とし
て設置される事となった。あとは、今後の経過次第で順次増やすか、
止めてしまうのか決めるみたい。嗚呼、疲れたと心の中でぼやきなが
ら帰る準備をいそいそと始める私。

「……あの、ちよつとええかな」

「っー」

その声に気付いて振り返った私は悪くないと思う。ミッドチルダ
語としては聞き慣れない鈍り方、その時に気付いて無視を決め込んで
いれどれだけよかったらうか。補佐として付いて来てくれた
トーレさんは私の後ろで厳しい視線を飛ばしてた。まあ、機動六課の
隊長が目の前に居るからねえ。

——まさか此処で、彼女と接触するなんて。

しまったあ、と嘆くけれどももう遅いし、そう言えば地上勤務だから本局に居てもおかしくはないんだっけか。でも、原作キャラと出会っても知らぬ存ぜぬを決め込むと最初から決意していたのでどうにか押し止まったよ。危うく私の口から彼女の名前が零れ落ちてしまう所だった。そう、私の目の前に立つのは八神はやて、その人である。何で私に接触してきたのか。スカさん一味だとバレてしまったのか、背中に尋常でない量の嫌な汗を掻く。

「はじめまして、わたしは八神はやていいいます。制服で解ると思うんやけれど、時空管理局で働いています」

わざわざ私の視線に合わせてしゃがみ込んで自己紹介をしてくれるはやてさんは、可愛く笑ってた。メインキャラ補正って凄い効果があるんだなーと心の片隅で思いながら、返事をしない訳にもいかないので私も自己紹介。ふんわりとははやてさんから香ってくる匂いは、香水じゃないっぽいんだけど、洗濯剤なのかなあ。良い匂いがするよ。そんな彼女の後ろには守護騎士であるおっぱい剣士、もといシグナムさんが厳しい視線で私を見てる。視線がすごい怖いデス。流石原作の主演級たちは、モブである私とはオーラが違うし。厳しい視線に気が付いたトーレさんがシグナムさんと睨み合い合戦をしている最中、はやてさんと私はのほほんとした空気を醸し出している。

一応、こういう場なので名刺も渡す。もちろんそれは嘘の塊で、私の名前は偽名。会社名は適当に付けて、ペーパーカンパニーとして機能している筈。もう既に原作は始まってるとし、さっきはびくりしたけれど焦ったところで仕方ないから既に私は開き直ってた。どうやら声を掛けてきた理由は遠回しに『時空管理局でも働かない？』的な事だった。

三歳児を誘うなんて管理局はそんなに人手不足なのか、と言いたくなるけれど、はやてさん的には使えそうな人間ならば唾を付けておこうくらいの考えなんだと思う。名刺を渡した通り私は社会的には社会人なんだもの。原作通りに事が進み悪行家業が廃業になってしまえばお願いしたいところだけれど、今後の展開でどうなる事やら。

一秒先の未来だって、どうなってしまうのかは未知数なんだし。

……予定の時間より帰宅が遅れた事に激怒したヴィヴィオさんに責められたのは、余談である。尻になんて敷かれていない。お腹を空かせた皆に文句を言われた事も腑に落ちない出来事だった。自分たちの食べるご飯くらい作ろうよ。

第四話：ホテル・アグスタ。

ホテル・アグスタ。

そこではとあるオークションが開かれようとしていた。きっと会場では準備に追われてんてこ舞いをしているオークションの従業員やホテル側の面子も同じ様に走り回っている事だろう。そんな忙しい事極まりないホテルを襲撃する事は決定事項で、今回のメイン戦力であるガジェットドローンの出撃準備に私たちもてんてこ舞いを披露している最中である。遊んでくれないとぐずって泣いていたヴィオさんを置いて来ているからちよつと心配だけれど、やる事は仕事としてやらなきゃならないのでぐつと我慢であるし、誰かがヴィオさんの面倒を見ているので問題はない。

「済まないね、手伝わせて」

と、ガジェットドローンの準備を一緒に行っていたスカさんが私に声を掛ける。いえいえ、いいんですよ。金銭的な面で普段お世話になつているのだから、このくらいは。

「だいじょうぶです、おとうさま」

スカさんが作ったガジェットドローンが如何に優秀でも、やはりそこは機械なので些細な事で不調に陥ったり壊れたりすることはあるので、起動前の点検は大事。大まかなチェックは魔法を応用した装置で点検できるのだけれど、細かい所はやはり人間の目じやないと見過ごしちやう所もあるから、どうしても手が必要になるんだよね。

だというのに、これだけ大量のガジェットドローンを制作して稼働させているというのに、メカニックがスカさんと私しか居なければ、そりや大忙しになってしまうのは必然だ。心の中で『誰か手伝って』と叫ぶけれど、誰も来てはくれない。ナンバーズの皆のほとんどは戦闘に特化してるから、こういう事に対してはてんで向いてないんだもんね。仕方ないけれど、スカさんを恨む気持ちが芽生えたりして。

ゼストさんとルーシアさんも今回の騒動には首を突っ込むよう……と言うよりも、スカさんがそうなる様に仕向けちゃったから、ちよつと心配である。怪我とかしなければいいけれど、と願いつつ

黙々と作業こなしていく私。モノレールの時と同様、私はこのアジトでお留守番だ。今回のメイン戦力はガジェットドローンなので、私以外のほとんどのメンバーも待機してるんだけど、何が起こるか分からないから原作から外れてしまった展開になっちゃえば出撃する事もあるだろう。

仮に原作から逸れた展開になったとしても私は出撃する気は全くない。だって戦闘訓練もした事もない三歳児だから、皆の足を引っ張るだけだからね。それなら後方のウーノさんのアシスタントでもしてた方が役に立つってもん。それに今回は、原作主人公とその幼馴染二人が揃っているのだから、ガジェットドローンに勝算がないのは目に見えているし。

管理局の白い悪魔だとか金色夜叉だとか闇の書の主だなんて言う厨二病真っ盛りな二つ名を冠しているSランク魔導師が三人が居る訳ですよ。それに外にはフォワード陣と夜天の魔導書の守護騎士達^が全員揃っている事も知っているし。戦力過剰な地獄の釜の中に放り込まれるような事はしたくないので、スカさんからお留守番の命を貰った時は心底安堵した。戦闘訓練をした事が無いもやしっ子だけれど、スカさんのクローンだからリンカーコアを所持しているし魔力量だってそれなりに保有してるけれど彼女らに勝てる気も勝つ気もないのでこれでいいんだ。

なので、最近ナンバーズの皆様の新武装の開発に勤しんでる。たまーに妙な電波を受信してしまうらしく、これどうよ、と皆に試作品を披露するのだけれどドン引きされる事もしばしば。でもそこは皆、スカさんのクローンなのだから自分たちには理解の及ばない領域に入っているのだろう、と微妙な顔をしながら納得してた事に私は納得がいかなかった。

「さあ、これで準備は整ったつ！ 私の子どもたちよ行きたまえつ！！」

高らかに宣言して両手を広げながら白衣を翻す姿は、まるで子供のようにはしゃいでいる。いい歳なのに。その声と共にガジェットドローンが起動して転送魔法によってアジトの倉庫に沢山並んでいた

ドローンたちがどんどんと減っていく。アジトに殆ど引き籠もって研究と開発に勤しんでいるから、時々こうしてストレスを発散させたくなるのだろう。その方法が世界に喧嘩を売ってしまったっているだけで。スカさんも人間だから仕方ないね。明らかに犯罪なのにどうしようもない人だなと思ってしまうのは、きつと三年間一緒に生活してきた日々がそう私に思わせるのだろう。ま、最後は大人しくフェイトさんにしよつぴかれて欲しいもんだ。

「おとうさま、わたしがはいはつしたのも……いつしよにしゅつげきさせても、よろしいですか？」

「……うん？」

ハイテンションスカさんに近寄って白衣の裾を軽く何度か引つ張って、私の存在に気付いてもらう。

「おお、そうだったか。では、君が作ったものも披露しようではないかつ！ 私たちの凄さを世界に見せつけよう！」

スカさんを見上げていれば、しゃがみ込んで私を抱き上げて”平伏せ愚民共つ”と言いたげな程にマックスな状態にスイツチが入っちゃってるスカさんは高笑いを始めてしまった。あー……、そういえば三徹明けくらいだったかなあ。原作が開始されちゃったから忙しいみたいで徹夜の頻度が上がってるんだよね。そりゃテンションもハイになっちゃうよ。

寝てもらいたいんだけど、流石にこのタイミングで強制シャットダウンはお見舞いできないので、ぐっと我慢。落ちてしまいうような意識を無理矢理にテンションを上げて起きてるんだろな、スカさんは。どうしようもなく難儀な人だし、これで失敗すれば最高評議会の三人からトカゲのしっぽ切りをされるだけだし、私も色々と考えてた。それが今回作ったものである。

出撃予定のガジェットドローンが全て出払って、格納庫は大分すつきりしてた。その一角に今回私が試作した機械がある。

「なんだね、これは？」

まだ起動させていないので二人でそのロボットの下へ。大型のガジェットドローンと同じ筐体なんだけれど、中身は全くの別物。最近

原作開始したために忙しいみたいで、スカさんとは中々会えて居なかった。同じ場所に居る筈なんだけれど、ご飯の時間とかがズレてしまってたし、一人でちょこちょこ作っていたものだから知らなくて当然なんだ。

「これは、りさいくるるぼつとです」

今回出撃させたガジェットドローンたちは、無残にも主人公側の皆さんにぼっこんぼっこんと破壊されるだけの見せ場作りの噛ませ犬的存在。アニメでその残骸を見ちゃったから、そうなるならソレを回収したかったんだよね。リサイクルロボットだなんて格好良さげな名前を付けたんだけど、ただの廃品回収マシンだ。スカさんにはリサイクルの概念は持ってないみたいで、作ると作りっ放しで失敗作とか放置してゴミと化してそのままなんだもの。

勿体ないったりやありやしない。この辺りは元日本人である前世の私の価値観なのだろう。作りっ放しの失敗作も私が手を加えて使えるモノになれば使ってるし、今回のものも湯水のごとく消えていくお金を心配しての事。資金は潤沢にあるみたいなのだけれど、無限にあるモノじゃないからね。スカさんの欲望みたいに勝手に湧いてくるわきやないんだし。

「何故そんな物を？」

嗚呼ほら、理解を得られない。さて、どう説明すればスカさんに納得してもらえるように伝わるのだろうか。スカさんと私の遺伝子は全く同じ訳なんだけれども、どうも前世の記憶がある為かスカさんの思考には似なかった所があるから、ものの考え方の違いで研究開発においての意見や主張がぶつかる事もある。なので自分が納得できないと『うん』と頷いてくれないので説き伏せるのに結構頭を使うんだよね。

資金運用はスカさんに権限があるから、居候の身である私が勝手にお金を使いこむ訳に行かないので許可が出ないと何も出来ない。だからOKを貰う為に意見や主張が食い違えばスカさんが納得するまで話続けなければならぬ。……ならないんだけれど、スカさん人前で話す事とか滅多にないからかディベートとか下手です。若かりし

頃、大学とか研究所とかで他の人と一緒に研究開発をしてたんだよね、と疑問なるくらい下手ですよ。自分の意見を押し通さなければならぬ時はどうしていたのか。

研究者ってこういう事も大事なんだけれど……スカさんだしなあ。他の人がスカさんに噛み付いている所なんて想像できない、彼天才なんだもの。誰か居るのならプレシアさん位しか居なかったんじゃないのか。自分の研究に付いて相談できる人なん。そんなだから俗世が嫌になって、世間から離れてしまったのだろうし、長年染み付いた性格を今更治せる訳もなく。

「あいてのかたがたに、こちらのないじょうをしられるのはいただけませんか」

尤もらしい事を適当に吹いておく。コレを作った元々の理由は、ただ単に私の勿体ない精神が炸裂してしまったからなんだけれど、無駄に資金を使ってる雰囲気を感じ取ってしまったって心配になってきたし、この先最高評議会を切り捨ててしまう事はしているし。

新しいパトロンやスポンサーを見つけるには、アルハザードを目指すのがとく難しいだろうから、ケチれる所はケチっておきたかった。資金の使い道はスカさんが決めているけれど、資金管理はウーノさんに丸投げしているみたいなので、彼女の苦勞が少しでも和らぐのなら幸いだ。電卓を必死で叩いている姿には鬼気迫るものがあつたし。

それにガジェットドロンの残骸を残すって事は、現場に証拠を残して『捕まえて下さい』と言っているのと同義だし。残骸から身元を特定されるのなんて当たり前だし、少しでも遺留品が少なくなれば足が付きづらくなるかなーって。と言っても、スカさんはガジェットドロンのやレリックに自分の名前を彫ってしまったって、犯人は私と告げている様なものだから効果は無いのかも知れないけれど。

てかき、管理局は何をしているんだろうね。大犯罪者を放置して良いのか。そんな事だからスカさんは増長して名前を彫るだなんてお茶目をやらかしてるんだから、早く捕まえようよ。十年以上も放置とつか、逮捕出来ないなんて市民の皆様からの評判は大丈夫かな。税金で運用しているんだから、信頼を失うのは痛手だと思うんだけど

な。

「……ふむ、一理あるか」

内心でスカさんと管理局の事をぼろ糞に言っていたけれど、スカさん呑み込みとか理解とかは滅茶苦茶速いので助かる。その代り、研究開発でスカさんが疑問に思ったり納得のいかない事があれば、とことんまで突き詰めた議論が始まる。以前に私がぼろ糞に打ちのめされるハメになった事がある。一度だけだけれど。泣くつもりなんて全くなかったけれど、ちよつと思っていなかった所での不意打ちだったので泣いてしまったから、本当にスカさんには悪い事をしてしまった。

運悪くスカさんのラボに入室してきたクアットロさんから会心の鳩尾ボデイブローを頂き、床へと沈んだスカさんを他のナンバーズの皆様が見事なまでの速さでスカさんを縛り上げ、そのまま説教される姿は、指名手配犯だなんて思えない光景なんだもの。私が百パーセント悪かったので、皆に理由を話したらスカさんに謝ってくれたから大事には至らなかつたけれど、もう少しでスカさん一味が崩壊してしまう所だったよ。あの時は本当に焦ったなあ。

そうこうしている間に色々と準備を終えて、ホテル・アグスタへの襲撃が始まった。スカさんとウーノさんと私は、アジトで画面越しにガジェットドローンに搭載してあるカメラから現場の状況を見ている。ヴィータさんを中心に守護騎士の面々と機動六課のフォワード陣の姿もあった。どうやら順調に撃墜していつてる様で、ガジェットドローンの数がどんどん減っていつてる。

「はははっ！ 流石に高ランク魔導師に囲まれては私が作った物と言えど、プログラムされたコマンドのみしか実行できぬ機械では敵わんかっ！」

心底可笑しそうに笑いながらモニターを見つめるスカさん。

自分が作ったものをどどん壊されていく様を笑って見てられる胆力は凄い。多分私が作ったものを壊されれば、思い入れはあるので泣くと思う。その辺りの割り切りはスカさんの方が上手くやってみただし、流石悪党。

ガジェットドローン一体にかかる製作費を知っている私は、気が気じゃない。だってさ、タダで作れる訳なんかないんだよ。モグリの業者だけれど、ちゃんと仕入れルートが存在してお金を払って資材を買って作った代物なんだから。結構な費用が掛かっており、斬られて動かなくなる機体があれば、頭の中でちゃりーん。打ち潰されショートして動かなくなった機体をみればちゃりーん、とお金が飛んでいく音が響いてる。嗚呼、勿体ない。

そうしてどんどんと破壊されていくガジェットドローンの残骸を回収しているリサイクルロボット。その光景はとつてもシユールなものだ。さつきも言ったけれど、大型のガジェットドローンと同じ筐体を使用している中身は全くの別物。

壊れて散乱している部品を回収するための補助腕とか地面ごと穿つスコップ機能とかついているので、回収作業を始めるとかなり厭ついシルエットになってしまう。ある程度回収して、中身が一杯になると動きが止まるんだけど、決して故障したとかじゃない。

「面白い動きだ。……私には考えつかないものだよ」

その理由は、回収された部品が満タンになると自動的に転送魔法が発動される仕組みになっているから。人間や動物を転送する訳じゃないし、壊れた物を転送するだけなので転送魔法の構成も適当に組んだもので甘い。壊れている物だから、転送の過程でさらに壊れてしまっても困らないから転送にかかる魔力消費を最低限に抑えてある。装甲になる鉄なんかは炉にくべてやれば良いだけだしね。

「ありがとうございます、おとうさま」

一応研究開発における師匠になるからスカさんに褒められる事に悪い気はしない。

しげしげと画面を見ながらスカさんは、私が作ったりサイクルロボットの感想を述べてくれた。研究と開発畑の人だから、改善案とか駄目な所とか助言をくれるスカさんは頭の良いマトモな人に見える。

何でこの人、悪の道に突き進んでしまったのだらうと考えても、原作の知識と生まれ変わってから接した三年間しか知らないから、心の

深淵に触れるのは無理だろうし、見せる気も無いだろう。それでも、こうして議論するのは楽しいし、尊敬できる部分でもある。それ以外が、すつごいおざなりと言うか適当と言うか……人として欠落している部分がチラホラ見えてるから。

「さて、そろそろ第二段階だ。……彼女に連絡を」

派手に白衣を翻しながら後ろに控えているウーノさんに告げて暫くすると、モニター越しにルーテシアさんとゼストさんの姿。後ろにはガリューさんも映ってて、ちよつとテンションが上がった私。召喚獣ってカツコいいからちよつと憧れてる。デイベートは下手なのに、こういう騙しながら話すのって上手いよねスカさん。通信越しに映ったルーテシアさんは、まだ小さいと言うのに表情があまりない。ゼストさんはスカさんの事を信用してないから、不機嫌そうな顔。スカさんの言葉の裏にある真意を読み取りたいみたいなんだけれど、多分無駄だと思う。スカさんはスカさん本人が楽しければOKだから、きつと深い意味なんてないんだよ。

この後の展開は私の記憶が覚えている限りのままで、多分同じ道を辿ったんじゃないのかな。ホテル・アグスタ襲撃は成功。そしてテイアナさんの誤射により、危うく相方のスバルさんが撃ち落されるハメに成る所だった。

それにしたってテイアナさんからワザとじやないにしろ撃ち落されそうになったスバルさんの心臓の強さには驚きを隠せない。きつと剛毛が生えているに違いない。女の子にこんな言い方は失礼だけれど。だつてさ、後ろから撃たれるかもしれない恐怖を克服してるんだよね、しかも割とあつさり。訓練校時代からずつと一緒にツーマンセルを組んで仲が良いといつても、こんな事が起こってしまえば不信感はなかなか拭えない。

今回は寸での所でヴィータさんのフォローが入りテイアナさんが放った魔法弾を撃ち落してくれたけれど。未遂に終わったとはいえず味方撃ちだなんて普通の人間ならトラウマになっちゃって、先頭に立って先陣を切らなきゃいけない前衛なんて務まらないとおもうんだけれどなあ。やっぱりスバルさんの精神力は主役補正があるとは

いえ異常だ。

さてさて、ティアナさんの誤射事件をLIVE中継で見ていた訳なんだけれど、ふと思いついた事がある。うわー……、この後暫くすると、あの『少し、頭冷やそうか』になっちゃうのかあ。個人的にもあの出来事はなのはさんもティアナさんもお互いの未熟さと不器用さ故にどっちもどっち、って感じに私は受け取っている。指導方針を伝えていないなのはさんもなのはさんだし。限界を超えてこつそり訓練をするティアナさんもティアナさんだし。でもま、あれは若気の至りなんだろう。きつと年を取れば、頭を抱えてその時の自分を恥じるようになるだろうし。

二人とも頭の回転も早いし、臍曲がり者って訳じゃないからきつといい経験になるだろうね。有名なシーンだから見たいけれど、その現場に立ってれば漏らしてしまいそうなので我慢、我慢だ。三歳児にあの現場の重圧に耐えられる気がしないんだ。精神は肉体に引つ張られてるから、前世の自分なら泣かない事も今の私だと泣いちやう事もあつたりするからね。

それにしたって、なのはさんやらフェイトさんやらの過去のシーンを流して、新人さんたちと一緒に見てる場面があつたけれど、あれって管理局がデータ保管してたのかなあ。

野暮な事を言ってしまうえばアニメスタッフさんの演出なんだけれど、気になる。誰が盗撮してたんだろうってね。まあ深く考えても仕方ないし、恥ずかしいのはその映像を勝手に流されてしまったなのはさんたちだし。怒られるのは勝手に映像を見せたシャーリーさんだし。私が心配する事じゃないか。

◇

「ゼロお……」

「はい？」

名前を呼ばれて振り返れば、ヴィヴィオさんの姿が。

「おなかすいたよお」

しよぼーんという擬音が似合いそうな雰囲気、お腹をさすつてる。そういえば晩御飯の時間はとうに過ぎていいるから、ヴィヴィオさ

んが涙目で私に訴えるのは仕方ない事だ。誰もヴィヴィオさんのご飯を用意しなかったのか、とスカさん一家の残念っぷりを痛感しながら気持ちを切り替える。

「……ごめんなさい。いますぐつくりますね、ひめ。リクエストはありますか?」

「はんばーぐっ!」

なんともまあ子供らしい回答だった。私の研究室から調理場へと移動中、なんでか服を掴んで一緒に移動してるヴィヴィオさんに苦笑しながら歩いて行き、空腹を誤魔化すために林檎やオレンジを切つて出しておいた。

食客としてアジトに居るヴィヴィオさんの為に最近の大型冷蔵庫の巾着は充実しているから、食材に困る事はない。そんな事なのでハンバーグを作る事は決定なのだけれど、ハンバーグだけなんて寂しいから付け合せや副食を何にしようかと考える。お腹が空いたと主張しているヴィヴィオさんを待たせる訳にはいけないんだけど、手を抜きたくはないんだよね。どうせなら美味しく食べてもらいたいし。

そんなこんなで調理に取り掛かる訳なんだけれども、最近はいんターネットが発達しているから便利だ。美味しく作るコツなんかも検索すればすぐ解るし、隠し味とかについても書いてあるからね。料理を作る事自体は苦痛じゃないし楽しいから。

「んー。お嬢、何をつくってるんです?」

ひよっこりと調理場に顔を出したのはスカさん一家の六女、セインさん。最近ウーノさんやクアットロさんがご飯を作っている事に触発されたのか、セインさんもご飯を作る側に立つようになった。戦闘訓練はどうしたのだろう。今頃は皆その時間なんだけれどサボリかなあ。あとでトーレさんとチンクさんに怒られても知らないよ。

「はんばーぐです」

「おお、いいですねえ。何か手伝います?」

にしし、と笑ってセインさん。優秀なアシスタントをゲットしました。これでご飯を作る手間が省けるし、お手伝いさんが居るのなら他のメンバーの分も作り置きして、後は火を通すだけにしておこうか

な。訓練後に『お腹空いた』とこの場所に駆け込んでくるのは目に見えるし。

あとはトマトとレタスと卵の三色スープにレタスとツナの軽めのポテトサラダ、くらいかなあ。大人数で暮らしているのでコンロの数とか多めに設置して貰っているから、並行作業で出来るのは有り難い。そんなこんなで晩御飯が出来上がり、美味しそうに頬張るヴィヴィオさんは満足げな御様子。上機嫌なので、おねむの時間になるまでもう少し。

——おやすみなさい。

良い夢を。すやすやと眠るヴィヴィオさんの顔を眺めながら、こんな日常が続くのだろうって簡単に考えてた翌日、スカさんが衝撃の言葉を言い放った。さてさて、私の目の前で大泣きしているヴィヴィオさんをどうしたものかと考える。

ホテル・アグスタ襲撃から暫く立った本日スカさんの唐突な発言により、ヴィヴィオさんをアジトから追い出す日がやってまいりました。追い出すって言ってしまうと語弊があるかもしれないけれど、ヴィヴィオさんの気持ちになれば”追い出される”で間違いはないのかも。ヴィヴィオさんが泣き叫ぶ理由を作った張本人は知らん顔で。

ヴィヴィオさんは、巨大戦艦である聖王のゆりかごを起動させる鍵の役割であった聖王オリヴィエのクローンとしてとある違法研究所で人為的に生み出された存在だ。その違法研究所はスカさんと協力体制を取っていた筈なのに、いつの間にかスカさんの命令でナンバーズの皆様が違法研究所を襲撃しヴィヴィオさんを拉致ってきた訳で。

違法研究所も潰されたことに対しての文句を付ける事は出来ない立場にあるので、だんまりを決め込むしかないみたいで報復とかそういうったものは一切ない。そうしてそれから暫くはヴィヴィオさんとスカさん一家と私は一緒にこのアジトで生活してたんだけど、今日のスカさんの一言で、此処から追い出す事を決定した。年長組である四女の皆さんまではヴィヴィオさんがアジトに居る理由を知っていたので、不思議に思った彼女たちはスカさんに理由を聞いていた。

で、スカさん曰く。

『その方が面白い』

との事。そうは言っているけれど本心は、最高評議会の爺共の言いなりになんぞ、誰がなるか”の方がウエイトは大きいんじゃないのかと推測する。天才の考えている事なんて理解できないから突拍子も無い事をするもんだ。それでも私は原作を知っているのです、ヴィオさんが機動六課に保護されて後になのはさんの養子となる事を知っているから、このイベントがないと逆に困るから渡りに船。そんな事なのでただ今絶賛ぎゃん泣きしているヴィヴィオさんをどうにか泣き止ませて、色々と画策しているスカさんの指示通りになるようにしたいのだけれど、それが難しい。対スカさん用最終奥義である物理的強制シャットダウンなんて以ての外だし、無理矢理に移動用の生体ポッドに閉じ込めるのは可哀そうだし、昏睡系の魔法も何だかなあと思うし。なにより私の良心が痛むし。小さい子供だから、この先の事を伝えても理解してもらえないだろうしなあ。

スカさんから言い渡されたタイムリミットまでは後少し。無理矢理にヴィヴィオさんを移動用生体ポッドへ押し込めようとしたスカさんを説得して、時間をもらったけれど無理そうだなあ。

「ゼロお……」

うう、そんな目で見ないで下さい。無力な私を呪っても良いので、ともかくにもヴィヴィオさんを機動六課の誰かに保護をされるイベントは確実にやらなきゃならない事だから。もう希望が無さそうなユーノさんとなのはさんの貴重なフラグをバキ折りしてでも、なせねばならない事だ。じゃないとヴィヴィオさんの将来が不安でたまらない。

「なかないで。だいじょうぶだから……」

「……」

泣きすぎて疲れたのか、少し落ち着いた様子のヴィヴィオさんは今だに仏頂面で。大人の言葉を完全に理解なんて出来る訳なんてないのに、子供特有の察しの良さで機嫌は相変わらず悪そう。小さな子ども相手に、どんな言葉を掛ければ良いのかどんな行動を取れば良いの

か。経験値の少ない私には難題だった……のだけれど。

「……」

寝て、しまった。そう言えば、お昼ご飯を食べてから暫く経ちいつものこの時間はヴィヴィオさんはお昼タイムだった。その習慣からだろう、必死に睡魔と格闘していたヴィヴィオさんだったけれどついに負けて、眠ってしまった。そんな様子を見て私は大きく一つ息を吐き出す。

——大丈夫。君にはもつと大切な人たちが居るのだから。

そう、ヴィヴィオさんはこの場所に居るべき人じゃないから。君は太陽のように輝いて、生きて行く人なのだから。だから、その輝きを受け止めてくれる人達の所へ。眠ってしまったヴィヴィオさんの寝顔を見ながら私は、生体ポッドの扉を静かに閉じた。

第五話：使い魔契約。

ヴィヴィオさんが機動六課の皆様には保護されたようです。断定が出来ないのは、人伝に聞いただけであって自分の目で確認した訳じゃないから。

短い期間だったけれど、ヴィヴィオさんと一緒に過ごした日々は私にとつて大切なものだったらしい。子供が苦手な私だけれど、ヴィヴィオさんはその事に気付く様子もなく生まれてすぐのカルガモの子供みたいなのに、離れず引っ付いてくるものだから。邪険になんて扱える訳もなく、趣味に没頭していた私の手がしょっちゅう止まってしまったのだった。

——はあ。

深い溜息が自然に出てた。ちよつと試したい事があつて色々試行錯誤をしている最中なんだけれど、なんだか上手くいかないし全然進まない。ここ最近ヴィヴィオさんが私の研究室に居るのがデフォだったので『遊ぼう』と騒がしかったのが日常化し、それに慣れてしまっていたのか静かなこの場所がなんだか妙な雰囲気醸し出していて落ち着かない。

開発が進まない事にまた溜息を吐きながらヴィヴィオさんのお相手を務めていたんだけど、失ってから気付くなんて間抜けだよねえ、本当。私以外の誰も居ない研究室が寂しく思える時がくるだなんて思つてもみなかった。でも、しょっちゅう泣いていたヴィヴィオさんは未来の親子になるのはさんの下へ行つたのだから、幸せになるのだから、と自身に言い聞かせて作業をしていた途中の事だった。

「……っ!!」

調合していた試薬が急激な反応を示して爆発。その規模は私の周囲だけだったので、大事には至らなかつたのだけれど……。

「お嬢様っ!! 大丈夫ですかっ!」

爆発音が派手に響いてしまったのか、ウーノさんが血相を変えて研究室へと飛び込んできた。そうして幾ばくの時間も経たずにぞろぞろとスカさん一家が勢揃い。一番最後にはスカさんまで。ナンバー

ズの皆さんはともかく、スカさんは忙しい筈なんだけれどなあ。ホテル・アグスタの件で破壊されたガジェットドロンの補給作業とかがあつてこんな所で油を売っている暇はスカさんにはない筈なんだけれど。

ぞろぞろとやつて来た皆さんに心配されながら、怪我はないかと確認されたんだけど爆発自体は大したことも無くて怪我自体は掠り傷程度なので済んでいた。私の怪我の状態に皆さんから安堵の息が漏れてた。私が居なくなるとご飯を作る人が居なくなるから、それだと思ふ。

「……で、何をしていたんだね？」

十二人、と言いたいけれどドゥーエさんはお外で秘密のお仕事からだから十一人の壁をスカさんが割つて、ずいっと私の下までやつてきた。ラボの惨状を見てにやにやと仕方ないな、みたいな感じで笑つてる。いや嗤つてる。そんなスカさんの顔を見てちよつとだけムつとなるけれど、まあ笑われても仕方ない。余所事を考えていて失敗したのは私自身のミスなのだし。だから包み隠さず正直に話す。

爆発が起きてしまった発端は、タダの私の思いつきによる突発的な実験を実行していたから。戦車の装甲を貫く為に使われている”タングステン”。タングステンは固い素材と言われてて、それよりも固いモノを人工的に作れないかなと発作の様な思いつきで実験を開始した。金属成分やらなんやらを、いろいろと引つ張り出してきて調べてたのだけれど、ヴィヴィオさんの件があつて集中力が余り無くて調査量をミスつたのか見事に爆発。欲を張つて、魔法の技術もぶち込んでどうにかならないものかと実験していたらコレである。いやはや、無事で済んでよかつた一歩間違えれば死んでいた所だったし。

「それでこの有り様かね……」

ハイそうです。言い訳の仕様もございません。私の言葉に納得したのか、目を細めながら爆発で大変な惨状になってしまった研究室をスカさんは見渡す。その後、目を閉じたスカさんは何か頭の中で考えている様だけれど天才の考えている事を読む事は不可能。スイッチが入ってしまった様で、ぶつぶつと呟いていて怖いたりやありやし

ない。何かの拍子にスカさんはこうして考え込む事があるんだけど、その後は碌な事にならない事が多い気がする。

以前にもこうして何かの拍子に考え込んでしばらくだんまりを決め動かないから、皆と相談して放置する事を決定し二・三日経た後に喜々として開発品を披露してくれたスカさんんだけど、イロモノ作品過ぎてお蔵入りになった事がある。そんなスカさんを余所に、ナンバーズの皆様は私が無事だった事に安堵して各々訓練やプライベートな時間へと戻っていく。少し騒がしかった研究室は元のように静かになり、取り残されたのはこの部屋の主である私とスカさんだけ。

この状態のスカさんは自分の世界に引き籠もったままで暫く戻つて来ないだろうから、そのままの状態で放置しておく。酷いと思われるかもしれないけれど、無理矢理戻したとしてもまた直ぐに思考の海に沈みこんでしまうから無駄なんだよね。あと三十分後にでも戻れば早い方かな。スカさんの頭の中では色々な事が浮かび、それを整理して再構築しているのだろう。魔導師としてもそれなりに優秀なスカさんなのでマルチタスクはお手の物だし、普通の人よりも脳味噌の皺が沢山ある傑物だから思考回路は超早いんだけど、思考量が多すぎるのか常人よりも戻ってくるのに時間が掛かる訳で。仕方のない人だよな。

「？」

立ちすくんでいるスカさんを横目にしながら、研究室で引き起こしてしまった爆発の中心地には何やら黒い液体が。私が用意した液量よりもずいぶんと容積が増えている気がするんだけど気の所為なのかと思うけれど気の所為じゃない。側に近寄って観察していると、ただの液体の筈なのに微妙に振動している。ちよつと気持ち悪い。はてさて、これはどうしたものかと考える。タングステンより硬い金属成分をと考えて、その為に試行錯誤を繰り返して余り働かない頭を使って実験していた訳なんだけど得体の知れないモノが出来上がってしまった。全く予想していなかった、偶然の産物が出来上がってしまった事に驚きと動揺を隠せない私。興味深いからまだま

だ観察を続ける。ぬめむめと行動範囲を広げて研究室の中を所せましと動き回る液体は、前世のゲームでよく見たスライムみたいで。なので私は心の中で黒い液体を『スライムさん』と仮称する事に。

スライムさんは最初こそ振動しているだけだったのだけれど、伸縮運動や上下に動いて形を変えて最初に居た場所から随分と動いている。意識は持っていないのかも知れないけれど、生物的活動は起こせているみたいだった。しかし、タングステンってこんなに柔軟性があつたっけって思う。タングステン単体だと柔らかいから、そこに他の金属成分を含有させて合金となり凄く硬くなるわけなんだけれど、このスライムさんは実験道具のガラス棒でつついてみると柔らかい。

うーん、うーん、うーんと唸りながら腕を組んで考えを捻っても、答えなんて出てこない。

考えても何も浮かばないから仕方ないので、違う事や何か発見がなかなと思ひ観察を続ける。スライムさんは気ままに研究室内をウロウロしていて、その行動に一貫性はなく無闇矢鱈と動いているだけの様で。スライムさんのイメージって、ゴミとか落ちている物を何でも食べるって固定概念あるけど、このスライムさんはその行動を起こさない。個体差があるのかもしれないし一概には言えないけれど、床を這いずりまわっても床が綺麗になる事なんて無かつたし、落ちていゝるゴミを拾っては体内に入れてはいるんだけど暫く経つとポイッと食べたものを吐き捨ててる。

まるでそれは、食べられないモノを口にしてしまったヒキガエルのよう。彼等ヒキガエルは視力が悪い為に、動かずじつと待ち伏せを続けて耐え目の前に現れた虫などを食べるそうなんだけれど、間違つて食べられないモノを口にした時はペツと吐き出すそうだ。その様子を実際に見た事はないけれど、想像するに同じように見えて仕方ない。そんな事だから、意思は無さそうなんだけれどちよつと可愛く思えてきたし。見た目、黒光りをしている粘性生物なんだけれど、不思議だよね。

いつもなら失敗した事はさっさと忘れて、散らかった部屋を片付けて次に移る訳なんだけれど、不可思議な行動を起こすスライムさんに

興味を引かれて観察をまだまだ続行する。意味なく行動しているスライムさんとはある場所で立ち止まった。それは未だに思考の海の中に沈み込んでいるままのスカさんの足元。じっとしたままで動かなくなってしまうから、嗚呼、死んだのかと思っただけでもまた動き出して形をかえていく。少しの上下運動と横軸の移動しかなかったスライムさんなんだけれど、段々と天井に向かって縦に伸びていく。

少し待つとスカさんと同じ高さとなって、今度は横に広がり始めた。スライムさんが何を持って行動しているのかは理解不能だけれど、意図があり何かをしようとしているのは解る。行動自体は無意味なものかも知れないけれど、生物として進化や成長するためには大事な事。

模倣……したの？

段々と人間の姿に似ていき、少し時間は掛かったものの細部までスカさんそっくりな真っ黒スカさんが出来上がっていた。その光景はとてもシニールで、スカさんが動くときスライムさんも一緒に行動を取って真似をしている。何だかもう一人スカさんが増えてしまつて大変そうって思っちゃったけれど、暫く真似して満足して飽きたのかスカさんの模倣を止めて、元の黒い粘性生物に戻っていた。

思考の海に入り浸つたままのスカさんの姿になったスライムさんは、何を持ってスカさんと全く同じに模倣したのか。訳の解らない領域になりそう。生物学は専門じゃないし、こんなことなら齧っておけば良かった。詳しい人がいれば、その人に聞けばいいんだけど私たちは世間様にとって犯罪者だから。モグリの生物学者なんて居ないだろうし、早々に諦める。

「……おや、これはなんだね？」

ようやく思考の海から上がってきたスカさんは黒いスライムさんが付いて放った一言がソレである。正体不明のモノなのに落ち着き払って動いていないのは、経験の差なのかな。色々スライムさんがやらかしていた事は露知らず、呑気にそんな事を聞いてきた。質問を投げかけられれば、このアジトの最高責任者であるスカさんに

は答えなければならぬので、素直に先程まで起こっていた事を全て話したよ。そうしたらスカさんは愉快そうに笑って、失敗から偶然に未知の出来事が起こる事はまああるってさ。

「私も何度か経験した事がある。予期していなかったとはいえど、やはり楽しいものだ。科学というものはね」

そうしてスカさんと一緒に観察をしながら未知のスライムさんについて議論してただけけれど、結局は偶然に誕生してしまった代物だからあんまり有意義なものにならなくて、スライムさんの存在は謎のまま。スカさんとの議論でどのくらいの時間が経っていたんだろうか。スカさんと私はクローンというだけあって、熱中しちゃうと周りが見えなくなる癖は同じだから、スカさんと話し込んで夜が明けてたなんて事もあった。そんな二人なので、研究室の掛け時計に目をやれば結構な時間が過ぎていて。そろそろ食事の時間だから皆お腹を空かせて待っているだろうと考え始めた頃、研究室の中をウロウロしていたスライムさんから元気がなくなってるみたいで。

「ふむ。そろそろ力が尽きてしまうのかね。いやはや偶然の産物にしては楽しませてもらった。……これで”終わり”か」

なんだつまらん、と言いたげに侮蔑した視線でスライムさんを見下ろすスカさん。私的にはスライムさんな存在の黒い物体エックスに何を求めているのだろうって思うんだけど、スカさんの期待は大きかったみたいで、残念そうに嗤ってる。こういう所を見ちゃうと、嗚呼、普通の感性なんてものは持っていないんだなって実感しちゃうよ。スカさんは。

嘲笑らっているスカさんに反骨心を抱いて触発されたのか、元気がなくなつて動かなくなつたスライムさんが最後の気力を振り絞つたみたいで、激しく動き始めた。何をしたいのか何を求めているのか、何故スカさんの言葉に反応を示したのか、興味が湧いてくる。嗚呼、私もあんまりスカさんの事は言えないかも、と思つてしまいテンションゲージが少し下がったのは秘密だ。

『シ……ニタク、ナイ……………』

「……………ほう」

かなり低い声を出してスカさんがすんごい悪い顔をしてるっ。嫌な感じがひしひしするよ。こんな顔をした時のスカさんは悪事を働く秘密結社のボスの如く、碌な事を仕出かさなから付き合わされるこっちはたまったものじゃない。って、スカさんは悪の秘密結社のボスそのものだった。いかんせん愉快的な場面を見過ぎていてる所為かその感覚が薄くなる時があるから、ちゃんと頭の隅にでも置いて意識しておかないと痛い目を見そう。

「よろしい！　よろしい！！　よろしいっ！！　その感覚は生物として至極まっとうな感覚だっ！！　ならば、生きようではないか。誰にも知られず認められず、ひっそりと死に逝く命よっ！　だがっ、今生は愚かにも死にたまえっ！」

ええ……、今さつきスカさんは生きろって言ったじゃないか、なんで死ぬなんて言ってるのさあ。酷いにも程があるんだけど、徹夜明けでもないのにアッパーなテンションに突入したスカさんは一人で勝手に”ははは”と高笑いを始めちゃった。しこたま笑うって作業は結構体力を使う筈なんだけれども、引き籠もりで運動なんてものは全然してない人が、ずっと笑いなから声量が落ちないって異常なんだけれど、肺活量が尋常でない程大きいのかなあ。じゃないとこんなに長い時間笑っていられないんだもの。

スカさんはスライムさんを焼き付けてどうするつもりなんだろうか。一度死ぬ事を望んでるみたいだから、このまま命が尽きるまで放置する事が確定っぽいんだけど。その後はどうするんだろうか。まさか食べて自分の血肉にするなんて、そんなオカルトめいた事を科学者がやる訳ないし、どうやって生き返すつもりなのやら。死者蘇生の魔法は禁忌の領域だし、誰も達成した事がないそう。魔導師が何人も集まって大魔法術式を試みても無理だったと魔法の歴史書に残っているので、スカさんと私だけじゃ絶対に無理だろうし。

スカさんが高笑いをしている間に、スライムさんは力尽きてしまいべつとりと床に黒い液体が広がっていた。その色が赤ければ、死体の無い鮮血が広がった凄惨な事件現場と化していた所。これ、どうやって片付けようかな。はつきりいってあまり意識の無いまま実験をし

ていたので、制作過程があいまいなんだよね。そんな事だから、偶然に有害物質とか毒物に変化してる可能性も有るから、むやみに触っちゃうと危険だもん。

うーん。今度、解析系の魔法知識を深めておかないと。便利だから簡易的な解析魔法は使用できるものの、詳しく調べるとなるともつと複雑な術式と魔力と時間が必要になるから。自分で厄介なものを生産しちゃった時の対処法として使えるようにならなきゃね。後始末も大事な仕事の内である。

「さて、準備は整ったようだ。では、始めようっ！」

高らかに宣言して両手を広げて上げるスカさん。様にはなっていないんだけど、説明が無いから私はさっぱり事態を把握できずにいる。こんな事だから、コミュニケーションだつて言われるんだよ。自分の頭の中で話が完結していて、口から出る言葉は思考の中で完結した後の話でちゃうものだから、周りの人間はスカさんの意図を把握できなくて、簡潔に述べられた言葉を理解できないんだよね。

そう思っているだけじゃ仕方ないので、ちゃんとスカさんに何をするのか聞いてみれば『使い魔契約』だつてさ。使い魔契約って動物を相手に結ぶものだと把握していたんだけど、どうやら脳が存在している生物とならば可能みたいで。だから”シニタクナイ”と遺言を残して逝ってしまったスライムさんと契約をする、と。

何で言いだしっぺのスカさんとスライムさんと契約しないのか不思議に思い問うてみると、スライムさんを製造した責任は私にあるから、その方が妥当だろうって。でも、使い魔契約なんて全く興味が無くて知らないからやり方が分からないと伝えると、きつちりと教えるから大丈夫って。スカさん本当にオールマイティに何でも出来るのだから、感心する。マッドとか変態だとか言ってはいるけれど、チラホラと良い部分が見えるので侮れない。というか色々な分野に手を出し過ぎている気がする。まあだからこそ天才って言われるんだろう。

「命名をよろしくお願いします。マイマスター」

「ふむ。契約はきちんと履行されたみたいだね」

そんなこんなでスカさんから手解きを受けて私とスライムさんの使い魔契約を終えていた。ねっちよりと床に張り付いていた黒い液体は、粘性を取り戻してうのようによと動いていて。私とスライムさんとの魔力ラインが繋がっているのが解るし、スライムさんに私のリンカーコアから魔力が流れていつているのも解るから上手くいったのかな。ゲームとかでよく見るスライムの形をした黒いスライムさんは、発声器官なんてあるはずがないのにきっちりと流暢なミッドチルド語を駆使してそんな事を言い、言いだしっぺのスカさんは使い魔契約が成功した事に一つ頷いて満足げにしている。なんだか私だけが状況に追い付けなくて、目を白黒させているんだけれど。製造責任と使い魔契約をした責任をキツチリと果たしましょうかね。

けれども名前を付けてくれと急に言われても何も浮かんでこない。くるくると頭を回転させて考えてはいるのだけれど、浮かんでくる名前は”ポチ”や”タマ”。犬や猫に付ける訳じゃないんだし、恐らくきつと長い付き合いになるんだからそんな名前じゃなあ。

「……早く名前を付けなければ、契約として成り立たん。このままでは、コレはまた命を失うハメになるが？」

そうせつつかれてもちゃんとした名前を付けてあげたいと思うのが親心つてものである。でも、スカさんの言葉に急かされてちよつと焦っている自分が居るのもまた事実。頭の回転が速いスカさんのクローンと言えども得意な事が出来るだけってだけなので、こういう時は普通の人よりも劣っているかもしれない。でも、適当に名前を付けるだなんて出来ないから、時間の許す限り一生懸命頭の中で考える。

いろいろと浮かんだ名前をあーでもないこーでもないで吟味しながら、捻りだそうとする私……。誰かに名前を付けるって魔法術式を構築するよりも難しいね。子供に名前を付ける為に一生懸命悩んでいる人たちを尊敬するよ。

——ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

何処かで聞いた事があるような微妙で古臭い擬音を頭の中で流しながら、ふと思う。

「……ろぜ」

”ロゼ”。まあ、”ゼロ”を逆さまに呼んだだけの簡単なものなんだけれど”ポチ”や”タマ”と付けちゃうよりも幾分かマシなのかなって。スライムさん改め、ロゼさんが自分の名前を噛みしめているようで、ぽよんぽよんと自分の身体を跳ねさせているのでどうやら気に入ってくれたようで一安心。ロゼさんの横でスカさんがうんうんと頷いているんだけど、よくよく考えれば私のネーミングセンスもスカさんと同じレベルなのかも。流石クローンだって冗談で思ってたんだけど、ナンバーズの皆さんからもセンスが似ていると言われてしまい少し凹んでしまったのは、また別の話。

ロゼさんと使い魔契約を果たして数日。どんどんと駄目人間になっていく自覚が確実にあるのですが、どうしましょうか。それというのも、このスライムであるロゼさんはいろいろと私に足りていない部分を補ってくれる。三歳児という身なので高い場所の物が取れないのは日常茶飯事で、スカさんやナンバーズの皆様をそんな些末な事で呼び出す訳にはいかなから自分で結構無茶をしてどうにかしていたんだけど。

そんな私の姿を見てロゼさんは無言でスライムの身体の一部を伸ばして器用に必要な物を取ってくれたり、食事を忘れて研究に没頭していると『マスター、そろそろ栄養摂取を』と告げてくれる。ご飯を食べましょうと言わず”栄養摂取”と言っちゃうのはなんともロゼさんらしい。

他にもロゼさんはベッドやソファアーに擬態してくれて寝そべっていると、すんごく気持ちいいんだよね。作業をした時に最初座る場所が無くて困ってたなら、自身に座って下さいと言いだした。スライムさんだから自由に形を変える事が出来るのだけれど、スライム姿のままのロゼさんに遠慮してたらいつの間にか完璧な椅子の形を模していた。そんな事がいつ出来るようになったのか聞いてみれば、最初からできるそう。どうやら生まれたばかりの時にスカさんの形に模した事が影響しているみたいだった。

重いだろうし、長時間は辛いだろうから遠慮するって言ったんだけど、マスターは小柄で軽いですから問題は何もありませんと押し切

られ座ってみると、あら不思議、座り心地の良い事。椅子として大切な機能である弾力性もあるし、座った時に感じる独特のひんやりしたあの感じとか全くなくて不思議に思っていると、どうや温度調節をしてくれた。他にもマツサージ機能とかもあるから驚きだ。

椅子だけじゃなくてベッドやソファーにも擬態出来ちゃうから、研究室で寝落ちした私をいつの間にかベッドとなったロゼさんの上に寝かされていた事もある。誰が寝かせたのと聞いてみれば『私がやりました』と短く返事が。

どうもウーノさんとクアットロさんから『お嬢様はドクターと同様に無茶をするから、その時は止める』とロゼさんに伝えたみたいで。そしてロゼさんもその言葉を了承しちゃったみたいで。自分で自制が効かないのは自覚しているし、ロゼさんは良いストッパー役になってくれていると思う。

それでもやっぱりなるべくロゼさんに頼らないように頑張っているんだけど、使い魔契約の時に感情リンクを切るのを忘れていて私が疲れているとか眠いとかお腹空いているとかがロゼさんにバレバレ。スライムさんの姿だから表情何て判らないけれど、心配そうにされることやっぱり気になっちゃうから無理が出来なくて。それでも。

——うん、ロゼさんと使い魔契約をして良かった。

私の身の回りのお世話を甲斐甲斐しくしてくれているロゼさんなのですが、普段はスライムの姿で読書をしている。本を読む事で知識を吸収して色々な事を学んでいるようで、楽しいし面白いとの事。人間じゃないから疲れないそうだし、動物って訳でもないから無理に眠る必要も食事を摂る必要もないそうで、私の魔力に完全依存しているから永遠に読書が続けていても平気だそうだ。

私の使い魔なので、魔法も使用できるし魔導師としての訓練も欠かしていない。練習相手にはナンバーズの武闘派の皆様が相手になってくれている。でもスライムの姿のままだとやり辛いと苦情が出たので、人の形になってもらってる。人の姿となる事で、研究のお手伝いにも顔を出すようになってくれたロゼさん。もう既に居なくてはならない人物と化してしまった。

目の保養にと私好みの男性の姿になって貰ってたんだけれど、それを見たスカさんが『このアジトには私以外の男は認めないと』割と真面目な顔で言い放ってしまったので、それから女の人の姿になってもらったよ。

ちなみにネットでもたまに見つけた画像の写真を模して貰ってる。多分モデルさんだったのかな。長身故のすらっとした手足に整った顔立ちの金髪碧眼の八頭身美人で巨乳さん。その姿を見たスカさんは満足した様子で、にんまりしてた。スカさんってなんで同性の人を排除しちゃう傾向があるんだろうね。天才の考える事は良く解らないと、唸ってしまった一日だった。

第六話：怒涛のイベント消化。

最近というよりも以前から気になっていた事があって、それはスカさん一家の九女であるノーヴェさんの事だ。どうも反抗期なのか毎日ご機嫌斜めな御様子で、皆の輪の中に加わろうとしないんだ。唯一心を開いているのは、五女であるチンクさんだけで。それでもまあ、皆と完全に意思疎通しないよりは全然マシだし、無視をされる事もないんだけれども。事なかれ主義の元日本人の私としては皆と仲良くして欲しいってのが本音だし。

——ぷよん。

そんな擬音が似合う、私の使い魔であるロゼさんの上で腕を組んでどうにかならないかなーって考えていた。放つて置いても大丈夫って思っちゃう自分と、どうしても気になる自分が居て。出来る限り話しかけていて、そんな私を見てノーヴェさんは溜息を吐きつつ面倒臭そうに相手をしてくれるんだけど、一言二言で会話が終了してしまう。会話のキャッチボールを楽しむ気は無いみたいで、ちよつと傷心中なんだよね。

私が果敢にノーヴェさんにアタックして、すぐさま玉砕している事に気付いたチンクさんは、律儀に私に頭を下げてくれた。チンクさんが頭を下げるべき事柄ではないし、私が勝手にノーヴェさんの心配をしているだけだからって言う嬉しそうに笑ってた。ノーヴェさんの事を気にかけてくれる人が増えて嬉しいらしい。

でも原作三期が無事に終われば彼女は厚生道の道を歩んで、まっとうな人になるみたいだから将来的な心配はない。過去を省みて赤面しなきゃならないのはノーヴェさん自身で、その事についてはノートッチだし良い経験なんだとおもう。それでも仲良くしたいって考えちゃうのは私の我儘なのかなあ。

——むぎゅー。

「……………」

ロゼさんの上に座っていたのいつの間にかロゼさんを両腕で抱きかかえていた。丸いスライムさんの姿が私の腕の力で変に圧縮さ

れてるんだけど、邪魔をしないようにか文句なんて一言も言わず黙ってくれている。反抗期を迎えた子供時代を私も過ごした事はあ
るけれど、それは自分の両親に向けてのものだったから。ノーヴェさ
んが何を考えて皆とコミュニケーションを取らないのか、理由なんて
全然分かりません。精神的には大人な筈の私ですが、人付き合いは苦
手な前世を送っていたし今世も人間関係はこのアジトの中だけで構
築されているから、手をこまねいている訳で。

それならノーヴェさんの物欲に訴えてみようかと算段してみたも
の、なんだかモノで人を釣るのは卑怯な気がして、やっぱり正攻法
でいくしかないのだろうって結論が出たんだけど、何をすればいい
のやら。情けないけれど、私が取れる手段はそれくらいだから後は時
間が解決してくれることを期待するしかないよね。

公開意見陳述の日が近づいており時空管理局地上本部を襲撃する
計画をスカさんから知らされて、その準備に忙しくなってきたる所
だし。余計な事をしてノーヴェさんに精神的負担を掛けるのは避け
たいなら、何もしないのがベターな選択なんだろう。

武闘派の人たちは戦闘訓練と襲撃シミュレーションに力を入れて
何度も計画に穴がないか確かめている日々だし、私も含む後方待機組
は後方支援やもしもの時の為のサブプラン計画を立てている所。そ
んなこんなでスカさん一家は多忙な日々を過ごしているんだ。

ウーノさんのお手伝いで、資材調達やらガジェットドロンの在庫
管理。他にもアジトで暮らす為の皆の生活費の算出や必要経費の捻
出。光熱費はどうなっているんだろうって調べてみたら、自前の魔力
炉から電気を賄っているから電力会社に電気代を払ってなかった。
その辺りは流石スカさんで。自前で魔導炉型の発電機を開発してい
た。結構広いアジト内の電力を賄う為にやたらとサイズが大きかつ
たんだけど、設計図をスカさんから手に入れて手を加えて小型化と
出力向上を図ってみたたら無事成功。そうして小型化した魔導炉の空
きスペースにはスカさんと私が息抜きやネタで作ってお蔵入りに
なってしまった作品の数々をポイントと投げ入れている。勿体ないか
ら使ってあげたい所なんだけど、どうしようもないほどにネタに

走り過ぎてピーキーなものになっていたので使えない。ちょっと反省をしつつも、何時か折をみて再設計や解体して再利用しようっと。

また別の日にはトーレさんからお願いされて、脳筋組のメンバーとの戦闘訓練を行ったり。私が仮想敵役で捕縛系の魔法を使用してナンバーズの皆様を緊縛。んで緊縛されたナンバーズの皆様はソコからの脱出を試みるって寸法。面白半分でもスカさんを簀巻きにしている捕縛魔法の紐もどきで亀甲縛りを実行してみたら、たまたま訓練の様子を見に来たウーノさんとクアットロさんに目撃されて『そんな事を誰に教わったのですか?』と笑っているけれど笑っていない顔で問い質されたんだけど、前世で知っていたなんて言えなし嘘も付けないので書庫にあった本の中に書いてあったと伝えると、クアットロさんが魔法で一瞬のうちに転移して問題の本を見つけ出して焚き上げていた。ウーノさんもそれを確認してから書庫の主であるスカさんの下へと行き、スカさんに苦言を呈していた。

なんだかごめんなさいスカさん。でも、なんで書庫にそんな本を置いていたんだろう。趣味なのだろうか。

最近のロゼさんは知識の吸収に満足したのか、以前よりも格闘と魔法について熱を入れていてナンバーズの皆様と一緒に戦闘訓練に励んでいる姿をよく見る。危ない事はして欲しくないんだけど、本人が興味があるし楽しいと言っているので、ロゼさんが無茶をしない限り私は止めないつもりだ。

ロゼさんは防御魔法に定評があるようで結構固い防御陣を築いているそうだ。そんな事だからナンバーズの武闘派メンバーに目を付けられて、防御魔法突破訓練に引っぱり出されている。逆にロゼさんも他の人との魔法戦をお願いしているみたいなのでwin-winの関係みたいだった。私も開発して作った兵器の実験に付き合っ貰って、色々な事を皆に試してもらっているのだから私もwin-winなんだけれどね。

スカさん曰く『祭り』まであと少し。

◇

てな訳でスカさん曰く『祭り』である公開意見陳述の日がやってま

いりました。そう言えば地上本部襲撃と機動六課襲撃って同時進行だったな、と今更ながら思い出す。だもんでグループ分けは三組と相成っている。

地上本部襲撃組、機動六課襲撃組、そして後方待機。もちろん私は後方待機組だ。突発的な事態が起これば対処要因として出撃する予定もあるんだけど、もちろんそれは私が出来る範囲でのサポートだけだから戦闘はしないし、保護者も付いているんだよね。そしてその保護者はクアットロさん。なんでそんなにルンルンで締まりのない嬉しそうな顔をしているのだろうか。そしてウーノさんは心配そうに眉尻を下げているし。ちゃんと悪役っぽい顔をして欲しいし、心配するなら出撃組の心配をしてあげようよ。それに私が出撃する事態になるのはスカさんの計画が失敗を示している事になるんだから、そんな事態になっちゃうと駄目でしょうが。

ま、タラレバの話はさて置いて。

戦闘訓練を見学していて便利な能力だなーって感心したのはデーパーダイバーの能力を持つスカさん一家六女のセインさんだ。その能力は、無機物に潜行して壁抜きができるってもの。原作知識で知っているとはいえ実際の目で見るとは違うから、驚いてしまったのは言うまでもない。そして凄いと云っちゃったもんだからセインさんが悪乗りしちゃったのも言うまでもない。空き巣とか生業にしている人からすれば泣いて喜ぶ希少技能レアスキルなだけけれども、セインさんが生まれ持って得た資質だから誰彼が真似を出来る訳でもない。うん、世の中の平和は保たれてる。

そんな能力を持っているセインさんの力を使わない訳はなく、今回の地上本部襲撃の為の要になる任務を背負っている。地上本部指揮官制室へと直接潜入して、特殊なガスが装填されたハンドグレネードを投下して制圧するというモノ。要するに作戦成功の要にあたる内容で失敗すれば地上本部襲撃だなんて夢のまた夢となって、撤退を余儀なくされるだろう。

——カチリ。

室内の時計が、作戦開始時間を告げる。

「行くか」

戦闘を統括しているトーレさんが普段よりも幾分か低い声色で、ぽつりと宣誓する。その声に呼応して戦闘組の気配がガラツと変わった。嗚呼、戦う戦士の顔だ。普段一緒にご飯を食べたり、私が開発した試作品のテストに付き合ってもらったりしながら一緒に暮らして、時折馬鹿な事をやらかして笑ったりしているけれど”戦闘機人”と名を付けられるだけあって、こういう時の皆の眼はぶっちゃけ怖くなる。

そりや戦場になんて一度も出た事がない私のような甘ちゃんには、到底辿り着けない領域に達している訳である。一緒に暮らしている身としては、皆と穏やかに過ごせればそれで良いし文句なんてないのだけれど、状況がそれを許してくれない。スカさん自身とスカさんの後ろに付いている最高評議会。険悪な仲なだけけれどお互いに利用しなければ価値がなくなってしまうので今の所、共闘してるけれど。私的にはこの生活を保障してくれているパトロンとかスポンサーってイメージが強いけれど、スカさんはなんであんなに毛嫌いしてるんだろうね。

ま、無茶な仕事を沢山持つてくる上司みたいなものだから、賃金に似合わない労働をさせられればストレスが溜まるだろうし働き損になるから嫌になるのは理解出来るかも。その無茶に付き合わされている事になる私は辞退したいのだけれど、生活費の分くらいは働かないとね。タダ飯を食べる訳にはいかないし、ね。

どうか無事で、と願いながら彼女達を見送った後、帰還した皆が万が一怪我をした時の為の用意を始めた。

襲撃組が出撃してから暫く。皆の気配が消えていつもならそれに騒がしいアジトの内部は静かなものだ。時間的にはそろそろ同時襲撃が始まっている頃だなあ。ゼストさんとルーテシアさんもナンバーズの皆と一緒に作戦に参加しているから怪我なく戻って来てほしいんだけど。この身はハイスペックスカさんのクローンだけれど、まだ幼児だから現場に立てないのはちよつと悔しい。前線に立てば迷惑が掛かるだろうけれど、後方で出来る事もあるし。こうして

アジトで待機して安穩と過ごしている事に罪悪感を覚える。

それに今回はスカさん側に負傷者が出る事も知っているから気が
気じゃないし、主人公たちなのはさんたちの傍に私の様なイレギュ
ラーな存在が居る可能性も捨てきれないし。もし仮にそんな人が居
れば私はどうすればいいのだろう。その人物に接触して平和条約で
も結べるのなら結びたいけれど、敵対者とみなされればスカさん達と
一緒に倒される事になるだろうし。不安は尽きず、いろんなマイナス
思考が働くんだけれど、その可能性は少ないんじゃないだろうか。

一に、原作知識がある事。

一に、魔導師としての素質がある事。

この二つの条件をクリアしなければ転生者が存在していたとして
も機動六課の側に介入する事は難しいだろうし、魔導師じゃない時点
で役には立たないだろう。けれどもまあ、絶対なんて事はあり得ない
から用心するに越したことはないんだけど、一応今までにその気配
はないから安心していい。今更介入した所で、どうこうできる状況
じゃないしね。

あとは本当にイレギュラーが起こらない事を祈るのみだ。それな
らば、主人公たちが一度悪役に膝を折る事はテンプレート的な展開な
んだし、遠慮なく原作再現してくださいなと言うことで、スカさんの
計画が開始された。今回の襲撃には鹵獲目標が定められている。そ
れはもちろんヴィヴィオさんと、戦闘機人のオリジナルであるギンガ
さんとスバルさんだ。ヴィヴィオさんは絶対目標なのでトーレさん
が是が非でも連れて帰って来る事だろう。スカさんからも厳命され
ていたしね。

あ、ヴィヴィオさんとどんな顔をして会えばいいのだろう。イレ
ギュラーな存在を気に掛けるよりも、大きな問題が出て来てしまっ
た。すっかり忘れていたけれど、ヴィヴィオさんが戻ってくるんだっ
た。聖王のゆりかごを起動する為に必要な鍵になるヴィヴィオさん
だから、スカさんが何かしら手を施すのだろうかけれど、その間のお世
話は確実に私じゃないか。ちよつとシリアスに臭いセリフを考え
ながらヴィヴィオさんを送り出したあの時の私の気持ち返して

よう。すっかり忘れてた。

嗚呼、もう恥ずかしいと思ったらありやしない。

研究室のリノリウムの床の上を転がりまわりたい気持ちを抑えながらトーレさんがヴィヴィオさんの捕獲失敗しなかなーと頭の片隅によぎるんだけど一瞬で霧散させる。原作通りにシナリオを進ませたいのならヴィヴィオさん奪還は絶対だもんね。腹を括って、再会して恥をかくしかないのだろう。笑いたきや笑えばいいんだ。笑ってくれるのなら喜んで道化になろう。

——カチリ。

時計の針が襲撃タイムライン終了を告げていた。

◇

そんなこんなで、地上本部襲撃と機動六課襲撃は無事に終わり、原作通りにヴィヴィオさんの確保とギンガさんも確保された。スバルさんの確保は原作通りに無理だったようなんだけど、スカさんが満足げな様子だったので問題はない。ナンバーズの皆も怪我もしつつ無事に戻って来てくれたし、一安心。チンクさんの怪我が酷かったんだけど、怪我をして帰って来るかもと備えていたので直ぐに治療を開始して元に戻しちゃった。

機械の身体で生身の部分さえ無事なら、壊れたパーツの交換で済むのでこういう部分に利点は一応あるんだよね。倫理的にと言われると途端に怪しくなるけれど、その事は棚の上。今更ナンバーズの皆を生身の人間に戻すなんて不可能だし。普段から皆のメンテナンスを引き受けてた甲斐があったものだ。

ヴィヴィオさんとの再会を恐れていた私だったけれど、帰還早々に聖王のゆりかごの鍵として全うして頂く為に培養槽へとスカさんがさっさと運んじやって漬け込んだから、ヴィヴィオさんとの再会は叶わず。

ちなみにギンガさんも洗脳の為に培養槽へと漬けられて、現在スカさんが調整中。培養槽便利過ぎじゃないと不思議に思いつつ、時間があればその仕組みの勉強を始めようと心に誓う。地上本部と機動六課の崩壊でそろそろ原作も大詰め段階へとやって来て、イベントの

目白押しとなってる。次はアインヘリアルルの破壊なのだけれど、どうせなら破壊よりもいつその事乗っ取ってしまおうってスカさんに意見したら通ってしまった。なので作戦立案が私になってしまい、どうしたものかと試行錯誤しているんだけれど軍事知識がない私がそう簡単に作戦なんて立てられる訳ない。しかも戦力として動ける人数は実質十人程度で、少ないんだよね。ガジェットドローンは決まった動きしか出来ないし、制圧なんて器用な事は出来ないから。

戦闘機人と魔導師なので一般人となら負ける事なんてないだろうけれど、訓練を積んだ武装隊員を大量に投入されれば数の暴力で確実に負ける。それならば正攻法で作戦を立てるよりも、制圧完了後に何かしらの仕掛けをしておこう。ようするに制圧後の再侵入さえさねなければアインヘリアルルの起動は行えないし、遠隔操作にしてもええば現地に人を派遣しなくても操作できちゃうからね。あとは魔導師からの魔力供給問題を解決しなくちゃならないんだけど、少し前に小型化した魔導師炉を持ち込んで本来の電源と切り替えて設置すればいいだけだから、時間は掛からない。手に入れたあかつきには、過剰戦力となりそうだけれど持つていても持つていなくてもどつちでも良いなら、念のために持つて置こう。あとはスカさんが御乱心しない様に見張っておけば間違いはあるまいて。

ともかくアインヘリアルルは破壊から鹵獲へと変更されて、施設内を襲撃するプランとなった。下調べをしたところ警備兵は出入り口のみで、そこさえ無力化すれば施設内に居る人員は非魔導師だから侵入は容易い。その後施設内の職員や技術者の排除へと移るんだけど、天に召されてしまうような手荒な事はしたくないので追い出す形をとる。魔導師じゃないから無力化する事は簡単なんだけれど、捕えた人たちの輸送をどうしようか。人の手でやると確実に時間が掛かって、逆に私たちが襲撃される羽目になりそうだから素早い対応が必要なんだよね。

なので以前に造ったりサイクルロボットを少し改良を施して、ゴミじゃなくて人間を収容できるようにして雑に組み上げた転送魔法もきつちりと組んで人間の転送を行っても問題のない様にしようかな。

うん、これで人手が足りなくても平気だ。制圧後は、さっくりと別電源につなげ直してアインヘリアルを使用できるようにイジる事と遠隔操作可能にする事。そして最後の仕上げに誰も侵入できなくなるようにAMF発生装置と、あるガスを施設内に充填させる事にした。

ガスの充填は私の使い魔であるロゼさんの役目。というのもロゼさん制作過程で起きた奇跡の副産物のガスがある。タングステンに色々金属成分や魔法技術をつぎ込んでしまった為か、中和反応なのかなにかを引き起こしてガスを発生させちゃう時があったんだよね。そのガスには致死性はないけれど、即効性のあり直ぐに意識を奪ってしまうタイプのガスなんだ。ロゼさん曰く意図的に反応を起こそうとすれば延々と出来てしまうらしい。

成分が足りなくなれば、ロゼさんが指定した元素の標準液を用意すればいいだけだから凄く簡単だし、元素って市販されているから入手するのも案外楽なんだよね。ロゼさん特性のガスを利用して施設内をクリーンルームのように気圧調整してあげれば、外の空気が入り辛くなつてガスは施設の外に漏れにくくなるって寸法。そのガスを生み出すロゼさんの姿は滑稽なんだけれどね。人型だと特に。

スレンダーな金髪碧眼の綺麗な女性がお腹を壊して連続でおならを出している姿だし：ガスを出す事を念頭に置いているロゼさんなので音が出る事は些末な事らしく、すかしてして下さいと懇願したときは何を言っているのだろうかって世界の不条理を呪った過去がある。アハハ。最後の仕上げは、制圧後の施設内を占拠状態を維持させなくちゃいけないのだけれど、ナンバーズの誰かを常駐させる訳にはいかないの、地上本部に配備した警備ロボットの改良版とスカさんから借り受けたガジェットドローンを配備させる事に。これならガスが充満していても機械だから関係ないし、周囲の警備も十分に力を発揮できるだろう。そうそう私が制作した警備ロボットには、地上本部に配備された際に名前を付けたんだけど……。

S U — p e r (とても)

C U — s t o m i z a t i o n (カスタマイズされた)

J I — i n g o (好戦的愛国主義者の)

A | f f e c t i o n (愛情)

『SUCCUIA』が正式名称だ。読み方はちよつと無理矢理なんだけれど『スカジア』さん。あ、そうそう。アインヘリアル警備に当るのは改良版になるので地上本部に配備されたものと区別が必要なので新たな名前を付けなきゃならないんだけど、面倒なのでSUCCUIA:Type-Rとかでいいか。掛けてるお金もType-Rの方が高いし。地上本部に配備されたものは本部のお財布事情も関係してオミットされちゃった機能とかもあるので、ある意味TYPE-Rの方が完全版なんだよね。

因みに正式名称の意味だけをレジアスさんに教えたら、右側よりの名前の為か大層気に入っていた。お遊びで付けた名前で、ネタ元は何か月か前に私がふと思っってしまったスカさん×レジアスさんの禁断の情景が元である。本来の意味と嫌味を含めた正式名称を伝えちゃうと、血圧が天元突破してしまいレジアスさんが憤死しそうだからあえて言わないでおいただ。人間、知らない方が幸せなという場合もあるんだ。ワタシツテヤサイヨネ。

もしもの場合はアインヘリアルを破壊できるように、爆破装置も設置するし抜かりはない。私が立てた計画プランをスカさんとウーノさんに見せたら何でか感心してた。一応、この案だけじゃ不安なので何通りかの別プランも提案してあるし、失敗した時用のサブプランも考えてある。少ない人員でどう行動を起こせば効率よく最低限で動いて、最大限の効果をだせるのか考えるのは楽しかったけど。スカさんからの許可も得たし、晴れて私の初陣になるアインヘリアル強奪作戦は開始された。

……開始された、はずだった。

なんでナンバーズの皆様全員が私と一緒に出撃するんですかあー。スカさんに提出した強奪プランは最小限の戦闘員のみで任務に実直なトーレさんとチンクさん。そしてその二人が選出した二名と私とロゼさんだけだったのにー。だというのに出撃メンバーに選ばれなかった人たちが暇だからと理由になっっていない理由を付けて私たちと一緒に行動しています。もうアジトも出てしまったので帰れ

とも言えず諦めて一緒に行動している。唯一アジトに残っているのはスカさんとウーノさんだけで護衛に武闘派の誰かが残らなくても良かったのだろうかと思っただけで、一応秘密のアジトなので管理局に発見されていないから大丈夫なはず。

それにしたって皆過保護にも程が過ぎる。付いて来ている皆もそうだし、スカさんとウーノさんもサーチャーで生中継されている映像を見てるし、何かあれば直ぐに応援を寄越すから連絡しなさいって。子供じゃないよーって言いたいけれど、悲しいかなこの身は三歳児でした。最近忙しくて自分の肉体年齢を忘れつつあるよ。

アインヘリアルはミッドチルダに三基存在し射線確保する為に高地に建設されている為、三地点同時襲撃による一斉制圧を選択した。一個一個制圧しても良かったんだけど、時間が経つにつれ警備は強化されるだろうしね。

なお三号基は未だに建造中なので確保して自分たちで建設を続けるよりも、徹底的な破壊工作とした。なので私は三号基に向かい爆薬を設置して破壊する役目を担ってる。使い魔のロゼさんが私に着いて行くと聞いてくれなかったんだけど、一号基と二号基のガス充てんという大事な役目があるから命令として強制してしまった事は申し訳ないと思ってる。ロゼさん謹製の椅子やベッドにお世話になれなくなるのは嫌なので、後で確りとご機嫌を取らないとね。

「お嬢さま、そろそろ時間ですのでよろしいですか？」

トーレさんが私に声を掛けてくれて、作戦開始を促してくれる。機動六課襲撃から間が経っていないのに借り出して申し訳ないと謝るけれど、実戦部隊の長なので構いませんよと言ってのけるトーレさんはすごいイケメンだ。胸あるけれど。今回協力者としてルーテシアさんとゼストさんも手伝ってくれるそうなので一緒にこの場に立ってる。不思議に思っただけで何故と聞いてみると『興味があるから』って。協力してくれるのは嬉しいけれど危ない事はお願いできないので、ルーテシアさんにはガジェットドローンの転送をお願いし、ゼストさんにはルーテシアさんの護衛を頼んだ。

アギトさんが彼女たちの傍に居る筈なんだけれどスカさん一家は

苦手らしくて姿を見ていない。なので何処かに隠れているんだろう。後でお礼をしなきゃと思つて何が良いのかと聞くと『ゼロが作った御飯』『風呂に入りたい』となんとまあ健気なお願いだったので、この任務が終われば皆の為に盛大にご飯を作ろうじゃないのよさ。論文を幾つか書いてて、原稿料が入ってきてるしある程度自由の利くお金はあるので、その位ならお安い御用だ。

「はい。みなさん、よろしくおねがいます」

この場に居る皆に頭を下げて姿勢を元に戻してみれば、頼もしい顔をしている面々。嗚呼、これは失敗する事はないかな。原作だと破壊してたけれど、皆の自信満々の顔を見ると作戦失敗の文字は浮かばないんだもの。各々好き勝手に声をだしてそれぞれ自分の役割を果たすために散っていく。予定していたメンバーよりも多くなつてしまつたけれど、トーレさんが仕切つてくれたので楽だった。

気合の入ったナンバーズのみなさんのお陰か、一号基のアインヘリアル制圧は予想よりも早い時間で終了。職員や技術者の排除もスムーズに終わつて、あらかじめ用意しておいた小型魔導炉とAMF発生装置の設置が完了。

砲台の制御装置のハッキングからの遠隔操作切り替え、それからロゼさんの超シュールな光景が繰り広げられてガスの充填も無事に終了。同時進行している二号基の方も一号基と変わらないタイミングで制圧完了の一報を受けてしまったので、ロゼさんがちよつと大変な目に合つてしまつたけれども。

「た〜まや〜」

私の隣で呑気な声を出しているのはクアットロさん。その言葉の通りに三号基も私が調査した特製火薬を使用した自前の小型爆弾を使用して粉微塵に破壊したから、最初から作り直すには地上本部の予算の関係上不可能だろう。

どうにか私の初陣は無事に終了。戦場に出た新兵が死んじやう事なんて当たり前だから、結構なストレスが掛かっていたのだけれど気が抜けてどつと疲れてしまった。それでもこの後には大事な打ち上げ会があるのだし、皆晩御飯を楽しみにしているみたいなので倒れる

訳にはいかない。なので気力を振り絞ってアジトに戻って、調理を始めた。皆お腹が空いていたみたいで怒涛の勢いで減っていく大量の料理を目を白黒させながら見てた。

——お疲れ様でした。

そう心の中で感謝の言葉を呟いて、アジトの台所で私の意識はついに途切れたのだった。

第七話：終わりの始まり。

これで、良かったのかな。

変えてしまった事、変えてしまったものはもう元へと戻らない。まあ、いいか。そう何度も自分に言い聞かせているけれど、なんども良かったのだろうかと問いかけてしまう。深く考えても仕方ない事なのだから。なるようになるさ、ケセラセラってね。

「マスター。……マスター、起きて下さい」

私の肩を揺らしながら声を掛けるのは誰だろう。答えてあげたい所なんだけれど、それを頭と心が拒否をして眠りに誘おうとして、目を開けるのは断念。それでもまだ揺れる体に、段々と意識が覚醒していきようやく目を開いた。ぼんやりとする視界に映り込んだのは、濟まなさそうな顔をしているロゼさんが。

「申し訳ありません、マスター。ご命令でしたので……」

あー……、思い出した。アインヘリアル制圧で実戦を初めて積んですぐ疲れたんだけど、その後にもやらなくちゃいけない事があつて無理をしてたんだっけか。約束もあつたし、作戦を手伝つてくれた皆へのお礼も兼ねて普段作らないようなものを作つて満足したあと、寝落ちしたんだつた。自室のベッドで起きたから、誰かが此処まで運んでくれたんだろう。けれど疲れ果てた体が自然に目を覚ます為にはかなりの時間が必要なんだけれど、それだと全ての事件が終わつてしまいそうだったので、もし私が眠つてしまつたらある時間に起こして欲しいとロゼさんをお願いしてたんだ。

なのでロゼさんが申し訳なさそうな顔をする理由はないんだけれど、使い魔契約の時に精神リンクを切らなかつたので、私の感情とか肉体情報とかがロゼさんには筒抜けにながれているから、疲れているとかはすべてお見通し。無茶をしてはいけないとは分かっているものの自分でどうにも止められないから、丁度良いストッパー役になってくれているのでそんな顔をしないで欲しいんだけど細かい感情までは精神リンクでは伝わらないから難しい。

「わたしがたのんだことなので、きにしないでください。……ありがとうございます、ろぜさん」

申し訳なさそうな顔をしているロゼさんにそう言ってから部屋を二人で後にする。目的地はアジト内の培養槽がある部屋に。ヴィオさんの様子が気になるから覗きに行こうと考えていたんだけど、寝落ちしちやっただからだいぶん遅くなってしまった。急ぎ足で向かうんだけど長い廊下を進む早さは三歳児の身なので時間が掛かる。

「少し、いいか……？」

声が聞こえた方に振り返ってみれば、厳しい顔をしたゼストさんが居た。少し張り詰めた空気に反応してロゼさんが私を庇うように前に立つけれど、ゼストさんに敵意はない事は分かっているの下がってもらおう。私に用があるなんて珍しいなと思いつつ、話を聞く姿勢を取って耳を傾ける。その内容は、ゼスト隊全滅事件の事だ。でも私がゼストさんの言葉に答えられる情報は持っていない。この世界に生まれて三年しか経っていないし、十年前の事を聞かれても知らない。知識としては知っているけれど、当時に存在していた訳でもないし。前世の記憶のお陰でゼスト隊全滅については何となく理解はしているからゼストさんがスカさんを毛嫌いしている事も解ってるし、私の目の前に立つ不器用な人が真相を解明しようと足掻いている事も知っている。

「……ぶめんなさい」

彼の望みに答えられなかった事に少しの罪悪感を覚えてそんな言葉が口から勝手に飛び出していた。

「いや、いい。済まなかったな。妙な事を聞いて」

大きな手で私の頭を撫でる手は優しくかった。その手から伝わる熱がなんだか切なくて。私の下を去ろうとする背中は何か嫌な雰囲気を感じ出している。それを感じてしまうのはこの先を知っているからこの幻かも知れないけれど。

それなら……。

「まっってくださいっ」

ゼストさんを引き留めて私に着いて来て欲しいとお願いしてみれば、一つ返事で頷いてくれた。スカさんに似ているし、嫌われているかもしれないから賭けみたいなものだったけれど。そうして三歳児の後ろを、かなり大柄の渋い男性が私の歩幅に合わせて歩く光景は滑稽な事だろう。普通は逆だろうし、ロゼさんは私の影の中に入っちゃってゼストさんの事を警戒しているし。ちよつとへんてこな雰囲気には笑い出しそうになるのを我慢しながら目的の場所を目指す。

移動中、ゼストさんは一言も喋らずに黙ってただ付いて来てくれる。陸の部隊では珍しいオーバーSランクの魔導師で部隊を率いていたつてのが信じられない位だ。失礼だけれど、言葉数の少ない上司が部下と意思疎通を上手くできてたのだろうか。でもまあ、真面目で実直な人だから、大丈夫か。それじゃなきや出世なんて出来ないし、副官の人が確りしていて代弁してくれば平気だもんね。部下に恵まれてたんだらうな。

「これは……」

はいはい、そうですよ。培養槽が沢山並んでる部屋です。本当はヴィヴィオさんに会うためにやって来るつもり場所だったんだけど、少し予定を変更してヴィヴィオさんが眠っている培養槽の場所よりも奥に居る。

きよろきよろと顔を動かしながらゼストさんは周囲を見てる。培養槽の中に入っている人は裸の女の人ばかりなので、連れて来る事を迷ったけれどゼストさんなら邪まな気持ちで見ると事はないだろうし、全力でそれを悟られないようにするだろうし、口外もしないだろうして事で来てもらった。私が奥まで入るのは珍しいんだけど、ゼストさんに見ておいて貰いたい事があるからここまで来た。監視カメラはあるんだけど、スカさん達は別の事で手が離せない状況なので今のタイミングなら大丈夫なはず。

「メガーヌっ……い！」

そう。ルーテシアさんのお母様であるメガーヌさんが眠る培養槽の前です。本当なら直ぐにでも目覚められるメガーヌさんなのですが、研究用の素体にでもするつもりだったのだろうかスカさんの気ま

ぐれにより培養槽の中で眠ったままだ。目覚めさせるだけなら私にも出来るんだけど、原作三期が終われば管理局の技師さんだかお医者さんによって目覚めるし、現在お世話になっているスカさんに逆らう訳にはいかないので現状維持である。私の心情的には、この培養槽に入る人たちを開放したいけれどね。でも、やっっちゃうと色々不都合が起こるから。申し訳ないのだけれど、自分の事が優先だ。

「何故、此処に俺を連れてきたっ!」

視線で射殺いころされそうなくらい怖い表情のゼストさんは底冷えするような声で静かに吼える。深い理由なんてないんだよね。ただメガーヌさんは無事で、目覚める為にはレリックが必要ない事を伝えたかっただけなんだし。なら今すぐにやれと言われていた様な気もしないんだけど、まだ知識が足りないから不安な面がある事と、現状だと私はスカさんに逆らう気はないので出来ない事。そして遠くない未来……このアジトに居る皆は逮捕されるだろうから。管理局は確かに人手不足で回らない部分もあるけれど無能なんかじゃない事。だから今少しスカさんのお遊びに付き合っただけ欲しい。

「これは?」

不服そうな顔をしながら差し出した物を受け取るゼストさん。まあ、まだまだ培養槽の仕組みを理解しているわけではないのだけれど、そこいらに居る技師や医療関係者よりは詳しい筈だ。そこは流石スカさんのクローンだし、培養槽についてもスカさんから少しずつ教えてもらったしね。今のこの管理局や管理世界の医療技術だとメガーヌさんに後遺症も何もないまま覚醒させる事は不可能で。

後遺症や障害のないまま目覚めさせる事ができるのはスカさんくらいなんだけれども、一応スカさんを師と仰ぎ色々教えてもらったので自分なりに考察やらをして色々纏めてるデータだ。後は管理局に所属している医療関係者の腕と知識と経験が必要になるけれど、纏めたこのデータが役に立つ筈だ。スカさん独自の理論も使っちゃってるから一般に普及している培養槽と少し違うからね。

ゼストさんに渡すモノはもう一つある。それは戦闘機人のデータだ。ナンバーズの皆のメンテナンスをしていたから、スバルさんとギ

ンガさんに応用できるだろうと思ってこれも用意しておいた。用意周到過ぎて不審に思われるかもしれないけれど、口止めをしておけばゼストさんは義理堅い人なので出所は言わないだろうし、仮に言った所で私は別に困らないし。私が知っている未来を辿るのなら、ゼストさんはあの結末を迎えなきゃならないのでデータを作成した人物の特定は無理ツィ訳なので。コピーは幾らでも取れるし、漏れても問題は無い情報だからゼストさんの使いたい様に使って欲しい事も伝えて。

「わかった。変な事を聞いて済まなかったな。……俺は十年前の事を問質しにレジアス・ゲイズに会いに行く」

少しだけ目を細めて笑い、受け取ったデータを大事そうにポケットへと仕舞いこんで、ゼストさんは足早にアジトを出て行った。

どうか無事だと願う気持ちと、ゼストさんの背中に背負った目に見えない何かが、まるで彼の未来を示しているように見えて、私は深い溜息を一つ吐きだした。やるせない気持ちを抱えながら、ヴィヴィオさんが眠っている培養槽の下へと向かう私がたまたま目に入ったのはギンガさんが眠っている培養槽だった。最終決戦にはスカさんの洗脳を終えて、ナンバーズ十三番目として出撃をするわけなんだけども。憂鬱な気分の中で、もう一つくらい憂鬱を背負い込んでも構わないかと心が騒ぐ。

そんな事なのでギンガさんの洗脳を時限式で解けるように設定しておきました。これで上手く時間が合えばスバルさんとギンガさんの姉妹喧嘩をしなくて済むようになるんだけれど、賭けの部分が大きい。何せ詳しい時間とか知らないしね。上手く洗脳が解けたなら、管理局員として現場に即戻れるだろうし。戦力が足りていないから、負傷していない限り受け入れてくれるだろうし。

スカさんたちを裏切ってしまう形になるんだけど、それはそれ、これはこれである。ロゼさんが私の影の中で見ているけれど、ロゼさんは私の使い魔で私の事が最優先なので無問題。ちよつと時間をとってしまったけれど、やつとこさヴィヴィオさんの下へ。気持ちよさそうに培養液に浮かんで寝ているヴィヴィオさんは無邪気な子供

そのままです。流石にヴィヴィオさんに細工をする事は出来なかった。聖王のゆりかごを起動させる為の大切な鍵なので、余計な事をすればスカさんに速攻でバレる仕組みになってるので私に出来る事はなにもない。だからこうしてみている事しか出来ない。

——それじゃあね。

別れを告げて、培養槽が並ぶ部屋から出ていく。ヴィヴィオさんが目覚め、聖王のゆりかご起動までに時間はそう掛からなかった……。

◇

お約束通り聖王のゆりかごが起動した。泣き叫ぶヴィヴィオさんをモニター越しに見るのは辛いんだけど、なのはさんがどうにかしてくれるからなのはさんに投げっぱなしである。何か手を出して失敗してもアレなので、主人公さんに一任しましょ。それにしてもう原作も終盤なんだねとしみじみ思う。これまでの過程は原作通りで、多分心配は要らないとおもうけれど何だか胸が痛いのは何でだろう。

スカさんのクローンとして生まれ変わり、スカさん達と過ごして来た三年間。その日々が終わってしまうのだから胸が痛くて仕方ないのはしょうがない事だと思うけれど。スカさんだって自分が望んでやりたい事をやっているのだし、私だってやりたい事をやりながら過ごして来たのだから。悪の道に走るような非道な人間にはならないと言って逃げようと思えばいつでも逃げられた。そのくらいに私は自由だったし、与えられていたものも多かった。育ててくれた恩と彼の庇護下の中で手に入れた知識や経験は、普通に生活していたならば手に入れられなかっただろう。でもさ、これはやり過ぎじゃないのかな……スカさんや。

「諸君！・ 私は研究が好きだ」

嗚呼、始まつちやったよ。

「諸君！・ 私は開発が好きだ」

好きだよねえスカさん、コレ。

「諸君！・ 私は研究・ 開発が大好きだ!!」

ちよつとふとましい体型で高級な白いスーツを着込んだ少佐のよ

うにそんな事をのたまうスカさんは凄く上機嫌。だって目の上のたんこぶだった最高評議会の三人をドウエさんが始末しちゃったもんね。だから今のスカさんは首輪の外れた猛犬状態になってしまった。さあ、もう誰も止められる人は居ないよ。『無限の欲望』だなんて二つ名を持つているスカさんだから仕方ないんだけど、彼の演説もどきに返事をしてくれる兵士さんなんてどこにも居ないから、すんごく滑稽な光景になっているんだよね。

だからその滑稽さを緩和させるために大量のガジェット・ドローンを兵士に見立てて、気分を出すために私が音声を合成して観客のギャガを流してる。その声は時にはスカさんに同調し、最後には盛大な拍手とスカさんを称える名前コールが流れるようになってるんだけど、スカさんの演説はいつ終わるかわかんないし、時々アレンジが入るから手動でやるしかないんだよね。

某少佐の演説がスカさんの目に入っちゃった理由は、私が第九十七管理世界ようするに地球にあるインターネット回線に自由にアクセスできないかと考えて、超長距離通信を編み出した事が発端だった。

もちろんそれは地球の質量兵器や技術が知りたくて繋げたのだけれど、前世の記憶が懐かしいと訴えてきてちよつとだけ”2525動物館”とか”my tube”とかを覗いちやったのが間違いだった。あそこはネタの倉庫だから、ついつい楽しくて見入ってしまったんだよね。それを偶々スカさんが知ってしまい一緒に見る様になってしまったんだけど、ロボットアニメなんて物もみてしまったから影響されまくりで。アニメのネタで済んだ事を真面目に科学的に検証をし始めるし、私も私で感化されて一緒に考えちやったもんだから状況は悪化する一方で。

あの技術は使えるとか、あれならば管理世界の技術で応用が利くとか熱弁していつの間にか夜が明けていた事なんてザラだった。スカさんと私の生存確認をしにきたウーノさんが生きていた事に安堵した後、呆れ顔になって深い溜息を吐いていた。何時もの事なのだから諦めて欲しいんだけど、ウーノさんの溜息までがお約束。様式美。すぐに興味を示して色んな作品を見ていたスカさんは、世界を旅する

武器商人とか超電磁砲的なのとか、宇宙生物に侵略されながら滅びの道を歩むしかない人類とかが気に入ってた。で、特にお気に入りの先ほどの演説シーンで。

教えてしまった責任もあるし面倒だと思っても演出のあるなしで雰囲気が大分違うから、地味な作業だけれどスカさんの声のタイミングに合わせて合成音声を流している最中だ。しかもこの演説、スカさんがいとも簡単に公共電波をジャックして管理局や次元世界に住む人たちに公開生中継してるんだよね。テレビを付ければどのチャンネルもスカさんのイカれた姿が映るなんてどんな罰ゲームなんだ。私は裏方スタッフとして参加、かと思いきやスカさんの左腕に抱かれて一緒に映ってる……。犯罪者として次元世界にデビューするだなんて全く考えてなかったよ、とほほ。テンションが駄々下がりの中、スカさんの演説はなおも続く。BGMの選択もこだわったようで、今流れているのは地球のオーケストラでよく演奏されている組曲惑星から”火星”である。

これも私が作業用BGMとして流していたのをスカさんが偶然聴いてしまい気に入ったそう。いろいろと地球産のオーケストラを聞いて気に入ってたみたいなので、スカさんのラボでもよく流してたなあ。著作権は切れているから全然問題はないけれど、暗い音が地味に流れ始めて段々と激しく派手になっていく曲調だから今の状況には似合ってる怪しさ満点である。スカさん曰く、見栄えは大事だそう。

「さあ、諸君っ！ 地獄を創るぞ」

あ、最後はネタが思いつかなかったのか某少佐の台詞をそのまま言っちゃった。その言葉は今のスカさんの状況を的確に表している言葉だろう。聖王のゆりかご起動のお陰でミッドチルダは阿鼻叫喚の縮図状態。管理局員は総出で現場に出勤しているだろうし、一般市民の皆様は緊急避難をしなければならぬし、経済的打撃はどうなっているのやら。多分凄惨な事になっているんだろうけれど、賠償金を払いきるお金がスカさんにあるのだろうか。多分無理、だよな。

だからこそミッドチルダの政府や管理局が存在してるんだろうけ

れど、そつちもそつちで財政状況は芳しくなさそうだからちよつと心配の種だったり。復興費って巨額のお金が動くからね。逆に潤う人もいるだろうけれど、その陰には必ず不幸になってる人も居るのだし。はあ。

そして今まさに、最高評議会と一緒に動いていた人たちがやって来た悪事をスカさんがあっさりと暴露しちゃった。どのくらいの人たちが最高評議会の影響下にあつたのかは知らないけれど、管理局の高官たちは慌てふためいてるんだろうな。脳髄だけになってまで生命維持を施して生きながらえながらも倫理的に不味いつて理由で秘匿されてたもんねえ。もしくは存在は知っていても、姿をしらないだけだったのかも。この辺りの記憶はあやふやだ。その話の流れでプロジエクト・フエイトについても踏み込んで煽る事煽る事。フエイトさんに何か恨みでもあるんですかーってくらいに煽ってるんだけれど、これってスカさんなりの嫉妬なのかなあ。プレシアさんもかつては一緒に研究をしたみたいだけれど、そういえば”記憶転写”の部分に関してはノータッチみたいだったし。興味がなくて手を出さなかつたのだろうけれど、娘を蘇らせたいという執念に囚われて、完全ではないにしろ”転写”が出来てしまったプレシアさんに対抗意識でも芽生えてしまったのか。スカさん自身にしか判らない事だから、推測するしかないんだけど。うーん、と微妙な顔になりそうなのを我慢しながら、アジトでのスカさんの演説はやつとの事で終わった。スカさんは大仰に喋るもんだから、腕の中で揺れる事揺れる事。気持ち悪くなる寸前に終わって安堵したのは秘密である。そして、長かった。

さてさて、演説が終わったって事はこのアジトも危険に晒される訳である。はやてさんの友人である査察官のベロツサさんがハツスルしちやって、この場所がバレるんだったよね。どうやってこのアジトを見つけ出したのが不思議なんだけれども。そして一緒に主人公サイドからは”暴力シスター”ことシャツハさんと、管理局からは長年スカさん関連の事件を追い続けていたフエイトさんに件のヴェロツサさんが突入してくるんだよねー。見た目は三歳児でなんにも出来

ない子供に見えるかもしれないけれど、アインヘリアル襲撃時に顔が割れているだろうから多分捕まるんだろうな。こんな事なら変装でもしておけばよかったけれど、初陣の緊張でそれどころじゃなかったし。

つか、このアジトで自由に動き回っている時点で怪しい人物乙だしね。演説を終えたスカさんの腕から解放されて晴れて私は自由の身になる。スカさんは指揮官としての役目があるのでこのままココに残るそう。秘書兼副官であるウーノさんも勿論一緒に。最終決戦の為かこのアジトにはスカさんの護衛の為にトーレさんと六女のセインさん、七女のセツテさんが待機している。

あ、そう。このアジトに潜入されて制圧を受けてしまう前にやらずなくちやいけない事がある。その為にいそいそと自分の足で研究室へと赴き、スカジアさんの全機体遠隔操作システムを引っ張り出してプログラムを構築。地上本部に配備されてあるスカジアさんの操作権限を乗っ取って、レジアスさん、ゼストさん、そして一番の優先目標のドゥーエさんの死亡を回避しようって魂胆から。レジアスさんの居場所は地上本部に不法侵入するはずのゼストさんとドゥーエさんの魔力を感知して居場所を特定する予定で個体で魔力波長が全く違うので分別は可能だし、二人の魔力波長は知っているので簡単だ。

本部には十体しか配備されていないけれど、戦力としてそれなりだから盾にでもなつて時間を稼いでくれれば、烈火の将であるシグナムさんが止めてくれるだろうし。賭けに近いし、残りの問題はシグナムさんに丸投げという何ともザルな行動なんだけれど、何もしないで見ているよりは出来る事をする方が建設的だし。そしてもう一つの保険を掛ける。

「マスター。何故……」

私と離れてしまう事に不満があるんだろうね。ロゼさんがふくれっ面である。それでも主である私の命令には服従しなければならぬ。最近の訓練でめきめきと腕を上げているので、スカジアさん十体よりも断然に役に立つ。命令されたコマンドだけしか実行できない兵器

と、自分の意思で考えて動いてくれる人ならば後者の方が圧倒的に貢献度は大違いだから。ぶっちゃけて私のできる事、すべき事はこれで終わってしまった。あとは出たとこ勝負の勢い任せだ。

もしかすれば何かの間違いで原作のストーリーから外れてしまいかもしれないけれどそれはまたその時だし、モブとして気にしてもらえないくらい存在の私が死んでも何も問題はないだろうし。いや死にたくなんてないけれど、そうなるのならばきつとそういう運命なのだから。

第八話：決戦。

そろそろフェイトさん御一行がスカさんやスカさんの護衛に付いているナンバーズの皆様を逮捕しにやって来るかなー、だなんて呑気に考えてた。思考の隅では、聖王のゆりかごに乗艦している皆や管理局の邪魔をしに出撃していったメンバーも気になっていて。スカさんの下へと行けば生中継をしている筈だから状況を知る事ができるんだけど、ハイテンションスカさんに付き合うのも大変だから……なんだかなあ。

自分の研究室で何かをする気にもなれないから、私はアジトの中をウロウロと落ち着きなく彷徨っていた。使い魔のロゼさんが地上本部へと向かってしまったので現在私の身を守ってくれる人が誰も居ません。他の人の事を考えていて、自分の事を綺麗さっぱりと忘れていただなんて、間抜けすぎてなにも言えない。

これからきつとフェイトさんたち管理局がこの隠れアジトに突入してくる訳なんだけれど、私の扱ってどうなるのやら。いろいろとやらかしてしまっているから、取り敢えずは逮捕される事は確かそうなんだよね。アインヘリアル強奪時に私の姿はバツチり割れているし、スカさんの演説に一緒に映つちやつてたし、地上本部に配備したスカジアさんの件もあるしなあ。容疑が沢山ありますよ、あははー。

あとは捕まった後の扱い方なんだけれど、子供嫌いな人の手に渡ると邪険に扱われそうだし痛い思いはしたくないから、逮捕される時は子供好きを拗らしてるフェイトさんが一番安心なんだけれど、スカさんを捕まえる事に必至だろうから違う人だよね。

それでもまあ、何だろう。この場所から逃げようだなんて思わないし、逃げる事も出来なかった。スカさんのクローンとして生まれ変わったの三年間の時間は、私にとって濃密なもので楽しかった時間だったから。スカさんがやっている事を知りながら、止める事も諫める事もしなかった私にも罪はあるんだろう。ぐるぐるぐるぐる回る私の思考回路とぐるぐるぐるぐる回る頼りない足取りは、いつの間にかこの場所へと辿り着いていた。結局行く当てなんてなくて自分の

研究室に来ていたのだから笑うしかない。

この部屋で色んな事があったなあ。スカさんと研究や開発で議論を夜通し繰り広げた事もあるし、無茶な徹夜をやらかしてウーノさんやクアットロさんにトーレさん、はたまた他の人たちに止められて強制的に中断されて抱きかかえられ自室のベッドまで連れていかれたり。

ご飯を食べる事を忘れていけば、セインさんやチンクさんが簡単な食事を作って差し入れてくれた。武闘派の人たちはもつと強くなりたいてって言ってISの強化や武装を改造する為に相談に来てくれたりもしたんだ。

前世では私の両親は御世辞にも良い親とは言い難かった。

口答えをすれば暴力を受けたし、些細な事でけんかになってぶつかっていた。あまりにも酷いものだったらしく、ご近所さんに通報されて児童養護施設に保護されて育つ。その施設の環境もあまり良くなくて。まあ私に運がなかったんだろう。

何をするにも制限があつたし、自由もあまりなかった。そんな事だから反骨心だけが育つてしまい必死で勉強をして、どうにか良い学校に通って職に就いて。でも、そんな環境下で育った私は、周囲の人たちに溶け込む事が出来ずに浮いていた。一人で過ごす日々は気楽なものだけれど、正直寂しくもあつた。時間を潰すために漫画やアニメに嵌ってしまったのは必然だったんだと思う。

その事を”逃げ”だと言う人がいるのなら、そうなのだろう。けれど私にとってそれは現実よりも楽しくて面白いものだったから。それに物語の中で描かれる幸せそうな”家族”の形に密かに憧れていた。誰かに優しくされる事が嬉しかった。誰かに頼られる事が嬉しかった。誰かに褒められる事が嬉しかった。多分、私以外の他の人がみれば何の変哲のない当たり前のものだったのかもしれないけれど。でも、私にとってそれはとても心地の良いものだったから。いつの間にか大切に思っていて、大事なものに変化していったんだろう。

何もする気が起きないとは言ったものの、気になってしまうのが人間の性というものだから。スカさんが監視している映像にこっそり

とハツキングを掛けてこの部屋でも観られるようにした。物語は本
当に佳境に入つて、聖王のゆりかごでは八神さん家のヴィータさん
が動力炉の破壊に向かつているし、クラナガンの街ではスバルさんや
ティアナさんの姿がある。そしてエリオさん+キヤロさん対ルーテ
シアさんによる怪獣大決戦が始まっていた。

——ルーテシアさんとキヤロさんの召喚獣対決……街中の被害が
とんでもない事になっていく気がする。

他の星からしゃしゃり出て来て三分間しか変身出来ない某巨人の
ヒーローが、敵と戦いながら派手にビルやら工業地帯やらをどっこー
んばっこーんと破壊していく特撮作品みたいになってる。怪獣を撃
退して良かった良かった、そして平和が保たれましたって言っている
けれど、実際にはその陰に家を失い仕事を失い路頭に迷う人たちが沢
山いると思うんだよね。

そんな事を描いてしまえば夢も希望も浪漫もなくなってしまふし、
子供向け番組だから小難しい事は言わない方針なんだろう。でも、現
実に起こつてしまえば色々世知辛い問題が沢山出て来て、それに奔走
しなきゃならない人たちも沢山出て来るんだから。戦っている本人た
ちは頑張っているんだろうけれど、建物のオーナーとか今頃膝から崩
れ落ちていくんじゃないかなと想像しちゃうのは無理もない話で。

他の場所でもスバルさん対ギンガさんの対決が始まろうとしている。
さて無事にギンガさんの洗脳は解けるのか、賭けのようなものだ
けれど信じるしかないかな。培養槽のシステム解析については私は
まだ完全に習得していないからスカさんの方に分があるし。なので
ギンガさんの洗脳が解けない可能性があるんだけれど、スバルさんも
機動六課でなのはさんの直々に訓練を受けて頑張つて来たんだから
きつと報われるはずだ。

所謂他人任せの投げっぱなしジャーマンなんだけれど、四方八方手
が出せるほど器用じゃないし出来る限りの事は施したのだから、私に
はもう見守るしか手段がないんだよね。

そういえば私が居るこのアジトはどうなっているんだろうか。外
の出来事に興味を引かれちゃったからこのアジトの中の事を気にし

ていなかっただけけれど、そろそろこの場所にもフェイトさんたちが突入してきてもおかしくないから。キーボードを手繰り寄せて色々と操作をし、固定監視カメラの映像を拾ってみると見事にフェイトさんたちはアジトの中へと侵入を成功させていてスカさんと対峙中。

トーレさんとセツテさんがフェイトさんと戦闘中で、一応優勢みただ。フェイトさんはまだ軍服調のバリアジャケット姿だからまだ余裕はありそうかな。トーレさんたちに加勢するつもりなのか、スカさんは言葉でフェイトさんの心を乱す手段に出た。私の遺伝子の提供者ながら、嫌な台詞をどんどんとよく言えるもんだ。しかも真に受けてフェイトさんに精神的ダメージを与える事に成功しているし。

もう少しフェイトさんはメンタル面を鍛えた方が執務官としての職を全うできるのでは、と愚考しちゃうのは仕方ない。だって、世の中は不条理な事ばかりで溢れていてその状況に直面する機会が一番多いのはフェイトさんなんだよね。だからこそ精神の強さが大事だと思っただけけれど、スカさんの言葉でたじろいじやうようじやこの先がとても心配だと、私の老婆心が叫んじやった。

あ、老婆心が働いたついでにもう一つお節介というか今後の身の振り方の為に保険をもう一つ掛けておこう。そう思っただけでキーボードをまたべけべけと叩いてとあるデータを入手しておいた。

精神的に追い詰められているフェイトさんを余所に、地上本部ではゼストさんが無事にレジアスさんへの御礼参りに成功したみたいで、再会を果たそうとしていた。そんな事だから地上本日に配備されているスカジアさんが、レジアスさんの執務室へとゼストさんの後を追っかけている。ロゼさんも既に現場待機が完了しているみたいで、隠れてタイミングを窺っている状態だ。

なので、もしかすれば私が考えている通りに物事が進めば彼ら二人とドゥーエさんは助かるかも知れない。後はシグナムさんの采配でどうなるかなんだけど、武士の情けが発動しないかなーと狙っている。ま、管理局員だから手荒な事はしないはずだ。

『……レジアス』

『な、何故お前が……此処につ！』

レジアスさんが驚くのは仕方ない。ゼストさんは世間的にはお亡くなりになっていてる人だもん。レジアスさんが驚いて彼の事を幽霊扱いしてもおかしくないと思う。ひげ面で仏頂面のレジアスさんが目を見開いて驚いているので、その反応が面白かったり。

驚いているレジアスさんを無視してゼストさんが問いかける。もちろんそれは十年前の事でゼストさんがこの十年間抱えてきたものだ。その問いに一瞬レジアスさんがたじろぐけれど、一度息を吐いて気持ちを切り替えた時だった。転送魔法で静かに音もなくレジアスさんの後ろから現れた変装ドゥーエさんがレジアスさんに狙いを定めた一瞬。

『……ッシ!!』

瞬息一閃の斬撃は誰の目にも止まることなく無慈悲に対象を斬り殺す……筈だったんだけどその刃が届く事はなかった。細い刀身がレジアスさんの首へと喰い込むことを止めたのは、誰であろう私の使い魔のロゼさんである。人の形で硬化しちやったからヘンテコな感じになっているのはご愛嬌で、心の中でロゼさんタイミングバツチリナイスと叫びながら、ふと原作以上のバッドな展開になってしまわないか不安になってしまおう。

『なっ！ 何故貴方が止めるのっ!! ドクターの計画の邪魔をするつもりっ!?!』

ドゥーエさんの台詞は尤もだ。それがスカさんの命令であったし、誰も逆らう事のない不文律だったのだから。そしてその不文律を絶対に破らないであろうスカさんのクローンである私が破ってしまったのだから、彼女が驚くのは正常な反応なのだ。

『マスターの御命令ですので。……それとマスターからの伝言です。…また一緒にご飯を食べましょう』と……』

ロゼさんの言葉に一瞬目を見開いて、苦虫を潰した様な顔になるドゥーエさん。そんな私と一緒にご飯を食べるの嫌だったのかしら。ちよつと落ち込みながらも、命が助かった事に安堵してた。

『ドクターに何て言えばいいの……』

『それはご自分で考えて下さい』

ロゼさんは書籍で言葉を覚えてしまったものだから、結構というか大分言葉のチョイスが固くてキツイ。しかも思った事をストレートに言ってしまうのでこの先ちよつと心配である。ゼストさんとレジアさんはドウーエさんのいきなりの登場に驚いてフリーズしたまままで。

その方が都合がいいんだけど、これから起こる事を考えればこのままでは不味い。周囲にはスカジアさんがぞろぞろと執務室に入ってきているし『何事だっ！』とレジアさんが叫んでいるけれど……。うん、スカジアさんはレジアスさんをしょつ引く為に入室したんですよ。スカジアさんがレジアスさんを取り囲んだ瞬間、超絶なタイミングでシグナムさんが乱入してきた。このカオスな状況に少し混乱したようだけれど、おっぱい剣士のシグナムさんはその胸の大ききの如く広い心で全員を逮捕。

もちろんロゼさんはシグナムさんに捕まるなんてヘマは犯してない。ロゼさんには”逃げろ”と言つてあるので逃走を凶つてもらつてる。だつて起こりうる可能性は私が全てロゼさんに伝えてあつたから、状況が掴めているので逃げるのは案外簡単。ロゼさんはセインさんみたいに無機物の中に入り込んで移動する事が出来るし。液体金属つて便利なんだけれど、セインさんのように誰かと一緒に移動する事は出来ないから、有用性はセインさんに分が上がる。

ドウーエさん、ゼストさん、レジアスさん、公務執行妨害でシグナムさんの手により現行犯逮捕されました。取り敢えず捕まえば良いので罪状が適当だなーと思いつつ。レジアスさんは事情聴取や裁判で最高評議会の件とか問質されるだろうね。もしかすれば原作よりも謎が解けるんじゃないのかなあ。ゼストさんは世間的には死んじやつている人だからどうなる事やら。ま、戸籍はID復活でどうにでもなるだろうし、上手く立ち回れば直ぐにでも釈放されそうだけれど、不器用だからねえ。

ゼストさんが助かれば刑期を短くするために、培養槽の論文や戦闘機人についてのデータを渡した訳なんだけれども、ゼストさんは上手く使つてくれそうにない。んー不安になるなら、それもちゃんと伝え

ておけば良かったか。彼の寡黙さと実直さを考慮するのを忘れてたよ。まあいいや、その辺りの判断はゼストさん自身に任せよう。それにスカさんに加担していたけれど、止むに負えない事情があったんだし。オーバーSランクの魔導師を管理局が腐らせておく訳もないだろうし。

◇

地上本部の騒動が収まりつつある頃、外ではスバルさん対ギンガさんによる強制的姉妹喧嘩が終了してました。ギンガさんの洗脳が上手い事解けたみたいで、そのまま戦線復帰するみたいだ。ド凡人オブT H Eド凡人と自称しつつ努力で才能を強制開花させたティアナさんも、ウエンデイさんとデイドさんを倒しちゃったよ。うーん、原作よりも私のおせっかいによって武装とか強化されてただけだけどティアナさんの成長の方が上回ってたみたい。

スカさんとフェイトさんの舌戦も続いていて、フェイトさんは軍服調のバリアジャケットからレオタードに毛が生えたくらいの布地面積が少ないバリアジャケットにいつの間にか変わってた。畜生、生着替えシーンを見逃した。魔力で編み出したモノだから魔力供給量を減らせば良いだけなのに、わざわざ布地も減らしてしまう意味が理解出来ないんだけど様式美というやつなんだろうね、きつと。それにフェイトさんがその方が気合が入るって言うのならそれでいいのだろうし。

『はあああああっ!!』

腹の底から出した声が集音マイクを通してスピーカーへと響いてくる。フェイトさんの見せ場でもあるのだけれど、やっぱりレオタード姿は痴女としか言えない。ごめんフェイトさん。あ、でも二刀流はカッコいいです、はい。やはり悪党は正義に倒されてしまうのが世の常識なのか、トーレさんとセツテさんが健闘虚しく倒れてしまった。多分、暴力シスターことシャツハさん対セインさんとの戦闘も終わる頃だろうな。

ウーノさんもヴェロツサさんに変態的発言である『頭の中ちよいと查察させて』と言われてドン引きしている頃合いだろうし、私の下に

も武装隊員でも突っ込んでくるんだろうな。余所事を考えていたら、モニターの画面ではスカさんが逆転満塁ホームランのごとくフェイトさんのザンバーで斬られるというよりも打ち上げられていた。南無。合掌。

「さあ、いきましようか。お嬢様」

「え」

突然聞こえてきた聞き慣れた声に振り返ってみれば、眼鏡を外したあの人の姿が。……あ、あれ。クアットロさんは先程まで聖王のゆりかごに居たはずではと聞いてみると『転移魔法でちよっ』とハートマークを浮かべて私を抱き上げる。そうして私はクアットロさんが転移魔法を発動された腕の中で一緒に聖王のゆりかごへと一瞬にして辿り着く。作戦プランには私は聖王のゆりかご組には関わらない予定だったのだけれど、突然のクアットロさんの行動を不思議に思い聞いてみると。

「ドクターはもう見限りました。それにドクターが居なくてもマイクロチップと貴女が居れば十分に計画は続けられるでしょうし」

ふふん、と鼻を鳴らして不敵に笑うクアットロさん。あ、はい、そうでしたね。原作でも割とあっさりスカさんを見限っていたので、この展開はありっちゃありなんだね。目の前の眼鏡……じゃなくてクアットロさん的には。

まあ、今は眼鏡を掛けていないのでのほほんとした腹黒お姉さんって雰囲気は微塵もないし。言うまでもなく悪の女幹部と言った所かな。しかも似合っているのだからぐうの音も出ないというか、なんというか。いや、私はスカさんの計画に加担するつもりはないんですよ。研究や開発は楽しいからやってきただけで、世界を混沌の渦の中に落とし込むだなんて興味ないですし、平和が一番です。

そんなこんなでスカさんの代わりとなる私をきつちりと手に入れた事でご機嫌に高笑いを始めたクアットロさんの後ろには、同じように高笑いをしているスカさんの幻影が見える。嗚呼それはきつと負けフラグだよとげんなりしながら、腕から降ろされた私はクアットロさんの足元でどうしたものかと頭を抱える。

ふと正気に戻ってここは何処だろうと見渡してみると、聖王のゆりかごの最深部。モニターにはヴィヴィオさんとなのはさんが親子の絆を結ぶ為に、盛大な親子喧嘩（仮）を繰り広げているし、動力炉ではヴィータさんがボロボロになりながらグラーフアイゼンと共に破壊活動に勤しんでいるし。

そろそろ終わるなあとしみじみしていると、ある事が思い浮かぶ。ん……………ワタシコノママジャンノハサンノあれヲイタダクコトニナリマスヨ。

瞬時に頭の中に非常警報が鳴り響いた。そう、そうなのである。非常にまずい状況で、非情にも逃げられる方法がない状況なのだから。クアットロさんを説得して一緒に逃げるのもアリだけれど、それだと話の根本を変えてしまう恐れがあるので駄目だから、このまま大人しくここでののはさんの砲撃を頂く選択しか存在していないという現実。非殺傷設定なんだろうけれど私が精神的にお亡くなりになりそうなんだけれど…………。出来れば回避したいけれど無理だ、無理無理。

「駆動炉が……………防御機構フル稼働、予備エンジン稼働、自動修復開始。ふっ……………まだまだっ」

嗚呼、その台詞はもう駄目だこりゃ状態でフラグをどんどんと建設していくクアットロさん。そのフラグを一本でもユーノさんに分けてあげてと心の中で切に願うけれど。そうしていろいろと仕掛けを施していたクアットロさんの悪足掻きは徒労に終わってしまう。何故ならなのはさんのワイドエリアサーチに引っ掛かっちゃったから。

「私をずっと探してた……………！　だ、だけれどここは最深部……………」

や、やめてクアットロさん。その台詞は撃つてくれとなのはさんに言っているようなもんですよ。あ、どうしよう、なのはさんの砲撃で撃ち抜かれる未来を恐怖してお手洗いに行きたくなってきた。この身は三歳児で子供で幼児なんだけれど、一応精神的には大きな大人なのでそんな事態にはなりたくはない。なりたくはないんだけれど、クアットロさんを置いて逃げる事は出来ないから一緒に撃ち抜かれるしかないんだな。壁抜きの為になのはさんは七発のカートリッジをロードして、さらに威力を高めようとする。なのはさん自身の魔力だ

けでも十分だというのに、確実にやる気だよ。鬼だよあの入。

『ダイバイ——ン……………』

撃ち抜かれる覚悟を決めた瞬間、突然ひよいと私をクアットロさんが抱き上げる。

「ふふふ……………！ 貴女はこんな小さな子供を撃てるのかしら……………」

——へ？

嗚呼、汚いつ。クアットロさんは私を盾にする気だ。でもどうせ一緒に撃ち抜かれるのだから何処に居ても一緒なのでクアットロさんの腕の中で大人しくしてる。それでなのはさんが砲撃を止めてくれるのなら御の字だし、ラッキーだよね。

『バスターア——————！……………つて子供おおおお!!』

あ、なのはさんが珍しく戦闘中に涙目だ。集中していた為なのか気付くのが遅かったみたいで今更止める事は無理難題。主役キャラの貴重な物を見れたなと思いつつ、これで仮に天国へとクアットロさんと一緒に旅立ってもいいかなーなんて。

『レイジングハートっ！ 止めてっ！ 止めてええっ！』

『It is impossible because it is already
Master.』

……Physical damage will be left,
but those who are shot through
Will

モニター越しに聞こえるなのはさんとレイハさんの無慈悲なやり取りを聞きながら迫りくるバスターに目を瞑る私。そう言う問題じゃないよーとなのはさんの叫び声が聞こえるけれど、その声ははるか遠く。何故かこの三年間の記憶が走馬灯のように流れ始める。

嗚呼、最初スカさんたちと一緒に暮らしてる事が不安で仕方なかったなあ。でも、段々と慣れてきて。アニメだけの知識だけだと知らない事や、意外な一面を見る事があったし。悪人でも人間らしさはあるんだなーって。三年間を懐かしみつつ死なないう様に祈っているんだけれど、一向にバスターの衝撃が来る気配がない。恐怖に震えながら

も目を開けてみると、目の前には私の大切なスライムさんの姿が。

「ろぜさん、なんで……」

ここに居るのか、という言葉は口から出なくて。

「……どうにか、間に合いました」

イケメン顔負けの台詞を吐きながら唐突に現れてデイバインバスターの盾となつてくれているロゼさんなのだけれど、バスターの威力が高すぎる為か所々が融解し始めててちよつと怖い。地上本部からこつちに急行したのだろうし、これ以上バスターを受ければロゼさんの命が危ない。私が使い魔契約をして助けた命なのに、こんな所で無駄死になんてさせるなんて絶対に駄目だ。非殺傷設定だろうけど、ロゼさんは普通の使い魔よりも特殊な存在だからどういう結果を招くか解らないから用心するに越したことはないので、私も一緒に前に出る。

「マスター!?!」

下がって下さいと言いたげなロゼさんを余所に横に立つ。私に出来る事なんてロゼさんへの魔力供給量を一時的に増やして、ロゼさんの防御を上げるくらいしか出来ない。残念ながら必要に駆られなかったから防御魔法については習得してないんだ。こんな事ならちゃんと習っておけばよかったと後悔しつつ。出来る事をするしかない。一体何秒耐えたのだろうか。そのくらい時間経過が解らない程には耐えていたと思う。どうにかなのはさんのバスターを凌ぎ切り安堵の息を吐く私。

その後ろでは、なのはさんの砲撃が怖くて仕方なかったのかクアツトロさんが気絶してた。砲撃の土埃が晴れて、モニター越しになのはさんが凄い驚いた表情をしている。

———どうにか凌げたなあ。

そんな気持ちは直ぐに飛び去る事になるけれど、ね。

第九話：決戦の後。

なのはさんのバスターをどうにか凌ぎきったあと、驚いた様子を見せるなのはさんだったけれど、これで終わりという訳もなく問題がまだ残っていた。クアットロさんが気絶という名の退場をした為に、ミッドチルダ中に溢れかえっていたガジェットドローンも機能を停止……したまでは良かったんだけど、ヴィヴィオさんの暴走がまだ続いている。精神操作が解けたようなんだけど、ヴィヴィオさんの意思と関係なく肉体が勝手に動いてなのはさんを攻撃してしまう為に、かなりつらそうな表情をしてるんだよね。ヴィヴィオさんは。でも、その光景は長続きしなかった。

——何故かって？

そりやもちろん私が止めたから。ロゼさんの防御魔法のお陰で、聖王のゆりかごのメインコントロールパネルが生きていたからクアットロさんに代わって操作したんだよね。バスターの影響で所々機能していない部分もあったけれど、突貫工事でどうにか誤魔化しながら自前でプログラムを組んで、ゆりかごのシステムに割り込んだ。ヴィヴィオさんの戦意が下がれば自動防衛モードになるのだから、欺瞞情報を通しておいたわけである。ヴィヴィオさんの闘争心は失われていなくて、戦意はバツチリあるよーってね。

でも駆動炉が死んじやっているので、このままだとゆっくり墜落してミッドの街の被害がとんでもない事になっちゃうからこれもどうにかしたいんだけど、システム面で出来る事がもうないから私に打つ手はない。後はヴィヴィオさんの体の中に残るレリックを取り出すだけなんだけど、取り出す事も出来るしそのまま体の中で眠ってもらう事も出来るし、自身のリンカーコア外からの魔力供給源として利用する事も出来るので、まああとはヴィヴィオさんの意思次第。

『ヴィヴィオ！』

『なのはママっ！』

おお、感動の名シーンですよ。眼福眼福と思ってたらなのはさんが

レイジングハートさんを構える。え、なんでそんな事をと考えるけれど、彼女達にレリックを無効化させた事を伝えていなかった。そんな事だから私は慌てて通信を開いて、星を軽くぶつ壊すビームを容赦なくヴィヴィオさんに撃ち込もうとしているのはさんを急いで止める。

でも私の言葉だけじゃ納得できないだろうから、レリックの構造とヴィヴィオさんに埋め込んだ経緯と施術方法、そして取り出す方法もデータとして提出しておいた。どうにかやつとなのはさんの理解を得られて、ヴィヴィオさんとなのはさんは晴れて仲直りと相成った訳である。ふう、と長い息を吐いて、安堵する。暴走が解けて私の存在にやつと気づいたヴィヴィオさんが驚いていた。ま、盛大な親子喧嘩をしてたんだから気づかなくても仕方ない。

残りは聖王のゆりかごの破壊だけなんだけれど次元航行隊の皆様が出張って艦砲射撃で撃ち落すので問題は無いはず。ゆっくりと高度を下げていく聖王のゆりかごは誰にも止められない止まらない。ヴィヴィオさんとなのはさんにはゆりかごが落ちてしまうからと脱出を促して、その姿を確認。私たちの事を心配してくれていたけれど、こっちはこっちでどうにかなるので、ヴィヴィオさんの安全の確保をって言ったら渋々納得してくれた。

「マスター。此処は危険ですので早く脱出を」

「うん。いきましようか、ろぜさん」

「はい」

自動防衛モードに入っていないのでAMFの影響はないので魔法を使用出来る。使用出来るのだけれどロゼさんと私はさっきのなのはさんのバスターによってガス欠状態。見事にすっからかん。なのでロゼさんにはクアットロさんを抱きかかえて貰って歩き始める。なのはさんたちはスターライトブレイカーを撃っていないので、魔力の余裕はあらずだからそんなに心配はいらないだろう。道に迷わない様にメインパネルから聖王のゆりかごの地図をぶっこ抜いてそれを頼りに歩いているんだけど、最深部に居た所為で脱出口まで遠い事遠い事。

これ結構時間かかるんじゃないのかな。私の歩幅は子供なので小さいし、ロゼさんはクアットロさんを抱えながら私に歩調を合わせているから、滅茶苦茶進みが遅い。てか私が鈍足過ぎるんだよね。仕方ないけれど。

私たちは立派な犯罪者なので運が悪ければ次元航行隊からゆりかごと一緒に撃ち落とされる可能性があるから、早くゆりかごから脱出しなくちゃ命がないんだけどどうしようもない。ロゼさんと他愛のない事を喋りながら、せめてロゼさんとクアットロさんだけでもどうにかならないか、歩きながら方法を考えていた時だった。

「居たっ！」

「あ、本当だっ！」

「ギンガさんっ！ スバルっ！ 急いでっ!!」

おやまあ。ローラブレード……じゃなかった、ウイングロードを敷いてデバイスで滑走する仲良し姉妹二人と赤いバイクに跨ったテイアナさんがこちらへとやって来る。

本当ならなのはさんたちの救出に向かうはずだから不思議に感じて理由を聞いてみると、クアットロさんの確保とロゼさんと私を助ける為だって。それは間違ってるって私もクアットロさんたちと一緒に逮捕されるのでは、と聞いた所そのあたりは執務官や上官たちの仕事だから私たちは関係なくて、ただ助けたいから来てくれたって。主人公属性の人たちって格好良いよね。眩しいや。

真顔で三人は言い切るものだから、ちよつと驚いたけれど。それでも助かったのは事実なのでお礼を述べて、クアットロさんを引き渡してロゼさんは私の影の中に入れてもらった。その光景に三人とも驚いているんだけど、使い魔って主人の影の中に隠れる事が出来ものだと思っていたから私がびっくりである。ロゼさんは特別なのかなあ。どうなんだろう。この場から去る前に気になる事があるからもう一つ聞いてみる。ゆりかごの中に居た人たちは無事に脱出出来たのだろうか、と。その答えは私にとって満足なものだったので安心した。

『お〜い三人ともー。そろそろ急がへんとちいーと不味いかな』

そんな呑気な声で全通信で念話を飛ばしてきたのは誰であろう機動六課の最高指揮官であるはやてさんだった。モニターに映る姿を覗いてみれば銀髪なので、どうやらリインさんとユニゾンしているみたいだった。

私の姿に一瞬息を飲んだのははやてさんだったがけれど、周りには一切気付かれていない辺りは流石その若さで二佐になっただけはある。はやてさんが何を考えているのか解らない恐怖が一瞬襲うけれど考えなくても仕方ないし、彼女に手渡さなきゃならないものもあるからちよつと通信に割り込ませてもらった。

手渡すものつてというのがアインヘリアルルの操作権限。アインヘリアル制圧時に遠隔操作ができるようにしていたから、その権限をはやてさんに移譲させてもらった。これならば次元航行隊の到着を待たなくてもゆりかごを撃ち落せるだろう。

その為にアインヘリアルを破壊ではなく制圧し自分たちの手中に収めるといふ面倒な事をしたのだから、活用してもらわないと取り越し苦労になってしまう。これでアインヘリアルを使つて撃ち落すのも良し、次元航行隊の到着を待つてゆりかごを砲撃で壊すのも良し。その判断ははやてさんに任せよう。アインヘリアルを使わなければ、ちよつとイジげるかもしれないケド。

考えていた通りになんてならなくて、色んな事が起こってしまった。本当ならこの場になんて居ないはずでスカさんのアジトで捕まる予定だったもんね。培養槽で眠ってる人たちをどうにかするつもりだったんだけど、掛けておいた保険が効けば良いけれどなあ。私がかこうして色々と手を打てたのは、偏にスカさんのクローンだなんていうチートじみた能力と前世でのアニメの知識のお陰なんだけれどね。でもさ、色んな事が起こり過ぎて……。

——流石に疲れたよ。

そう思った瞬間、私の意識は深い眠りへと誘われた。

◇

——知らない天井だ。

よく聞くテンプレートで使い古された台詞を頭の中に浮かばせな

がら、その知らない天井を目が覚めてから結構な時間私は眺めていた。腕には点滴が打たれてあるし、他にも医療器具が自分の体にそこかしこ繋がれてあるから病院なんだろう。

「ろ、ぜ……..さん？」

喉が枯れているのか、それとも寝起きで声が出にくいだけなのか。掠れた声でロゼさんを呼ぶ。私の使い魔となって短い付き合いだけれど、既に私の半身となりつつあるロゼさんの事を思い出す。なのはさんのバスターを防ぐだなんて無茶をやつてのけたのだから無事ではいられない筈。そう思った瞬間冷や汗が噴出してたまらない不安に襲われる。

「マスター。ここに居ります」

「……..よ、かった」

無事だった。最後まで言葉にできなかつたけれど、とにかく無事で何時もと変わらないロゼさんの姿を見て安堵する。少しロゼさんと当たり障りのない言葉を交わしていると、色んなことを思い出す。スカさんやナンバーズの年長組は逮捕されたところを見たから、今は取調べでも受けている最中なんだろう。無茶な取り調べを受けていなければ良いけれど、管理局つてそういう所はどうなんだろう。

フエイトさんやクロノさんみたいな人ばかりなら、きつと無茶な取り調べはないだろうけれど。世の中いろんな人がいるからね。ちよつとだけ心配なんだ。私もこれから体験するのだろうか、人の心配をしている余裕はないけれど。それに、他の皆はどうなったんだろうか。大体の経過はモニターで眺めていたから大丈夫だろうけれど、気になって仕方ない。

「皆さん無事です。ただ全員が逮捕されてしまいました……」

申し訳なさそうな顔をするロゼさんただけれど、悲しむ事はないと思う。多分、だけれど皆覚悟はしていたんじゃないかな、私もそうだしね。やつちやいけない事をやったんだから当然の報いだ。

現にいまの私はベッドに拘束されて身動きが取れない状態だし。小さな子どもにこんな酷い事をして思われるかもしれないけれど、管理局側からすれば私は得体の知れない人間で、アインヘリアル強奪容

疑とスカさんの演説に抱っこされて一緒に映って華々しく次元世界デビューをした訳だから、この処置は仕方ない。

「誰か……心配を感じます」

そう言いながら私の影にロゼさんは入って行き消える。どうにもロゼさんは人見知りか、私以外の人とコミュニケーションを取ろうとしないのは頭の痛い問題だ。いつかどうにかしなくちゃね。

多分、私の身の安全を第一に考えてくれていて何かあった時は守ってくれるつもりなんだろうけれど、過保護過ぎなんじゃないかなあ。外見が幼女だから仕方ないけれど、その他の事はちゃんとしつかりとやっているというのに、やはり見た目が問題なのかな。

エアーが抜ける音と共に部屋の扉が開く。その開いた扉の向こうにはフェイトさんとはやてさんの姿があった。

「……あ」

「目え覚めたんやなあ」

二人の姿を見て起き上がろうとするけれど、拘束具が邪魔をして上手く起き上がる事が出来ない。そんな私を見るなり二人が駆け寄って、動かなくていいからと言ってくれるんだけれど長い時間寝ていたみたいで結構体中が痛いから、贅沢を言うと動きたいんだよね。骨が軋むし筋肉が硬直しているから解したいというか。

てか私はどのくらい気絶していたのだろうか。きよろきよろと周りを見回してカレンダーを探すけれど、生憎と殺風景な部屋で必要最低限の物しか置いていなくて今日が何日かすら分からない。フェイトさんとはやてさんの姿が若々しいままだから、流石に何十年も寝ていたなんてことは無いだろうから、良くて数日くらいかなあ。それなら事件の事後処理でてんこ舞いをしてそうな二人さんだけれど、こんな所に来てきても大丈夫なんだろうか。それともまさか暇だとしても言うのだろうか。

二人がこの場所へとやって来た理由は私のお見舞い……は冗談として、どうやら医療器具でモニターしていたそうで、私がそろそろ目が覚める事が判ったから時間を見計らって来たそうだ。取り敢えず

二人の話を聞く事になったんだけど、その前に拘束具を解いてくれる事となった。ベッドの上で自分の身体が問題なく動く事を確認してから、聴く体勢を取る。フェイトさんとはやてさんはそんな私の姿に驚いた様子をみせて。

この身は幼女でも、中身は一応それなりの年数を生きて社会経験をしてきたのだから当たり前なんだけれど、前世の事を伝えるとなるとややこしくなるだけだろうし適当に誤魔化す。お互いに自己紹介となったのだけれど、私にファミリーネームが無い事に驚いて二人とも苦虫を噛み潰したような顔をするのだけれど、別に困ってなかったから気にしていないし、犯罪だけれど偽名もあったから不便は無かったんだよねえ。取り敢えず、自己紹介は無事に済んでお互いの立ち位置などを理解した所で、本題に入るみたいだった。

「まずはお礼からや。ゼスト・グランガイツからのデータやゆりかごに居た局員にも渡したデータ、そして私がもらったアインヘリアルの遠隔操作権限、これで助かった人が居る。……だから、ありがとうな」

そう言つて頭を下げるはやてさん。ちよつと待つて欲しい。部隊を率いる隊長でしかも捜査官の資格を持っているし、一番の理由は三佐なんだから、私みたいな人間に礼を言う必要もない。むしろ私は管理局の人たちやミッドチルダに住んでいる人たちからすれば、犯罪者で責められて側の立場なんだから。

「……おれはいりません」

「そう、なのかもしれない。けどな、君の取つた行動が誰かを救つたつて言うんは事実。それに私たちの力だけじゃどうにもならへん事もあつたんや」

「うん、そうだね。色々調べで後から判つたんだけど、君は”聖王のゆりかご”の自動防衛モードも防いでた。それにスカリエツテイのアジトで実験台になって培養槽に入っていた人たちも君の手が入つてたのは調べて分かつてるんだ。それに他の事もね」

「……………」

ありやりや、バレバレでんがな。で、でも別に目の前の二人に褒め

られる為にやったんじゃないんだからね。私がやりたいからやっただけなんだからね、と口には出さずにスカさんを始めたとした皆の事を聞いてみた。スカさんと年長組は原作通りに事件の捜査には非協力的で、核心部分は分かっていないみたい。年少組の皆は自分の罪を認めて捜査にも協力しているみたいだけれど、多分重要な事は引き出せないだろうなあ。その辺りはスカさんと年長組が徹底していたし、私もよく知らないんだよね。本当どうしてこんな事を仕出かしたんだろう。

スカさんには首輪が付いてて自重していたんだけど、ドゥーエさんが最高評議会を潰した後にスカさんが表ざたにしちやっただもんだから、タガが外れたでも納得できなくはないけれど。もっと上手くやる方法もあつたはずなんだよね。スカさんなら可能だっただろうし。でもそれをしなかつたんだから、スカさんはスカさんのやりたい事をやったんだと思う。そういうえばゼストさんやレジアスさんはどうなつてんだろうか。

「ん？ 彼等も取り調べを受けている最中やな。詳しい事は判つたらへんけど、捜査には協力しとるからそんなに心配は要らへんはずや」

「そうですか」

そつかそか、良かった。無茶をした甲斐があつたなあ。それにレジアスさんが生きているのなら最高評議会の内情が原作よりも少しわかるはずだし、最高評議会に誑かされて違法なものに手を出してしまつた事も理解してもらえらるだろう。それでもレジアスさんは本局側からすれば危険思想の持ち主で敵視すべき人材だろうから、出所できても監視対象になるかも。保護責任者が必要な歳でもないし、元陸の最高責任者だから何かしらの伝手はあるだろうしミッドチルダ復興の一助になつて欲しいって勝手に思つてる。

ゼストさんに関してはそんなに罪は重くならないみたいらしいので、彼が望むなら管理局への復帰も可能だつてさ。てか、元部下の人たちから嘆願書が提出されているんだつて。十年前に死亡判定がされて長い月日が経っているけれど、人望があつたんだねえ。無口な人

だからどうなる事かなくて心配だったけれど良かった。

「けど、どうしてそんな事が気になるん？ 君にとっては赤の他人やろ」

確かにそうだけれど接点を持つちゃったから、気になってしまうのが人の心というか。これは言えない事だけれど、アニメで事情を知って生きて欲しいって願いが私の心のどこかにあつたからね。私がお二人に聞きたい事はこれ以上ないんだけど、お二人の方が私に聞きたい事が色々あつたみたいで、この後も結構な長い時間病室で話し込んでいた。取調べというよりも質疑応答みたいな感じだったし二人の性格からなんだろう、私が責められる事も一切なかった。

そんな二人の紳士な姿に感動した訳ではないけれど、私知っている事は包み隠さず話したつもりだし、嘘も言っていないから彼女達の捜査の妨げになるような事はしていないだろう。

「ああ、そうだ。最後になるけれど、この人が何処に行ったとか、行きそうな場所を知らないかな？」

フェイトさんに問われて空中にモニターが浮かぶ。そのモニターを覗いてみればその人は誰であろうロゼさんで。あれ、もしかして逃走犯にでも間違われているのだろうか。

「……あ」

そういえばスバルさんたちが助けに来てくれた時、私の影の中に隠れてその後はもしかして誰とも会っていないのだろうかロゼさんは。私以外と。ロゼさんの人見知りっぷりに頭を抱えつつ。

「ろぜさん、ろぜさん」

「お呼びでしょうか、マスター」

私の影から出てきたロゼさんは、素知らぬ顔で私の傍に立つ。二人を警戒しているのか若干視線が厳しい物だったけれど、ロゼさんはあんまり表情が変わらないから私以外には判らないかも。

「はっ？」

「うえっ？」

うん、ごめんなさいお二人が驚くのも仕方ない。逃走犯として捜査しながら追っていたらうし、こんな所に居ると思っていなかったの

だろうし。ロゼさんはロゼさんで口を噤んだままだから、なんでここに居るかの説明は私がした。何故だ。私の使い魔である事、素体が実験の失敗で偶然”命”を受けたスライムというか液体金属というか。キチンと説明するには不可思議過ぎてお二人は啞然としていたけれどね。

ロゼさんはこのまま監視対象となるみたいなんだけれど、主である私の傍を離れたがらないからどうしたものかと思ってたんだけど、このままで良いらしい。処分が甘くないのかなと思うけれど、彼女たちの優しさに甘える事にしておいた。

それから今後の話をもう少しだけ。どうにもなのはさんのバスターを防いでしまった後遺症があるみたいで様子見であと二・三日は大事をとってこのまま入院。回復を待って私の移送が決定してるってさ。小さな子供をそんな場所に行かせることは気が引けたみたいで上層部に掛け合ってくれたみたいなんだけれど、上からの命令じゃどうしようもないよね。

それに私が生活していたアジトはもう崩壊しちゃって戻る場所もないのだし。しばらく拘置所暮らしの後に年少組の居る厚生施設に行くそうなのでどうって事ないし。二人が病室から出ていくと、また睡魔に襲われた。やる事も無いし、無理に起きておくこともないから私は素直に意識を手放す。

——私がすべき事は、まだまだ沢山残っているけれど。
でも今は少しだけ……。

◇ 「……………」

窓の外を見上げる。視界に広がる青い空。何度か見た事があるけれど、ミッドチルダの空は不思議が一杯だ。アニメで見た時は創作物だったし『魔法世界』だなんていう設定があったから納得出来ていたけれど、実際、自分の眼で見ちゃうと疑問が湧いてくるんだよね。だって太陽以外の惑星だか衛星が何個か空に浮いているし。そもそもお互いの星の重力干渉が無いのかなーって。潮の満ち引きとかさ、絶対地球と違うよね、これ。

「外が気になるの？」

ハンドルを握ったまま助手席に座っている私を見るフェイトさん。いやさ、私の事を気にするよりも前を見て下さいな、と心の中で願いつつ。

「いままであまりそとにでたことがありませんし、こうしてゆつくりけしきをみるじかんもありませんでしたから」

そうなんだよねえ。ほとんどあのアジトで過ごしてたし外に出たのなんて数えるくらいだし。行くとしてもアジトに被害が出ない様に実験をしに無人世界へ行ってみたり、あとは地上本部にスカジアさんの配備説明とアインヘリアル強奪の時だけだもんねえ。マジで引き籠もり状態だった事と転送魔法で移動を殆ど済ませていたから、窓の外に気を取られても仕方ありませんて。

「……っ！」

ちよつと涙目になっているフェイトさんなんだけれども、なんで彼女と私が一緒に居るかというと、病院から拘置所までの移送をフェイトさんが請け負ってくれたらしい。それで今はフェイトさん所有の黒いスポーツカーの中だ。ものものしい護送車とかに乗るのかなって思ってたんだけれど、病室に顔を出したのはフェイトさんでフェイトさんが拘置所まで送るよーと言って軽いノリで現れた。なんでそんな事になったのか聞いてみると『君の弁護を請け負ったから』なんていう理由だった。弁護士さんってそこまですらないと思うけれど、管理局は司法と警察と軍隊が一緒くたになったような組織だから出来るんだと思う。凄く突っ込みを入れたいけれど。

「直ぐに出られるように弁護、頑張るからねっ!!」

気合を入れるのは嬉しいのですが、前見て下さい、前、前っ。危ないですからっ。前世で運転免許証を持っていた身からすれば、普通に他の車も走っているのも怖いんですってば。この車に自動運転機能でも付いているのなら、事故の寸で止まるんだらうけれど。確証はないし知らないんだもの、恐怖心しか湧きません。フェイトさんも私も喋る方ではないから車中は静かなものだ。あ、ロゼさんは私の影の中に居ます。一度ロゼさんと私を引き離れた事があるんだけどロ

ゼさんが勝手に抜け出して戻ってきちゃったものだから、例外的に一緒にいる事が許可されました。

まあ、得体の知れないスライムさんを監視するのは難しいと判断されて丸投げされたとも言えるけど。ロゼさんが悪さをすると私の刑期が伸びるそうなので、私の傍で大人しくしてもらってる。自分の事で私に迷惑を掛ける可能性が出たものだから、ロゼさんはその事に滅茶苦茶不服そうだったけれど。

「……着いたよ」

病院から拘置所までのドライブは直ぐに終わった。心配性のフェイトさんの別れ際に『何かあれば直ぐに連絡を』と言われたけれど、たぶん大丈夫かな。変な人が居ればロゼさんが守ってくれるし大丈夫。それに拘置所のイメージってよくないものだったけれど、結構清潔で広いし。三歳児という事で無理はさせられないからと配慮してくれているみたいだね。

そんなこんなで拘置所生活を暫く送りながら、いくつかの裁判を経た後は厚生施設で暮らす事となりました。もちろんナンバーズの年少組のみんなとロゼさんも一緒に、だ。

第十話：最終話。

——半年後。

ふへえ。久しぶりの娑婆でございますよー。太陽の光が眩しいなあ、というのは冗談で、更生施設は閉ざされた刑務所だなんて事は全くなくて大分自由が効いたし、出来る事も多かったから困る事は少なかった。建物自体の設計もちゃんと考えられていて、日光をふんだんに取り込むようにしていたから自分が犯罪を犯して捕まっているだなんてあまり思えなかったし。

皆よりも早く更生プログラムを終了させて先に出所しちゃうのは申し訳ない気持ちで一杯になるのだけれど『直ぐに出るから待ってて欲しい』なんて言われてしまえば仕方ない。で、なんで早くココを卒業できるのかというと、色々と管理局に協力した事と世間様への貢献度から。ハイスペックスカさんのクローンである私は持てる力の限りを振りかざして、色々とやらかしました。

まずはデータでも渡したんだけど戦闘機人の理論をもう一度最初から丁寧に纏めてメンテナンスや維持についての話をいれておいた。これは私欲の部分が大きいけれど。ナンバーズの皆さんは戦闘機人で、綿密なメンテナンス作業となる為に色々と充実した設備と技術が必要になって来るので、その辺りに困らない様にする事が目的。

スバルさんとギンガさんっていう前例も居るから大丈夫だろうけれど、戦闘機人については管理局よりもスカさんの技術の方が上だろうしね。いや、管理局の技術者を疑っている訳じゃないんだけど、人道的な部分を尊重してしまう分どうしても遅れるんだよね。そんな事だからスカさんの方に分があるって訳で。

倫理的な問題がクリアする事になるなら事故とかで失ってしまつた四肢として部分的に機械化が出来るから、義手や義足の代替案としてそれも論文にまとめて提出。他にもスカさんが得た戦闘機人で転用できる技術をいくらか纏めておいたけれど、その辺りは世間の理解を得られるならばって感じかなあ。

人道を無視している面もあるから一人で判断するのは難しいので、

医学界等で認められれば陽の目を見る事になるだろう。戦闘機人に
関しての技術はスカさんの実績がほとんどなだけけれど、俗世に興味が
無かった為に論文提出とかやっついていなかったスカさんの手柄を横
取りした形になってしまふけれど、許して欲しい。

培養槽のデータもそうだし遺伝子操作技術についても色々と考え
て、遺伝子病の回避や治療法とかもこれまた論文にして医学界に提
出。ガジェットドローンで培った機械工学でも、工場とかに使えるよ
うにして補助機能的な物とか設計して経済界に殴り込んでみたんだ
けれど、受けが良かったみたい。

それと魔導炉の小型化に合わせて出力を増やす為の論文と同時に
特許を提出。これで日々の生活には困らないだろうと画策した。日
常生活が送れないのは頂けないから、結構必死で纏めて少しでも良い
金額になるように頑張ったんだ。

本当は機械いじりにも精を出したかったのだけれども、アジトみた
いに設備が充実していなかったし望める筈も無くてずっと机に向
かって論文とか専門書とかを取り寄せてもらって知識を吸収してた
なあ。結構な量を半年間の間に書いたと思う。施設のお偉いさんに
頼んで用意してもらった預金通帳を先程見てみると、この先暫くの生
活には困らないくらいのお金が入金されていたから、懐は潤ってる。

出所出来た私にお迎えをしてくれる人なんて居ないから、気楽なも
んだ。風雨を凌げるアパートでも借りたいところだけれど、三歳児か
ら四歳児にクラスチェンジした私に借りる事ってできるのかな。
ミッドチルダの俗世には疎いので疑問だ。

「これから、どうするのですか？」

私の横に立つのはもちろん使い魔のロゼさんである。ロゼさんも
社会を混乱に突き落としたりはしていないので私と一緒に厚生施設
から卒業となった。というか私の出所の条件にロゼさんも一緒に出
る事を私が提案しちゃったので、そうなたただけだけれど。

「とりあえずは、すむところをさがしましょうか」

ロゼさんの質問に答えて言葉を続ける。慎重しく日常生活を送れ
ればそれでいいかなーって。私は自分の幸せだけを願える立場じゃ

ないからね。そんなことだから、不動産屋さんを探してそこから住む場所を決めなきゃなあ。無一文じゃないだけマシなんだけど、四歳児に家を売ってくれたり貸してくれたりする奇特なお店があるのが謎だ。

「あんたがジエイル・スカリエツテイの娘か？」

さてロゼさんと一緒にお店を探しに行こうかってなった時、突然暗くなった視界に上を見上げれば見知らぬ人たち何人かで私を取り囲んで立っていた。それにしても、何時の間にもそんな事になっていたんだか。私はスカさんのクローンつてだけで親子関係はないんだけれど。嗚呼、でも”娘”って符号の方が実に簡単で分かりやすい。そんな事だから無言で私は頷く。

「あんた達さえっ！ あんた達さえ居なければっ！！ 俺はっ、俺はっ！！」

そう最初に叫んだ男の人の声に連鎖して続く周囲に居た人たちの呪いの言葉が無遠慮に降り注ぐ。家を失った人、会社を失った人、色んな人が居る。そりやそうだよね、ミッドチルダの街に及ぼした被害は大きかったんだもの。

「マスターっ！ お下がり下さい！」

あー待って、待ってください。ロゼさん。一般の人たちに手を出したらまた逆戻りどころか、今度は完全に鉄格子付きの塀の中になっちゃうから。ここは彼等のやりたい様にさせてあげて下さいな。そのくらいの覚悟は出来ているし、罵られるくらいで済むのならまだ彼等には理性があるのだから。

「ですがっ！！」

止まらない罵声に反応してロゼさんが威嚇する猛獣みたいに怒っているんだけど、不思議と私は恐怖も何も感じていなかった。彼等の言葉は人間として当たり前の行動で言葉なんだよね。

どこにも嘆く場所はなく、吐き出す場所すらも無くようやく見つける事の出来たジエイル^大・スカリエツテイ^犯のクローン^者という存在。しかも私もスカさんたちと一緒に悪事に加担していたのだから、その責任はあるのだし。

「お前たちっ！ 何をしているっ!!!」

騒ぎを聞きつけたのか厚生施設の警備員さんが守衛所から飛び出してきた。その姿をみるなり、蜘蛛の子を散らしたように一目散に逃げていく人たち。

そんな背中に私は頭を下げる事しかできない。助けてくれた警備員さんにお礼の為に再び頭を下げたのだけれど、気付くのが遅れて済まないと逆にこっちが謝られる羽目になって困った。私みたいな小さな子どもにやる事じゃない、けれど彼等の気持ちも汲んであげて欲しいってさ。もちろん理解しているから、その言葉に素直に頷くと警備員さんは苦笑してた。

「久しぶりやなあ。迎えにきたで」

「？」

ん、おや。そんな呑気な声が聞こえて来たので、そちらを振り向いてみればはやてさんの姿があった。その後ろには護衛なんだろうなあ、シグナムさんとヴィータさんが居たよ。優しく微笑んでいるはやてさんに対して、後ろの二人は警戒心を見せているから口ゼさんが反応して火花を散らしてる。

迎えと言われても全然関係のないはやてさんがなんで私を迎えに来るのだろう。頭の中で疑問を浮かべつつも、私が拘置所と厚生施設に居た間と、裁判に出廷する際に色々と便宜を図ってくれた人の一人なのでお礼を伝える。ひらひらと片手を振って『気にしなくて良い』と言ってくれるけれど、一応、ね。言葉にしなきゃ伝わらないんだもの。こういう事はきつちりとやっておいた方が良いんだな。

「行く当てもないんやろ？ だったら六課^{ウチ}に来うへんかって話なんや。まああと一ヶ月しか存続せーへん部隊なんやけど今後の事を考えるなら丁度ええ期間やあらへんか？」

ようするにははやてさんは一か月間の仮住まいを提供してくれるという訳か。でも六課の隊舎を破壊したのはある意味で私の身内の人間なんだから、六課の人たちは良く思っていないだろうしなあ。後ろの二人は怖い顔をしたままだし、あとひと月とはいえどそんな人間が居ることに六課の隊員の皆様は耐えられるのかなあ。

「小さい子供がそんな難しい事考えんでええ。その辺りは大人の務めやし気にせんでええさかいに。それにな、ヴィヴィオが君の事首を長くして待つとんねん」

くしやつと私の髪を撫でて笑うはやてさん。ヴィヴィオさんつて六課でまだ受けていたつけと思いつつ懐かしい日々を思い出す。ヴィヴィオさんの事を持ち出されると強く出れない私が居た。断つて適当に不動産さんをしらみつぶしに当るつもりだったんだけれど……。

「君に家を貸したり売つたりしてくれる不動産さんなんて、あるのかな？」

と、私の思考を読まれちよつと意地悪気なはやてさんに言われてしまつてはもう逃げる道はなかった。なので素直によろしくお願いしますと伝えてまた頭を下げた。

◇

やつぱり見慣れないミッドチルダの空を車窓から眺めて暫くすれば機動六課の隊舎へと辿り着いていた。車中ではやてさんから色々六課のことやミッドチルダの事を教わりつつ、時折スカさんが起こした事件の事についても聞かれたりもしながら。はやてさんも色々今後の為に考えている事もあるだろうから、嘘は話していないし知っている限りの事を全て喋つたつもりだ。でもフェイトさんと話した事と同じだったから目新しい収穫はなかったかも。駐車場から少し歩くと結構立派な隊舎が見えてきた。トーレさんたちが破壊したはずなんだけれど、半年でよく復興したなあ。ミッドチルダの建設業界恐るべし。

「あ……………ぜろおっ！」

機動六課の隊舎前ではヴィヴィオさんがまだかまだかと待っていたらしく、着いた途端に熱い抱擁を受けたまでは良かった。

——いい、痛い。

決して口には出さないけれど。ヴィヴィオさんは私の姿を見た途端にイノシシの如く突進し始めて私に抱きついたものだから、私よりも体格が大きいヴィヴィオさんの勢いに負けて地面に倒れて頭を打

つ未来を迎えそうになつたけれど、なんとか意地で回避しました。頭を打つ事を回避したまでは良かったんだけど、子供の無邪気さ故なのかヴィヴィオさんは地面に倒れてしまった事を気付いていない。重いし息苦しいからそろそろ離して欲しい所なんだけれど、暫くはこの状態のままかも。

「陛下、失礼いたします」

むんずとヴィヴィオさんの襟首を掴んで私と引き離して助けられたのは使い魔のロゼさん。掴んだまま丁寧に地面に下して、どうか窒息死することから免れて生きながらえました。ふう。

「……大丈夫か？」

その後が続いたのが凄く渋い声で話しかけてくれた守護獣のザフィーラさん。もちろん犬……じゃなくて狼の姿で。その姿を見た途端、もふもふして愛で倒したい欲求が沸き上がったけれど無理矢理に抑え込んだ。

「よからぬ事を考えていないか……？」

そんなことはないですよーと、急いで首を振って誤魔化した。ザフィーラさんって鋭いよね。獣の直感なのかな、犬って考えると直ぐに訂正を求めて来るんだもの。私の『もふもふしたい』って気持ちが強くて、それがロゼさんに伝わったみたいでこの日の夜にロゼさんから『どんな獣が良いでしょうか』と言われて困まり果てた。

ロゼさんはロゼさんだし、スライムさんの姿でぎゅーつてするのも大好きだし、人間の姿でぎゅーつてされるのも好きだから。でも獣の姿に擬態するのもふり倒してくださいと言われると、流されそうになる私が居る。なのでこれは最終兵器として取っておこうと思う。犬や猫を飼ってもいいんだけど、構うとロゼさんが確実に嫉妬するだろうし最後を看取らなきゃならなくなるのも確実だからね。と、閑話休題。

「珍しいなあ。ヴィヴィオが誰かに懐いとるなんて……」

そういえばヴィヴィオさんには人見知り属性があったんだっけか。私の傍に何時も居たもんだから忘れてたなあ。

「さてと、まだ君に逢いたい言うとする人が居るんや。隊舎の中の案

内は後にして先に会ってもらってもええかな？」

私の返事を待たずに”こっちやで”と言いながら歩き始めるはやてさんの後姿を追いかける。もちろん歩幅が普通の大人の女性のもだから追い付ける訳もなく。なのでロゼさんが自然に後ろから手をだして私を抱きかかえて歩き、ヴィヴィオさんもザファイーラさんの背中に乗って移動。その後ろにはシグナムさんとヴィータさんも一緒に歩いて付いて来てる。結構な大所帯になっちゃったけれど仕事は良いのかなと思いつつ、結構な距離を歩いた。そうして辿り着いたのは海側の演習場だと思われる場所ではやてさんの足が止まった。

「ああ、あの時のちびっこじゃない。……そういえば新しい人が増えるって通達があったわね、それアンタの事だったのね」

「あ、本当だっ！ 久しぶりだねえっ！」

訓練服に身を包んだティアナさんとスバルさんがこちらに気付いたようであざあざ足を向けてくれて、挨拶を交わす。

「ひと月ここに居るんでしょ。よろしくね」

「あ、そうだったっ！ よろしくねーっ！」

スバルあんたねえ、と呆れ声でティアナさんが冷たい視線でスバルさんを見ている。なんだかアニメに出ていた二人そのまま、ちよつと嬉しかったり。その後にはエリオさんとキャロさんがやって来て自己紹介を交わしたよ。

「ルーちゃんがお世話になってたっつ！」

「うん。きみの話はルーから聞いたんだ。これからよろしく」

とまあ、そんなやり取りと共に抱っこされたりしてた。機動六課の中では最年少組の二人は、ヴィヴィオさんよりさらに年下の私がいる事になるのが嬉しいって。

困ったらいつでも声を掛けて欲しい、だなんてその年齢で言えるなんて成熟し過ぎてないかなあ。もう少し子供らしくても良いと思うんだけど、彼と彼女の過去を考えるとそうもいかないか。私も前世は両親のお陰で大分捻くれた性格をしてたしなあ。その横でヴィヴィオさんがなんでか不貞腐れてた。ヴィヴィオさんは皆から愛されているのだから、私がいる事で誰かがヴィヴィオさんから離れてい

くなんて在りえないから心配いらなと思うけれど。

「あ……。あの時以来だね」

管理局の白い制服に身を包んだのはさんが私に気付いて微笑みながらゆつくりとこちらにやって来た。ロゼさんが警戒心MAXなご様子だったので、心配は要らないと伝えて殺気を引つ込めてもらうのに大変だったけれど。色んな事があり過ぎてはつきりと覚えていないから、ロゼさん程警戒心は湧かないんだよね。ロゼさんは逆になのはさんの事を敵わない人って意識してるみたいで、私を守る自信がない為に余計に警戒してるみたい。

「あの時は巻き込んでごめんなさい。それと、ヴィヴィオを助けてくれて本当にありがとう」

開口一番にそう言つて頭を下げるなのはさん。いえいえ。ヴィヴィオさんを助けたのは私じゃなくてなのはさんの優しさだ。ずっと拘束系の魔法で戦いながらの決着を狙ってたし、大変だったと思う。それよりもスカさんやナンバーズの皆様にご迷惑をお掛けしたのだし、むしろ私が謝るのが正解で怒られるのが筋だと思うのです。何で皆こんなに優しいのか不思議である。

「こんにちは、久しぶりだね。元気だったかな？」

その後が続いてフェイトさんもやって来た。何度か取り調べをフェイトさんから受けて、裁判でも弁護人を務めてくれたしはやてさんと同様に色々と便宜を図ってもらった人の内の一人なんだよね。いつの日かお礼を必ずと心に誓う私を余所に施設での暮らしぶりとかを聞かれたんだけれど、心配し過ぎじゃないのかな。目の前の美人ロリコンさんは。半年前までは敵対してて、死闘を繰り返していたのに良くこんなに気を許せるもんだ。

この戦力過剰な機動六課に放り込まれた理由が私を監視する為だったら、なんつー策士なんだろうか管理局。確かにこの面子だと私は何も出来る事はない、というか引き籠もりだったし戦闘訓練を受けた訳でもないので無害なはずなんだけれど、スカさんのクローンだしそう思われていないのかもしれない。スカさんみたいに悪事を働くつもりなんてないし、邪魔にならない様に大人しくしておくつもりだ

し、出来る事があるのならば協力は惜しまないつもりなだけけれど、これからどうなるかなあ。

——さてこのひと月、一体どんな事があるのやら。

そんなこんなで六課の主だった面々にはお人形のように私は扱われておりました。ちよつと疲れたけれど皆原作通りに良い人ばかりで良かったーと一安心してた。

◇

何も考えずに私を六課に誘ったのだろうかと思う事件が勃発してしまつた。それも六課に来た一日目にしてだ。

それは私の寢床問題である。てつきり開いている隊士部屋を貸してくれるのだろうかと考えていた私なだけけれど、そうはいかなかつた。空いている部屋は無いとはやてさんからにこやかに告げられ、それならば適当に書庫なんかを借りてロゼさんベッドで眠ると宣言すると力強くフェイトさんから却下され、その横でなのはさんも確りとフェイトさんの言葉に頷いているし。そんな二人の様子にはやてさんは苦笑いをしてた。絶対に他人事に思つてるよはやてさんは。

じゃあどうするのかつてなつただけけれど皆が自室に來いと誘つてくれてたんだよね。私はちんまいから一緒にベッドに寝ても邪魔にならないからと、全員に言われ。フェイトさんとなのはさんはヴィヴィオさんと三人で同じ部屋で今更一人増えたところで問題はないらしい。スバルさんとティアナさんも別に私が居ても困らないそうだし。キャロさんも一人で寝るのは寂しいので来て欲しいって。エリオさんは流石に『僕は流石に……』と自重してくれた。某おこじよとは大違いである。はやてさんも部隊長部屋だから広いけれど、閲覧不可な書類とかあるからと言つて唯一駄目って言われた人。それはまあ仕方ないし、今度八神家の方に泊りにおいでと誘つてくれたんだ。

そんなこんなで私は日替わりで皆さんの個室にお邪魔する渡り鳥になりました。

荷物が少ないから良いものの、本当に場当たりに考えていたんじゃないかと勘繰ってしまう出来事だった。初日の今日はなのはさ

んとフェイトさんの隊長陣の部屋です。滅茶苦茶広くて、ベッドが大きいので四人が一緒に寝る分には問題はなさそう。隊舎の食堂でご飯も済ませて、そろそろヴィヴィオさんがおねむの時間に差し掛かる頃だった。

「そうだ、皆で一緒にお風呂に入ろっか！」

良い事を思いついたとばかりに、一度手を叩いて嬉しそうにするなのはさん。

「あ、いいね、なのは。皆で一緒に入ろう」

なのはさんに続いてフェイトさんも同意。この二人がそういうのなら決定事項だろうし、慣れていない場所で一人でお風呂に入るのは大変だから有り難く素直に頷く。ロゼさんはお湯に浸かると、しばらくふやけてしよんぼりしてしまうのでお留守番。

「……ゼロのえっちー！」

何処でそんな言葉を覚えたんだろうか。そんな子に育てた覚えはありませんと冗談で心の中で思いつつ、何故か赤面しているヴィヴィオさん。ヴィヴィオさんの突然の発言にきよんとする私となのはさんとフェイトさん。

あれ、もしかして私の性別ヴィヴィオさんに勘違いされてるのかしら。確かにアジトじゃあ長袖長ズボンを着ていた、でもそれは実験で使った薬品が肌に直接付くと危ないし、機械いじりの時に火の粉なんか飛んで来たりするから危険防止の為だったんだけど。でもいわれてみれば今もズボンを穿いててスカートなんて無縁だった。それにスカさんのそっくりさんな為に男顔だし二次性徴期も訪れていないからその事が助長してるので、ヴィヴィオさんが勘違いしても仕方ない……のかな。でもやっぱり複雑で。

——私、一応女の子に分類されるはずなんだけれどなあ。

心の中で強くそう思いながら、釈明をお願いしようとなのはさんとフェイトさんに視線を向けてみれば、二人は微笑ましそうに私たちを見ているだけで助けてくれる様子が全くない。なので自力で解決するしかなくなってしまったよ、トホホ。

ヴィヴィオさんに私の性別を説明して納得してもらうまでにはか

なりの時間を要し、これなら見てもらう方が早いから皆と一緒に脱衣所に直行して『ばおーん』^{ぞうさん}がない事を確認してもらったら納得するしかないよね。なんでこんな事をしているんだろうって私の魂が飛びかけていたけれど、どうにか自我を保った私は偉いと思う。あとでヴィヴィオさんにはお説教タイムを設けねばと考えながら、久しぶりに入った浴槽は気持ちよくて。それになのはさんとフェイトさんが劇甘モードだったので全自動だったし。悪い気はしないけれどやっぱり慣れないし恥ずかしい。

機動六課の皆様にはリクエストされた事もあり後日、ヴィヴィオさんのアジトでのご様子をご鑑賞して頂く事になりました。その映像を見てしまい顔を真っ赤にしていたヴィヴィオさんは可愛いと思いません、まる。

◇

ヴィヴィオさんの盛大な勘違いを解いた翌日、私はとある場所へと呼ばれていた。そこは機動六課の部隊長室。高級そうな革張りの黒くて大きなソファには私が真ん中に座って、両隣にはなのはさんとフェイトさん。対面のソファにははやてさんが座ってる。珈琲もテーブルの上に用意されていて、私にはオレンジジュースを淹れてくれてた。で、この四人が部隊長室に集まった経緯なんだけれど、これは私の進路相談とでも言うのかなあ。ヴィヴィオさんはなのはさんの養子に入る事は決定しているみたいで、行先の無い私の事を心配してくれての事なので無碍には出来ないし、断りきれなかった為にこうなっちゃった。出来るのなら、私とロゼさんとで生計を立てたいんだけれど四歳児という身が邪魔をしてしまう。

いくら社会進出が早い管理世界とはいっても、流石に四歳は異常みたいで。保護責任者の話とか養子としての引き取り手の話とかその辺りがメインに据えられてた。

有り難い事に私を引き取りたいとか保護責任者になっても良いって名乗り出てるものが既に居るらしい。多分裏には色々とその人たちの思惑があるんだろうけれど、スカさんという保護者を失った私がこの世界で生きて行く為には必要になるから私もその時は利用

させてもらおうとしよう。でもロゼさんと慎ましく生活する為の資金はあるし、保護責任者も里親も必要ないから難色を示した為に話は前に進む様子はない。どうも三人は私に保護者が必要だって思っているみたいで話は平行線になっちゃうんだよね。

「……やりたい事がある?」

こくりと一つ頷いてそれを見たはやてさんは『それは何なん?』と促されたので私が厚生施設の中で考えていた事を話す。内容は簡単な事で、スカさんが引き起こした一連の事件の被害者の人たちの為の基金を設けたいって事。その事を話した途端に三人とも微妙な顔になったけれど何でだろう。

お金のあてはちゃんとある。私が研究して論文にまとめたものや、特許申請をして得た使用料からお金をつぎ込むつもりなんだだけ。もちろん自分の生活もあるから全額なんてつぎ込む事は出来なけれど、慎ましい生活をすればどうにかなるだろうって。

「そ、そこまでしなくても良いんじゃないのかな?」

と、なのはさん。

「そうだよ。責任はスカリエツティにあつて君にじゃないよ?」

と、フェイトさん。気持ちは有り難いけれど、ちゃんと裏事情もあるんだよね。だから無償の善意だなんて良いもんじゃない。コレを理由にしてスカさんたちの刑期短縮とか恩赦を嘆願するんだし。

きちんと話さないと三人は納得してくれそうもないので私の真意をちゃんと伝えると、ビックリした顔をした。まあ四歳児の考える事じゃないんだけど、私はスカさんのクローンだつて事で納得して欲しい。そんな事なので、管理局内で伝手があるなら教えて欲しいし、もちろん見返りもちゃんと用意すると言った。その言葉にははやてさんは頭を抱え、なのはさんは苦笑い、フェイトさんは魂が抜け落ちてた。

「はあ……わかった。その件についてはどうにか出来ると思う。けど無理はアカン。これだけは約束してな?」

真つ直ぐに私を見るはやてさんの瞳に嘘はないと思うから、こくんと確り頷いた。もしかすればやらなくても良い事で、無駄な事なのか

も知れない。でも、やらなきゃいけないんだと思うから。

——一年後、スカリエツティ基金設立。

紆余曲折しながらようやく設立できた。被害者の人たちの気持ちを考えればその命名はないじゃないか、と言われそうだけれど本当に困窮して困ってる人たちを助けたいって意味合いで付けたのもある。藁にもすがる気持ちならば利用できるものはどんなものでも利用するだろうし、一応代表者である私の名前は偽名になってるから平気かかって。色々と煩雑な手続きが必要で、諦めそうになった事もあるけれど。もちろんスカさんたちの釈放や恩赦について影響力のある管理局と、管理局に発言力の有る聖王教会にはこの事を伝えて了承も貰っているから、ちゃんとした形になった訳だ。そしてこれは”贖罪”なんてものじゃなく、私のエゴが生み出した産物だ。だから他の人から褒められるモノでもなし、むしろ責めてもらっても構わない。ただただスカさんやナンバーズの皆は私にとって『家族』なんだから。

この話をするのと六課の皆は微妙な顔をしちゃうからあまり大きな声で言えないけれど。たとえどれだけの時間が掛かったとしても、もしかすれば死ぬまで掛かったとしても遣り遂げればいけない事だもんね。

だからその日に向かってゆっくりでも良いから進もう。

——いつかまた一緒に皆と暮らせる日を望みながら。

第十一話：E p i l o g u e

——人類の進化は二歩と半分。

私がアレを生み出した理由はただの気紛れだ。もちろん私の純粋なクローンとして、もしもの時の為に私の意思を継ぐべき者だと考え造りだした経緯もあるが、特に何の感慨も無く造りだしただけだった。

私の体細胞を取り出し遺伝子を操作した個体。クローン技術は既に確立している為に安易な事だった。すぐにアレは培養槽へと移され、小さな胎児の形を得て育っていった。私の意思を継ぐ者ならば、優秀でなくてはならない。だからこそ持てる知識・技術の全てをつぎ込み最高の私を創ったのだ。ある程度育てば脳に直接知識を詰め込み私と同じレベルの知識を持たせ、魔法についても学ばせた。アルハザードについても、くだらない事を続けている人間の歴史も、管理局の成り立ちも全て、全て。そうして十月とつきが経とうとする頃、奇跡が起きる。

——アレが目を覚ましたのだっ！

そう、目を覚ましたのだ。目の覚める筈の無い培養槽の中で。これで驚くなど言う方が無理である。本来ならばある程度の年齢を培養槽の中で重ねさせ知識と偽の記憶を流し込ませ、人間として馴染ませるから覚醒させるつもりだったのだが。

……いやはや、この世に神が居るのなら感謝するよ。こんなにも私の心を躍らせてくれたのだから。しかしながら私は赤子など育てた事は無いし、本心を言えば邪魔な存在ではある。いくら私のクローンで知識を持ち得ていても、理性は存在しない。泣くであろうし、排泄もすれば、食事もする。そんなくだらない事に私は時間を割く暇は無いのだから、アレの世話はウーノ達に言い含め私はしばらく様子を見る事にした。

ウーノからの報告を聞けば、どうやらアレは一切泣かぬそうだ。腹を空かせても泣かぬし、機嫌を損ねても泣かぬ。排泄をすれば泣かず

に、そうした事を襁褓に触れて訴える。普通とは全く違い、一切手の掛からぬ嬰兒であった。

はてさて、これはどうしたものか。そのようにする事は培養槽で知識を植え付けたとはいえ、教えてはいない。自ら学び、実践するにはまだまだ早い段階である。面倒な事ではあるが、人間一人が成長するにはかなりの時間を要するのだから。そんなアレの様子に興味を抱き、目覚めてから一切接触していなかったのだが部屋へと行きベッドの上に大人しくしていたアレの顔を見た。

……。

言葉にならなかった。小さな瞳が私を射抜き、小さな手を私に差し出した。だがその手を私が握る事は無く、無表情のまま私は部屋を出たのだった。伸ばされたアレの手を何故握る事が出来ようか、そんな事の為にアレを生み出したわけじゃないのだから。初めて抱いた知らぬ感情に戸惑いはしたものの不快感は無く、むしろ心地よい物だった。

のちにそれが父性と知るのだが、この時の私が知る由もないのは仕方ない、何せ物心がついた時から研究に没頭してきた人間なのだ無理もなからう。芽生えた感情に温かな物を覚えながら、一年が過ぎた。そうしてその頃にはつたないものではあるが歩き始めた。だが、調べた知識によるとこの頃から単語で言葉を話し始めるようになるらしいのだが、その傾向が見られない。

何故、と疑問が湧いたが専門家でもない私が答えなど出せる筈もなく、また暫く時が経つ。そうして漸くアレは喋るようになるのだが、かなり拙い喋り方だったのだ。またそれが可愛らしさを誘うのだが、この時の私もその理由が解らなかった。あの感情を理解していれば、きつと映像データとして記録を残していた事だろう。いや、むしろレリックに映像を流し込み永遠に消えぬものとして残しておけばよかったと今更ながら思う。

そうしてまた暫く時間が経ちアレがどうにか喋るようになって、一番最初に私に要求したものは『台所』だった。はて、何故そんなものをと考えたのだが答えは浮かばず。何故ならこの時の私は食事に関

しては興味が無く、栄養を摂取出来れば良いと考えており口にすることすら面倒になれば栄養剤の点滴で済ませていたのだから。私以外のナンバーズたちもアレのその言葉の意味をよく理解していなかったようだが。

舌足らずではあるがあまりのアレの熱意に押されてアジトの一角にその設備を設ける事とした。敷地の中には余り余裕が無かった為に最奥の遠い場所で狭いものであったが、文句も言わず『ありがとう』と珍しく笑っていた。その瞬間を記録に残していなかった私の失態を恨むが、今更嘆いた所で仕方ないのだが。

そうして『台所』が完成した瞬間に食材を要求されて、物が揃えば調理を始め料理を作っていた——つたない動きで調理する姿や味見をする姿はそそのるものがある——のだが、完成した食事は自身の為ではなくどうやら私たちが食すべく作ったそう。調理の知識を教えた覚えがないのだが、その理由を聞いてみれば調べて作ったとの事だ。アレ曰く食事は大事な物で栄養はバランスよくきちんと取るべきで、栄養剤やビタミン剤だのは問題外と憤っていた。一体何処の母親なのだろうと思っただが、私に母は存在しない。だが悪いものではないと知り、私が叱られる事などプレシア以来で懐かしいものだった。

私たちの食事を用意するようになったアレだが、同時に私の研究にも興味を持ち始めた。初めは隣で見ている事の許可を求め大人しく私の傍で研究や開発する姿を見ていたのだが、暫く時が経ち気になる事があれば質問や疑問を飛ばしてくるようになっていた。

知識に貪欲で吸収も早い。私はその試しとして大学に通わせ、論文や基礎理論を提唱させた。そうして提出された物は、その分野に新たな改革を起こすものとして大きく学会を揺るがせていたのだから痛快だった。そうして間もなく課程修了の報せをアレから聞いた。それからというものの私の見よう見真似でガジェットドローンを完璧に造り始め、しまいにはアレが自身で考えた別系統の魔導兵を造りだした。私が以前に提唱した理論を応用したものだが、発想そのものはアレ自身のオリジナルと言っていいだろう。私には考え付く事が出来ないものを生み出したのだから。

——面白い。

一人でずつと行つてきた研究に張り合いが出た。何年も孤高に高みを求めてきたが、隣に並ぶべき存在が出来たのだから心躍らない訳はない。そうして有意義な時間が訪れる。研究に行き詰めればひよっこりと顔を出して私に助言をくれ、また逆に私もアレに助言や指摘をよくしたものだ。意見が合わなければ当然議論する事になる、科学者としてのセンスが違えば見方も違う。

はは、嗚呼そうだ。やはり私は楽しかったのだ。アレと科学を突き詰めていく事が。私もアレに感化され影響を受け、アレもまた私に感化され影響をおおいに受けてそこらに居る科学者には太刀打ちできない程のレベルにまで直ぐに育った。そしてまた月日は経ちアレは完全にオリジナルの仕組みを打ち出し新たな物を造りだした。アレは造りだした魔導兵もどきを“二足歩行兵器”と言い、何故機械を人間のように歩行させるのかと聞けば“ロマン”を追い求める事に価値があるだとか。

私には少し理解し難いものだが、アレが言いたい事 of 理解は出来た。研究や実験には並みならぬ熱意が必要だ。その理由が何であれどんなものであれ、その事に貴賤はないのだから。そうして完成した二足歩行兵器を無人世界へと持ち出し、起動実験を行った。結果は無残な物になってしまったが、成果は確実に得た。アレは悔しさと泣いていたが、科学者にとって失敗は勲章である。そう諭せば一つ頷き、涙を拭っていた。しかしアレの泣いた所など初めて見た。培養槽から目覚め赤子同然の状態ですら、泣かないアレである。確かにアレの感情の起伏は通常の子供よりも乏しい、いや無いと言つても過言ではない。

だからこそアレの表情に惹かれたのかもしれない。私も私が作りだした戦闘機人たちも。嗚呼そうか、理解した。私はアレの事をどうやら娘として見ていたようだ。急にこんな事を言い出せば、気でも狂ってしまったのかと脳髄共に言われてしまいそうだが。はっ、それでもかまわんさ。理解してしまつたのだ、ずつと抱いていた自身の感情の疑問を。まだ泣き止まぬアレが爆発の影響で付いてしまつ

た煤や埃を払うのを見て思う。

——泣き顔の私の娘、次元世界一超可愛い可愛い！

そうして私はアレを……いや、娘を抱き上げ無人世界を後にした。

◇

娘がアジト内の生活環境を整えた事で、副産物が生まれた。とは言っても微々たるものではあるが、その効果に私は驚いた。まずは、先にも言った通り食事である。一日三食、娘が用意したバランスの良い食事を摂る事。

今迄は食べる時間すら惜しくサプリメントや栄養剤で済ませ、それで満足していたのだが……娘が食べぬと怒るので仕方なく食べ、仕方なく食後の珈琲を飲んだ。そうして暫く、便通が良くなり食欲も増した。相変わらずの寝不足ではあるが、身体の調子が良いのだから研究も捗り良い結果も出ているのだから、食事に時間を取られる事に文句を言えなくなってしまった。娘はウーノにも調理を仕込み始め、ウーノ本人も楽しそうに娘から教わっているのである。私の計画に支障が出るのならば止めねばならぬが、あの娘はウーノの空いている時間を見つけたしあっさり調理についての全ての工程を教え終えていたのだから驚いたものだ。

次に風呂。風呂自体は珍しいものではない。バスタブとシャワーが併設されたバスルームは一般的なのだから。だが娘は入り方に言及したのだ。

我々、特にミッドチルダにはバスタブに浸かるという文化はあまりなじみが無く、身体の汚れさえ落とすことが出来れば十分と思っていた私を殴ってやりたい。入浴方法を熱く語りながら娘が考え設計した風呂は、大きな浴槽と幾つかのシャワーが設置され一度に何人も入れる風呂であった。そうして娘が提唱した入浴方法を試してみる。初めは湯の温度が熱く直ぐに浴槽から上がってしまったのだが、慣れるとこれが病み付きになる。そうして娘が何処からともなく持って来たビールが美味で。風呂上りの一杯のビールが最高だった。

普段はワインであるが、風呂上りはコレに尽きる。一度飲み過ぎで失態を晒してしまっただが、まあ一度の失敗など幾らでも有るだろ

う。再び同じことを犯さない事が大事なのだから。

次に睡眠だった。しかしこればかりは娘の意見に従う訳にはいかぬ。研究とは一瞬の閃きと、それに向かい突き進む勢いが大事なのである。もしもその途中で寝てしまうなど愚行を犯しては科学者として風上におけない。おけないのだが、私は平気で五日間から七日間程寝ないのだ。若かりし頃はほぼ不眠不休と言っても良い一日二時間睡眠で研究を続け、一月後には全身に湿疹ができ痒みに襲われ仕方ない状態になってしまった事もあったが、流石に今になっては無理である。

余談はさておき、まあ一週間連続で私はほぼ寝ないのだ。そういう時、今までは止める者など居なかつたのだが、娘は違つた。拙い言葉使いで“おとうさま ねてくだちやい”等と言われれば寝ぬ親など居るものか、いや居ないに違いない。だが、流石に長時間は寝られず直ぐに起きまた研究へと赴くのであるが、それを知つた娘は最終手段と言わんばかりに“延髄打ち”を放つた。いやはや、これはお手上げだつたよ。強制的に眠りへと誘われるのだからね。だが目覚めた後は何故か無性に頭がすつきりとしているのだから不思議だ。そして私は悟つたのだ。これは、愛の力なのだと。娘の愛が私に極上の眠りを捧げてくれるのだと。嗚呼、娘よ。徹夜をする父を止めてくれてありがとう。お陰で研究が更に捗つたのだから、文句など一つも無いのだよ。

また暫く時が経ち、娘はパワードスーツなるモノや小型化させた二足歩行兵器にAIを搭載したモノを造りだしていた。パワードスーツはリンカーコアを持たない人間用に開発したらしいのだが、生憎と被検体を手に入れる事が出来ず暫くお蔵入りとなつてしまつたが。嗚呼、すまない娘よ。

リンカーコアを所持していない人間を拉致してくれば良かったのだが、アジトに無能は必要ないのだよ。その事は口にはしていないが、あつさりと諦めていた娘には、清々しい物があつた。そんな事なので、AIを搭載した二足歩行兵器に注力していたようだ。そうして暫く、形になつたと言つて私に報告してきた娘は珍しく嬉しそうな顔

をしていた。

ある日、ベル力を滅ぼしてしまった兵器も斯くやあらんとばかりの言葉が私を襲った。

——…：…：そう言えば、お嬢の事は何て呼べばいいんツスカね？

ウエンデイ君。君は時折ぽんこつではあるが、まさかこの時真の力に覚醒したとは。いやはや私も驚いたのだよ。そう、そうなのである。娘であるアレに、命の言祝ぎである名を付けていなかったのだから。神の悪戯なのか、この時まで忘れていた理由は定かではないが確かな事は娘が自身の名を望まなかった事もある。

だが望んでいないとは言え、これは親として責任を果たせていないだろう。だからこそ素敵な名を送らねば。悩んでいる私を余所に娘は『ジュエル』と呟くが、それだけは認められない。いくら偽造ID用の名前とは言え、あの脳髓共が考えたものなのだから。私の気も知らないで、周りの皆の視線がだんだんと冷えていく、が。そう、そうだ。『ゼロ』はどうかね。本来ならば彼女には『13』を与える事が筋であるが、私の完全なクローン体である。であるならばウーノを差し置いても問題はあるまいし、何より数学的にも天文的にも大事な数字である事は確かである。ならば、そう、やはりソレしかあるまい。何故か周りの娘たちは不思議そうな顔をしていたが、私の完璧な思考に追い付けていないだけなのであろう。それにゼロは少し嬉しそうなのだから、何も問題はあまい。

◇

「何故、あんな事を……」

長い金糸の髪を揺らしながらプロジェクトフェイトの遺産である一人が私に問いかける。やれやれ愚問をと心で失笑しつつ、この場では私は何も出来ず暇な身なのだから、怒りを露わにしている小型犬の様な彼女に教えて差し上げようではないか。いやはや、私も丸くなったものである。

人類の進化は二歩と半分。有史以来、諍い事が絶えぬ年月は堂々巡りの悪循環であろう。だからこそ人間は可能性を見つけ何処までもその果てを追い求め、そうして死を迎え朽ち果てて逝きそしてまた振

出しに戻り、諍い事へと発展する。何も学ばぬ人間に進化などおこがましいとでも言うべきか、それならばいつそ退化こそが究極の美であるのかも知れんと、私は思うのだが君はどうだね？

急にこんな質問をされれば答えられぬか。まあ、良い。私は君の答えなど求めてはおらぬし、興味も無いのだからね。おお、怖い怖い、そう怒らないでくれ給え物事には順序というものが要だ。答えだけを求めて正解をしても、過程を知らねば意味は無いだろう。それと同じ事なのだよ、この話はね。

先にも言ったが、人間とは愚かなものだ。同じことを何度も繰り返して学ばない。進化している様に見えて実の所、進化などしておらず停滞している。では、どうすれば良いのだろうか、人類は誰も変えようとしなかったのだから。それならばいつその事私を変えて見せようと思った訳なのだよ。『恐怖』に支配される世界をね。

リンカーコアを持たない人間だろうか、魔導師だろうか、私の生み出したモノに支配されし世界で二歩と半分より先の世界に進める事を確約したと言うのに。

「そんな事、誰も望んでいませんっ！」

ならば君は、二歩と半分しか進めなかった世界で停滞していれば良い。それだけの事だ。もう用は無いだろう？

「待つてください、質問に答えて頂いていませんっ！」

これで判らぬと言うのなら、この話はおしまいだ。帰りたまえ、御嬢さん。出口はあちらだ。……やれやれ。プレシアの娘は諦めの悪い……。まあ、母親そっくりではあるが。だが如何せん、夢を見過ぎな所もあるな。嗚呼、やはりプレシアに似ているのか。

全く今日は忙しい。また面会とは。一体誰だと言うのだね……。

「お久しぶりです、父さん」

嗚呼、本当に久しぶりだ。我が娘よ。忙しかったのだろうか、何時もより時間が空いたね。怒っているわけではないのだが、私の楽しみを奪われた気がしてね。気分を害してしまったのなら済まない。それといつも差し入れを済まないね、何分此処には娯樂が無くてね。君が来る事や差し入れがささやかな私の喜びなのだよ。おや、暫く見な

うちにもまた綺麗になったのではないかね。なに謙遜など要らん、心からの賛美であるのだから受け取ってくれねば困るのだよ。

さて、今日も私の暇つぶしに付き合ってくれるのだろうか？ 時間は有限で、私の欲望の様に無限ではないのだからね。早くしたまえ。ほう、これは……、面白い事を考え付いたものだ。嗚呼、面白い。音も無く心が振るう。ふむ、ふむ、ふむ。しかしこの理論では穴がある。娘が提唱した論に面会時間ぎりぎりまで討論するのは、すこぶる楽しい。彼女の頭は冴えており、相変わらず私が考えもしない視点から発想し具現化させようとする。ただ、時折一人では無理な事もありこうして私に助けを求めてくるのだから、愛おしくて仕方ない。科学者としてならば彼女は愚を犯しているのだろうか、私を師と仰いでいるのだから何ら問題は無い。

「ねえ、父さん。いい加減、意地を張るのは止しませんか？」

意地など張ってはおらぬのだがね。ただこの世の人間が凡骨過ぎて話にならないだけなのだよ。それに私の命もあと僅かだろう。嗚呼、そんな顔をしないでくれ、私は私の理想を掲げそれに向かって進み事を成したのだから、この人生に後悔など無い。さあ、そろそろ面会時間も終了だろう。早く帰りなさい、些か此処は交通の便が悪いだろうからね。では、まただ。

一つ、後悔があるとすればもう一度皆で食卓を囲みたかった。ただそれだけだ。だが君たちと一緒に過ごした時間は、私にとって穏やかで楽しい物だったよ。家族など必要の無いものだと思っていた私が良い物だと知れたのだから。ありがとう、夢の様な日々を私に与えてくれて。

——嗚呼、そうだ。

生まれてこなければ良かったと思つた事もあつた。君たちのお陰でかけがえの無いものを手に入れられたよ。無限の欲望などと呼ばれた私が、唯一満足したものなのだから。



——二十年後

『世紀の大犯罪者ジエイル・スカリエツィ獄中死』と大きく新聞の一面に踊った字は、次元世界に住んでいる人達には吉報だっただろう。この新聞が刊行される前日、私はスカさんの訃報を知らされていた。何故だかその時は実感が湧かなくて。

「マスター……」

「ごめんなさい、ロゼさん。少しだけ胸を借りて良いですか。」

「はい」

事件に巻き込まれた人たちの事を考えれば、泣く資格なんて無いのかも知れない。でも今はロゼさん以外誰も居ないから、誰も見ていないのだから少しの間だけ許してほしい。この世界に死刑制度は無い。一番重い罰は終身刑だ。だけれど、スカさんの力ならその才覚を以てして世間に貢献すればきつと恩赦で出所出来た事に違いない。でも彼はそれをしなかった。

悪は悪のまま、彼の人生を終えた。その人生が良い物だったのか、それはスカさんにしか判断出来ない事なんだろう。ずっと恩赦を願ってきた私やナンバーズの皆の願いは届く事は無かった。残念だけれど、スカさんらしいとも思う。

それから半年、ウーノさんドゥーエさんトーレさん、そしてクアットロさんの出所が決まった。スカさんが亡くなってから憑き物でも落ちたかのように事件の真相をとつとつと語り始めた事と、私たちの嘆願がようやく届いたようで。

—— おかえりなさい。

時間は掛かってしまったけれど……また一緒に……ご飯食べられますね。

おまけの話

第一話：機動六課隊長陣視点

古代遺物管理部機動六課部隊長である八神はやては頭を抱えていた。

先のアインヘリアル強奪事件で明らかになった”戦闘機人”のメンバー全員。そこまでならば問題はなかった。過去の戦闘でスカリエッテイ一味である戦闘機人の報告は受けており、その構成員もほとんど割れていたのだから。しかし、一つ問題が浮上した。アインヘリアル三号機を爆破された時の映像を流し、はやては目を細める。

「なんで、この子が……」

その子供とは地上本部で面識があった。少し前に地上本部の警備部隊を一部機械化するとの通達があり、その時に開催された配備説明会で陣頭指揮を執っていた小さな子供。面識のある子供がアインヘリアル強奪・爆破事件に関与していたのだから、驚きを隠せないでいた。

まだ三歳という年齢ながら言葉使いや態度は大人顔負けのものであり、外見以外は社会人として立派に通用するものだった。一言で言えば類まれなる天才児で、必ず管理世界に革命を起こす人物だろうと確信していたはやて。その才覚に彼女の将来を考えて唾を付けておいたのだが、どうしてこんな事になってしまっているのだろうか。あの小さな子供がスカリエッテイ一味の一人である可能性が浮上した事は青天の霹靂だった。

子供から貰った名刺を見つめながら深い溜息を吐く。どうせこれは偽名であろうし企業も実在していないか、偽装されたペーパーカンパニーである事は明らかで。先行配備されたSUCUJIA十体はなんの問題もなく警備をし、先の本部壊滅でレジラス・ゲイズ逮捕の一件にも貢献してはいるが、SUCUJIA自体に何か仕込まれている可能性も危惧しなければならなくなった。部隊の隊舎喪失、地上本部の壊滅とそれだけでも頭の痛い案件が山積みであったのに、今回の

アインヘリアル強奪事件で更に頭を抱える羽目になってしまったはやては間違いなく苦労人であろう。

「はやて?」

「ん、ああ、フェイトちゃんか……」

スカリエツティ一味による機動六課襲撃で隊舎は壊滅しており、コは臨時で借り受けた管理局が所持している建屋の一室、そして今は部隊長室として機能していた。隊舎襲撃によりヴィヴィオを攫われて気落ちしていたフェイトであったが、家族であるエリオとキャロにより大分復活しており、その瞳には確りと光が宿されている。

「返事がないから勝手に入ったんだけど……大丈夫? 顔色が悪いよ」

「ん、あー。平気やって言いたい所なんやけどなあ……」

度重なる事件により、地上勤務の管理局員ならば誰しも疲弊している事だろう。その事を理解しているはやては立場上疲れているなどとは言えるはずもなく、そのまま手元にあった写真を入室していたフェイトに見せる。

「これってアインヘリアル三号基爆破の時に居た子だよな?」

「うん、そうや。なんでこんな小さい子供が場違いなところに居たんか謎なんやけど……」

地上本部での出来事を考えれば、子供であろうが大人顔負けの態度を取っていたのだから不思議ではない。しかしそれをフェイトに伝える事はなく、写真の子供についての考察に入ってしまった。

「うーん。スカリエツティ達に脅されている、とか?」

「そうだったらええけどなあ。……この子の顔、スカリエツティにそっくりやん? スカリエツティの子供かクローンって可能性の方が高そうやけど……」

その言葉にフェイトは顔を歪ませるが、直ぐに元に戻る。それを察知できなかったはやてではないが、この場はあえて黙っておいた。フェイトにも色々事情がある事は知っているし、そんな事をすれば彼女が傷ついてしまうのは百も承知だから。

「それなら、どうしてこんな小さい子を危ない場所に連れて来たん

だろう……」

普通ならばフェイトの言うとおり危ない場所に小さな子供を連れて行くなど愚の骨頂であるが、写真に写る子供は特殊な存在である。

「この子な、地上本部の機械警備兵を作った張本人やねん……」

「へ？」

衝撃の事実にはフェイトは驚きなのか呆れなのかなんだかはつきりしない感情を抱えて、素っ頓狂な声を上げた。

「その反応が正しいんやろうなあ……。わたし、この子と面識あるんやけどな、めっちゃ確りした子やねん。大人顔負けの論で説明会、乗り切ってたしなあ」

子供だからと言って甘い顔をする管理局ではない。不備があればキツチリ指摘するし、ダメな事があればそれも指摘される。それらを踏まえて弁舌と己の実力で技術者や本局の高官たちを納得させていたのだから、子供の実力を素直に認めるしかなかった。

「は、はやてっ！ この子知ってるのっ!？」

「せやで。まあ話したのは他愛のない事やったし、一言二言なんやけどな。それにその時は、こんな事になるなんて思うとらんかったし」

知っていたなら速攻で身柄を確保していたと、心の中で愚痴る部長。だが非情にもその時は写真の子供の立ち位置など知らず、規格外の天才としか認識していなかったのだから。

「こんな小さい子を逮捕せなアカンのかなあ……」

捜査官として数々の事件に関わり解決してきたとはいえ、犯罪を犯した者たちは大多数は大人だった。時折子供も逮捕する事もあったが、ここまで幼い子供は初めてであり戸惑うのは仕方ない。長年管理局に努めているとはいえ、彼女もまだ十九歳である。地球の日本で暮らしていれば、まだ学生であつたかもしれないのだから。

「……はやて。気持ちは解るけれど助けてあげなきや、ずっとスカリエッティの下で罪を犯さなきやいけなくなるよ。だから私たちがちゃんと更生の道を歩けるように導いてあげなきや、ね？」

執務官として働いてきたフェイトの方が、こういう事に直面した事

が多いのかも知れないし犯罪に巻き込まれた自身と同じような境遇の子供を助けたいと標を掲げているフェイトだから、嫌でもなれてしまっている。それでも、何度このような光景を目にしても胸に走る痛みがなくなる訳はないのだが。

「せやな、フェイトちゃん」

無理矢理に笑顔を作り笑うはやて。返事の代わりにフェイトも笑う。

「でも本当にスカリエッティにそっくりな”男の子”だね」

エリオと仲良しになれるかな、なんて既に将来を考え始めているフェイトは子煩悩である。

「なに勘違いしとんのフェイトちゃん。この子、女の子やで」

「え、男の子じゃないの？」

「……お、女の子やろ？」

一瞬口籠ってしまったはやてはフェイトの言葉に疑いを持ってしまふ。もらった名刺の名前は完全に女性の名前ではあったのだが、確かにスカリエッティにそっくりであるし幼い子供故の幼児体型で性別の判断に確信が持てないのだから心が揺れてしまっても仕方ない。ここでもゼロの性別問題が勝手に勃発し、二人の疑問は謎のままであつた。

——ぶえつくしゅつ！

同時刻、某所。誰かが盛大なくしゃみを嘔ましていた。

◇

『諸君！ 私は研究が大好きだ』

突然ジェイル・スカリエッティの仕業により電波ジャックされミッドチルダにある数々のテレビ局は騒然としていた。電波を復帰させようと色々試してはいるがそれは叶わないままで。高らかに声を上げながら大仰に両手を広げ、男がドヤ顔を画面越しにみせつける。この映像を見ている次元世界の人々がイラツ☆としたのは言うまでもない。

『諸君！ 私は開発が大好きだ』

その白衣の男、ジェイル・スカリエッティの腕の中には小さな子供

が抱えられており、男と瓜二つの顔をしていたが演説で器用に表情を変え、スカリエッティとは違い幼子の顔は無表情。どうしてその場に居るのか、どうして世紀の大犯罪者であるジェイル・スカリエッティにそっくりなのか、疑問はいくつも湧いてくるが真相を知るものは少ない。

「諸君！ 私は研究・開発が大好きだ!!」

聖王教会に所属するカリム・グラシア騎士の予言通り、無限の欲望は壺から溢れ出てこの世界を恐怖に突き落とそうとしていた。聖王のゆりかごは起動し、ミッドチルダに住む人々は狂い始めた平和に慟哭する。

「あ、あの子……」

ぼそりと声を漏らすフェイト・T・ハラオウン。ぎゅつと手を握りスカリエッティが潜伏しているであろうアジトの入り口を厳しい視線で見つめる。

——必ず、助けるからね。

ヴィヴィオも君も、と。フェイトの誓いは公人として大人として素晴らしい物だろう。悪を倒す正義そのもので、そして彼女の持つ正義感も至極正しい物のだが、件の子供がジェイル・スカリエッティの下に居るのは自らの意思である事を知らないのは幸か不幸か。突入メンバーであるヴェロツサ・アコース、シャツハ・ヌエラらと共に領き、彼女達は巨悪に立ち向かうべく歩を進めるのだが、フェイトが子供を助ける事は出来なかった。

「……居ないっ！」

逮捕したスカリエッティの身柄を武装隊に任せて、崩壊しつつあるアジトを移送いで移動して来たのだが空振りに終わる。

「先程まで、気配はあったんだけどねえ」

スカリエッティの右腕といえる戦闘機人ナンバー1であるウーノを逮捕したヴェロツサが子供の居る場所を突き止めてはいたが、あと一步遅く。子供はクアットロによって、聖王のゆりかごへと転移魔法で移動してしまっていた。空振りしてしまったフェイトの落胆ぶりは凄まじく、後に高町なのはとの関係に少々罅が入るのだが十年以上

の付き合いがある二人なのだから、一応の解決は出来たと明言しておく。

罫が入った原因はもちろん、高町なのはが放った処刑用バスターについてである。

助け出せなかった事に後悔をしながらも、やるべき事がフェイトには残っていた。ヴェロツサに後の事を任せてアジトの別の場所に存在するという生体ポッドがある場所を目指した。

◇

スカリエツティ確保の報を受けて安堵したのもつかの間、聖王のゆりかごは首都クラナガンを目指しゆっくりと移動していた。それを阻止する為にはやての家族である鉄槌の騎士ヴィータがゆりかごの駆動炉に向かったのだが、破壊したとの報告は未だに届かない。首都であるクラナガン上空でガジェットドローン殲滅の為に指揮を執っていたはやてだが、頃合いだろうと考え他の人間に現場の指揮を任せて聖王のゆりかごに突入する事となる。

——ゆりかご内部・メイン通路

リノリウムの床をひた走る……事もなく飛行魔法で飛んで移動するはやて。AMFの影響で本来の力を出せずにはいるが、魔法を使えない事はないので魔法で移動し一路駆動炉へと急ぐ。時折ガジェットドローンと出くわすが問答無用で破壊して、駆動炉へと辿り着いた。そうして炉に視線を向ければ自身の大切な家族が力尽きる寸前で抱き止めた。

そうして駆動炉はヴィータの活躍により、その活動を停止し高度を維持できなくなったゆりかごは、ゆっくりと確実に高度を下げていた。ヴィータの怪我の具合が心配なために一度脱出する事を優先し、今来た道を引き返すはやては他の部隊員が気になり移動しながらモニターで刻々と変化していく状況を眺めていたその時だった。

『デイバイ——ン……………』

『ふふふ……！ 貴女はこんな小さな子供を撃てるのかしら……？』

ひよいとナンバーズの一人によって抱きかかえられた小さな子ども

もは見知った顔だった。スカリエッツィのアジトに居るはずの子供が聖王のゆりかごの最深部に何故居るのか一瞬頭によぎるが、今見えるモノが真実であり変わることはない。

『バスター——……つて子供おおおお!!』

「……なのはちゃん」

「……なのは……」

やってしまったと言わんばかりの呆れ声は、はやてとヴィータにか聞こえない。

『レイジングハートっ！ 止めてっ！ 止めてええっ！』

必死に砲撃を止めようとするのはだが、撃ってしまつてはもう遅い。魔法詠唱をキャンセルすればどうにか止められるのだが、術者への影響が大きい為に余り好まれる手段ではない。

『もう射出されてますので無理です、マスター。魔法ダメージは残ってしまいますが、撃たれた人たちが死ぬ事はありません』

”非殺傷設定”が名目上効いているのだが七発のカートリッジをロードし一撃必殺を狙つた一発は、どう見ても、誰が見てもアレは死亡してもおかしくはない立派な桃色のゴン太巨大ビームであった。

「なのはちゃんがやってしもうた……」

「……」

部下の失態に頭を抱える部隊長。子供の正体が民間人なのかスカリエッツィの手下なのか確定していない状況でのコレは大変に不味い。胃に痛みが走り始めた事を認識しながら、部下兼大切な友人である彼女の失態の処遇と処罰について高速で考えを導きだし、答えを模索する。

——映像加工してしまおう。

最低な考えを過らせながら、空中に浮かべたままのモニターを横目で見ると信じられない光景が広がっていた。処刑用バスターにより舞い上がった土埃が晴れて、映像が回復する。顔が歪になっている金髪長身巨乳の女性とその足元には例の子供の姿。そしてその後ろには気絶して倒れているナンバーズの四番目の姿があったのだから、驚

くのは仕方ない。

「ウソ……やろお……」

「あ、ああ……」

信じられない光景が広がっていた。はやての旧友であるのはのアレを受けたというのに、生きているのだから。いや、この言い方では語弊があるのだが、ある意味で間違っただけではない。旧友のアレは肉体には限界ギリギリまでの負荷が掛かるだけで死にはしないのだが、精神的に死んでしまう可能性が大きいのである。そうしてそれを耐えられた人間は極僅か。はやては人伝に聞いた話や以前に読んだ報告書の内容でしか知らないのだが、もちろんソレはフェイトの事だった。

まことしやかに囁かれている噂では『高町教導官の砲撃^{アレ}を受けるとドMになる』と言いだしたのは果たして誰なのだろうか。その責任の所在を追及してしまえば、噂の元凶は確実完全にドMとなってしまうだろうから誰もが目を瞑っている状態なのだ。

——同時刻・某所

「酷いよ……なのは、あんな小さい子に……デイベインバスターを撃つなんて」

もちろんわざとでは無い事は理解しているのだが、空中モニターを目にしながらぼつりと零れたフェイトの言葉は長年の友人に向けた本心であった。……閑話休題。

かなり疲れた様子の子の小さな子供ではあるが、どうにか命に別状はない様子で。安堵の息を一つ吐いてはやてはゆりかごの外へと早々に脱出。負傷が酷いヴィータを医療班に任せて、また部隊の指揮を執るべく通信をアースラへと繋げようとしたその時だった。

「なのはちゃん……！ なんつー無茶やっとなねんっ！」

友人の無茶振りに怒りがこみ上げて叫んでしまうが、なのはが昔から無茶を仕出かすのは百も承知だった。だが、また同じ過ちを繰り返そうとしているのだから笑えない。今まさしくヴィヴィオの体の中に取り残されているレリックを破壊する為に、スターライトブレイカーを撃とうとしているのだから。けれど、はやてにそれを止める権

利はないのだろう。なのはが無茶をするのは十年前に知っていたし、その無茶で自身も救われたのだから。そしてまた運命に翻弄された小さな一人の少女を救おうとしている。自分の身を犠牲にしても、だ。

『ちよつと痛いかもしれないけれど、我慢してね。ヴィヴィオ……』
長らくの戦闘により周囲に散らばった魔力素をかき集めて、自身の魔力へと変換していく収束魔法。その威力は星をも軽く壊すほどと言われる事もある、高町なのはの最終兵器だった。無茶ではあるがきつとヴィヴィオは救われると、その映像を見ていた誰もが思った瞬間だった。

『まってください……』

『……にやつ！』

何処からともなく聞こえてきた突然の声により、予備動作である収束が一旦遅くなる。繋げていた機動六課の通信を割り込んで砲撃を止めたのは、あの小さな子供。驚いてしまったのか最近では滅多に口にする事のないなのはの口癖が出ていた。

『かのじよのぼうそうをこちらで きようせいにてきに とめます』
たどたどしい言葉ながら、モニター越しに映る子供の姿は確りとしたもので嘘を吐いている様には到底思えない。だが、疑心は残る。なにせ次元世界を揺るがす次元犯罪者ジェイル・スカリエッティそつくりであり、なによりスカリエッティの演説と一緒に映っていたただ一人の人物なのだから。一味の中で重要な立ち位置にいると考えられるのは安易な事だから。なのはと子供のやり取りを、注意深く観察するはやて。子供の真意は何処にあるのか、全く理解が出来ない。

『えっ、えっ……』

砲撃を止められたなのはは狼狽える。ヴィヴィオを撃ち抜く覚悟は既に霧散しており、もう一度集中しろと言われても難しいだろう。そんなのはを余所に、小さな子どもは聖王のゆりかごのメインコンソールパネルに向き合い、恐ろしい勢いでタイピングを始めた。

『ヴィヴィオっ!!』

暫く待っているとヴィヴィオは気を失い地面に倒れそうになるが、

それを許すなのはではなかった。そうしてしばらくして子供の手は止まり、小さく息を吐いて通信を繋げた。

『どうにか とめることができました。あとはかのじよのからだのなかにねむっている れりつくをどうするか、だけです』

『え？ あ、うん。……ありがとう？』

未だに事態が呑み込めていないのははヴィヴィオを抱きしめたまま、子供に曖昧な返事を返す。

『それと これを』

そうしてなのはの下には大量のデータが送られていた。それもレリックに関する記述である。専門的な事はさっぱりと分からないが、子供からの説明を聞けばヴィヴィオの体の中に埋まっているレリックの取り出し方法だった。その真贋を突き止める為に、戸惑いながらも上司であるはやてが居るロングアーチへとデータを転送。さらにそこから専門技術者にデータを送り返事を待っている状態なのだが、遅いとはやてが心の中で悪態を吐く。

『とりあえず ゆりかごのじどうぼうえいモードは ふせぎました が くどうろがだめになってるので ついらくのきけんがありました。なのではやく にげてください』

その言葉に続いて、子供は地図をなのはに寄越した。その地図は聖王のゆりかごの地図で、ご丁寧にも最短の脱出経路が記されているもので。

『君はどうするの？』

『ごちらはごちらで どうにかかります』

子供の機転の早さに驚きながらも、小さな子供を置いて自分たちだけ脱出してしまうのは忍びないらしく、なのはは困惑していた。

「……なのはちゃん、一旦ヴィヴィオを連れてゆりかごから脱出しよう。もろもろの問題は後からでもかまへんっ！」

『わかった』

納得のいかない顔をしながらも、ヴィヴィオがいる為にははやての言葉を聞くしかないなのはの表情は渋いモノだった。おそらくは小さな子供の事で思う所があるのだろうが、ヴィヴィオの状態も心配だっ

た為に必ず後で迎えに行く」と心に誓いゆりかごを後にした。犯人の生死よりも、部下の命を優先させたはやては優秀な指揮官としての証拠だろう。

幼い子供を見限るだなんてひどいと言われても、優先すべきは部下の命であり比重が重いのである。もちろん助けたいのは山々であるが、今は猫の手を借りたいほどに忙しいのだから。犯罪者に構っている暇はないし”どうにかする”と言った子供の言葉に賭けている部分もあった。

『部隊長っ!』

「おお、ティアナ。無事やったんやなっ! 怪我とかはないっ?」

唐突に入った通信にはやては顔を綻ばせる。管理局内部は混乱に混乱を呼び通信回線は大量の通信でパンク状態だった為、一時的に音信不通状態になっていたので。大事な部下の様子に安堵して、報告される内様に耳を傾ける。

『理由は判りませんがガジェットの動きが全て止まったので、私とスバル、ギンガさんの手が空きそうなのですが……』

「ギンガ、無事やったんっ!」

”ギンガ”の言葉に即座に反応したはやては驚いた様子で、ティアナからもたらされた吉報に喜びを隠せない。スバルとギンガによる戦いへと発展していたのは知っていたが、戦闘が忙しく経過を知る事が出来ず仕舞いだったのだから。ティアナからの報告によると、どうやら戦闘に発展してからいくら経たずに洗脳から解放され自我を取り戻したとの事。戦力が足りない為にそのまま戦線復帰、今に至るという訳だ。

「お疲れのところ悪いんやけど、三人でゆりかごの中に入ってこの子を探してもらえんかな?」

その言葉と共に、助け出すべき三人の画像データをティアナに送り、そのデータを見たティアナは顔が引き締まる。

『了解しましたっ!』

本来ならばティアナの直属の上司であるのはが下命する事が筋であるが、その人物は今はいりかごからの脱出中で手を取れない。

なのはへと通信を繋げなかったティアナの機転に感謝しながらはやては部下に命令を下し、そうしてなのはが先程子供から転送された地図のデータをティアナへと渡して”頼んだで”と短く伝えアースラの管制室へと急ぐはやての表情は硬かった。なにせ聖王のゆりかごは巨大で、何処かに墜落してしまえば甚大な被害を被ってしまう事は目に見えて明らかだった。出来る事ならば塵芥にして消滅させてしまいたい所では有るが、どだい無理な話である。

なのは、フェイト、はやて三人によるトリプルブレイカーを以ってしても無理であろう。ゆりかごの破壊だけが目的ならばそれで構わないが、如何せんデカすぎるのだ。アレは。破壊して瓦礫が街に散らばる事だけは避けたい。落下地点も大体の予想しか出来ず、その区域の民間人の避難が遅れているとの報告も受けている。管理局の動きの遅さを嘆きながら、それでもやらなければならないと決意をしてアースラの管制室に辿り着いた。

「みんな、ごめん。またせたな」

本来ならばはやてはこの管制室に腰を据えているべき人間である。部隊の最高指揮官が前線で戦うなどと笑えない冗談であるのだが、如何せん管理局の人材不足が招いてしまった結果と、優秀な高位ランクの魔導師という肩書がそれを許してくれない。

指揮官の帰還に顔を綻ばせるロングアーチメンバー。はやての顔を確認し怪我がない事にもう一度安堵して、気持ちを切り替えた。事件はまだ終わっておらずミッドチルダの危機は去っていないのだから。聖王のゆりかごが人口密度の高い場所に墜落すれば、被害がとんでもない事になってしまうのはココに居るメンバーが全員理解していた。

「さっそくで悪いんやけど、本局のクロノ君に繋いでくれへんかな？」

その言葉の瞬時に回線を開いたオペレーターは優秀で。即座に中央モニターには真剣な表情のクロノ・ハラウンが小難しそうな顔をして口を開いた。

『……言いたい事は分かっている。出港していないすべての次元航

行艦を向かわせよう。今少し持ちこたえてくれ、はやて』

「助かるっ！ クロノ君お願いや!!」

状況判断とそれを即座に実行させられる能力を持つ上司にはやては感謝しながら、沈みゆく聖王のゆりかごを厳しい視線で見つめる。

——墜落したら、ミッドが被る被害……考えどうもないわ。

ふ、と誰にも気づかれないう様に鼻を鳴らして悪態を吐いたはやてはモニターから視線を外して、オペレーターの一人に落下予測をリアルタイムで更新するように頼む。少しのズレが甚大な被害をもたらす可能性があるのだから見過ごすことは出来ない。無理矢理にアースの砲撃でゆりかごの軌道を変える事も多少ならば可能である。即座に対応できるようにと細心の注意を払いながら、出来る事は最早ないので自身に言い聞かせ管制室の指揮官が座る席へと移る。

『部隊長っ！ 例の子供と容疑者の一人を確保しましたっ！ 今、脱出中ですっ！ それと子供から”コレ”を預かりました。部隊長に渡してくれとの事だそうですね……』

中央モニターに突然割り込んだ通信には、風切り音を混じらせながら映るティアナの姿と共にバイクのタンDEMシートにちよこんと座り眠っている件の子供が。その横にはスバルがナンバーズの四番であるクアットロを米俵のように担いでギンガが厳しい視線で担がれているクアットロを見つめていた。

ナンバーズの扱いが雑だな、とはやては心に抱きつつも口にはせずゆりかご墜落にはまだ時間に余裕がある事を伝え、無茶をしないで脱出するようにと通達。彼女らと同じころなのはとヴィヴィオが脱出したという報告を受けて、これで聖王のゆりかごに残っている人間は居ないと一息吐き次の準備に取り掛かる。もちろん、次元航行隊一斉射撃による聖王のゆりかご粉微塵計画の事だ。一瞬遅れていた思考を元に戻して、ティアナからの報告で受け取ったデータを確かめる。

「ウソ……やろ……っ！」

確かめたデータの内容に驚いて椅子から立ち上がるはやてだったが、直ぐに力が抜けもう一度椅子へと座る羽目となる。はやてが驚くのは仕方ない、スカリエッティ一味によって奪われてしまったアイン

ヘリアルルのコントロール権限だったのだから。しかもアインヘリアルルの射撃権限は本来ならばもつと上の高官に付与されていたものである。本来、佐官程度の権限で請け負えるものではないのだが、はやての決断は早かった。

その理由は次元航行隊を待たなくても、ゆりかごを粉微塵に出来る事。そして仮に失敗してしまったとしても後詰である次元航行隊の一斉射撃でカバーは可能。棚から牡丹餅というか、なんとというか。得体の知れない子供の存在に少しばかりの恐怖を覚えながらも今はそんな事を気にしている暇はないのだ。選択肢は多いに越したことはないし、いまのゆりかごの位置ならば最小限に被害を収められるだろうから。

——これでミッドチルダを救えるっ!!

ギョツと強く拳を握り込んでアースラメンバーに二基のアインヘリアルルによるゆりかご一斉射撃計画を皆に伝えた。その後の展開は早かった。次元航行隊が到着する前にゆりかごははやての計画通りにアインヘリアルルによつて粉微塵にされ、姿なく消し飛んでいく。

これは管理局が後から調べて判った事なのだが、本来のアインヘリアルルの出力よりも三割増しになっていたのは件の子供がこつそりと手を加えていた為だった。強化しなくとも十分な威力のあるアインヘリアルルを更に強化した理由をとあるロリコン執務官が聞いた所『大艦巨砲主義って浪漫ですよね』と要領の得られない年頃の女の子には理解出来ない回答だった為に、真実は闇の中へと葬られた。某砲撃馬鹿が子供に聞いていればもしかすれば理解を得られたかもしれないが、そうなる未来は訪れず。……彼女らの名誉の為に名前は伏せておく事としよう。

第二話：機動六課隊長陣視点

執務官に与えられた執務室にて事件の全容を纏めているフェイト・T・ハラオウンの手が止まる事はない。次元世界を股に掛けて罪を犯し続けていたジェル・スカリエツィは自らの手でとらえる事が出来たのだから。聴取には黙秘しているので事件の全容が明らかになるには時間が掛かるだろうが、今後一切彼の手による犯罪は起こらず不幸になる人が居なくなるのならば、今の忙しさも許容できるとフェイトは考える。

まだまだすべき事は山のようにあるし、問題も残っているのだがその内にどうにかなるだろうと疲れすぎている為に思考を放棄させた。だがしかし、彼女は誰が見ても働きすぎであろう。一夜目の徹夜で星空を見上げた事は覚えているのだが、二夜目はどうしていたのか記憶がない。そうして三夜目を今夜迎える事になりそうなのだが流石に限界だと悟り、今夜はきちんと睡眠を取ろうと決意した時だった。

『フェイトちゃん忙しい所悪いなあ、そろそろ例の子供が目覚ますみたいなんけど、手は空きそうなん?』

「本当?!? 大丈夫だよ、今そっちに行くね」

突然入った通信だったが、何時もの事だった。”お願いやー”と独特の訛りが入ったミッドチルダ語を使いこなす長年の友人の八神はやてに苦笑しながら、通信を受けた人物の下へと急ぐ。長年の付き合いで気は知れたものだから、会話もあまりないままフェイトが所持をしている黒のスポーツカーへと二人は早々に乗り込んで件の子供が収容された病院へと赴くのがだった。

「あ、そうそうフェイトちゃん」

「どうしたのはやて?」

「助けた子な、女の子で確定やからな?」

「へ?」

「いや、間違えてもうたら可哀そうやからな。一応や」

「う、うん」

”にしし”といたずら気に笑うはやてと状況が余り理解できてい

ないフェイト。フェイトは車を運転している為よそ見が出来ないのではやての表情を知る事は出来ないが、こうして子供の前で男の子かと問うてしまうフェイトの未来は潰えたのだった。

病院に到着するなり受付で二人は別室へと通され、子供の様態について医師から説明を受けた。取り敢えず、デイバインバスターを受け肉体的影響はない事。ジェイルスカリエツテイの完全なクローン体である事。尋常では無い情報を脳髓に直接流し込まれた痕跡がある事、リンカーコアの性能を極限まで高められている事、身体能力も同年代の子供たちより遥かに優れている事。

聞いているだけで二人の怒りが込み上げてくるものだった。

——あんな小さい子供に非道な事を。

そう思ってしまうのが普通の人間としての感性であり思考でもある。ジェイル・スカリエツテイに言わせれば己の欲望のまま子供を優秀な人間に仕立て上げる為に、最善を尽くしただけなのだからその言葉を理解する事は永遠に出来ない。価値観など人それぞれで、寄るべき思想により立ち位置は変化し個人を作り上げる。生きている人間のほとんどが善性を持って生まれるが、時折悪性を持って生まれそれを行う事になんの躊躇いの無い人間が居る。悪性を所持しているようにも理性で押さえる事が可能なのだが、ジェイルはそうならなかった。生きてきた環境の所為なのか、彼自身が生まれ持っていたモノなのかは誰も知る事が出来ないが。

「では、こちらへ。……拘束して魔法を使用出来ない状況にはありますが、危険である事には変わりはないので十分にお気を付け下さい」

『子供と言えど犯罪者、何を仕出かすか判りませんので』と続けた医師の言葉は小さな子どもに向ける台詞ではない。だが、リンカーコアを所持していない人間にとって魔法から身を守る術はないのだから警戒は仕方ない事と考えて、医師の言葉に反論はせず二人は子供が収容されている病室を目指す。子供が収容されている隣室では完全監視体制で男性の管理局員二人がモニターを見ながら控えていた。その彼等に所属と名前、訪れた理由を告げてフェイトとはやては部屋へ

と向かう。

子供は既に目を覚まして起きているが拘束されている為に身動きが取れず、きよろきよろと部屋を眺めているだけだった。監視カメラの向こう側である病室では子供の使い魔であるロゼが姿を現していたのだが、誰も気づく事は出来ず。ロゼは監視されている事を勘付いていた為に、自身の存在を子供以外に知られぬように認識阻害魔法を使用していた。ただただ主人の傍に居たいが為の手段であった。そうして人が来る気配を感じ取った使い魔は、主人の影の中へと隠れてその存在を完全に消し去ったのだった。

「あ……」

「目え覚めたんやなあ」

子供が怯えてしまわない様にと、なるべく明るく努めて病室へと入るフェイトとはやて。その姿を見て子供が起き上がろうとするが、拘束具が邪魔をして起きる事が出来ず無理矢理に体勢を崩して起きようとするものだから二人が慌てて制止する。

「無茶をしないで。起きたばかりなんだし、身体にどんな影響があるかわからないから……」

「せや。疲れてるなら、まだ寝ててええんやから」

フェイトとはやての言葉に首を振る子供は、無表情ではあるが何かを訴えかける様だった。その姿になにか感じるものがあり、執務官と捜査官の権限を用いて子供の拘束を解く事にした。医師や警備を請け負っている局員からは反対されたが、無理矢理はやてが彼等を口八丁手八丁で丸め込んだ。そのやり取りに子供が見かねて止めに入るのだが、その言葉も捻じ伏せたのだった。拘束具から解放され身体が動く事を確認する子供を見つめながら、話すべき事を二人は考える。子供はどんな経緯でスカリエツティの下に居たのかは謎のままであるし、下手をすれば子供がこの場で暴れ始める可能性もあるのだが、その心配は杞憂に終わる。

「兎にも角にも自己紹介からやな。一回会うとるから覚えて貰えてたら嬉しいんやけど、わたしは八神はやて言います。管理局とある部隊の指揮を執ってるんやけど……難しい話は止めとこか」

にっこりと笑って以前にも一度挨拶を交わしたのにも関わらず丁寧にもう一度自己紹介を始めたのははやての気遣いと優しさだろう。子供が覚えていない可能性も考えての事だが、説明会以降時間が経っていたし、目の前の子供にとって色々な事が起こり過ぎていた可能性もあるから。

「ちゃんとおぼえています。あのときは おさそいありがとうございます
いました」

少し舌足らずではあるもののベッドに座ったままお辞儀をして、はやての自己紹介に確りと返事を返した。その様子にはやては記憶の改竄等をスカリエツティから受けている可能性を低いと考え、視線をフエイトへと移して次を促す。

「フエイト・T・ハラオウンです。私もはやてと一緒に管理局に勤めています。それと君の弁護を預かる事になったので、これから何度も会うと思います。よろしくね」

子供らしからぬ確りとした物言い、フエイトにも頭を下げる子供。

「それで、君の本当の名前を教えてくださいませんか？ 私が君から貰った名刺は偽造なんよね、だから本当の名前を教えてくださいんやけど……」

「……せろ」

目の前の子供が賢く聡いというのは理解しており、スカリエツティの下に居た事から素直に答えてくれるのだろうかと疑問だったのだが、あっさりと質問に答えてくれた。名前だけを答えてファミリネームを彼女の口から聞く事はなかったが。

確か取り調べを受けて素直に自供を始めているメンバーも自身の名前を語っただけでファミリネームはない様だった。その事実二人は目を細めながら、スカリエツティの下で余り良い境遇でない環境で育ってきたのだろうと勘違いをするのだが、このまま重い空気のままではいけないと首を振り次の話題へと切り替える。

「まずはお礼からやな。ゼスト・グランガイツからのデータやなのはちゃんにも渡したデータ、そして私が貰ったアインヘリアルの遠隔

操作権限、これで助かった人が居る……だから、ありがとうな」

最初に口火を切ったのははやてだった。この二日間でミッドチルダの被害状況の報告を受けていたはやてだが、状況の回復は想定していたものよりも早く、既に復興への準備が進み早い所では工事や修繕、避難民の帰還等が始まっているのだから。

もしもアインヘリアルが破壊されて使えない状況だったのなら、と仮定してみたが今の現状よりも悲惨な事になっていたのは確実にあったし、次元航行隊も理由を付けて来れない可能性もあったのだ。考えただけでも冷や汗ものなのだがその事を表へと出さなまま子供に感謝を伝えるのだが、渋い顔をしながらゼロはこう言った。

「おれはいりません。……ちちのしでかしたことをかんがえればわたしのことなんて とるにたらないことです」

ゼロの言葉は既に善悪の判断が出来スカリエツティに加担していた事を認めた証拠であったが、こんな小さな子供がそんな台詞を言ってしまう事に悲しさを覚える二人だが起きてしまった事は仕方ない。はやては子供に過保護なフェイトの顔を横目で確かめるのだが、取り乱す様子はないようでほっと一息吐く。が、内心ではフェイトはどう考えているのか。また保護責任者などに名乗り出てしまわないかと心配しているのだが、それはまだ先の話であろうから今は置いておく。

「そう、なのかもしれへんな。けどな、きみの取った行動が誰かを救ったつちゆうのは事実なんや。それにわたしらの力だけじゃどうにもならへん事もあったんやから」

「そうだね。色々調べて後から判ったんだけど、君は”聖王のゆりかご”の自動防衛モードも防いでた。それにアジトで実験台になってポッドに入っていた人たちの事も君の手が入っていたのは調べてわかってるんだ。それに他の事も」

二人の言葉に『ありがとうございます』と小さく頭を下げるゼロなのだが、その姿が痛々しくて仕方ない二人。

「あのね、気になる事があって。聞いていいかな？」

そうしてもう一つスカリエツティの事を”父”と読んだ事に驚い

て、血の繋がりがあるのかと一瞬二人は錯覚してしまうが、医師の言葉信じるとなればゼロは100%スカリエッツィのクローンなのだから続柄が”父”というのはあり得ない。フェイトは先ほどから気になっていた事なので、コクリと頷くゼロに聞いてみる事にした。

「スカリエッツィはゼロのお父さんなのかな？」

『フェイトちゃん小さい子供にめっちゃストレートになんてこと聞いてんのー!!!』と心の中ではやてが冷や汗をかきながら絶叫するのだが、口に出してしまった言葉を呑み込めるはずはなく。もちろんフェイトは自分が執務官として経験を積み、その言葉をゼロに尋ねても平気だろうと勘を利かせての事なのだが。それにゼロ本人もさして気にしていない内容なのだが、それを知らないはやては顔には出さず慌てふためく。

「ちち、といえはごへいがあります。わたしは じえいる・すかりえつていのクローンです。なのでせいかくにはちがいますが、べんぎじょうそういったほうがわかりやすいので……」

「そっか。ごめんね、変な事を聞いて」

「……いえ。あの、わたしもききたいことがあるのですが……いいですか？」

「ん？ 答えられる事が可能なら言えるんやけど、それで構へんかな？」

はやての言葉にこくりとゼロは頷いて、聞きたい事を尋ねてきた。それはスカリエッツィを始めナンバーズの全員がどうなったのかと、ゼスト・グランガイツ、ルーテシア・アルピーノ、レジアス・ゲイズの処遇についてだった。本来ならば容疑の掛かっているゼロに言えない事なのだが、捜査には協力的でありスカリエッツィの事を”父”と呼ぶゼロが心配しても仕方ない事だと考えて伝えられる範囲の事は伝えた。それは管理局員ならば誰しも知っている事で当たり障りのない事だったのだが、ゼロは安堵した様子を見せあまり表情の変化を見せない顔が少しだけではあるが綻んでおり、二人は話して良かったと安堵する。スカリエッツィやナンバーズとは三年間一緒に生活していた事を聞いた二人だったので、ゼロがスカリエッツィやナン

バーズの心配をしている事はまだ理解できるが、何故関係の薄い彼等の事を聞いたのか。

その答えは”関わってしまったから”と至極単純なもので、目の前の子供にはあまり表情というものがないのだがちゃんと人並みの優しさを持ち合わせているのだと気づかされた。

病み上がりである小さな子どもに長時間聴取を行う事は憚られた。その為に今日は必要最低限の応答で済ませるつもりだったのだが、ゼロが確りとした受け応えをした事により想定よりも進んでいた。

地上本部に配備されたSUCUIAの事、アインヘリアル強奪事件の指揮はゼロが執った事。ガジェットドローンについてやアジトの概要。しかしながらゼロはスカリエツティの目的は知らず、ただ一緒に三年間暮らした共に彼の研究や開発を一緒に行っていたという情報しか得られなかった。その事を責める積りはない二人なのだが、スカリエツティによる犯行声明の時に一緒に映っていた子供だから重要な事を知っているかもしれないという期待は外れ、結局スカリエツティの目的は分からず仕舞いになってしまった。

「ああ、そうだ。最後になるんだけれど……この人が何処に行ったとか、行きそうな場所を知らないかなあ？」

空中にパネルを表示させて映像を出すフェイト。その人物は誰であらうゼロの使い魔であるロゼだった。ナンバーズによるレジラス・ゲイズ襲撃を阻止し、高町なのはのデイバインバスターを防ぎきった事。そして、アインヘリアル強奪事件にも関わった人物として重要参考人扱いになっていた。ゼロがティアナ達によって確保された後より行方知れずで、六課や管理局、はたまた聖王教会までの力を借りて血眼になって行方を追っているのだが、手掛かりは一向に掴めそうもない。実はゼロが六課の手によって確保された際にゼロの影に隠れただけであり、ロゼが主人の傍から離れるという選択肢は存在しないのだが彼女が”使い魔”という事を知らない人間にとっては、逃走を図ったと思われても仕方ない。

「ろゼさん。ろゼさん、でてきてください」

使い魔の主であるゼロもゼロで適当だったので仕方ない。ティア

ナ達によつて確保された際にその辺りの説明をきれいさっぱり忘れていたのだから。ティアナ達も崩壊するゆりかごから”はやく脱出しなければ”と急いでおり、目の前で主人の影の中へと消えたロゼを見て驚きを隠せないまま取り敢えず脱出する事を優先したのだった。はやてにアインヘリアルとの遠隔操作権限を渡した後には、ゼロの意識が落ちてしまい今に至つてしまったという訳で。『もしかしてやつちやいました?』と心の中で冷や汗を掻くのだがゼロなのだが、今まで気を失つていたのだからこの騒ぎを収める術はない。

「お呼びでしょうか、マスター」

突然三人の前へと現れた画像の女性。

「は?」

「うえつ?」

素つ頓狂な声を上げて二人は目を見開く。驚きで声がまともに出せずロゼの姿を見て指を指すだけで、動けない。この状況をどうしたものかとゼロは考えるが、主導権は二人が握っているのだからと思考が再び動き始めるまで静観を決め込む。もちろんロゼも主人が何も言わないのだから、発言などする事はなく幾ばくかの時間が過ぎる。

「え……えつと。なんで貴女がここに居るのっ!」

「せ、せやつ! 逃げとつたはずやろっ!」

「……………」

無表情のまま二人の問いかけに答ええないロゼ。

「ろぜさん。おふたりにてきいはありません。しつもんにごたえてもらつてもいいですか?」

「……分かりました。……………私がこの場に居るのはマスターの傍に居る為で、それが私の全てだからです。なので元から逃げてなどいません」

片眉だけを器用にぴくりと動かして主人の言葉に不承不承ながらも返事をしその通りにする。先程までゼロが拘束されていたという事実に不快感を抱き不機嫌極まりないのだが、事前にゼロから”何もしないでください”と言い含められていた為影の中で大人しくゆりかご脱出以降主人の言葉を守りながら、ずっと新たな言葉を待つて

いた。ゼロが意識を取り戻し、少しの間だけではあるが姿を現して主人の無事を喜んでいたのだがそれもつかの間、二人が訪れ邪魔をされたのだからロゼは二人に余り良い印象を持っていない。

「マスターって、ゼロの事でいいんだよね？」

「はい」

「マスターって言うたけど、どういう関係なん？」

「主人と使い魔。これ以上の表現はありませんが」

ロゼには使い魔の特徴と言っても過言ではない、耳や尻尾が存在していない。なので二人の疑問はミッドチルダや次元世界に住む人間が普通に抱いてしまう疑問なのだが、当の本人たちはその理由に気付かない。

「……ほんとうに使い魔なん？」

「はい」

「でも、尻尾や耳の特徴がないけれど……」

「くどい」

ぴしやりと言い放ち、これ以上の質問は無駄であると言いたげだった。その言葉に二人はゼロに顔を向けて助けを求める。

「ろぜさん。もとのすがたにもどってもいいですか？」

一瞬ロゼは目を細めてゼロを見、何か言いたげではあったものの主人の言葉はロゼにとつて絶対で逆らえないものである。ゼロからすれば『嫌な物は嫌と言えば良い』と言うだろうし以前にロゼの忠誠心の高さ危惧して『私の全ての言葉を受け入れないで良い』と伝えていたのだが、そのつもりは全くロゼにはなかった。

——ぷるん。

金髪碧眼のスレンダーな女性から刹那にして黒い液体へと変化し、一呼吸だけ置いて粘性を帯び丸い塊へと変貌したロゼ。ロゼの元の姿を見てもらった方が早いだろうと考えたゼロの思惑はもちろん失敗していた。

「……………っ！」

「な、なんやこれええええええええええ!!」

驚く二人であつたが、モニター越しにこの部屋でのやり取りを見て

いた隣の部屋で待機している局員と医師も同時に腰を抜かしていた。

なにせ、常識を通り越している出来事に脳の処理が追いつく筈はなく、脳を回転させようとしてもエラーを起こして空回りするのだから、情報の処理が進まない。”生命体”なのだから契約できるはずなのにそんなに驚く事なのだろうかと思議に思いつつ二人の様子に困り果てて、どう説明したものかと考えあぐねているゼロであるが。

こちらの世界の常識については不得手であり、スカリエッティのアジトで過ごした時間もこちらの世界の常識レールを学ぶこともなく育ったのだからどうしようもない。面倒極まりないが事の成り立ちを最初から説明した方が賢明なのだろうと、つたない言葉でロゼと契約に至った経緯を二人に話す。もちろん、ヴィヴィオが居なくなってしまう寂しかったなどは決して口にはしないのだが。

「……そ、そんな事あるんやなあ」

「うん。驚いたよ」

少しばかり遠い目をする二人と驚かせて済みませんと謝る少女。そしてスライム状態のままのロゼ。なんともまあ、混沌とした絵面だった。そうして暫くして話は一段落して、ゼロとロゼの今後についての説明をしてフェイトとはやては部屋を出る。スカリエッティのクローンという事で一体どんな子供なのだろうかと不安はあったが、話してみる限りゼロはキチンと物事の善悪を判断出来、そして自分が犯した罪を理解して甘んじて罰を受けると言っていた。あとは裁判の結果次第であろうが、これならば獄中生活などはせずに厚生施設で再教育を受け短い期間で出所する事が望めるだろう。ただ彼女に向くであろう疑惑の解明をしなければならぬのだが、それは裁判の弁護次第となる。

——大丈夫。

”ジェイル・スカリエッティのクローン”という事が一番の焦点になるだろうとフェイトは考える。しかしいくらクローンと言えど考え方や理想、生き方まで同じだとは限らない。その証拠に彼女は既にジェイルとは違い自分の罪を認めて反省をしている。まだ三歳という子供。そんな子供に一生牢獄で過ごすようなことはさせたくない

し、させないと誓い病院を後にした。

◇

ゼロの法廷での様子は大人顔負けの確りとしたもので舌足らずではあるものの自分の犯した罪を全て伝え、受けるべき罰は甘んじて受けると言い放った。健気な態度の様ではあるがゼロ自身は『ヤツちやつたものは仕方ないよね』という軽い気持ちだったのだが、ゼロの心の内を知らないフェイトはそれはもう頑張った。幼い子供を塀の中に入れる訳にはいかないと奮起して、半年間の更生施設送りと出所後の一定期間管理局での奉仕との沙汰が下った。裁判長の言葉の後に長い溜息を吐いたフェイトは間違いなく優秀な執務官だ。

裁判中に拘留されていた留置所でのゼロの態度は大人しいモノで、拘置所から厚生施設への申し送りの書類にも注意すべき事等は一切書かれていなかったのだが、ココで一悶着があった。

——この子供、ヤベエっ!!

涙ながらに叫んだのは、この施設に勤務する男性刑務官だった。

ゼロは普段の再教育では同時に逮捕され同時に移送されてきたナンバーズと呼ばれる仲間たちと一緒に更生プログラムを受け何ら問題は無いのだが、プライベートの時間となると途端に不味くなる。幼い子供だというのに平気で徹夜をし、何か作業をしているのだ。しかも消灯時間を過ぎても月明かりを頼りに書き続けているのだが、ルールを犯している訳ではないので指導をしたくとも出来ないのが公僕の辛い所。仕方なく注意で済ませるのだが、いう事を聞くような耳を持つているのならばそもそも徹夜などしないのだ。自身の能力に疑問を抱きながら何日か経過すれば分厚い紙の束を渡されて、学会に提出するかどこそこの大学の何々教授に渡してくれと頼まれる。

こんな子供が何故と疑問を抱きつつも、手紙や書類を出すこと自体はこれまたルールには抵触していない。受刑者から頼まれたのならばちゃんと言いつけ通りに出さなければ己が罪を犯す事になってしまう。なので懐疑に思いながら刑務官は自分の仕事をきっちりこなしなした。そうしてその生真面目さから施設職員全員が頭を抱える羽目になってしまったのだった。

ゼロを担当した職員は言う。無表情ながら幼子はその瞳に宿すモノは“狂気”なのかもしれない、と。

更生施設職員の業務規定には受刑者の資産についても管理しなければならぬとある。何故ならば、出所後に無一文だと再犯の可能性が高まる為に施設で軽作業をこなすのだが、その対価がきつちりと支払われる。そのまま受刑者に手渡ししてしまえば使い込んでしまう事が簡単に予想できた為、職員がきつちりと出所までは管理すると定められていたのだから。

ゼロたちは口座を持っていなかった為に新しく専用のものを開設したのだが、ゼロは施設長に直談判をしてもう一つ通帳を手に入れていた。流石に本人の希望とはいえずそれをゼロ本人に渡す事は不可能で、こうして担当の刑務官が管理する事になっていたのだが、たまたま目に通ってしまった通帳に驚愕した。

「うそ……だろ……」

一度の口座振り込みに自身の年収近い額が振り込まれているのだから、驚くのは仕方ない。そしてそれがいくつもある。何故あんな子供がと疑問に思うのだが、振込相手の名義を見て更に目を見開いた。

「なん……だと……」

いくつもの大学の名前と学会の名前。他にも病院の名前まである。よくよく思い返してみれば、ゼロが紙の束を渡した時に口にかけていた大学の名前や学会の名前が一致する。

「どうしたの？」

「いや……これ……」

「なによ……これ……」

隣に座って事務作業をこなしていた女性同僚がひよいと男が作業していた画面を覗き込んで驚愕する。そこには受刑者の名前に巨額の振込の文字がディスプレイ上に映されており、彼女もまた自身の給料と比べてしまい頭が真っ白になってしまう。

——幼女に……負けた……。

と。ゼロがジェイル・スカリエツテイのクローンである事は厚生施設的全職員が周知しているのだが、まだ子供である事や普段の大人し

さからゼロが持つ破格の才能に想像もつかなかったのだろう。この噂は瞬く間に職員たちに広がり” 幼女に負けた” と仕事のモチベーションを下げてしまった。

事実を鑑みた施設長は管理局に『こんな問題児は手に負えん』と匙を投げた抗議文を送り、それを受けた時空管理局の本局は面倒事は地上本部に任せようと地上本部に連絡を入れ。地上本部も地上本部でいまミッドチルダの復興で忙しいからと、逮捕した機動六課に任せようと見事な連携のたらい回しとなった。こうして当初の予定よりも幾日か早く出所したゼロを半ばヤケクソではやてが迎えに来たのだった。

第三話：機動六課隊長陣視点

時間はゼロが厚生施設から出所する三か月前に遡る。

「面会人だ。……案内する、ついてこい」

宛がわれた部屋にて机に向かい紙に文字を書き込んでいたゼロの手が扉越しに聞こえてきた刑務官の声でぴたりと止まる。ミッドチルダに知り合いなんて居ないに等しいし、仮に居たとしても皆堀の中。面会人の言葉にいったい誰なのだろうとこの三年間で出会った人たちの顔を浮かべてみるが、接点のある人などは極少数で一体誰なのだと思いが考えていてももちが明かないので素直に刑務官に誰が訪ねて来たのかを問う。刑務官の口から紡がれた名前はフェイト・T・ハラオウン。自身の弁護を担当した知り合いでもある。しかし自身の裁判は全て終わり沙汰も下っているのだから、ゼロに面会を求めた理由が謎のまま。

ただでさえ忙しい管理局員という身でありながら、フェイトは更に執務官という肩書を持っている。自分の様な人間に構っている暇などない筈だけれど、と思いつつも面会を拒否するという選択肢は存在しなかった。仮にもゼロの刑期を半年間という驚異の短期間をもぎ取ってくれた張本人なのだから。

刑務官に案内されて通された部屋は、長机にガス圧式の椅子がいくつも並んでいる、割と広い会議室のような場所。その一角に件の人物は座って待っていた。

「久しぶりだね」

「おひさしぶりです。ふえいとさん」

ドアが開きゼロの姿を確認するなりフェイトは椅子から立ち上がり、瞬間移動でもしたのかと言わんばかりの速さでゼロの下へと駆け寄りしやがみ込む。ゼロを案内した刑務官はフェイトの姿が一瞬消えたときと驚き、ゼロはフェイトの姿をどうにか目で追いついた自分下へと異常な速さで魔法も使わず辿り着いた事だけは理解出来た。

「うん、本当に。元気にしてたかな？ 無理とかしてない？ 不便な事とかあるのかな？ 欲しいモノとかはある？」

と、怒涛の勢いで捲し立てるフェイトの勢いに押されて、彼女の問いに答える暇がないゼロ。もちろんこれはゼロだけに向けられる言葉ではなく、保護した小さな子どもには必ずこのように過剰気味な心配心を発揮するフェイトなのだがその事を知らないゼロは”この人パネエ”と心の中でドン引きするのだった。

「げんきですし、むりもしていません。ふべんなこともとくだんありませんし、ほしいものもとくには……あの、きようはどんなごようけんで？」

フェイトの質問に答えて、取り敢えず疑問であった面会に至った理由をフェイトに求めた。そのゼロの言葉にフェイトは苦笑してもう少し世間話でもと言うが、ゼロに忙しいのでしようと言われては本題に入るしかないフェイトだった。それでも本題に入る前には手土産で持参していたショートケーキを先に別の刑務官にでも渡していたのか、絶妙なタイミングで皿に盛りつけられたケーキと珈琲、オレンジジュースがお盆の上に乗せられてやってきた。

やはりフェイトは子供に甘すぎるとゼロは眉間にしわを寄せるのだが、三か月間の更正施設生活では得られなかった”甘いモノ”の誘惑には勝てなかったらしい。目を輝かせてじつとケーキを見つめるゼロを、どんなに賢くて落ち着いた物腰の子供でもやはり子供は子供なんだなと思いつつながら、その事は口に出さないフェイト。

「食べながら、話そうか」

そう言っつてフェイトが先にケーキを口にするのを見て、ようやくゼロもケーキへ手を出した。小さく切り分けて一口サイズにしたケーキを口にしたゼロの顔は微かにではあるが、山吹色の目を細めて咀嚼しました口にする。ゼロの様子を見て喜んでいるみたいでケーキを差し入れて良かったと笑い、ようやく本題へと入るのだった。

「えつとね。ちよつとゼロに見てもらいたいものがあった。……捜査に協力してもらいたいただけの良いいかな？」

「しせつのかたにきよかをいただけるのなら、だいじようぶだともいます」

ゼロに否の選択肢はない。スカリエツティは逮捕されフェイト達

と敵対している訳でもなく、仲が悪いわけでもない。わざわざ厚生施設まで足を運びこうしてやって来てくれたのだから。それならば困っているであろう目の前の彼女に協力する事など容易い事なのだが、何をすることも施設から許可を得なければならぬ。不自由だとも思うがこれは仕方の無い事で。フェイトが許可を取り忘れるはずなどないだろうが、念の為の言葉だった。

「これ、なんだけけれど……」

フェイトは一枚のマイクロチップを長机の上に置いた。

「これは……。ちち、のものですか？」

ゼロはこの形のマイクロチップを何度かアジトで目にしていた。これは市販されているものよりも大容量の記憶媒体である。もちろんスカリエッテイ本人が手を加えたもので、そこいらに出回る代物ではない。それを見た瞬間、ゼロはフェイトがこの場へとやってきた理由を理解してしまった。

「……よく……わかったね」

本来ならば、このマイクロチップの出所を語るべきなのだがそれよりも前に気付いてしまったゼロの言葉によってフェイトはその先の台詞を紡ぐことはなかった。爆破され、土砂で埋もれてしまったスカリエッテイの隠れ家をわざわざ掘り起こして見つけたマイクロチップだったのだ。

「はい、なんどかみたことがありますので。ぷろてくとをかいじよすれば いいのでしょうか？」

「っ！……お願いしてもいいのかな？」

「きざいをかりられるのなら、すぐにおわるとおもいます」

流石に施設に拘留されている身なのだからゼロはコンピューターの類はそうそう触れられない。

「施設の人たちには許可はもう貰ってるんだ。あとはゼロの返事次第だったんだけれど……」

その様子だと大丈夫みたいだね、とは言わずモニターとキーボードが空中に現れた。すでに用意は完了しており、マイクロチップをドライブへと差し込んでアクセスすれば、Please enter

a p a s s w o r d”の文字がモニターに現れた。

「局の技術者に解析を頼んだけど、誰もロックを解除できなくて。……それで、もしかすればゼロなら解るかもしれないと思って……」
そんな事を言いながら、身長が足りないために空中に浮かんだキーボードへと手を伸ばしても届かないゼロを微笑ましく思いながらそつと抱きかかえて、フェイトの膝の上にちよこんと乗せた。

「……できるかどうかはわかりませんが、やるだけやってみます」
成長していればフェイトの膝の上に乗ることもなかった故に、このちんまい身体が忌まわしいと心の中で愚痴るゼロ。心の中を知る術がないフェイトは『ゼロって軽いなー』と真面目な話をしているにも関わらず二人はそんな事を考えていた。ゼロが膝の上から落ちてしまわない様にと小さな腹に手を回して『お願いします』と答えたフェイトの言葉と同時にゼロの手が高速で動き始める。曲がりなりにもスカリエツティが作成した物なので、直ぐに終わるとゼロは言っていたものの難しいだろうとフェイトは考えていた。すでに何度か解除キーを試したようだがロックは開かず。

「本当ならゼロに頼るべきじゃないんだろうけど……」

ロックの解除をゼロに頼んでみる、と上層部に話を持っていった時は反対されたが結局誰にも出来なかつた為に上層部は仕方なく首をようやく縦に振つたという経緯もあつたので、フェイトは申し訳ない気持ちで一杯だった。

もしかすれば見なくてもいい物を見ってしまう可能性もあるのだから。スカリエツティが人としての道から外れた事を行つていたのはフェイトは嫌と言うほど知っている。だからこんな小さな子どもに頼むのは筋違いなのだが、頼まなければ前に進めない。苦虫を噛み潰す勢いで、この場にやってきたのだが思ったよりもゼロは何の抵抗もなく依頼を受けてくれた。

「……いえ」

フェイトの言葉を聞いているのか、聞いていないのか。反応が遅れたゼロの言葉に少しばかりの不安を覚えるフェイトだったが、直ぐにそれは払拭された。

「うげ……………」

「……………あ！」

エンターキーをゼロが押した瞬間だった。モニターには“ The lock has been released”と表示され、その数秒後にはビッシリと文字がモニターへと映し出される。

流星にゼロはこの内容を見るべきではない、と考えてフェイトの方へモニターを向けて中身を見ないようにしたと同時に、今だ手元にあるキーボードを神速で叩く。

「すごい！　すごいよ、ゼロっ！」

「い、いえ。……と、とりあえず、ろつくはもうかからないようにしすてむをへんこうしたので、あとはだれでもみられるとおもいます……………」

「本当？　助かるなあ。ゼロって本当にすごいんだね！　大人でも解除できなかったのにつ！」

ゼロの腹に回していた手に力を込めて抱き直し、頬に顔を寄せるフェイト。

自身の真横で物凄く喜んでいるフェイトに対してゼロは内心で冷や汗を掻いていた。何故ならば、先ほど解除したパスワードには大変な問題があったからである。そうして同時に物凄く安堵していた。誰も解除できなくて良かった、と。

——私の娘、次元世界一超可愛い！！！！！！

誰が想像出来ようか。世紀の大犯罪者といわれたジェイル・スカリエツティがこんな阿呆丸出しの文字をキーワードにしていたのだから。以前にスカリエツティがパスワードを解除している所を偶然見てゼロは覚えていた。その時のゼロは、こんな簡単なパスワードだと誰にでも解除出来てしまうから変えろとスカリエツティに忠告をしていたというのに、どうやら変更をしていなかったようである。

冗談半分で解除キーを打ったゼロは『変えてなかったのかスカさんっ！』と心の中で叫びながら、フェイトがキーボードへ打ち込んだ文字を目で追っていない事を切に願いながら、スカリエツティの親馬鹿ぶりに怒りを覚える。先程神速でシステムを改竄しロツクを掛け

なくても良いようにしたゼロは『犯罪者なら最後まで犯罪者らしくしてよスカさん』と心でぼやく。それでも完全には憎めないゼロのその思いは、ゼロ以外の誰にも届かず知られる事はないのだが。

「あ、ゼロも見て平気だよ。きつと専門的な事になるだろうから、私にはちんぷんかんぷんだろうし、ゼロさえよければ意見を貰えるかな？」

解除キーの内容について気付いていない様子のフェイトの言葉に安堵して、モニターへと視線を向けるゼロ。確かにこれは専門分野で素人には分からないものだろうし、スカリエツティが独自に更に手を加えたものだからその辺りに転がっている専門家ですら首を傾げる代物であった。その内容に『やっぱスカさんは凄いや』とゼロは思うのだが、次の瞬間には口元が引き攣り始めていた。

——なんで見つけた物がコレなんだろう……。

と。その内容に画像データが添付されていなかった事を幸運に思いながら、どうしたものかと考える。自身の後ろで喜んでいる女性にどう伝えるべきなのか。彼女の生い立ちを間接的に知っているゼロとしてはマイクロチップに収められていたデータの内容は、彼女の古傷を抉る可能性が高いことを嫌でも解っているのだから。オタクでコミュ障というゼロの人間関係の薄さが頭をより悩ませていた。

「……どうしたの？」

少し考えている様子のゼロを不思議に思い問いかけるフェイト。

「あ、いえ。……いでんしこうがくにくわしいかたならわかるとおもいますが。……ふえいとさんにとつて、きいてもあまりいいものではないかもしれません」

「……私に関係のある事、なのかな？」

「はい。どうしますか？」

山吹色の瞳でまるで射抜くように確りとフェイトの目を見つめる。その目にはきつと、私の事を案じてくれて心配してくれているとフェイトは確信し決意する。

「……大丈夫だよ。もう過去には決着を付けているから」

ゼロがフェイトの過去を知っている筈はないのだが、スカリエツ

テイの研究を手伝っていたと言っていたし、フェイトとスカリエツ
テイのやり取りを見ていたのならアリシア・テスタロッサのクローン
だと知っていてもおかしくはない。遅かれ早かれ内容は知る羽目に
なるのだろうか、どちらにせよゼロがフェイトの事を案じてそう言っ
てくれたのだから逃げる訳にはいかなかった。

「たんてきに言えばありしあ・てすたるっさのいでんしときおくの
でーた。そしてぶれしあ・てすたるっさのいでんしでーたです……」

一拍置いて、何故父がこうして手元にデータとして所持しているか
の理由は解らない、とも。フェイトはゼロの言葉に頭が回らずその言
葉の意味だけを受け取り、なにも口にする事が出来ない。ただただ
『何故』という疑問だけが残り、ジエイル・スカリエツに問質した
所で黙秘を続けている彼から有益な情報など得られるはずはないの
だから。

それでもこの場で出来る事は少なく、ゼロにその内容を確認しても
らう事くらいだった。ゼロがそのデータを見た所でなにも出来ない
し、望んだところでもなにもさせられない。簡単な内容をゼロから聞き
札を述べて、更正施設をフェイトは後にした。

◇

高町なのはは悩んでいた。

聖王のゆりかごの最深部に居たナンバーズの一人を撃ち抜く為
に放ったデイベインバスターは、唐突に抱きかかえられた子供と共に
んの抵抗も出来ないままその威力を受けるはずだった。カートリッ
ジを七発使用し自身の魔力も込めて撃った渾身の一撃だったという
のに、防がれた。撃ち終えた後の土埃が晴れ、ようやく着弾点の様
子が見えるようになってしまったその時、どこからともなく現れていた金髪の
女性によって。ファイリングロックを解除していたが故に物理ダ
メージを受けた者に影響されてしまう為、通常のバスターよりも強化
されていたというのだ。

——嘘。

信じられない光景が広がっていた。これで終わる、と思っていた一
撃が防がれた事実。小さな子供を撃たなくて済んだ安堵と、防がれて

しまった悔しさに。その狭間で思考をぐるぐる回らせても答えなど出せないまま今に至ってしまった。謝らなければならぬ、と打ち終えた後からずつと抱えていた気持ちだったのだが、なのは自身無茶をした事もあり事件の終了後はヴィヴィオと共に病院へと運ばれてしまった。

同時に撃ってしまった子供も病院に運ばれたのだが、運ばれた先は別の病院で。管理局が運営している負傷した犯罪者や病気で刑務所等に居られないものが収容される専門の病院。自分が入院している場所とは遠く離れていた事と、子供もすぐに目が覚めて病院から拘置所に移送されフェイトと共に裁判へと入ってしまった。会いに行こうとしたのだが、管理局上層部からの許可が下りず諦めるしかなかったのだった。

そしてさらになのはに衝撃の事実が突き刺さる。

「ゼロだっ!!」

フェイトが自室に持つて帰った仕事の写真の一枚を、偶然見たヴィヴィオが大きな声を出した。ご飯を終えてそろそろヴィヴィオも眠くなり始める時間帯であったのだが、その写真を見てテンションを最高潮にさせたと同時に『ゼロに会いたい』とぐずり始めたのだから二人して困ってしまった。会いたいとヴィヴィオが言った人物は既に堀の中であり、半年間の更正施設での再教育が決まっていたのだから。どうにかフェイトと二人でヴィヴィオを宥めすかして、ベッドへと送り込むことに成功したのだが大人二人が小さな子どもに頭を抱え、どうしたものかと考えるが良い答えは浮かばず。

ヴィヴィオとはスカリエツテイのアジトで仲良くしていたらしく、取り敢えずは半年たてば会える事ができるのだからヴィヴィオにはその時まで良い子にしようと言ってどうにか納得してもらった。ゼロと呼ばれる子供が出所後にどういう境遇になるのかは判らないが、弁護を請け負ったフェイトが居るのだからその行方を知る事は簡単だ。撃ってしまった事に後悔がないと言えば嘘になる。撃たなければクアットロによつてなのは自身やヴィヴィオが助からなかった可能性もあるのだから。けれどあんな子供を巻き込むつもりなんて

微塵もなかった。

無事でいてくれた事、生きていてくれた事に感謝をしているしヴィオにスターライトブレイカーを撃ち込まずに済んだ事も、気持ち的にも大分救われている。自身の体調もスターライトブレイカーを撃つていけば、もしかすれば未だに入院していたかもしれないし、空を飛べなくなる可能性もあったのだから。あの小さな子供には沢山助けられたのである。

そうしてもう一人、自身の全力を込めたディバインバスターを防いだロゼと呼ばれる使い魔の存在。何故防げたのか疑問だった。そうしてその使い魔もゼロと共に厚生施設へと入所してしまった。機会があれば今一度手合わせしてみたいと血が騒いでしまうのだから、自分でもどうしようもないとなのはは苦笑する。そしてロゼの主人であるゼロは一体どれだけの魔導師としての才覚があるのだろうか。あの年にして破格の原石なのであろう。きちんとした道しるべを作り導けたとしたら、自分よりももっと高みを目指せる存在となるだろう、となのはは心を躍らせる。口角が吊り上るのを我慢しきれず、口元を手で押さえても笑いは止まらない。でもそれは、キチンと子供と和解をしてからの話だ。兎にも角にも……。

——謝らなきや。

ぐずりつかれてベッドで眠るヴィオの顔を見ながらなのはは心に誓った。

そして、魔導師の道をゼロが目指してくれるのならば私が全力でソレをサポートしようとして布団の中で高町なのはは明るい未来を夢見ていた。

◇

機動六課が解散する一ヶ月前、本局から陸の地上本部を経て機動六課に一つの指令が下る。その内容は”問題児を引き取れ”と遠回しに書かれていた指令書だった。何故今頃そんな命令が、とはやては考えてみるのだが本局に更生施設からクレームが付いた事をしらないのだから、正解を導く事もないまま。命令は既に下されて否はないのだから丁度手隙であったシグナムとヴィータを連れて手配した車に

乗り込み仕方なく迎えに行く羽目となった。そうしてタイミングよくゼロと再会した訳なのだが、ソコで一悶着を既に起こしており深い溜息を吐くのだが、はやてにとつてその光景は心に抱えている傷のかさぶたを剥がされるような気持ちにならざるを得なかった。

小さな子供を責める大人たち。仕方ない事だとは思うが、どうしようもないどす黒い人間の心の闇は幼い子供に容赦などないまま平気で向けられていた。その言葉にじっと耐え抵抗も釈明も何もしないままの子供は、さながらあの頃の自分を見ている様であった。これ以上は見ていられないと止めに入ろうとした時、騒ぎを聞きつけて厚生施設の職員が止めに入り先を越されてしまう形となった。このタイミングでしゃしゃり出ていく事は出来ず、遠目からゼロと職員の様子を伺いながら善き所で今来た風を装ってゼロを迎えた。

子供にとつての半年という期間はおおきいのだな、と実感するはやて。ゼロの伸びた身長に目を細めて車へと案内し六課の隊舎を目指す。ゼロに対して不安要素は少しばかりあるが、今は気にしても仕方ないし当の本人たちの問題でもある。だから余計な事は口にせず、厚生施設での暮らしぶりやこれから赴く機動六課の事を簡単に説明。それからしばらくして、六課へと辿り着いた。ヴィヴィオによって熱烈なタツクルを受け頭を地面に打つ寸前のゼロであったがどうにか止まり事なきを得た。

ゼロへの案内もほどほどに旧友からの約束事があった為に、合流した面子と共に海側の訓練施設へと一緒に足を向ける。取り敢えずははやての言う事を大人しく聞いてくれるし、反抗する様子もない。更正施設で優良判定を受けている事だけはあるようで、同年代の子供よりも接しやすかった。訓練を終えた部下たちに、ゼロは挨拶を済ませ件の本人が現れた。

「あ……。あの時以来だね」

「いんにちは」

ゼロの姿を見るなり目を細めて笑うなのは。デイバインバスターを受けた後遺症という名のトラウマが発動してしまわないか、ココに居る全員が心配していたのだがゼロはなのはの姿を見て頭を下げて、

なのはの言葉に確りと返事をした。

「あの時は巻き込んでごめんなさい。それと、ヴィヴィオを助けてくれて本当にありがとう」

「いえ。しかたのないことでしたし、ちちやみんながしたことをかながえればとうぜんだとおもいます」

ゼロはなのはがデイバインバスターを撃つ事は知っていたし、ゆりかごの最深部へとクアットロと共に居た時点で覚悟は決めていた。それに使い魔のロゼの手により必殺のバスターの一撃を直接受けた訳でもないで、周囲でなのはとゼロのやり取りをハラハラしながら見ている六課メンバーの心配を余所にトラウマになるほどの精神的ダメージはなかった。

しかし見た目が四歳児であり、なのはの砲撃の威力を知っている者としては心配になってしまふのは仕方ない。それほどまでになのはの砲撃は訓練といえども威力は高いし発動させた防御魔法も貫通させてくる。七発のカートリッジを使用した必殺のデイバインバスターを防いだと報告書で見たり聞いたりした者たちは、驚きを隠せないでいた。この世でなのはの”あの”砲撃を防ぐ人が存在していたのか、と。

防いだとはいえ一緒に巻き込まれてしまっているのだから、恐怖を感じない事はあるまい。なにせ四歳という年齢で、戦闘や訓練に参加した事はないと聞いた。だからこそなのはあの桃色のゴン太ビームにトラウマを抱えていないか心配していたし、なのは本人にも苦手意識を持ってしまわないかと考えていたのだから。幼い身ながら、スリエツティやナンバーズが犯してしまった罪を認めて彼等の罪と自身の罪を謝る健全な姿は、色々な事情を持っている六課メンバーに同情心を煽ってしまったている事をゼロは気付かない。

「けれど、ゼロが助けてくれたのは事実だよ？ 実際ヴィヴィオに向ける筈だった砲撃も止めてくれたし、ね。だから……ありがとう」綺麗に笑って礼を述べるなのは。そしてその顔を直視できないゼロ。変えてしまった出来事に負い目を抱えているゼロはなのはの言葉を素直に受け止める事が出来ない。堂々巡りの押し問答を暫く繰

り返し、なのは結局ゼロの言葉に折れる形になってしまふ。ヴィ
ヴィオを止めたのはなのは自身の力だとゼロは言い切つて、バスター
の話はこれでもう終わりだと言わんばかりにそれ以上は何も言わな
かった。

ゼロの横では人見知りをするヴィヴィオが嬉しそうにしているし、
六課解散までの一ヶ月でこの規格外の幼児にどんな事が起こるのか、
もしくは起こしてくれるのか。楽しみになつたなのはだった。

第四話：六課での一ヶ月間あれこれ。

さてさてつと。機動六課にて一ヶ月間お世話になる事になった私は忙しさに追われております。

なにせ私はスカさんのクローン体って事で管理局や聖王教会から目を付けられている様で、伝説の三提督やリンデイさんクロノさん、さらにはギル・グレアム氏とも面会したり。なんだろうね主人公サイドの関係者で、高い階級を持っている人たちとの面会は気が休まるものじゃなかったし、聖王教会側もカリムさんを始めとして、更に上で雲の上の存在直前の枢機卿みたいな立ち位置の人とも会ってご挨拶する羽目になったし。正直疲れたんだよね。どうにも品定めされているような視線はやっぱり苦手。でも、見返りは十分にあつたと思う。

厚生施設で私が色々とやらかして金銭を得ていた事は彼等に当然筒抜け状態だったらしく、管理局や聖王教会にも技術提供や協力をしてくれるのなら、無償奉仕の期間短縮や捕まってしまったスカさんを始めナンバーズの皆の恩赦も考えてくれるって。

その言葉を額面通りに鵜呑みにする事は出来ないけれど、何も言ってくれないよりも十分に進歩したんじゃないのかな。利用されている気がするけれど、私だってスカさんたちの事で彼等を利用しているのだから文句は言えないもんね。

さつそく交渉の余地ありとみた私は『スカリエツティ基金』について話を持ちかけてみれば、快く引き受けてくれたんだ。引き受けてくれたんだけど、一筋縄でいかないのが面白い世界というか、なんというか。それは管理局と聖王教会どちらがその手綱を取るのか、だった。

私的には被害者の人たちに正しく資金が分配されるなら文句なんてないから、どっちが手綱を握ろうがどうでもいいんだけど。双方の面子やら市民の皆様からの評価を得る為にどっちの組織も私の気を引こうとしているのがバレバレでして。お金に関する喧嘩ほど

人間は地が出ちやうのかお互い一步も引かず。面倒極まりないので管理局と聖王教会どちらにも利益があるように均等に資金を分配して運営資金の使い方はどうぞご自由にして事においておいた。

もちろん間違った使い方をすれば即送金は停止するし、関わる事を止めるとの約束を交わしたから大丈夫かなーって。何分、こういう事は日本ではあまり馴染みがないから私も詳しく解んないんだよね。お金だけ渡して後は人任せにしちやっただけれど、不満はないかな。自分で運営するには大変だろうし公的機関にきっちり管理してもらった方が良さそうしね。発足の準備がちよつとずつ進んでるよ。

他にもレジアスさんとゼストさんの裁判に顔をだして、ゼストさんの証言人として出廷したり。傍聴人の人たちがびっくりしてたんだけれど、悲しいかなその反応にはもう慣れてしまった。早く大人になれないかなーと思いつつ、法廷の外でレジアスさんとゼストさんが言葉少なに会話をしている所を目撃しちやっただよね。雰囲気は全然悪くなかったし、和解出来たら嬉しい限りだしロゼさんに無茶をお願いして地上本部にまで出張ってもらった甲斐があるってもん。

レジアスさんは管理局を辞めちやうらしいんだけど、その影響力は陸に限定すると十分に発言力が残っているから、もしかすればJS事件が切っ掛けで起こった地上本部の混乱は早く収まるかもしれない。

レジアスさんの後任に就いた現中将さんは風の噂だと”ゲイズ派”らしいので。ゼストさんも病気は快方に向かっているみたいで、その後に無償奉仕期間が終われば管理局に再就職できるそうだ。ベル方式のSランク魔導師って貴重な存在だから、教導隊に所属する話も浮上してるってさ。本人は何も言っただけだけど、嬉しそうな顔をしているので本当に良かった。無口で不器用な人だから誰かに言いくるめられたりしないかなって心配してたから。

フェイトさんから聞いた話になるんだけど、スカさんや年長組のナンバーズの皆はまだ黙秘を続けてて裁判は難航中らしい。面会とか差し入れが出来るか聞いてみると、素気無く断られちゃった。面会とかで何か起きたら大事になっちゃうからだからってさ。そんな事

なので裁判が全部終わって落ち着いてからスカさんたちに会いに行こうかなって。きつと退屈で暇だろうしね。厚生施設組の皆とは時々会ってた。

スバルさんやテイアナさん、エリオさんにキャロさんが皆の事を気にかけてくれて『面会に行くから一緒に行く?』って聞いてくれるから、御厚意に甘えて一緒に着いて行って皆とお喋りしたり、差し入れた物を食べたり、遊ばれたり。アジトに居る頃よりも皆は明るい表情をしているから良い傾向だね。出所して生活が安定したら、皆で遠出とか楽しそうだから、皆で遊ぶお金を一杯貯めておかなきゃね。嗚呼、そうだ。六課のフォワードメンバーも一緒だともっと楽しいだろうなあ。更正施設組の皆とは打ち解けてきてるし。うん、気合が入った。頑張ってお金貯めよう。

今日はそんな忙しい日の合間みたいでのんびりと六課で過ごしてた。

日中の時間帯はなのはさんやフェイトさんはお仕事になるのでヴィヴィオさんとヴィヴィオさんの番犬、違った、護衛役のザフィーラさんと一緒に遊んだり、シャーリーさんのラボにお邪魔して要らない部品を貰って機械いじりをしたり。ヴィヴィオさんのお陰で引き籠もりにはならなくて済んでいて、アジトで生活してた頃よりも健康的に過ごしている気がする。すこし文句を言ってもいいのなら、ここでは料理が出来ない事かな。

私にとって料理はストレス解消みたいなものなので、ちよつとだけ不満なんだよね。でも食堂で働く人たちに迷惑を掛ける訳にもいかないで、もう少しの辛抱だ。それに六課の食堂のご飯は美味しいし、スカさんのアジトみたいな環境だったら文句を付けちゃうけれどそれも無いから。

「ゼロ、ちよつといいかな?」

「は?」

なのはさんが珍しく自分の部屋へと仕事に戻ってきてきてヴィヴィオさんと遊んでいた私を呼んだ。何だろうと思つて要件を聞いてみれば私のリンカーコアの数値に興味があるから測定してみたいって

さ。そういえばスカさんの所に居た時は魔法そちのけで研究とか開発ばかりしてたから、私の魔力量がどれだけあるのかなんて知ろうともしなかつたから。

せつかく誘ってもらったし興味もわいてきたのでお願いしますと頭を下げると、にこにこ顔なのはさんが。私の魔力量なんて知っても面白くもなんともないような気がしながら、様子を横で見てたヴィオさんが『私もゼロと一緒に受けるー！』って言い始めて、私の後でリンカーコアの魔力測定を行う事になった。

ひろーい演習場のど真ん中に私は一人取り残されて、空中に浮かんでるモニターにはなのはさんの姿と明るい声が。てつきりシャーリーさんのラボでやるのだと思っていたら海側の演習場まで出張ってた。

しかも皆忙しい筈なのに六課の主要メンバー全員居る。なんで居るのさと心の中で愚痴りながらも別の場所へ行ってくれだなんて言える権利はないから我慢してるんだけど、皆仕事を放って見学なんていいのだろうか。給料泥棒だつて言われても仕方ないと思うんだけど、部隊長であるはやてさんまで居るのだから、多分きつと六課の皆さんは暇なんだろう。

取り敢えず、なのはさんから『魔法を使った事はあるかな？』と聞かれたのでYESと答える。スカさんに延髄打ちを決めた時や倒れたスカさんを搬送する時にも魔法を使ったし、簡単な物なら自分从一开始構築して組み上げた事もある。その事を伝え終えると皆びっくりにしてただけけれど、六課の皆様の方がスゴイと思うんだよね。私は戦闘系の魔法は使えないし、鍛えても無いから身体が持たないだろうし。使えても簡単な魔法だけだし。

一番魔力を消費したのがなのはさんのデイバインバスターを防いだ時なんだけれど、あの時はロゼさんが防御魔法を張ってくれてたんだし、私はロゼさんに魔力を譲渡してただけだったのでノーカウント。なので、マトモに魔法を使った事なんて無いに等しい気がするんだよねえ。

そんな事だったのでちよつと欲が出て訓練の様子を見学してた時

に、なのはさんやフェイトさんの魔法術式をこっそり解析しようとしたら、頭痛が酷くて直ぐに諦めた。

独自に組んで限界まで術者に適応させてあるから、解析が難しすぎて脳に負担が掛かったのが原因かな。本人に直接教えて貰えばいい事だし、無理して隠れて使えるようになっても仕方ないから、今度正直に教えて下さいって伝えよう。

『それじゃあ、始めるよー！ リンカーコアに集中して魔力を集めてねー』

なのはさんの言葉の通りに私はリンカーコアを発動させて、自身の体内に巡っている魔力を活性化させて心臓に近い場所を意識する。

『うん、いい感じだよー。少し余裕がありそうだから、もう少し頑張ってみようかー』

なんだかなのはさんの台詞がイメージビデオの導入部みたいな感じだったから、想像しちやうって吹きそうになった。声は女の人だからいやらしい感じはしないけれど、台詞だけ聴いちやうと、なんだかね。言葉通りにリンカーコアをさらに活性化させて、魔力を放出させる。魔法術式を組んでいないから、体内に内包されていた魔力が外に漏れているだけなので誰かが怪我をする心配もないから気楽で良い。

この世界の魔法は、非殺傷にも設定出来て文字通り死にはしないけれどダメージは残つちやうから、痛いモノは痛いし怪我人なんて出たくないよね。もしもの時の為に演習場に出張ったのだろうけれど、何事もないまま無事に終わりそう。

『もうちよつと上げられるカナー？』

その言葉に返事はせず、さらにリンカーコアの回転を上げてそれを持って返事とした。そろそろ限界みたいで結構しんどくなってきたんだけど、ストップが掛かる様子はない。私の限界値ぎりぎりまでがんばるのかなーと思ってキツイけれど、もう少しだけ頑張つてリンカーコアを更に活性化させた時だった。

『ゼロ、ゼロっ！ もういいよっ!!』

「……………っ！」

なのはさんのその台詞の直後だった。眩暈を起こして身体の力が

抜けて膝から崩れ落ちる。

「マスターっ！ 大丈夫ですか!？」

「ろぜ……さん……」

私の影からしゅばつと出て来てロゼさんが受け止めてくれたから地面にぶつかる事はなかった。寸での所で受け止めてくれたロゼさんにお礼を言つて、どうにか立ち上がる。単純にガス欠状態になっただけだから、気合を入れれば動くことは出来る。ふう、びっくりしたあー。

「ゼロっ！ 大丈夫っ!？」

「だいじょうぶです」

うん、本当に。ロゼさんのお陰で地面に激突は回避されたし、ちよつと自分の限界を見誤っただけで、魔法自体は使っていないからダメージの反動は軽いものだから直ぐに回復できるだろうし。心配そうに私を覗き込むのはさんは、眉をハの字にさせてる。なのはさんが居た場所からここまで結構な距離があつたはずなんだけれど、瞬間移動でもしたのかなあ。うーん。私が悪いからそんなに思いつめないで欲しいんだけど、まあ言いだしっぺだし責任感が強い人だから仕方ないのか。

「だいじょうぶ？ ゼロ」

「無茶しちゃ駄目だよ、ゼロ」

おやおや、心配だったのかフェイトさんに抱っこされてこっちにヴィヴィオさんまでやって来て、ヴィヴィオさんもなのはさんと同じ様に眉をハノ字にさせてる。流石似た者親子（仮）だな、思考が良く似てるみたいだった。フェイトさんもフェイトさんで、お小言じやないけれど、それに近いモノを貰つてしまいました。

『ゼロ、念の為や。シヤマルに診てもらおうなあー』

そんな三人を余所に余裕綽々な感じで遠目から様子を眺めてたはやてさんから通信が入つて、医務室に行けと言われ渋々向かう事になった。歩き始めた途端にロゼさんが後ろから私の両脇に手を通して自然と抱きかかえられてたし。そろそろロゼさんのこの過保護っぷりをどうにかしなきゃねと思ひ始めた今日この頃、忙しいけれど穏

やかな日々が続いてた。

因みに測定結果は”ニアS”と言われて腰を抜かすところでした。でもそうじゃなきゃ、なのはさんのバスターをロゼさんが防いだ理由が説明できなくなっちゃうから、取り敢えず納得しておいたんだ。

結果を教えてもらった時なのはさんとフェイトさんから、魔力量が多いからといって無茶をしない事を約束した。んー無茶を一番してしまいう人たちに言われたくないと微妙な心境になりながら、その言葉自体には頷いておいた。成長してない体で魔力行使しても碌な事にならないもんね。

うーん。管理局に目を付けられそうだなあ。無償奉仕期間があるから陸か本局に顔をださなきゃならなくなるんだし。あれ、これって過労死決定かも。いや、でも、大丈夫なはず。

ブラックだ、ブラックだつて言われている管理局だけれど目の前に居るなのはさんやフェイトさん、はやてさん達は忙しい身だけれど、前世の日本でブラック企業で働く死んだ目をした社会人みたいな感じじゃないからそんな事にはならないはずだ。と言うかそうなりそうになったら、全力で逃げよう、そうしよう。

次元世界の果てまで何処までも、世界旅行でも兼ねて。

そうなれば必死に管理局が追いかけてきそうで怖くなってきた。うん、逃げるのは止めて頭で勝負しよう。規模だけは無駄にデカイし、管理世界内なら影響力が凄いしね、管理局。

——ま、そんな未来はないだろうけれど。

◇

シャーリーさんのラボでレイジングハートさんとバルディッシュさんのメンテナンスをしたので、その様子を見学させてもらった。インテリジェントデバイスの存在自体は知ってたんだけど、ストレージデバイスしか見た事がなくて実物を見るのは初めてだったしデバイスマスターの資格をいつか取りたいって考えていたから、有意義な時間だったよ。六課でお世話になって暫く、シャーリーさんから色々と教わって新しく身についた事が一杯あるし、資格取得のアドバイスを貰ったし良い事尽くめ。

廃棄品だった管理局所属の魔導師さんたちに支給されるストレージデバイスを譲り受けて、中身をバラして修理して設計図を書き起こしてたり。書き起こした図面を見ると本当によく考えられた設計だなーって。六課の隊長陣やフォワードの皆のデバイスは使用者の特性を生かして設計されたものなんだけれど、この官給品は万人が使うもので。そんな事だから用途は多岐に渡るし、使う人も様々。浅く広く、誰にでも適応する機械って感じかな。汎用品で構成されており、なるべく安価に仕上がるように部品も世間一般に普及している物が使用されてて。開発した人たちの執念がうかがえるんだよね。どこまで安価に作成でき、かつどこまで用途を広く使えるように保てるか、を。

私にはない考え方だったし、面白いコンセプトだね。参考にすべき事も沢山あるんだけど、やっぱりあくまで汎用品だから限界がある。なのでちよこちよこーっと最近暇を見つけては弄ってたんだけど、ようやく完成した。能力的にはレイジングハートさんやバルデイツシュさんの足元にも及ばない品だし、弄ったって言ってもそんなに劇的には変わってないはず。ヘタってた部品を取り換えたのと、図面をみて改めるべきところは改めただけだし。

で、完成を記念してデバイスを起動させてみようかってなったんだ。

デバイスマイスター資格を持つてるシャーリーさんに点検をして貰ったから暴走とか爆発する心配はないし、官給品デバイスに登録した魔法も容量が大きくなっちゃって一個しか魔法を使えなくなっちゃったし、魔法自体が攻撃魔法じゃないから平気。

「それじゃあ……」

かけている眼鏡をきらりと反射させてシャーリーさんがいてみよーやってみよーって某国営放送の子供向け番組のMCさんみたいな声を上げた。その声を合図にリンカーコアを起動させて魔力を流し込む。ミッドチルダ式の丸い魔法陣が浮かんで組んだ術式に魔力を込めて発動させたんだけど、取り敢えず発動させるだけであとは様子見だ。

「ね、ねえ。何をしたのかなあー？ コレ……」

顔を引き攣らせながら私に問いかけるシャーリーさん。んー。何をもって言っても、あつたら便利だよねって考えて魔法術式を組んだものだからなあ。まあコレは自分の手足の代わりといえればいいかな。

四歳児だから色々と不便な事が多いんだよね。高い位置に置いてある部品とか本とか調理器具とか取れないから。わざわざ誰かを呼んでまで取ってもらうのは気が引ける。それならスカさんを簀巻きにしていた魔法をもう少し細かい事が出来るように術式を組み直して、再構築させて出来る事の幅を広げただよね。そうしたらこうなっちやった……。

——部屋一面に埋まる触手の群れ。

いやあ。ちよつと欲張り過ぎたのかな、とこの光景をみて少しばかり反省する。によるーんとかうによるーんとかの擬音が似合いそうなお、不可思議な動きで揺れているだけの魔力の糸が千本近くあるんだもんねえ。何も知らない人が見ればそりやびつくりするか。イメージしたものはフィンランドの人が書いたカバの妖精で出てくるうによるよというかによるよしてるアレなんだけれど、魔法構築が甘かったのか思ってたよりもまったく可愛くない。

自分の想像力の無さにげんりしながら、見てくれを良くするにはどうすれば良いだろうと考えているその時だった。多分メンテナンスに出したデバイスの様子を見に来たのか、エアーが抜ける音と共に扉が開いてなのはさんとフェイトさん、二人の姿が。後ろには何故かはやてさんとヴィヴィオさんも一緒に来てて、部屋の惨状を見るなり目を丸くしてフリーズして、ピタリと進んでいた足が止まる。数秒後によるよやく思考が動き始めたみたいで。

「な、な、な………っ！」

なのはさん、語彙力喪失。

「……き、気持ち悪い」

フェイトさんは、青い顔をしながらこの光景にドン引き。

「な、なんやのっ、コレッ！ 気持ち悪うっ！！ 一体なにしたんや、シャーリー!!」

はやてさんは、部隊長という立場の責任からか気持ち悪いのを我慢して何が起こったのかシャーリーさんに説明を求め。

「きもちわるーい！」

気持ち悪い、と言いながら楽しそうにヴィヴィオさんは触手の群れと戯れ始めているし。反応は人それぞれ。

「ち、違いますよっ！ はやてさんっ！ 私じゃありませんっ！

ゼロの魔法ですっ!!」

ヴィヴィオさんが触手と戯れてくれているので、飽きない様にとほっぺを突つついてみたり、くるくると触手で確りと巻き上げてタカイタカイを試してみたり。他にも出来る事はあるので、ちよつとヴィヴィオさんを借りて実験してみよう。

「なんや、原因はゼロかいな……」

え、なんでソコで納得して呆れた視線を向けて私を見るんですか、皆さんは。酷くないですか。ちよつと周りの人たちよりかわった魔法をくんじやっただけなんですよ。それだけなのに……それだけだというのに。えーい畜生、こうなったら触手で戯れているヴィヴィオさんで遊んじやるうーい。

「きゃー。ぜろく。コレ、おもしろーい！」

触手の絨毯の上を器用に両手を広げて、ヴィヴィオさんは歩いてる。今日のヴィヴィオさんの服装はワンピースだったのでパンツが見えてしまわないか心配になったけれど、ヒロイン補正が効いているのか絶対領域を発動させているようで中身は見えない。

「ちよつ！ これ、ナ○シカのラストシーンやんけっ!! なんでゼロ口が知ってるんやっ!!」

流石ははやてさん、勘が良い。ちよつと涙目になっているけれどよく気が付いたなあ。げへへ。ついでにBGMも流してるよ。無理して裏声を出した私が真似したヤツなんだけけどね。

著作権の無い無料音声を探して合成するつもりだったけれど、見つからなかったから自作したんだな、これが。んーでも私の魔力光はスカさん譲りの赤黒い色だから、ちよつと、いや、大分悲惨な光景になっているかも。これじゃあ金色の野を歩く少女じゃなくて、血の海を渡

る少女になっちゃてるよ……。

「あ、本当だ。懐かしいね」

地球組、そして日本出身者のなのはさんも気づいてくれたみたい。

「な○しか?」

「……フェイトさん判りますか?」

ミッドチルダ出身のフェイトさんとシャーリーさんは知らないみたいで、一緒に首を傾げてる。よし、今度フェイトさんに映像を見てもらってからデバイスを渡して、ヴィヴィオさんにもう一度コレを再現してもらおう。魔力光が金色の人が居てよかったあ。あ、フェイトさんに断られたら、エリオさんも候補だな。

「ねえ、なのはママ、フェイトママ。な○しかって何?」

触手の絨毯から下りたヴィヴィオさんは、そんな事を言ってるし。

「うん? 私とはやめちゃんの故郷のアニメ映画だよ、ヴィヴィオ。でもどうして、ゼロが知ってるのかな?」

そりや元日本人でオタクだから知ってますとも、なんて言えるはずもなく。地球に長距離通信でアクセスしてた事を伝えて、偶然見て環境問題に強く関心を持ったって事にしておいた。本当は管理外世界にこっちの世界の一般人が不用意にアクセスする事は禁止されてる。仮にアクセスをするなら管理局からの許可が必要なんだけれど、そんな事は露知らずだったから裁判でも問題になっちゃったんだけど、知らなかったで押し通した……フェイトさんが、ね。

だから今はそうそう簡単にデータを手に入れられないから、私の楽しみが減っちゃってるんだ。その分時間が出来たから開発とかできるんだけど、ちよつと寂しい。

「もう勝手にアクセスしたら駄目だからね。もし、そうしたい時はちゃんと行ってね?」

フェイトさんが私の両方のほっぺを軽く握って伸ばす。その言葉に『ひゃい』と返事を返すと、フェイトさんは満足してくれたのか手を離してくれて頭を撫でてくれるんだけど、恥ずかしい。

「ねえママ。な○しか、観てみたいっ!」

「え? うーん、どうだろう?」

そう言つてなのはさんが私を見るけれど、私も全部のデータを保持していないので無理だった。だから今度地球に行つたときに一緒に見ようかつてなつて、ヴィヴィオさんはすごく嬉しそうに笑つてた。

あ、そつか。ヴィヴィオさんはなのはさんの養子になるんだから、高町家の皆様に挨拶もかねて地球に行かなくちゃならないのか。じやなきや、なのはさんがあやふやな約束事を結ぶわけはないし。親子になるのはもう少し先だろうけれど、良い親子になれそうによかつたよ、本当。二人には強い絆があるみたいだし。私は部外者だから口を出す事は無粋だけれど、スカさんがやらかしちやつた事もあつて、ヴィヴィオさんには幸せになつて欲しいんだよね。

——SLBをヴィヴィオさんに撃つてないから、ちよつと心配してただけこれなら安心。

こんな日々を過ごしながら、一ヶ月つて期間はあつという間で。四月を迎えて機動六課は無事に解散。それぞれの道へと歩み始めました、とき。

第五話：機動六課解散後の私。

機動六課が解散しました。解散したんだけど、どうしましょうか。住むお家がありません、あはっ。取り敢えず今は安いホテルに住まいをしているのだけれど何時までもこのままって訳にはいかないから、どうにか一軒家を借りるか買おうかしたい所。え、ホテルもどうやって四歳の身で借りられたのかって、そりゃ勿論私の保護責任者と後見人の面々を見てもらってホテルの人たちの信頼を得たからだ、無理矢理だけれどネ。

管理局や聖王教会にとって私って面倒な存在な訳である。スカさんのクローンってだけでも問題なんだけれど、半年間の更正施設生活中にさまざまな分野に論文や特許を出して提唱してたから有名になっただけらしい。そんな事だから色んな人たちに目を付けられて、親が居ない事や素性が漏れてて私を養子に迎えたって話がたくさん管理局と聖王教会に来てたんだって。

犯罪歴がある人間と親子関係を結ぶなんて酔狂な人たちだなんて思うんだけど、ミッドチルダや管理局ではそう珍しい事でもないみたいで文化として根付いているんだってさ。コネを使って強硬な手段に出ようとした人も居たらしくて、私の扱いをどうしようかって悩んでたそうさ。でもその養子になる本人の私はその気はなくて全て固辞しちゃったものだから、さあ大変。

今度は保護責任者は誰になるんだって話が私の知らない所で進んでいて、これまた候補者が沢山手を挙げてたらしい。もう一人で暮らせるお金は十分にあるから困ってないから大丈夫って伝えたら、世間的に問題があるから体裁を整えないと、だっさ。それでも私が渋っちゃったんだけど、無理な物は無理で、法律上親の居ない子供には責任者が必要だからそれは無理だし駄目だっただけだ。

じゃあどうするのさーってなるんだけど、これが頭の痛い問題だった。

まずは私の保護責任者になる事に元機動六課の隊長陣は三人とも立候補してくれた。すごく嬉しくて有り難い事だったけれど、私がそ

れに首を横に振る。私を引き取った事で昇進とか査定に影響があるといけないものね。そしてそんな事を気にする人達じゃないのも知っていたからこそ、余計に首を縦に振る事なんて私は出来なかった。でもこの三人の時点で受けていたのならば、こんなややこしい事にならなかつたんだろうと、今なら言える。

頑なに断り続ける私を見て、じゃあ誰なら良いのって話になっちゃって、私の後見人になる事でその人の人生に悪影響が出ない人が良いつて伝えたら、管理局からリンディさん、聖王教会からカリムさんの上司さんが名乗り出てきた。六課でお世話になった時に挨拶をした事があるし、六課で一ヶ月間お世話になっていたあいだに何度か会った人たちなだけけれど、リンディさんだってお孫さんとか居るし、カリムさんの上司さんだつて家庭があるんだから。

それならば私を利用してしようと考えて名乗り出てきた人たちから適当に選びますって口が滑ったもんだから、怒られた。そんな人は碌な人じゃないし、ちゃんと私の面倒を見てくれるかどうかも解らない、最悪お金だけ取られる可能性も有るんだから絶対に駄目だつて。平行情のまま何時までも話が終わらないと考えたのか、私の意見はいつのまにか封殺されててあれよあれよという間に保護責任者と後見人が決まっていた。解せぬ。

でだ、全然知らない人じゃないからまだ良いとして、保護責任者と後見人の名前が書かれた書類を見て私が思った事は管理局と聖王教会の息が掛かって、しかも私が悪い事を出来ない人選にちやつかりとなつてる。

結局、管理局からはリンディさん、聖王教会からはカリムさんの上司さんが保護責任者に。後見人には伝説の三提督と聖王教会のカリムさんの上司さんよりさらに上の三人の名前が書かれていた。この豪華すぎるメンバーに文句なんて言えるはずもないし、多分出世とかはもう望んでない、もしくは最上位に居る人たちなので何も言えなくなつてしまつて。そんな面子だったのでホテルの人からの信頼を一応得られたつて訳だ。

——これつてき、首輪だよねえ。

何処からどう見ても、誰が見ても。さつきも言ったけれど私が悪さをしない為の人選である事は言われなくてもわかるし。でも、そのネームバリューのお陰でホテル住まいが出来てるし、一軒家も購入出来るそう。

もう私は開き直って、この豪華なメンバーを頼る事にした。一軒家が買いたかったので何処かいい不動産屋さんは知りませんか、と。あれよあれよという間にクラナガンにある不動産屋さんに連絡をしてくれて、物件を紹介してくれた。管理局と聖王教会の威光すげーと感心しながら物件を漁ったんだ。私の希望としては、マンションとかじゃなくて一軒家。この条件は譲れない。建屋自体はロゼさんと私が住むだけなので狭くても良いけれど、土地は広い方が嬉しいんだ。小さくても良いから研究室とか欲しくて、実験も行うつもりだから爆発とか被害が出た場合に住宅密集地じゃ問題がある。

条件としては難しいだろうなーと微妙な顔をしながら私は物件情報を隅々まで見てただけけれど、不動産屋さんが良い人たちで私の要望に応えてくれるモノを、一生懸命探してくれたんだよね。さつそく見学とかにも行って、立地条件も良くて普通に生活するには困らない場所だったので即決したよ。

——ゼロ・S・フリーランダー

新しくなった自分の名前を必要書類にサインして。初めてミッドチルダ語で自分の名前を書くから緊張して少し手が震えたけれど。保護責任者と後見人の人たちが決まって、戸籍登録をしようって決まった時に自分で考えた名前。”S”はもちろん”スカリエツテイ”のS。”フリーランダー”はリリカルなのはキャラクターは車の名前が付いているって知ってたから其処にあやかってみた。

ファミリィネームってどうやって付けるんだろうって難しく考えていたら結構適当で。次元世界って戸籍のない人も多いらしくて、登録の時は勢いで変な名前を登録する人とかいるみたい。種族や人種でも特色があるし、ルールはなくて結構自由。倫理や良俗に反する言葉だけは駄目だよーって言われたくらいだったかな。

サインをした後、購入した物件はちよつとばかり築年数が経ってた

からリフォームもお願いして、修繕と耐震補強と新しく一部屋、ようするに研究室を作ってもらったよ。

稼いだお金が飛んでいっちゃうんだけど、また論文とか書いてそれから特許とかも取れば良いから先行投資だって思えば安い、安い。

そうして時間が過ぎるのは早いモノで、自分のお城が完成してホテル住まいともおさらばとなった。私の荷物なんて鞆一個だしロゼさんも私物は服以外ないに等しいから引越なんて大げさな事はしなくて済んだし、必要な家具とかはリフォームが終わると同時に新たに購入して業者さんに運び込んでもらってる。

「マスター。これはこちらで良いですか？」

大体の荷物は業者さんに運び入れてもらったけれど、細かいところまではキッチンと出来てないからロゼさん男性ver.と一緒に最後の仕上げに入ってた。

二人で住むだけだから荷物自体も少ないので、あと数時間もかからないと思う。ロゼさんには大きな荷物をお願いして、私は細々としたものを運んだり箱から出して並べたりしてるんだ。ちなみにロゼさんは普段女性の姿を模しているんだけど、力仕事なら男性の姿になった方がより重いモノを運べるからって言っただけ珍しく男の人の姿になってる。筋肉量の絶対値が違うから、その方が良いそう。そういえばロゼさんが女性の姿になってたのはスカさんが原因だったなあ。そんな懐かしい事を思い出しながら、ロゼさんはどんな姿でもロゼさんだから問題はない。

——ピンポーン。

あや、来客だ。私がおここに引越した事は、保護責任者二人と後見人の六人しか知らないんだけど皆今日は用事があったて来れなくて申し訳ないって言葉をもらってるから誰だろう。ちよつと距離があるけれど、ご近所さんにはこの後挨拶をしに行かなきゃねってロゼさんと話してたんだけど、もしかすれば先を越されちゃったのかなあ。

『こんにちはー！』

『こんにちはは、突然悪いわね』

誰だろうとモニターを覗き込んでみれば、スバルさんとティアナさんだった。機動六課解散後も仲睦まじいようだなによりだ。でもなんでこの場所がわかったんだろう。知っているのは限られた人たちだけで彼女達には伝えてないはずなんだけれどなーと不思議に思いながら、玄関でお待たせするわけにはいかないなので元の姿に戻ってもらったロゼさんと一緒にお迎えしなきゃ。ちよつと散らかっている事を伝えてお二人をリビングに通して、珈琲を淹れたんだけどやっぱり二人が私の家に来たのは疑問だったので、理由を聞いてみた。

「アンタの事を心配してた、なのはさんやフェイトさんの代わりよ」「そだよー。仕事で来れないから代わりに様子を見に行ってくれないかって頼まれちゃったんだー」

うわ。折角の貴重な休みをこんな事に使わせて申し訳ない。「気にしなくていいよ。私もゼロの事気になってたし。それにね、ヴィヴィオがなのはさんの養子になる予定でしょ？　ゼロはどうするのかなーって気になって。おせっかいだって言われちゃうかもしれないけど、エリオやキャロも気にしてたしねー」

「そうね。四歳らしくないアンタだけれど、保護者は必要でしょ？　けれどアンタは養子の話を全部蹴ったって聞いたし。いくらなんでも無理がある。それに学校とかはどうするつもりなのかしら？」

『いかなきゃダメでしょ』と言いたげな視線で私を見つめる二人は本当に心配してくれているんだろう。それじゃなきゃわざわざお休みを潰してまで私の家に様子を伺いに来るなんて思えないし。いくらなんでも元上司のお願いとは言えど、ね。でも学校に通うつもりはないんだ。スカさんたちと一緒に生活してた頃に、偽名だったけれど大学を卒業してるし。その事を後見人の人たちに伝えたら、それじゃちゃんとした卒業資格を交付しましよってなってる。

それでも流石にまったく大学に通わないまま卒業資格を交付する事は出来ないから、前みたいに短期間の通信教育を受ける事になった。あと一週間もすれば大学の通信教育講座を受け始める事になる。その旨を伝えると二人は驚いた顔をして頭を抱えてるんだけど、まあなんだろう、慣れて欲しいと思う。私自身、自分のスペックの高

さに驚く事があるけれど、大体はスカさんのクローンだからで納得出来るから。

裁判でも聞いた話になるけれど、どうも私はスカさんから魔改造を受けてみたいだし、前世の記憶も合わさって自分の能力の高さは恐ろしいって感じる事があるもんねえ。でもまあ、その力は自分がやりたい事に使ってるし、魔改造を受けた事を恨んでなんかないし、むしろ感謝してるくらいだから。だって世界が広がって楽しいんだよね。研究も実験も魔法も、そしてこの世界の事も。

「はあ……。そりゃアンタはそれで良いかも知れないけど。友達とかどうするのよ？ まあ、アンタなら必要ないって言いそうだけれど、それでも一緒に遊びに行ったりする人は必要でしょ？」

「そうだぞー。あたしとティアみたいに仲良くなれば、楽しい事一杯出来るんだよー！」

あまり考えてなかった事に、きよとんとしてしまう私。そういえば考えた事はなかったなあ。それに知り合いなら一杯出来たし、旅行とかならロゼさんが居るからなあ。必要がないとまでは言わないけれど、現状維持が精一杯。

「アンタねえ……。ま、いいわ。五月蠅く小言なんて言うつもりはなかったんだし。それよりも片付けは順調なのかしら？」

やれやれと眉間に寄せた皺を戻してティアナさんは話題を変えた。小言よりも、引越しのお手伝いが本来の目的だったみたい。有り難いけれどそんなに荷物はないし、もう終わりそうなんだよね。細々した物や足りない物は後日に買い足すつもりだし。取り敢えずはご飯とお風呂とベッドがあれば最低限の暮らしは出来るんだし。

「何か手伝う事ある？ 力仕事なら任せてよっ！」

スバルさんが腕まくりをして力こぶを作るけれど、残念ながらほとんどの作業は終わってしまってる。荷解きした段ボールとか散らかってるだけだから、ゴミの回収日に出すだけだ。それを伝えると、しよぼーんって顔をしたスバルさんが。なんだか二人に申し訳ない事をしてしまったし、せつかくここまで来てくれたのだからお昼ご飯を食べませんか誘ってみた。

「え？ いいのっ!？」

「……スバルっ！ このばかつ！」

気にしないで欲しいけれど、ね。

「悪いわね、忙しい時になんだかご馳走になって」

「いえ。だれかといっしょにたべたほうがおいしいですし、にぎやかなほうがうれしいのしいですから」

うん。騒がしすぎる食卓は苦手だけれど、寂しすぎる食卓はもっと苦手だから。それにせっかくここまで来てもらったんだから手ぶらで帰ってもらう訳にもいかないし。嗚呼、ぐしゃぐしゃと力任せに頭を撫でないでくださいな。髪は別に乱れても良いんだけど、ちよと痛いんだな。こっそりティアナさんの顔を見上げてみれば、なんだか微妙な顔をしてたから、彼女の琴線に触っちゃったかあ。ふ、と短くため息を吐いて仕切り直しと言わんばかりに口を開いたティアナさんは、数瞬前の表情を全く変えてて。

「……というか、アンタ御飯作れたのね」

料理は私の趣味の一つですよ、と答えながら冷蔵庫に詰めておいたここ暫くの食材を取り出す。お二人のリクエストを聞いてティアナさんと私でお昼ご飯を作った。その間にスバルさんとロゼさんで散らばってた段ボールとか纏めてもらってたんだ。スバルさんの大食は知ってたからだいぶん多めに用意したつもりだったけれど、腹八分目と言われてシヨックを受けてしまった。

食べていってくださいと言った手前、お腹を空かせて帰ってしまったれるだなんて、料理人としてのプライドが崩れてしまう。なのでちよつと意地を張っちゃってお二人には時間をもらってデザートを作る事にした。引越して来たばかりだから、ケーキとか凝った物は無理だったのでドーナツだ。

「うー……。お腹いっぱい……」

「はあ……。スバル、アンタねえ……」

ふふふ。お二人にご馳走した甲斐があった台詞をやっと聞けた気がする。ティアナさんはご飯の時点で満腹だったみたいで、ドーナツは少しだけ口にしたただけだけれどちゃんと美味しいって笑ってたし。

スバルさんにも満足して頂けたようで、作って良かったなあ。そうしてそろそろお暇すると言った二人を見送り、ロゼさんとまたぼちぼちと家の片づけを始めた。

◆ そんなこんなで新生活一日目はこうして幕を閉じた。

時間が過ぎるのは早いもので、新しいお家に引っ越ししてから一ヶ月が経とうとしている。

「マスター、そろそろお時間ですが……」

朝。眠い目をどうにか無理矢理に開けて、のそりのそりと寝ていたベッドの上に座り込む。一応目覚まし時計を仕込んではいらんだけれど四歳児の身にそんなものは通用しないので、ロゼさんに強制的に起こしてもらおう日々が続いてて、起きなきゃいけないと思いつつも暫くうとうとしているのが気持ち良いんだよね。そんな私の横でロゼさんが微笑ましそうに私の様子を眺めているんだけど、ロゼさんにちよつとした問題がある。まあ、私は慣れちゃったし別に困ってもないから良いのだけれど。

——ロゼさんは裸族でした。

元々は黒いスライムさんと言えはいいのか液体金属とでも言えばいいのか。そんなロゼさんなので”服”って概念がないのも仕方ない。一番最初にスカさんを模倣した時はちゃんと服を着ていたのだけれど、ロゼさんがアジトにあった書物や文献を読み漁った時に人体の構造に興味を持ったようで完璧に模写する事をロゼさんは望んで、努力によつてそれを成す事が出来た。

どうもその参考にしていた書物や文献が医療系のモノだった為に、擬態をする時は何故か服を着用せずに全裸だった。ロゼさんに服を着て欲しいとお願いしてみれば、あまり好きではない様子で困った顔をしてたんだ。理由を聞いてみれば、身体に擦れるから微妙な感じがするそうで、服を着てもらった時も複雑そうな表情を続けてるから無理強いするのは止めにした。

それでも流石に人前に入る時は倫理的に大問題になっちゃうので、裸で居ることを許可出来るのは私と二人っきりの時のみ。私以外の

人前に出る時は嫌でも服を着てもらっている。無理強いをしているけれど、人の世界で生きる為のマナーだしルールだから我慢してもらってるんだ。

「おはようございます。ろぜさん」

「マスター。おはようございます」

そんな裸のロゼさんをぼんやりと眺めていたら段々と眼が冴えてきてベッドからもそもそと降りて挨拶を交わし、着替えて身だしなみを整え朝御飯の準備に取り掛かる。ロゼさんと一緒に暮らしてはいけるけれど、ロゼさんに食事は必要ないから一人分の食事を作るのは凄く面倒臭い。面倒臭いんだけれど、これを怠るとロゼさんと私がこの家で生活を送れなくなってしまうから仕方ない。

と言うのも、一人暮らし……正確にはロゼさんが一緒なので違うけれど、保護責任者と後見人の人たちと交わした約束に”食事はちゃんと取ること”を強いられたんだ。家事全般問題なくできると伝えただけけれど、信用されなかったようで暫く様子見をするとの事。

なのでこの一年くらいの間は保護司の人が週に一度、私の様子を伺いに来て、日常の様子を報告されるようになってるからちゃんとした暮らしをしないと。これを怠れば保護責任者のリンデイさんかカリムさんの上司さんの所へ赴かなくてはならないから、サボるなんて出来ない。いざとなればサプリメントや栄養剤で済ませようと目論んでいた私の考えは看破されてたのかも。

通信教育での大学も始まり、順調に単位を取得してるよ。でもただ以前みたいになる気持ちはないからゆつくりと時間を掛けて色んな事を学んでいくつもりだ。あの時は遺伝子工学と機械工学だったから、他の分野にも手を伸ばして視野をもっと広げたいな。そんな事を考えながら、自分の研究室の一角で今日の講義を通信越しに受け終えた。そうして課題やら提出物なんて物を纏め、データを大学に送信。

その後は私の趣味に没頭する。機械いじりだったり魔法についての文献を読み漁って、デバイスマスターの資格を取る為に勉強をしたりと有意義な時間が過ぎていく。あつという間にお昼になってまた自分のご飯を手抜きで作って食べて、それからまた趣味に没頭。最

近ではスカジアさんの評価が地上本部内で上がっていつている様で、増台したいとお願いされた。

この研究室の設備だと大量生産は無理なのでライセンス契約でもして管理局に設計図を渡そうと考えてる、私が作れたのだから設計図さえあれば管理局の技術者でも作れるだろうし、無理なら企業にお願いするだけだしね。改良を施したければどうぞご自由にと伝えてある。ただあの時引き渡したスカジアさんは初期ロットなので、後発で作ったスカジアさんType-Rをさらに改良を加えた設計図を渡すつもりだ。

改良を施そうと決意しても、何が良いのか思いつかない。だから地上本部にとって備えていけば便利な機能を調べなきゃねえ。地上本部に勤務する人たちにアンケートでも取れば良いけれど、難しいかなあ。取り敢えずは警備用だから、不審者侵入対策と捕縛が出来るように作ったんだけれどさらに改良を加えるならば何を施すべきか。いずれはAIを搭載してスカジアさん達の意味で自立した行動を取ってくれるようになれば嬉しいけれど、まだまだ先の話だろうし。

現実を考えるのなら、もう少し攻撃力を付与させるべきなのか。あまり過剰戦力になっても駄目だし、この辺りは本部の人たちの要望を集約するべきかも。良いモノを作るって難しいね。海と陸じゃ、戦術ドクトリンとかその辺りが微妙に違ってそうだし。んー考えるべき事は山ほどある。

そんな事で忙しい毎日を送ってる。日中を忙しく過ごしている所為なのか、眠くなっちゃうのが早いんだよね。ご飯を食べてお風呂に入ればもう眠くなってる。リビングのソファでうとうとしてるなんて事がザラにある。

そういう時はロゼさんが寝室まで運んでくれてベッドに寝かしつけてくれるんだよね。そうして今日も無事にソファでうとうとして寝落ちしてたみたいで、気付くとロゼさんがベッドに運んでくれた。

——おやすみなさい。

本当に日々が過ぎるのは早くて、また一日が終わろうとしていた。

◇

「バルデイツシュ……！」

「……Yes, sir」

「雷光一閃……」

「……Plasma Zamber Break

」

突然聞こえてきた何処かで聞いた事のある声に飛び起きて、何が何だかわからないまま私の視界は金色に覆われた。

第六話：理不尽は突然やって来る。

爽やかな朝の始まりはフェイトさんの悲鳴で幕が上がった。

「な、なんでっ！ 何で知らない男の人がゼロと一緒に寝てるのおおおおおおお!!」

涙を流しながらライオットザンバー・カラミティを構えて殺意を前面に押し出しているフェイトさんに気圧されてるロゼさんと私。この台詞の前に放たれた魔法で飛び起きたんだけど、不思議と怪我とか被害が無かったからフェイトさんが加減をしてくれたのだと思う。

知らない男の人と一緒に寝るような趣味は私には一ミクロンたりともないのだけれど、と自分の横を見てみればロゼさん男性ver.の姿が。しかもロゼさんは裸族。もう一度言う、全裸族なのだ。しかも人間の生態をしらみつぶしに調べ上げて完璧を目指したロゼさんの擬態は無駄に完成度が高いのが今回は仇になっていて。男性特有の朝の生理現象まで再現していたものだから、さあ大変。私は医療知識とか身に付けててロゼさんのその姿を見てもなんとも思わないし、ロゼさん自身も人間の生態を模したただけであってえっちな意味は含まれていない事を知っているからもう慣れてたからいいんだけども。

問題は目の前のフェイトさんである。うん、ごめんなさい。多分、見た事がなかったのだと思う。フェイトさんの顔は怒っているけれど、顔も耳も真っ赤だし。そして一番の問題は、ロゼさんの姿をフェイトさんたちは女性の姿でしか見た事がないという事実。私がフェイトさんの立場なら、同じ対応を取っている事は間違いないと思う。幼女と裸の成人男性……どう見たって超不味い現場だよな。

さて、どう弁解をしたものかと考えてロゼさんを横目で見る。視線を例の場所へと向ければ、まだ元気なままのロゼさんのご子息様。取り敢えずその立派なモノにはシーツを掛けてあげて隠してみるんだけれど、シーツが薄いからもちこりしてなくもない気が。まあそれはさておき。構えた両手剣をまだ元に戻してくれそうもないフェイト

さんの様子に頭を抱えるんだけど、良い策なんて見つかる訳はなく。そういえばロゼさんは色々なものに擬態が出来る事を伝えていなかったな、と頭の隅によぎる。

「小さい子供に……なんてモラハラをつ……！　そもそもなんで、抱き心地が良さそうなゼロをどこの誰とも知らない人が一緒に……」

その役目は私がしたかったのに、と小さく呟きながら瞳のハイライトがだんだんと暗くなっているんだけど、き、気の所為、絶対に気の所為。ロゼさんが私を抱き枕代わりに寝ることはいつもの事だし、私もロゼさんに抱きかかえられて寝るのは心地いいし微妙な柔らかさをずっと保持してくれてるし、夏場は冷たく涼しいし冬場は適度に温かいつていう快適機能を発揮してくれてるんだもん。以前にスライムさんの姿でロゼさんと一緒に寝ると一度窒息死しかけた事があるから死んじやいたくはないのでロゼさんには悪いけれど禁則事項になったんだよね。

ロゼさん曰く『無意識でマスターの身体を包み込んでしまったようです』との事だったので、解決方法を探したら人間に擬態した姿のままを維持してもらっていければ本人も気づかない間に私の身体を覆って包み込む事態にはならないそう。

なのでこうしてベッドで一緒に寝る時はロゼさんには人間の姿になっってもらっている訳なんだけれど。それなら今度フェイトさんにもロゼさんの心地よさを理解してもらおうと心に誓うんだけど、無理かなあこの状況じゃ。

——なんで怒られているんだろう。

もちろん正座で。一応慣れているから私は良いけれど、ロゼさんは初めての体験だろうからちよつと辛そう。硬いフローリングの上じゃなくてベッドだからまだマシなんだけれど、この状況は笑えないなあ。

というかミッドに正座の文化はない筈なんだけれど、フェイトさんは何で知っているのーって心の中で愚痴ってたんだけど、目の前で涙目になっているフェイトさんは海鳴の街に何年か住んでたんだよ

ね、忘れてた。それにリンデイさんも地球の文化、特に日本のモノに精通してるんだっけか。緑茶に砂糖をぶち込む暴挙に至ってた気がするけれど、きつと何かの見間違いだろう。

怒りは少し収まったのかバルディッシュさんのザンバーモードは解除されて取り敢えずは一安心なだけけれど、それでもフェイトさんの表情は強張ったままで。フェイトさんの後ろでは、一緒に来訪したリンテイさんが頬に手を当てて『あらあらあ』って感じで笑ってるし。他人事だと思ってこの状況を楽しんでいるに違いない。というか、フェイトさんの暴走を止めて下さいよ、静観していいいで。

「……ゼロ。少し聞きたい事があるんだけど、いいかな……」

「はい、なんででしょうか……」

私の隣で正座をしているロゼさんはバインドで拘束されて正座を強制させられたのだけれど、その姿が不憫でならない。一応敵意のない人たちには手を出さない様にと伝えてあるんだけど、この先の展開次第でフェイトさんとの戦闘に発展する可能性があるのだから、火が付いているフェイトさんに油を注ぎこむような事は出来ないのだから、発言には細心の注意を払わなければ。

「とうして”男の人”と……ど、どど同き……一緒に寝てたのかな……？」

口ごもりながらにつこりと笑ってるフェイトさんだけれど、纏っているオーラに負の感情が詰め込まれているのは明らかで。それも超特大のモノです、はあ。でもまあ、フェイトさんがこうして怒ってしまったのはロゼさんの擬態についてきちんと伝えてなかつた自分の迂闊さが原因だから言い訳もなにもする気になれないけれど、其処まで怒る内容なのか、とも思っちゃう訳で。

まあ、いいや。取り敢えず言い訳にならない言い訳を開始しよう、そうしないと状況が改善されそうにもないしね。

「ふえいとさん、わたしのよこにいるだんせいは ふえいとさんもしっている ろぜさんです」

「えっ？ 嘘……」

嘘なんて吐くつもりはないんだけれどなあ。正真正銘私の使い魔

のロゼさんである。

「で、でも。ロゼは女の人じゃないの？」

ロゼさんには元々性別はありませんから、中性とか無性という分類になりますねえ。生物学上の意味を考えるのなら、その存在は不思議なもので。性別を持たないイコール子孫を残せない存在だもんね。”種”というものが残せないのだから、生物として矛盾を抱えている存在なのかもしれないけれど。まあ偶然生まれちゃった存在だから人知れず絶滅する運命なのがロゼさんなのだろう。

こうして人間の姿に擬態できるようになったのはロゼさん自身の努力の賜物ですので、あまり怒らないでもらえると嬉しいな。と言うか、写真とか見せればその人物を100パーセント完璧に擬態しちゃうのがロゼさんクオリティなのです。

「そんな事が出来るの？」

「できますよ。それじゃあためしにふえいとさんにぎたいしてもらいましょうか。ろゼさんおねがいしてもいいですか？」

「了解です、マスター」

ちよつと不機嫌そうに私をお願いを聞いてくれたロゼさんは、バインドされたまま男の人の姿からぬらりとフェイトさんの姿へと変わっていく。その時に骨格が変化してしまったのでバインドから抜け出したロゼさんはしてやったりと悪い顔をした。

「ほ、本当に私にそっくり……………」

「あら、凄いわね。コレ」

興味が沸いたのかリンディさんが私たちの会話の中に入ってくる。ですよね、ロゼさんって凄いですよ。えっへん。今はフェイトさんの外観だけを模したただけだけれど、時間を掛けて解析すれば声や胸のサイズや他の人に秘密にしておきたい身体のアレやコレも一ミリの狂いもなく再現できちゃうんですよねえ。でもそんな事をすればきつと怒られてしまうのは確実なのでやらないけれど。

「へえ。面白いのねえ」

にっこりと笑っているリンディさんの心の内はうかがい知れない。まあ、女性の身でありながら長年管理局に努め提督という立場を手に

入れている人なのだから一筋縄ではいかない人なんだろうなあ。無印でもなのはさんを管理局に引き込む事を成功させているし、闇の書事件の時もはやてさんを管理局に引き込んで、強硬派の闇の書事件の遺族のみんなから守ってもいたのだろうし。あんまり敵に回したくない人物の一人だよ。そんな事を口にしちゃえば『現場から身を引いて久しいから、そんな事はもうしないわよ』って綺麗な笑顔で返されそう。うん、やっぱり敵に回したくない。

ところで、お二人はなんで家に来たんだろう。

「貴女の様子を伺いに来たのよ。もう少し早く訪れるつもりだったのだけれど忙しくて。それと、抜き打ちみたいになってしまった事は、ごめんなさいね？」

「いえ」

うん、本当に。来ること自体に問題はないし、お家の鍵のパスワードを教えてたし、アポなしで入って来る事も問題はないし、ちゃんとお客様としてお迎えするだけなのだから。

リンデイさんとカリムさんの上司さんには保護責任者だからお家の鍵のパスワードを伝えてたんだよね。何かあった時に対処できないのは不味いし、緊急用って事もあるだろうし。

でもまさかフェイトさん怒りのソニックフォームを拝む事になるだなんて思ってたなかったけれどねー。酷い目に合う寸前だったと思いつつ、お二人が今日来た用件を聞いてみる。たぶん様子を見に来るついでに何か違う事もある筈だ。

「話が早くて助かるわ」

「母さん……。ゼロは確りしているといってもまだ小さい子供です。無理をさせる訳には……」

おお。こんな所で親子喧嘩を始めないで欲しいな。やるならせめてフェイトさんかリンデイさんの家でやって下さいな、と心で思いつつ私は問題ないので話の続きを促す。フェイトさんが渋い顔をしているんだけど、まあフェイトさんは甘い部分があるので放置。酷いと思われるだろうし申し訳ないとは思うんだけど、話が進まないからねえ。

「貴女の無償奉仕勤務の内容が決まりました。無限書庫はどうだろうと、本局の上層部の人たちが決めたのだけれど、貴女はどう思うかしら?」

戦闘に出る訳でもないし危険な事をする訳でもないので文句なんて全くないです、はい。もちろんその内に魔導師ランクも取得して囑託魔導師として登録しようと考えてはいるけれど。

「あら、そうなの?」

少し驚いた顔をしたけれど、ちよつと顔が綻んでいるリンディさん。

「だ、駄目だよっ! たしかにゼロの魔力量は凄いけれど、戦闘訓練も積んでいないでしょ!? 母さんも、ゼロを持ち上げるような事は言わないで下さいっ!!」

大丈夫ですよ、そうなるのはまだ少し先でしょうしね。なにより魔力量が合っても身体の成長が追い付いていないから、今の状況で現場に出て邪魔になるだけなのでもう少しこの身体が成長してからファイトさんの言う様に訓練を積んで、魔導師としての経験を積んでからだ。

それに今のうちに仕込んでおきたい事もあるから、その為の準備もしなくちゃならないし忙しいから囑託魔導師なんてまだ何年も先の話だろうと思う。そんな事が許されない状況になるのなら仕方ないけれど、今の状況なら急ぐ必要はないだろうし。だから今しばらくは私のやりたい事をやるつもりだ。もちろん無償奉仕をサボるつもりは無いから、全力を持って事に当たるつもりだよ。

あれ、でも。

——無限書庫って管理局の中でもブラック中のブラック部署じゃないかな……?」

そんな気がするのは気の所為なのかしら。永遠と増え続ける情報という名の書の山。あれーおかしーよ。一瞬楽な部署だよーと思っただのが一転、お先真つ暗な未来しか見えない気がする。でも今考えても仕方ないし、なるようになるはずだ。大体、司書長はユーノさんだからきつと大丈夫だよ、ね?」

リンデイさんとフェイトさんとの面談ではロゼさんの事が問題に上がった。内容は男性版ロゼさんは流石に問題があり過ぎる、と。家の中だけなら問題はないけれど、外に出る時とかは禁止だつてさ。先程の事を思い出してしまったのか、フェイトさんが顔を真っ赤にしてるけれど。

何故なら最近の世間様の目は厳しい、と。私と男性版ロゼさんが一緒に外を歩けば懐疑の目を向けられる事は少なからずあるだろうから、問題を引き起こしてしまう前に対策を取っておこうつて。まあ、ご近所さんへの挨拶も女性版のロゼさんと一緒に行ったから、周囲の人たちから変な目で見られるのは避けたいし、ロゼさんには申し訳ないけれど外出する時は女性の姿になつてもらう事になつた。

本当、世知辛い世の中になつたものだよね。変な事件が多い所為もあるのだろうけれど。でも無関心を貫き通されるよりは良いんじゃないのかな、知らんぷりをして事件が起こつてしまつたつて方が寝覚めが悪いものね。

「あ、そうだ。なのはとヴィヴィオがね、ゼロのお家を訪ねたいつて言つてただけれど大丈夫かな？」

全然問題はありませんし、歓迎しますよ。そういえばなのはさんとヴィヴィオさんは養子になつたのか気になるけれど、私が踏み込んで良い事じゃないしフェイトさんに聞くのも筋違いだろうから興味本位で聞くのは止めておこう。フェイトさんもリンデイさんも笑つてゐるからきつと悪い話じゃない事は推測ができるし、何かあるのなら出来る事は少ないけれど微力ながらも何かしたいし。

「ゼロさん、これを」

「……これは？」

名前を呼ばれてリンデイさんを見てみれば、バッグの中から小さな機械を取り出して私に手渡してくれた。

「本当はもっと早く渡すべきだつてんでしようけれど、通信端末です。機動六課の皆の連絡先や保護者のみなさんの連絡先が登録されているから、何かあれば遠慮なく使つてね？」

「ありがとうございます、りんदैいさん」

そう言つて頭を下げる。両手で持つてもちよと持て余してる通信端末は市販されているオーソドックスなもの、だと思う。固辞しても最終的には押し付けられるだろうから、遠慮なく受け取ったんだよね。皆の連絡先を聞ける身分でもないし、自分から連絡を取る事もないだろうと考えていたし公衆電話とか一応あるから気にも留めてなかったし、必要とも考えていなかったから購入する気はなかったんだけれど、リンデイさんは気を利かせてくれたみたいだ。

後、GPS機能も付与させてあるから肌身離さず持つていてくれると嬉しいって。何が起るかわからない世の中だし、私の身の安全も考えてだそう。小さいし持ち運びに不便はないから、お出かけするときは言われた通りに持つていよう。

「困つたらすぐに連絡していいんだからね？ ゼロは遠慮してる所があるから心配だよ」

眉をハの字にさせてフェイトさんが困り顔で私を見つめる。んー、困る事がそうそうにないからこの端末を使用する機会は無さそうなんだよね。ロゼさんの力を借りれば大体の事は解決できちゃうもん。でも、気持ちは嬉しいから素直に受け取っておこう。

「はい、ふえいとさんもありがとうございます」

ん。いつもお世話になつてばかりだから、感謝の言葉はちゃんと伝えないと。嗚呼、フェイトさん抱きしめてくれるのは嬉しいのですが、力加減をして下さい。柔らかい胸に挟まれて苦しいんです。死にはしないけれど見た目に反してフェイトさんの腕力があるんだよね。流石Sランク魔導師、伊達な鍛え方はしてない。

「それじゃあ、そろそろ。……フェイト、行きましようか」

「あ、はい。母さん」

また来るからね、とフェイトさんとリンデイさんは言い残して家を後にした。玄関先で今度お泊りしたいんだけどいいかなって聞かれたので了解ですと答えておいたよ。狭いけれどゲストルームはあるから一人くらいなら全然困らないので断る理由はないし、大勢いる方が楽しい時間を過ごせるしね。お二人の姿が見えなくなるまでロゼさんと一緒に見送つて、いそいそと研究室にまた引き籠もる私だつ

た。

◇

さて、やりたい事があるので大学の講義を受けながらちよくちよくと進めてたのだから、少しづつ形になって来たのかなーって思う。研究室の机の上には自動式拳銃が一丁置かれている。もちろん、管理外世界である地球の代物じゃなくて私が一から設計して作った魔法由来による兵器なので、質量兵器じゃない事は確か。狙いは陸士部隊の魔導師ランクを取得していない一般局員の人たちに戦力の底上げという名目で装備してもらおう為だ。あと低ランクの魔導師の人たち用にも、かな。

魔法由来なので拳銃単体で運用って訳にはいかず、オプションも付けないければならないのだけれど、大分小型軽量化を図ってみたので魔力を保持していない女性にも撃てるようになってるはず。機能や威力は、直射魔法一つしかないけれども威力はAランク相当のモノが撃てる。だから、魔導師の少数精鋭部隊というよりも、同じ事しか出来ない大多数を揃えた部隊構成って感じになるけれど、運用次第で犯罪者に対応できるかなーって。

後は撃った時の反動とかを失くしたいけれど、この辺りは魔法構築に掛かってるかな。あまり反動がないのも考え物だから、多少は撃った感触を手に残しておかないと。動力依存しているから無限に撃てる訳でもないの、弾数管理は必須項目だからね。何発撃ったのか音や感触で判るようにはしておかないとだし、色々と考えなきゃいけない事が沢山あるから難しい。

スカジアさん改良型納入と共に、これを地上本部に売り込むつもりだよ。本当は質量兵器を導入してもらうのが一番手っ取り早いし安価に済むのだけれど、質量兵器アレルギーを引き起こしている管理局だから到底無理だろうしね。それなら徐々に慣れていつてもらおうのが良いかなと考えて”拳銃”の形にした。本当なら、杖でもなんでもいいんだよね。魔法を撃つだけの装置でしかないのだから。

でも自動式拳銃型にしたのは利点が結構あるから、行きつく先がソレになってしまったてのもある。魔法を発動させるトリガー、そして

魔法を射出させる銃口、グリップの内部には弾倉ではなく色々魔法仕掛けの装置を入れてあるし。

厨二病が発動しちゃうのなら銃剣型とかもカッコいいから試作品を一応作っては見たもの、お蔵入りが決定してた。そもそも拳銃自体が遠距離攻撃なんだし、魔力を所持していない人が接近武器を持つのは危険極まりないだもん。

怪我や死んじゃう可能性が跳ね上がるから却下。それなら防弾チョッキみたいに魔法を防いでくれる着用型のなにかも考えたし作ってはみたけれど、今の所燃費が悪すぎて難航中。パワードスーツも捨てがたいけれど、地上本部の台所事情を考えるとちよつと大掛かり過ぎるからそれも保留、というよりも私の家の研究室の設備だと大掛かりな代物は作れないので無理なんだな。

そんなこんなで目の前にある”拳銃型魔法射出装置(仮称)”をお試しする事にした。相手が必要なのでロゼさんをお願いして庭に出てみる。

「この辺りでよろしいでしょうか、マスター」

適当で大丈夫ですよー、その為にお庭のかなり広い家を購入したんだし。取り敢えず自分の魔力を使わずに”拳銃”が撃てる事と、仮に失敗してご近所さんにご迷惑が掛からなければそれで良いし。

それじゃあ、防御魔法をロゼさんに発動してもらって、的はロゼさんが張ってくれてる防御魔法だ。危なくない様に拳銃の出力は最低にまで落として設定して、取り敢えず数発試射を試してみた。ロゼさんの防御魔法は、なのはさんのデイベインバスターを防いだ実績があるので大抵のものは大丈夫だろう。そう思って遠慮なく撃ち込む。

「この位であれば、何ともありませんので続けて下さい」

ロゼさんの頼もしい言葉に更に遠慮なく撃ち込んで連射する。耐久度も確かめたいから、早々に撃ち終わるつもりなんてなかったけれど、そろそろ銃身が魔法エネルギーによってヘタってきそうな感じがヒシヒシと。それでもまだ撃てるので、カートリッジシステムを応用した魔力蓄電装置が空になるまで撃ち尽くしてみないとね。

——あ、なんだかデジャブってる。

そんな事を頭の中によぎらせた瞬間、拳銃型魔法射出装置が爆発、ついでに魔力蓄電装置も一緒に爆発。いやはや、限界をいつの間にか超えていたようで全然気が付かなかった。被害は小規模で私の身体が煤けているくらいなので大したことにはならなくて良かった。もう少し耐久性を持たせないと駄目だな、コレ。

「ま、マスター……」

ああ、大丈夫ですからそんなに心配しないで下さいロゼさん。しかしまあ、あんなに魔法をポンポン撃つ事がないから、トリガーハツピー状態にでもなつてたかな。魔法を使った事がない人が今の私のようになる可能性もある事も踏まえなきゃいけないかなあ。対策をどうしようか、一度撃ち尽くすだけ撃ち尽くして飽きさせる、とかかなあ。それとも連射機構をオミットさせるとか。

出来る事は沢山あるし、お披露目までにはまだまだ時間はあるしもつと確りとした改良を加えよう。安全が確保できていないなんて兵器として終わっているし、使う人から信頼を得られない物なんて普及していく事はないからね。

「嗚呼、マスターの綺麗な髪がっ」

むむ、私の髪がどうしたのでしょうか。珍しくしよんぼりしているロゼさんの様子が気になる。

「……マスターこれを」

身体の一部を硬化させて反射板のようになったロゼさんが、鏡代わりに差し出してくれた腕。そのロゼさんに映る自分の姿を覗き見る。

——ありやりや。

見事なチリ毛になっている私の髪。なんだろうこのギャグ時空と思いつつ爆発の熱が影響したのか、四年間切っていなかった私の髪がチリチリに縮れてる。一応、私服のままバリアジャケットを展開させていたから身体自身は無事で傷一つないけれど。

仕方ないから髪を切りに行こう。そういえば美容院ってどこにあったかなあ。自分で切る事も出来るだろうけれど、プロ並みに切れるって技術は私にはないから諦めてこの辺りで予約なしでカットしてくれる所を探さなきゃ。

さっそく家に戻って検索を掛けて近場の美容院を探す。そうしたら何件かヒットしたのもっとも近場の美容院に連絡を入れて今からカットできるのか聞いてみればOKだって。なのでロゼさんと一緒に出掛けて、チリ毛になった部分をカットしてもらった。美容師さんになんてこんな事になったのか不思議に思われたけれど、初歩的な魔法を練習してたら暴発したって嘘を吐いたら信じてもらえた。嘘を吐いた事に申し訳なさを覚えるけれど、仕方ないよね。真実を伝えるても理解してもらえない気がするし。

大分さっぱりした髪の毛の襟足を撫でてシャンプーが楽だなあ、なんて軽く考えていた。

第七話：やらかした後のツケ。

先日実験を行った”拳銃型魔法射出装置”の爆発事件は思わぬ所へと余波を呼んでいた。

私の目の前にはナカジマ三佐とはやてさんが難しそうな顔をして座ってる。爆発事件の翌日、はやてさんから連絡を受けて陸上警備隊第一〇八部隊に来てくれと通信があったんだ。一体何の用だろうと思いつつも、言われた事には逆らえない身なので理由も聞かずに陸士一〇八部隊へとやってきたのだけれど……。

「事情は大体理解しとったんやけど、ゼロ、ぷっ！ その髪どないしたん？ 見た目まんま男の子やんかつ！」

事情を知っているのなら聞かなくてもはやてさんなら解るでしょうに。意地悪な人だなあ。あと指を指して笑わないで下さい、もう。笑われてしまうのは仕方がない事だ、だってどうせ伸びるからと思つて美容師さんに遠慮なく思いつき短くしてくださいって伝えたからね。けれど、指を指してまで笑わなくても良いじゃない。似合わないのは仕方ないけれど。

「子狸から噂は聞いていたが、本当にとんでもねえ子供が居たもんだなあ」

しみじみと目を細めて私を見ながら紫煙を吐き出すゲンヤさんは堂に入っているなあと思いつつ、煙草の臭いが部屋に充満し始めていて、片眉が跳ね上がる。正直、煙草の匂いは苦手で、周りに誰も吸う人が居なかつたつてのもあるけれど。

「ちよ、子狸言わんで下さい。ゼロが真似したらどうするんですかっ。その時はちゃんと責任とってくれるんでしょね、三佐殿」

「おいおい、脅かさんでくれ、ヤガミ。それにこんな子供が理解出来ると思えんが」

あーうん。子狸の意味は理解出来るし、冗談でゲンヤさんが言っているのも理解出来るし。

「ゼロは例外中の例外ですよ。多分意味をちゃんと理解出来ている

はずですし……」

そう言つてジト目でこちらを見るはやてさん。うん、意味はちゃんと理解出来ているけれどここで”子狸”なんて私が言つちやた日には一生はやてさんから恨まれそうなので黙つておこう。

「まあ、それは置いといて、だ。嬢ちゃん、管理局の許可を取らず無断で魔法を使ったらどう？」

あれれ、私有地で魔法を使う事も駄目だったけかな。ミッドチルダの法律には疎いから、知らない事があるんだよねえ。

「嬢ちゃん家の御近所さんからの通報でな。爆発音がしたと連絡が入ったんだ。現場に向かつてみりや家主は留守。どうにもならなくて戻つてきてこうしてヤガミに頼んで、嬢ちゃんを呼び出した訳なんだが……知らないかつたのか……」

嗚呼、はい、知りませんでした。てつきり私有地の中なら迷惑が掛からない限りOKだと思ひ込んでいたのですが、駄目だったんだ。ご迷惑をお掛けした事は謝りますし、何か罰があるのなら甘んじて受けよう。ごめんなさい、そう言つてゲンヤさんに頭を下げた。

「な、ん。お、おう……」

啜えていた煙草を口から落としそうになりながら、驚いた顔をするゲンヤさん。そんなに驚くことなのかな。知らなかつたから仕方ないし、罰金とかで済めばめつけもんなだけれどなあ。

「ほらな、ナカジマ三佐。この子のことを子供やって侮つてるところして不意打ちを貰いますよ」

「ま、まあ、今回は爆発も小規模。被害も嬢ちゃんの髪だけだと報告は受けてる。今回は嚴重注意つー形を取るつもりだが、次に同じことを仕出かしたらちゃんと罪を償つてもらうからな。あと魔法を使いたいのなら公共魔法練習場を使うこつた」

「まほうれんしゅうじょう……?」
そんなものがあるんだ。

「む、知らなかつたのか、嬢ちゃんは。一般市民の皆さんが魔法を使いたい時にはソコを利用するのが大前提だ。許可なく魔法を使えばこうして管理局から怒られる。例え悪意がなくとも、な」

「そうやで。知らんかったら仕方ないんやけど、次から気いつけーな。またこうやってこわいオジサンに怒られるのは嫌やろ？」

「おい、ヤガミ。余計な事を言うな。何気に傷つくぞ……」

二人のやり取りには苦笑するしかないけれど、そこにはちゃんと信頼関係があるからこそこの憎まれ口なんだろう。けれど家の近くに公式練習所はなかったはずだから、遠出しなくちゃならないんだよね。それならいつその事、作ってしまった方が早いんじゃないだろうか。

「かりのはなしなのですが、もしじまえてこうしきれんしゆうじょうをつくるとしたら、どうすればいいのですか？」

「ん？ 管理局に届け出してから業者と話をして作ってもらうのがセオリーだろうなあ。嬢ちゃん、もしかして作るつもりなのか……？」

どのくらいの資金が必要になるかが一番の問題になると思うけれど、遠出しなくちゃならないのは面倒極まりないし、テストしたい時にすぐに出来ないのは不便すぎるし、それなら自分の家の敷地内でも大丈夫ならいつその事作っちゃった方が早いもん。

「ゼロ、あんま無茶せんといてえな。それに手続きが結構煩雑やし、被害が周囲に及ばないように結界魔法とか結構面倒なシステムを組み込まなアカンのやけど……ゼロなら大丈夫そうやな……」

はあ、と深い溜息を吐いて額に手を当てるはやてさんは呆れていた。それでもやっぱりやり通すと決めたなら、最後まで突き進むのが私クオリティー。という事で、公共魔法練習場設置関連の必要書類を丸々貰ってお家で熟読する事にしたよ。取り敢えず着工手続の届け出と必要書類をあきれつつも揃えてくれたゲンヤさんには感謝、感謝である。これで魔法練習場を作った事のある業者さんを探して、見積もりを取って納得できるようなら契約して建造に取り掛かって貰わなきゃね。

話が終わる頃、ひよっこりとギンガさんが顔を出した。

「あ……ゼロ、私の事解るかな？」

もちろん分かるし、少し遠慮がちに問いかけてきたギンガさんに疑

問を覚えつつ、問いに頷いて言葉を返す。

「あのときは、ちちがごめいわくをおかけして　ほんとうにもうしわけありませんでした」

「い、いいんだよっ！　悪いのはスカリエツティで貴女自身が悪い訳じゃないでしょう。それにフェイトさんから聞いたけれど、私の洗脳を時限式で解いてくれるようにしてくれてたって。大事な妹を傷つけなくて済んだもの、本当にありがとう」

うぐ。色々と仕込んでた事が明るみに出てて恥ずかしいなあ。フェイトさんには正直に事件の事を全部話してただけけれど、周囲に吹聴してたのねん。なにか私他にもやらかしてたっけかなーと考えるけれど色々と手を付けてたので思い出せない。それから少しギンガさんと話し込んだ。戦闘機人について纏めたデータも役に立ってるらしくて、以前よりも調子が良いって言ってくれてちよつと嬉しかったり。抱っこしてもいいかなーって言われて、断る理由もないので領けばはやてさんまで便乗してくるし。でもまあいいか。皆が楽しそうならそれでいい。

そうして暫く陸士一〇八部隊を後にして家には直帰せずに、業者さんに立ち寄る。子供の姿で説明するのは驚かれるし、その事についての説明も面倒なので私と一緒に来てくれたロゼさんに頼んで念話越しに着工を依頼。

ロゼさんは完璧に出来る女性を演出してくれたし、いちおう金払いの良いお客としてうっはうはな顔を業者さんはしてた。それに丁度手隙だったみたいで、管理局の許可が下り次第直ぐに着工してくれるって。工事の説明を受けて気付いたんだけど、魔法練習場にもいんなタイプがあつて。唯のグラウンドとか最近流行のデイメイジョン・スポーツ・アクティヴィティ・アソシエーション、通称D S A Aのリングを模したヤツも需要があるんだって。

ヴィヴィオさんは何年か先に選手としてD S A Aに出場するんだっけか。それならついでにリングも併設すれば練習場には困らないかなあ。たしか総合とか立ち技オンリーとかにクラスが分けられてて色々とおつたはずだ。vividの知識はおぼろげにしかない

けれど、確かそんな感じだった気がする。それに魔法練習場は私には必要な物なので、リングの有る無しに関わらず作る事は決定事項。

業者さんに後からリングを併設する事が出来るか聞いてみると、可能だけれど手続きが更に面倒になっちゃうから、出来ることなら最初と一緒に申請しておいた方が楽なんだってさ。そういう事なら、お金が掛かっちゃうけれどもリングも一緒に作ってもらいますか。無駄に広い土地を買ったから余ってるし、設置する場所には困らないもんね。

後の問題は結界維持の為に魔力の消費が大きいとの事なので、一般家庭の出力では間に合わないと言われた。その辺りは小型の魔導炉があるのだし、問題はないかな。もろもろの確認した業者さんは、建設現場を見てみたいという事だったのでお家に案内する事になった。わかれて移動するのも無駄なので、ついでに一緒に車で送ってくれるって。ラッキーと思いつながら、業者さんの車に乗り込んで家に戻り、測量とか必要な事を行って帰って行った業者さん。

——これが完成すれば、大手を振って魔法実験が出来るなあ。

お家で色々出来る事が増えるのは有り難い限りで。ミッドチルダの常識に疎くて、時々こうして怒られながらも過ごしているけれど楽しい日々が続いてる。

……大金が保護責任者の知らない所で動いていたのでリンディさんとカリムさんの上司さんから後に大目玉をくらってしまった事は秘密、である。

◇

「こんにちは」

「ゼロく、こんにちはー」

来訪を告げるチャイムが家に鳴り響き、モニターを覗いてみればそこにはなのはさんとっこり嬉しそうに笑っているヴィヴィオさんの姿が。親子よろしく仲良く手を繋いでいた。玄関で待たせる訳にはいかないの、パパパタと短い廊下を速足で歩いて出迎える。モニター越しにさつきも挨拶はしたけれど、改めてもう一度。

「ゼロ、髪切ったんだね、似合ってるよ。……フェイトちゃん大丈夫

かなあ……」

ちよ、なのはさん。小声で不安な事を眩かないで下さい。バツチリ聞こえてますし次にフェイトさんに会う時が怖いじゃないですかヤだなあー。髪を切ったくらいでフェイトさんがどうにかなるだなんて思えないしきつとなのはさんの思い過ごしに違いない。

「おとこの子みたいー!」

ぬぬ、私を男だと勘違いしていたヴィヴィオさんには言われたくない台詞なんだけど、凄く短くなったから仕方ないかと諦める。あの時の発言をヴィヴィオさんが覚えていない可能性もあるのだし、ここは大人の余裕というものを見せて上げなきやね。お二人をリビングに通して、なのはさんには珈琲をヴィヴィオさんには紅茶を淹れてお茶請けもちよとしたものだけれどバツチリ用意。

「いいお家だね、ゼロ」

「ありがとうございます」

小さい家だけれど満足してますよ、不動産屋さんが頑張って探してくれたおかげで良い物件を購入する事が出来たんだもの。

「ゼロくあっちの部屋に行ってもいい?」

あ、ヴィヴィオさん。そっちの部屋には行っちゃ駄目です。研究室なので危ないモノが一杯あるから立ち入り禁止ですよ。『えー』と言われても駄目なものは駄目なんです。ケ、ケチ……あ、いえケチでも結構です。ヴィヴィオさんが怪我をしたら駄目でしょう。という事でそっちは進入禁止なんです。あ、ヴィヴィオさんが抜け出したっ。ロゼさん、ロゼさーん、やんちゃ極まりないヴィヴィオさんを止めて下さい。

「陛下。そちらは危険ですのでお控えください」

にゅ、と私の影から現れたロゼさんがヴィヴィオさんを止める。もちろん人前に出てるのだから裸族なんかじゃないよ。

「えく。あっちも見に行きたいのにい」

「ヴィヴィオ。我儘言っちゃ駄目だよ、それにゼロも言ってたよね? 危ないモノが沢山あるからって」

しやがみ込んでヴィヴィオさんの目を確り見つめながら諭すなの

はさんは、母親らしいよねーってにんまりしながら横で見てた。本当に微笑ましい光景だと思うから、幸せになって欲しいなあ。あ、それとユーノさん頑張ってる。無限書庫に無償奉仕勤務をする事になったからその内に会うんだろうけれど、原作通りの人柄なのかな。優しいけれどなのはさんに気持ちを伝えられない人ってイメージが強いんだけど、どうなんだろう。恋愛相談とか楽しそうだけれど、見た目が子供だから出来ないよねえ。あんまり踏み込むのも失礼だし。

「ええ。なのはママも興味ないの？ ゼロが作ってるもの」

「え？ そ、それは、うーん」

ちよ、なのはさん。困った顔でこっちを見ないでくださいな。なのはさんも興味があるのか私がついているものに。女の子なんだから、その辺りの事には興味が無さそうって思ってたんだけど、デバイスを持つているもんねえ。機械の事には多少なりとも興味があるみたいで。それなら、後で案内しますよ。危ないモノとか触っちゃ駄目なモノがチラホラあるから、私が居ない時に入るのは絶対に駄目です。これだけは約束して貰わないとね。

「わーやった！」

「はーい」

やっぱり二人は似た者同士なのだ、改めて思う。ほらほら、折角淹れた珈琲と紅茶が冷めてしまいますから、一旦座りましょう。話はそこでも十分に出来るでしょうし。ずっと、と珈琲をすするのはさんの面持ちは何故か緊張しているような気がするんだけど。何事だろうと思いつつ決して口には出さずに世間話に花を咲かせる。

「あのね、ゼロ……」

珈琲カップを両手で包み込んだなのはさんが、遠慮がちになにかを言葉にしようとしているけれど迷っているみたいで。さて、どうしたものかなーと静観していると、なのはさんが瞳を一度ゆっくり閉じて再びゆっくりと開く。その瞳には迷いなんてものは存在していません。

「ヴィヴィオと養子縁組をしようと思うんだけど、ゼロはどう思うかな？」

どうもこうも良い事だと思う。自分の事ははるか頭上の棚の上に置いておくとして、子供には親が必要なんだし。真っ直ぐな性格で芯の強いなのはさんならばヴィヴィオさんを不幸にする事なんて絶対にあり得ないし。仮に金銭的に困窮しても、この二人なら笑いながら乗り越えられそうだしね。問題や心配なんてないと思うけれど、なのはさん自身は子育てとかした事ないから不安なんだろうなあ。ま、私もそうだから人の事なんて言えないけれどね。

「本当？」

ええ、本当に。それにお似合いだと思いますよ。なのはさんとヴィヴィオさんは。

「そっか、うん、そっかあ……」

少し天井を見つめるのはさん。

「なにかもんだいでもありましたか？」

「えっとね。ゼロに言っちゃうのはどうなのかなーって思うけれど、正直に言うね。ゼロの事を放っておいてヴィヴィオと一緒にするのはどうなのかなーって考えてて。色々と模索してたんだ。ヴィヴィオと一緒にゼロも引き取るのはどうかなーとかね」

んあ、そんなに深く考えてくれていたんだ、なのはさんは。うーん、気持ちはあるがたいけれど私は誰かの養子に入るつもりは全然ないんですよね。多分私にはずっと”スカリエツィ”の呪縛が付いてくるだろうし。そんなものを養子にと名乗り出てくれた人に背負わせる訳にはいかないですよ。だから気持ちだけで十分なんです。

それに保護責任者と後見人の人たちは雲の上の存在みたいな人の構成になっちゃっているし、困る事はないだろうから。だから私に遠慮なくヴィヴィオさんを養子に迎えてあげて下さいな。私も嬉しいですし、ヴィヴィオさんもこの会話をハテナマークを浮かべながら聞いているけれど、きつとなのはさんの子供になる事を望んでいるでしょうしね。

私には異論も反論も全くありません。

「そっか、そっか。後押ししてくれてありがとう、ゼロ」

なにか憑き物が落ちたみたいに張り詰めていたなのはさんの表情

が軽いものになる。嗚呼、そっか。私ってヴィヴィオさんの年下になるんだよねえ。だからかなあ、私を差し置いてヴィヴィオさんがきちんとした養子に迎え入れることをなのはさんが迷っちゃった理由って。申し訳ない事をしてしまったな、と思いつつ一度決めた事を思いとどまってしまうようなのはさんでもないから一安心。

それじゃあ、さつき約束した私の研究室に行きますかね。危ないモノがあるので散らかっている物を勝手に触ったら駄目ですよーとヴィヴィオさんに念を押す。こくりと頷いてくれたから大丈夫かな。「ゼロ〜ゼロ。これはなあに〜?」

あ、ほらヴィヴィオさん、約束したでしょう、危ないから勝手に触っちゃ駄目だって。ヴィヴィオさんやなのはさんはリンカーコアを所持してるんだから余計に危険度が上がっちゃうんです。

「あ、それ私も気になるかなあ。デバイスみたいだけれど、なんだろう? それにこれって質量兵器にならないのかな?」

ヴィヴィオさんとなのはさんが気になると言い始めたモノは”拳銃型魔法射出装置”だった。んーデザインそのものは地球産の拳銃そのものなのだからなのはさんの疑問はご尤も。でも中身は魔法由来の構造なので全然別物ですよ。

だから質量兵器保持者として捕まったりはしないのですが、家から持ち出して外で乱射なんて事をすれば当然逮捕案件です。一応非殺傷設定の魔法しか撃てない術式にはしているんだけど悪意を持った人が改竄してしまえば殺傷設定にできるだろうし、その辺りのプロテクト対策も確り行っておかないと。

「でもなんでゼロがこんなモノを作る必要があるのかな? リンカーコアを持つてるし、ちゃんとしたデバイスを作る方が良さそうだけれど」

そうですね、私を使うならデバイスを作った方が効率的な魔法運用が出来るでしょうね。けれどこれは私を使うものじゃなくてコンセプトは魔力を持たない管理局員の人たちの自衛手段もしくは攻撃手段ですし。

地球に住んでいたなのはさんならイメージしやすいと思うけれど、

銃を所持した警察官や軍人を思い浮かべてもらえばいいかな。局員の人たちだから一般の人たちよりは体力があるだろうし、なければないで訓練を受けて鍛えればいいし。組織的に群れを成して戦力を持つ事を目的としてる代物ですよコレは。魔導師の人たちより出来ることやれる事は限定的になつてしまふけれど、現場に出て身を守る術を持つていない現状よりは幾分かマシになるんじゃないでしょうか。「なるほど、ゼロが考えている事は理解したよ。でも、わざわざリッカーコアを持つていない人たちまで危険に晒す事になるけれど、ゼロはそれでいいの?」

それは管理局員という職に就いた時点で公の人になつていから、市民の皆様を守るのはその人たちの義務でもあるから多少なりとも覚悟はあるんじゃないのかな。

もちろん、やりたくないって人はやらなくていいだろうって思うけれど、その辺りを決めるのは管理局の上層部の人たちの考え次第だろうし。全員に配備命令が下ればそうなるだろうし、一部に試験的に導入するのならそうなるだけだし。

「ゼロはそれを理解して作つてるんだね」

一応は、ですけど。未来がどうなるのか解らないけれど、今のままの現状で管理局の人たちが魔法を使えないからと言って、魔導師の人たちよりも冷遇されてるのは見ていられないですしね。って、なのはさんたち魔導師さんを否定している訳じゃないんです。もちろん魔導師の人たちにも危険は何時でも付きまとう。けれど何も力を持たないまま現場に出なければいけない職員の安全ってどう確保しますか?

結局魔導師さん頼りになつて、戦力を分散させて倒れてしまふだなんて本末転倒で管理局の存在意義を問われてしまふ事になる。なら、どうするべきなのか。その私の答えが目の前のコレになるんだと思います。

「ちゃんと考えているんだね。でも、やっぱり心配かなあ」

兵器……ですからね。デバイスもですし、人殺しの道具である事に変わりはない。ただ魔法が当たり前に存在して普及している社会だ

からその意味が薄れている傾向がある気もするし。

それでもなにか現状を変えられるのなら、やりたくなるのが人情つてモノじゃないかな。余計なお節介になるのかもしれないけれど、その力を持つているのだし使わなきゃ勿体ない。採用されるかどうかも分からないのが現状ですし、難しく考えても仕方ないんだと思いますよ。

「ふふ、そっか。ゼロの気持ちは解ったよ」

それなら全力で応援するね、と言ったなのはさんの笑顔は流石原作主人公で、凄く眩しくて綺麗なものだった。それに試験で教導隊になにかお願いをする事になるかも知れませんが、その時はよろしくお願いしますとなのはさんに頭を下げたんだ。

「ゼロっ！　ゼロ！　ゲームがあるっ！」

嗚呼、残念ながらそれはゲームじゃないんですよね。なのはさんと私のやり取りに飽きたヴィヴィオさんが凄く嬉しそうに声を掛けてくれるけれど、ソレは試験品どころか発想段階の代物だからそう見えても仕方ないけれど。

「ゲーム機じゃないの？」

ヴィヴィオさんが興味を示したモノを一緒に見て私に問いかけるなのはさん。

「えー……。遊べないの？」

遊べないはなかなあ。小さい筐体は全くもって別物だけれど。んー……。でも試して貰って意見を聞くのも有りなのかも。なのはさんはその道のプロなんだし、って事でスイッチをぽちつとな。試行錯誤をしている最中で誰にも見せるつもりはなかったんだけど、いい機会なのかもと割り切り私はヴィヴィオさんとなのはさんに説明を始めたのでした。

第八話：無償奉仕勤務開始。

——ふへへ。……へへっ、うへへへへへ。

うはっ、やばいよココ。お宝の山だよ。奥に行くとき迷子になってしまふから行くな、と言われてるので行けないのだけれど触手魔法を伸ばせるだけ伸ばして奥に存在している謎の本を引っ張り出している。

内容不明の本の中身を確認して、ジャンルごとに分けているだけだから楽っちゃ楽なんだけれども、その内容が結構マニアックでツボを付けてくる物が多いから楽しい。アルハザードに関する記述の本もあれば、ミッド式ベルカ式でもない魔法体系が綴られた本、違法スレスレどころかド違法の医術本、魔法世界だつていうのに魂や幽霊の存在やオカルト話を書いている本もあるし。ほかにも色々私の好奇心をくすぐるモノが沢山あつて、手が止められない止まらない。

ちなみに私の相棒であるロゼさんは。私の下でスライムの姿のままでぷよんぷよんなクッションになってくれているから地べたに座つても辛くはない。それに『手伝います』と言ってくれてスライム状の先から細かい糸の様なモノを伸ばして本を手繰り寄せて中身を確認し、ぽいっとジャンルごとに投げ分けてくれていて私と一緒に作業してるんだ。

最初に検索魔法の術式を司書の人から教わって使ってみたんだけど、術式の相性が合わなかったようなので魔法構築自体に手を入れて術式を改竄してみたんだけど、これが功を奏したのか検索が大幅早くなったよ。

一時間も経つ頃には慣れてきていて、もう少し作業効率が上がられそうだったのでマルチタスクを併用させて更に処理できる速度を倍にしてみた。そうしてそれからまた一時間が経って、私に任せられた仕事の殆どが終わろうとしている。

「スクライア司書長……、あの子供一体なんなんですか？」

「そうですね。すごいスピードで溜まっていた内容不明の書物が……しかもアレ、あの子供用に考えた一週間分の仕事でしたよね？」

もう捌き切りそうですよ……ウソ……だろ……」

「……嗚呼今日、早く帰れるかなあ……それなら久しぶりだあ……感動で涙がでそう……」

「あ、あははははは。えっと、個人情報になる部分は言えないけれどもかなり特殊な子なんだ。期間限定ではあるけれどココで働く事になってるから、皆あの子の事よろしくね」

苦笑いをしながらユーノさんが時差出勤してきた職員の人たちに説明をしている。もう皆のその反応には慣れました、というかもう諦めました。異端児とかそんな感じに思われているのだろうけれど、それでもいいかなーって。

まあ、四歳児なのに無償奉仕なんてしてるし仕方ないと言えばそうなるのだろうけれど、ドン引きする反応を見せられればそりや傷つくってもんで。私がスカさんのクローンだって事は他の人たちに知らせない様になって気を使ってくれているから、無限書庫の人たちはユーノさんくらいしかこの事実を知らないし、他言無用とも言い含められているから他の人に言えないんだよね、ユーノさんは。ちよつと申し訳ないけれど、その方が静かに暮らせそうだから信頼できる人しか言わないようにしようかなーって考えてる所。わざわざ自分からトラブルを招きかねる事になっちゃいそうだしね。

で、今更なんだけれど今日は無限書庫に初出勤です。初めてだし道に迷ってもいけないからと言われてリンデイさんに通勤ルートを教えてもらいながら一緒にここまでやって来て、私が同僚の人から仕事内容を聞いているうちにいつの間にか居なくなってた。貴女なら心配ないでしょうから私は自分のお仕事をしてきますね、だって。

信頼されているのは嬉しいけれど、腑に落ちない事はリンデイさんの知人さんが居たみたいで『お孫さんですか?』と聞いてきたことだ。リンデイさんも悪い気はしなかったようで冗談で領いちゃったものだから、めでたいめでたいって私そつちのけで話が盛り上がったたし。事実はちゃんと伝えましょうよーと心の中で愚痴りながら訂正するのも面倒なので静観してた。

そんなやり取りがありながら、私の業務は始まって今に至るだけ

れど、そろそろ与えられた分の仕事が終わりそうだから、上司であるユーノさんの所に行って新しい仕事を頂くとしましょうか。一応四歳児という身を考慮してくれて、勤務時間は朝の八時からお昼の十二時までの四時間って決まってるんだけど終業時間まではあと二時間ある。楽しいし疲れてもないから、問題は全然ないので仕事、仕事。真面目な元日本人らしく働きましょう。そうして何か調べものをしていたユーノさんに声を掛ける。

「もう終わったんだね、凄いなあ。じゃあ少し休憩をしようか」

柔和に笑ってユーノさんが言ってくれるんだけど、たしか就業規定の書面には休憩時間なんて含まれていなかったはず。

「ゼロはもう四時間分以上の仕事をしてくれているからね、少しくらいはかまわないよ」

そう言っただけでユーノさんがおいでと手招きして案内してくれた場所は小さな休憩室で。その部屋の中には女性職員さんたちが既に何人か居てテーブルの上にはお菓子が沢山盛られていて。

「司書長、その子が例の子ですよね？」

「うわーちっちゃーい。かーわーいーい！」

「あらあら〜」

可愛いって言ってくれた事は素直に嬉しいんだけど、私はスカさんのクローンでスカさんそっくりだから可愛げなんて無いって思ってたんだけど。この女性陣の感性は良く解らない。

あれよあれよという間に、複数の女の人たちに囲まれて抱っこされたりハグをされたり、質問攻めを受けてた。ロゼさんはいつの間にか私の影の中に退避していて、ロゼさんの事を皆に紹介する機会を失ったな。と巨乳のオネイサンの胸の中で窒息死しそうになりながら事なきを得た。ふう。因みにそのオネイサンには五人の子供がおり、肝っ玉母ちゃんという言葉がすごくピッタリな人だった事を言っておく。

一通りもみくちゃにされた後はちよつとした歓迎会を兼ねた茶話会が始まって、仕事をこなしてた男性陣も途中で合流してわいのわいのと騒がしくなる。みんな司書なんて仕事をしている所為なのか本

が好きみたいで、話の内容の殆どはその事ばかり。おすすめの本とかを教えてもらいながら著作権切れしている作品のデータとかを譲ってくれたりしながら、色々と気を使ってもらってる。

「あ、そうだ。凄い勢いで検索魔法を使ってたみたいだけれど、どうやってたの？」

「それ、俺も知りたくない。確かゼロに教えたヤツって初心者用の検索魔法だったんだけど、なんであんな効率を出せるんだ？」

ん、ちよこちよこーと教えてもらった術式を自分向けにアレンジしただけなんだけれど。そんなに難しい事はしていないし、自分用に魔法をアレンジするのって皆さんしてるんじゃないや？」

「マジか……そんなことやった事ないな」

「だね。大抵、既存の魔法術式を使って皆そのままだよ。アレンジする人ってごく一部の物好きな人って聞いたことがあるなあ」

「そういうえば、司書長の検索魔法もあんまり見た事がない術式でしたよねえ？」

その言葉で皆の視線がユーノさんの方に一齐に向いてた。てか私もユーノさんの方を見ちやっただから人の事は言えないか。

「え、そうだったけ？ 僕はずっと前に自前で組んだだけだから、皆が使っているものと大差ないと思うんだけど……」

んー、私はユーノさんと同じように物好きな極一部に分類されてしまうんだろうか。そして自前で組んだって微妙に自慢が入っている発言だと思うんだけど、当の本人は気付いていなくて周りの人は呆れてたけれど、ユーノさんの人柄のお陰なのか職員の人たちは『この人なら仕方ない』みたいな顔をしてる。

「自分向けにアレンジってどうするんだろう？」

「それな。……やっただ事すらねえわ、俺」

そこからは検索魔法の術式についてみんなで話し合ってたあーでもないこーでもないって言ってる。皆の話は面白いものがあつて魔法術式の解釈って人それぞれで特徴がでるんだなーって。感覚でパッと組んじゃう人も居れば、きっちり公式を当てはめて構築する人、公開されている術式をそのまま使ってる人などなど。興味があつ

たので、魔法術式を見せて下さいってお願いしたらみんな気の良い人ばかりで私に見せてくれたんだ。ほとんどの人は初心者用の検索魔法よりも複雑な術式で構成された一般的に普及されているものを使用してた。見てみると、ところどころに術式の綻びがあったからそれを伝えて各々自分で修正してる。

あとは個人の得手不得手とか聞いて、苦手な物を補ったり逆に得意な部分を更に伸ばす為の術式を組み込む様に。無茶をして弄ると燃費が悪くなったり扱い辛くなるから劇的な変化はないけれど、使いやすくなったり検索が早くなったりして効率がちよつと上がってるはずだ。

「さあ皆、そろそろ仕事に戻ろうか」

ユーノさんの鶴の一声で皆は自分の持ち場へと戻っていく。その姿を見送りながらユーノさんに仕事を下さいと頼んでみると『今日の分というか一週間分の仕事が終わったんだけれどね』って苦笑いしながらコレをお願いできるかなって言われて新たな仕事を受けた。

やっぱり忙しいんだろうなこの部署なんて考えながら、私はさつきまで居た場所に戻って作業を再開。仕事内容は新しく情報として入ってくるデータの仕分け。管理世界で起こった事がリアルタイムで更新され情報として無限書庫に溜まっていくものだから、捌いても捌いても終わらない永遠地獄。

「マスター」

隠れていたロゼさんが影の中からぬつと出て来てしれつと私の下に潜って座布団替わりになってくれ、一緒に作業をまた開始して。時折突拍子もない内容の記事があったりして面白いんだよね。魔法の事だったり、事件だったり、どこそこの子供が粗相をしたとか、内容は多岐に渡る。残りの一時間少々はその業務に当たり今日の無償奉仕勤務を終えた。コツを掴んで来たので明日には更に倍の量を捌いてみようかと心に誓う。お昼を知らせるチャイムと共に私の下へと何人かの職員さんがやって来た。

「ゼロ、今日はもうあがりなんだよね？」

「?.....はい、そうですね」

お昼までの就業時間だから今日はこれでお暇するつもりだ。帰り支度をロッカーでしてただけだけど、どうしたんだろう。

「あのね、言いたい事があって……」

内容を聞いてみれば、さっきの検索魔法についてのお礼だった。皆口々に作業がはかどった、とか効率が悪くなったあたりがとうつて言ってくれるんだけど、私はアドバイスをしただけで組み直したのは本人なんだから。コツさえつかめば色んな事に応用できるし、後はその人のセンスや努力によりますって伝えておいた。また魔法術式を見てもらってもいいかなってお願いされたんだけど、アドバイスを送るくらいならいくらでもと思って軽く返事をしてしまった。この皆の真面目さが後に一悶着を起こすのだけれど、まあ仕方ないよね……。アハハ……。私の所為じゃない、きつと。

——ところでゼロって男の子ですよね？

そんな言葉が私が退社した後で言われていたらしい。いい加減性別を間違えるの止めてくれませんかねえ。

◇

——機動六課解散から四か月。

研究やら開発、論文に特許などに精を入れつつ、片手間に無償奉仕勤務で無限書庫へといったりきたり。スカさんたちが居る拘置所に顔を出してみたり——面会は裁判中なので無理だけれど——、更正施設組の皆に差し入れをしたりとそれなりに忙しく充実した日々を過ごしてる。

時々なのはさんが仕事で遅くなったりする事もあって、家にはヴィイオさんが遊びに来て一緒に外へと繰り出してご飯の買い出しやらウインドウショッピングをしたり、格闘技に興味が出て来たみたいで試合観戦に行ったり、遊びの時間も充実してた。あ、そうそう。元気印のヴィイオさんですが、なのはさんと我が家で養子のお話をした直ぐ後にstヒルデ魔法学院初等科に入学したそう。会うたびに楽しそうに学校の話をしてるから、きつと充実してるんだろう。

今日は今日で、スカジアさんの追加配備分の納入日なので私は地上本部へとお出掛けです。スーツ姿でビシツと決めたロゼさんに何故

だか抱きかかえられたまま受付に。用件を伝えてロビーで佇んで暫くすると、はやてさんが私の下へとやって来た。

「ゼロ、久しぶりやなあ。元気そうで何よりや。一人暮らし始めた言うてたから心配で様子見に行きたかったんやけど、忙しゅうて今になつてしもてん、ごめんなあ」

眉をハの字にしながら謝るはやてさんにわたしは気にしないで下さいと伝える。はやてさんが忙しいのは百も承知だし、一人暮らしといても家にはロゼさんが居るし、皆心配してくれてて私の様子をちよちよこと見に来てくれるから。寂しい思いとかは全然してないし、毎日が楽しいから充実してるんだよねえ。

「ご飯とかちゃんと食べとるん？ 掃除も一人じゃ大変ちがう？ 困った時は言うてえな、出来る事があるなら手伝うし」

はやてさんも小さい時は一人で苦勞してたから多分心配なんだろうなーと思いつつ、あの家での生活に不便もないし困ってもないんだけれどその時はよろしくお願いしますと言っておいた。

そんなやり取りもそこそこに、案内された場所は以前にも来た事がある例の部屋で。そう、地上本部内にある訓練所だ。周りを見渡すと今日の主役であるスカジアさんの改良版は既に運び込まれており、先代スカジアさんと共に並んでいる姿を見るとちよつとだけ誇らしい気分になる。自分で発案して制作から売り込みまで行ったものがこうして役に立って認められたんだから、ちよつとくらい喜んでバチは当たらないよね。

今日はスカジアさん改良版の性能テストと御披露目会みたいなものなんだけれど、実の所先代スカジアさんとの差は余りないんだよねえ。ぶつちやけ耐久性や稼働時間を引き延ばしたくらいで、目新しいモノは先代では実行できなかったコマンドを少し組み込んだくらいでそんなに変わってないし、管理局から依頼されたスカジアさんに追加して欲しい機能をちよちよこーつと付与したくらい。欲を言えば、なのはさんの砲撃ぐらいの威力を撃てるスカジアさんにしたいんだけれど、こんな事をすれば過剰戦力としてみなされるだろうし燃費も唯ならないことになつちやうから自重した。

スカジアさん追加配備よりも真の目的は別の事だから、この説明会は余興みたいなものだ。だからと言って手を抜けばきつとそれは分かる人にはすぐ分かっちゃうからやらない。以前と同じように真面目に説明をして先代スカジアさんとスカジアさん改良版の違いと利点と欠点を上げて、今回初参加の人にもわかりやすいように配慮もしなきや。

色々と言わなきやならない事はあるんだけど、運用ノウハウのデータは地上本部の方が蓄積してあるだろうから、その辺りはもうお任せしても良いだろう。前回にも参加してた人や、ずっと先代スカジアさんのメンテナンスをしてくれてた人たちも参加してて質疑応答は濃いやり取りが出来たと思う。

そうしてお披露目は終了して、本来の目的である人物に接触を図ろうとしたんだけど、なんでか向こうから私の方へやって来た。

「君があのお方の言っていた子供か……」

あのお方って言うのはもちろんレジアスさんの事だ。私の目の前に立つ人は地上本部のトップであったレジアスさんの後任となった中將さん。レジアスさんよりもちよつと若くてあんなに恰幅も良くないけれど、制服越しに筋肉がちゃんといっているのは分かるし、叩き上げの人と言われているそうさ。というか、レジアスさんから私の事をどう聞いていたのかすごく気になる所ではあるんだけど、それが目的じゃないからポケットからケースを取り出して名刺を渡す。

「……その年にして既に起業しているのか。やれやれ、あのお方が驚く筈だ」

溜息を吐き二、三度頭を振ったレジアスさんの後任である中將さんは放っておいて、話が進み辛くなりそうだから本題に入らせてもらおう。

レジアスさんがあんな事を仕出かしたお陰で本来なら本局や海の息が掛かった人が後任に就きそうなものだけれど、そうならなかったのはレジアスさんの息がまだ残っている証拠。その事実を良い事に、私が開発した”拳銃型魔法射出装置”を地上本部に売り込む算段だ。質量兵器アレルギーのトップだった最高評議会の面々は居なくなっ

てしまったし、以前よりも旧時代的な考え方の人は減っていると思われる。それならば魔導師に頼らない新たな戦力をと考えて私が作ったのがコレなのだから。そして売り込みを掛けるのなら一番手っ取り早い人物って、組織の一番上に立つ人が良いよねーって事でこの人に目を付けた。

「なるほど、場所を変えよう。立ち話す内容でもあるまい」

本当ならアポイントを取って会うのが筋なんだけれど、中将さんは私に興味があるのか時間を空けていたようだ。周囲に人が居るからあまり聞かれない内容だったし有り難い申し出を素直に受け取る。別室へと通されて豪華な革張りのソファーに腰かけて、ロゼさんに持つてもらっていた”拳銃型魔法射出装置”をジュラルミンケースから取り出してもらって彼へと向ける。

「これは……質量兵器……。まさかデバイス登録をして使用しろ、と？ 笑えぬ冗談だ。君も知っているだろう、銃そのものは確かにデバイス登録できるが鉛玉や火薬も使用制限がある。そんなものを仮に大量配備したとしても全く意味のないものになる」

ええ、もちろん知っていますし、鉛玉も火薬も使用制限されているのは承知です。管理局法を犯すような事は致しませんし、使用者を危機的状況に追い込む気もない。驚いている中将さんにきちんと説明しましょうか。

見た目は確かに質量兵器そのものですし、装置の外装は金属で構成されているものだからそう見えるだろうけど、中身は魔法由来のもので質量兵器には定義されないモノにちゃんとなっています。銃口もあるけれど、そこから射出される弾は金属で出来たものじゃないし、弾丸として射出されるエネルギーも火薬ではなく魔法ですし。

「これを魔導師たちに配備させろ、というのかね？」

もちろんソレでも良いでしょうけど、本来の目的はリンカーコアを持たない一般局員の人に向けて作った代物で、引き金を引くだけで女性でも撃てるってのがコンセプトだから。その辺りの事をキツチリと説明して、コレを作った経緯と目的説明。おっかない視線を私に向けてる中将さんの心中や如何に。

「しかし本当にそれで魔導師に勝てるのか、と疑問なのだが……。犯罪者にも魔導師は居る、そういう輩にはどう対処する？」

確かに。でも一人で立ち向かう訳ではない。管理局は組織だ。組織として治安を維持し市民の皆様を守るという大義名分がある。

だからこそ、その強みを利用しなきゃね。局員の魔導師一人と、リカーコアを持たない局員が百人集まりコレを装備したとすれば、どうなるのか。流石に高ランク魔導師には敵わないだろうけれど、低ランク魔導師や高ランク魔導師の足止めくらいなら運用方法次第できつとどうにか出来る。街の治安維持という意味合いならば、必ずしも魔導師でないと駄目だって事はないだろう。コレを武装した局員が巡回できたりするのだし、足りない人手に猫の手くらいは差し伸べられるだろうから。

「なるほどな。だが、その為の予算は？ 人材の育成はどうするのだね？」

予算は流石に私ではどうにもなりませんね、最初は少数で構成された実験部隊でも創設してはどうでしょうか。コレを装備されるための人材の育成は管理外世界の軍隊を参考にすればいいでしょうし。その為の文献とかは無限書庫で漁ってレポートにまとめてあるから教導隊や陸士訓練校の教官たちにも任せれば出来ると思う。というよりも訓練何て射撃訓練だけであとは体力の問題になるだろうし、難しく考えなくてもいいんじゃないのかな。

「では、もう一つだ。武器を持つ、という事は局員の命も危険に晒される、という事だ。攻撃をする手段を得ても身を守る術がない。そんな局員を私は前線に立たせる事など出来はしないよ」

そう言い切る中将さんは本当に現場からの叩き上げの人なんだろうねえ。レジアスさんもきつと彼と同じセリフを言うに違いない。キャリア組や技術系から出世した人ならこういう言葉は中々でないから。目先の利益に囚われて飛びつく可能性の方が高いし、下っ端局員なんて使い捨ててくらいに考えていそうだし。もちろんすべての人がって訳じゃないだろうけれど。

心配性な中将さんを見越してちゃんと対策は取ってあるんだ。簡

易バリアジャケットなるものを作っておいたのだから。武器を所持するのに防具はない状態っていうのはナンセンスだよな、と思い至って作った試作品。数か月前、難航していた開発品だけれどどうにか試行錯誤をして、漸く形になった品なんだよねえ。

常時魔法を展開していると燃費がとんでもない事になってしまったから身体全体を守るというよりも、胸や腹部の急所部分を守るものにしてみた。何もないよりマシだし、この世界は治癒魔法っつー便利なものがあるし。防御魔法発動も手動にして、任意に発動するようにして出来るだけ魔力消費しないように努力してみたけれど、そのうちヒューマンエラーとかポカミスとかでスイッチの入れ忘れが問題に上がるだろうから、何か対策を施さないと。でもまあ、その辺りは地上本部の人たちの意見も取り入れて改良していければ良いなって。一人で考えているとどうしても煮詰まっちゃうし、偏るしね。

中将さんにはこの事もきっちり伝えた。隠して後で大問題になってもいけないし、そんな事をしちやえば”信頼”を得られない。私は売り手で、買い手は中将さんになるんだから、お客さんに不誠実な対応なんてした日には、次のご来店を望めないもんね。

——世間に浸透している常識を覆すって難しい。

魔法が当たり前に存在し、魔導師が存在しその力を駆使して平和を守る。その当たり前が崩れることはないのかもしれないけれど……。私の作ったコレが何時の日にか陽の目を見られる事があるのなら、それは管理世界が半歩でも進んだ証拠、なのかもしれない。

第九話：SLBをパクってみましょう。

——面倒事を頼まれたなあ。

話は数時間前に遡る。

目の前には私の保護責任者であるカリムさんの上司さんと後見人である聖王教会上層部の三人の姿が。何処から嗅ぎつけたのだろう、私が管理局に新兵器を売り込んだ事を。彼等から聞いた話をすごく簡単に意識すると、管理局だけではなく聖王教会にも何かをくれて事なんだろうけれど正直面倒くさいというかなんというか。

頼まれた内容については、聖王教会を創設した人物の”魂”の再生、とでも言えはいいだろうか。もっと簡単に例えるとするなら霊験あらたかな”イタコ”の様な事をやりたいという事だった。その他にも医療魔法や医療技術の向上もお願ひされたけれど、本命は前述した魂の再生の方だろう。流石に死者蘇生は管理世界では禁忌とされているから出来ない、でもそれに近い事をやりたい。なら、どうするのか。

肉体ではなく精神だけ蘇らせれば管理局法に引掛からないのでは。

と言うのが彼らの考え方みたい。永続的になんてのは管理局から目を付けられそうだし、都合の良い時だけ呼び出せないかとも言われたいけれど。流石にこんな台詞をストレートに言えないから遠回しに伝えてきたけれどね。

依頼が依頼だけに、考えさせて下さいと返事を濁して帰ってきたのだけれど、まあなんだろうね。彼等の言い分も解らなくも無い。聖王教会の教義は割と自由で束縛するものは少なく、それ故に管理世界で広く人々に信仰の対象として布教しているのだから。

逆に言えば、確りとした教義ルールがないのと同義なんだけれどね。それでも何百年と続く宗教団体であるから力はあるし、市民の皆様からの信頼も厚いし、管理局にも影響を与えられる存在だから管理局に対を成すデカイ組織なんだよね。派閥もあれば、権力抗争も勿論あるのだろうし。それに巻き込まないでよと言いたいところだけれど、それを

言えないのが私という存在なんです。だって一応保護責任者と後見人になって貰って、ミッドチルダでの生活を保障して貰ってるんだもん。口が裂けても言えない、彼等の狗です。

まあ、そこまで卑屈に考えなくても良いと思うけれど、こんな無理を言われれば悪態をつきたくなくなってしまふのは許してほしい。

スライム状態のロゼさんの上で胡坐をかきながら、この件についてお家のリビングで暫く考えてた。色々と試してはいるんだけど全くうまくはいつてないから煮詰まっちゃってて頭を抱えている状態なんだけけれど、打開策なんて見つかる訳も無く。テレビから流れる光と音をぼーっとしながら無為に時間が過ぎていた。

しっかし魂の再生なんて出来るモノなのかな。つか無理だよ、無理無理。だってもう死んじやってるんだもん。黄泉の国から呼び出せとでも言うのだろうか。聖王教会に日本の宗教的な考え方は無さそうだし、何をしたいのやら。

「ヴィヴィオさんの件もあるし、”記憶継承”なんて厄介極まりないモノが存在しているのも知っているから下手に関わりたくない気持ちがあるのと、そういう人たちを自分の手で増やしてしまうのは頂けない。それなら医療系の魔法や医療技術の向上の方に力を入れますかねえ。魂の再生の件については有耶無耶にして煙に巻いちゃおう。いくらスカさんのクローンと言えど、無理なものは無理。むくくりだくくよおくってね。」

「マスター」

「どうしました、ろぜさん？」

「……大変心苦しいのですが、お願いがあります」

スライムさんの姿からいつもの女性の姿となるロゼさん。今は家で二人つきりなのでロゼさんは裸だ、裸族だよ。スレンダーで巨乳で美人の裸。

男の人なら喜んでるんだろうけれど、女性の裸なんて大衆浴場とかに行けばロリから熟女、果てはお婆ちゃんまでいつでも見られるし、ロゼさんの裸は慣れたしこのヘンテコな状況をなんとも思わなくなってる自分が居る。

それはさておき、なんでか床の上に対面で正座している奇妙な光景になつてるんだけど、ロゼさんが私にお願い事があるなんて超珍しいから、ちゃんと叶えられるものなら叶えてあげなくちゃ。いつもいつも高い所にある物や重い荷物を持つてくれたりしてて、迷惑を掛けてばかりだし。私の事を第一に考えてくれて、私の事を最優先してくれるロゼさんだもんなあ。

「……」

何だろうと思つてロゼさんが伝えてくれるのを待つてるんだけど、
ど言い辛そうなんだよね。

「……えっと、わたしにはいいづらいこと、でしょうか？」

まさか私に愛想を尽かして、使い魔契約を解除したいとか……。今までたくさんのお願いをしてきたし、それが嫌になつたとか……。少し考えただけでも目の前が真っ暗になつていくし、涙が零れ落ちそうになるんだけど……。身体が小さい所為か感情の余裕も小さいんだよね。ふとした事で泣きそうになる事が多いんだな。大人なら泣かずに我慢出来ていた事が、感情に流されて泣いてた事が何度かあるし。巨大二足歩行兵器が爆発四散した時とかがそうなんだよね。恥ずかしいから皆の前では必死で隠しているんだけど、今はロゼさんと二人つきりだし気が抜けちゃつてたから余計に自分の感情に振り回されやすい状態になつちやつてて。

離婚届願いならぬ使い魔契約破棄願ひ……。洒落にならないし、どうしよう。

今までロゼさんに頼り過ぎていたツケが回つて来たんだろうか。そう思つた瞬間、涙腺が決壊しちやつた。

「マ、マスターっ！ 何故泣いているのですかっ」

「……ろぜさんとかいまけいやくをかいじよするなんて ぜったいにいやです……」

ロゼさんは服を着ていないから裾を掴んで逃げられない様にすることが出来なくて、仕方なくロゼさんの右手の中指を掴む。

「えっ？」

「いやです……」

「い、いえ、マスター？」

「……いやです」

拭っても拭っても止まらない涙。止めたいけれど止まらないものは仕方ないし、涙の次は鼻水まで流れ始めるし。人様に見せられる顔じゃないだろうなあ、絶対。なんて考えていたらロゼさんにひよいつと抱きかかえられて膝の上に乗せられた。

「マスター。私がマスターと使い魔契約を解消するなんてあり得ません。私は貴女の手によって生まれ、契約し側に仕え、貴女と共に死ぬ。それが私です」

嬉しい言葉だけれど、同時に悲しい言葉でもあった。ロゼさんはそれで良いのかなって。

「もちろんです。私は貴女の使い魔なのですから。それが存在意義であり存在理由です」

きっぱりと言い切るロゼさんの瞳に迷いはない。確かに私の使い魔ではあるけれど、ロゼさんはロゼさんだし。自分の意思を持っているのだから嫌な事は嫌だと言って欲しいし、そのくらいの我儘は良いと思うし、私がやっちゃいけない事をしていけば窘めたり諫めたりして欲しいんだよね。ストッパーが居ないと駄目人間に直ぐなっちゃいそうなんだもん。

契約破棄をする気はさらさらないし、ずっとロゼさんとは仲良しでいたいし。でも、考え方の違いや捉え方の違いで喧嘩とかしちゃってモいんじやないのかなって。主従関係だけれど、それだけだと楽しくないし面白くない。対等でいたいと思うのは私の勝手な気持ちなのかな。

それにこの先長い時間を共に過ごすだろうから、嫌われてしまう可能性だってあるんだ。負の感情を持ったまま使い魔契約を継続しても仕方ないしその時は潔く破棄しなきゃね。私は嫌だし凄く哀しいけれど。私の気持ちを全部ロゼさんにぶちまけた。契約は破棄したくないし、これからも一緒に居たい事。駄目な事をしている時は止めて欲しい事。

ロゼさんが考えている事を教えて欲しい事。我慢とかもして欲しい

くないし、我儘だつて言つて欲しい事。主従と言うよりも対等な関係
を築きたい事。他にも色々。感情がリンクしているとはいえ完全に
理解出来る訳じゃないから、きつと勘違いとか思い違いだつて今日み
たいに起こつちやうだろうし、ね。

「やはり私のマスターは貴女しか居ません。貴女だからこそ側に居
たいと思えるのですから」

綺麗に笑つたロゼさんは私を膝の上に乗せたまま抱きしめてくれ
た。胸に顔が埋もれてロゼさんの心臓の音が私の耳に届く。それは
とても心地よくて温かくて。だんだんと瞼が重くなつていつて、抗う
術を持たない私はそのままロゼさんの胸の中で眠りに就いた。

目が覚めると、自室のベッドの上だった。ベッドサイドにはロゼさ
んが人の姿のまま腰かけていて、何かの本を読んでいる。寝返りを
打つて目が覚めた私に気が付いたのか読んでいた本から視線を外し
てこちらを見る。枕元の時計に目をやると寝てた時間はそんなに長
くはないんだけど、話を折つちやつたのは間違いなし途中で寝
ちやつたのは駄目だよね。

「ごめんなさい、ろゼさん。ねてしまいました」

大切な話をしていたというのに、幼い身だと我慢とか無理が利かな
いのでこうして時々やらかしてしまう。ロゼさん相手だからまだ許
されている節があるけれど、他の人には見せられないなあ。

「いえ、構いません。こここの所のマスターは忙しいご様子でしたの
で」

そういえばロゼさんが何か私に伝えようとしてたけれど私の盛大
な勘違いで妙な方向に話が逸れてしまって、結局なんの話だったのだ
ろう。気になるし、そのままにしておく訳にもいかなから素直にロ
ゼさんにさつききの事を聞いてみる。

「……言い辛いと言いますか、面倒な事を頼もうとしているのかも
しれません」

で、ロゼさんの話を聞いて要約すると。

——なのはさんに勝ちたい。

だ、そうだ。

聖王のゆりかご内で受けたデイバインバスターがどうにもロゼさんにトラウマを植え付けちゃったみたい。七発分のカートリッジとなのはさん自身の魔力を乗せたバスターを防げただけでもロゼさんは凄いし十分に強い。

ナンバーズの武闘派の皆とも対等に戦えていたし、攻防ともに十分な能力を持つている上に近接、中距離、遠距離どこポジションからでも対応できるのだから。それなのに満足していないだなんてロゼさんはどこまで強くなる気なのだろうか。面倒な事というよりも超大変な事のような気がする。なのはさんに勝つ方法なんて。まあ、それはさておき。ロゼさんのその意思や勝ちたいって気概は大切なものだから最大限の努力はしなきゃね。

「私にはマスターを守り切る力が足りません」

と、きつぱりと自分の戦力を分析するロゼさんはしょんぼりとした顔をしているんだけど……いやいやいや、ロゼさんは十分に強いですってば。目を付けてしまった人が冗談みたいに強い人だから敵わないのは仕方ない。なのはさんはなんてったって主人公属性が付与されているんだから負けフラグが立ち難しい人だもの。そんな人に勝とうってというのが無茶つてもなんだけけれど、強くなりたいうってロゼさんの意思を無碍にする訳にはいかないしどうしたものか。

ロゼさんの頭の中では対なのはさんや、対フェイトさん、対はやてさん+ヴォルケンリッターとのシミュレーションが何度も繰り広げられているみたいで、勝てる方法が浮かばないんだって。

打開する方法が何かあれば良いんだけど、どんなものがないのやら。割と真面目な相談だから適当に流す訳にはいかないんだけれど、私は魔導師戦に詳しくないし、戦闘訓練とかもしてないし。ロゼさんにアドバイスを送るとしても素人が口を出して良いモノじゃない気がするしなあ。どうしよう。

「ひっやつわぎ……とか」

あと決め技とか。アニメの”リリカルなのは”には最後には主役級のキャラの皆それぞれ大きい魔法を撃ってるし、ロゼさんにもあってもおかしくはないのかな。でもどんなのが良いのかな。

「確か、タカマチ一尉がゆりかごの内部で最後に撃とうとしたあの収束魔法……」

ヴィヴィオさんに撃とうとして私が慌てて止めてしまったので未遂に終わったスターライトブレイカーの事ですnee。そういえばロゼさんは収束魔法を習得してませんでしたか。ロゼさんは万能型の魔導師さんなので得手不得手は少ないから努力次第でどうにかなるんだろうけれど、収束系は使いこなすのが難しいといわれている魔法だから、ロゼさんの希望を叶えて上げることが出来るのかどうかは私が組む予定の術式次第。

未遂に終わったとはいえ魔法を発動させている所を見ていたから、なんとなく術式の理解はできる。できるんだけど、なのはさんが自分で組んだものだからスターライトブレイカーそのものを完全にコピーして私が組み上げることが不可能。

だけれど方法はいくつかある。

魔法術式も組み上げてないし、今すぐ使うのは無理だけれど詳しく調べればどうにかなるかな。なのはさんのスターライトブレイカーをそのまま使う訳でもないから、収束魔法についての記述をネットで漁れば見つかるだろうし。

もう少し踏み込みたいのなら無限書庫で探せばいいもんね。無償奉仕勤務中だし、司書の資格もあと少しで取得できるから堂々と魔法について調べられるようになるんだよね。やっててよかった。取り敢えず、基礎部分だけでも組んでおこうと研究室に移動して魔法術式を組む為のシステムを起動させて椅子に座る。部屋にはロゼさんも来ているから一緒に術式を組まなきゃねえ。ロゼさんが使うものだから、ロゼさんが使いやすいように組まないと。

——へくち。

ずずつと鼻をすすって、タイピングを再開するんだけど今の時点で収束魔法の欠点がいくつか。距離減衰が大きいし、装填までに時間が掛かる事や魔力消費が多く連発が出来ない事。この辺りが問題になって、文字通り最後の一撃としなければならぬから、使いどころの判断の難しさという点もあるかな。戦闘慣れしていたり、後詰の仲

間が居るのなら気にしないまま撃てるだろうけれど。

「しかし、確実に止めを刺すという意味では理想的かと」

あの……物騒な台詞を言わないで下さい、ロゼさん。ロゼさんを殺人者や犯罪者にさせる気はないんですから。いやまあ、更正施設を出る前に魔法を使用するならば必ず”非殺傷設定”を付与する事をロゼさんと約束したんだけど、だ、大丈夫かなあ。もう一度確認した方が良いかな、うん。

そんな私の心配を余所に、モニターに浮かぶ術式の羅列をロゼさんと二人で眺めながら、あーでもないこーでもないって言いながら消したり書いたり、理論を追加してみたり要らないモノを削いでみたり。考える事自体は楽しいから苦にはならないんだけど、拘りだすとトコトンまで突き詰めようとするのがスカさん譲りの悪い癖で。勘違いして泣いてしまったのがお昼ご飯の少し前、それからお昼ご飯も晩ご飯も忘れてずっと術式を構築してた。

嗚呼、不味いなあ。保護司さんにご飯のメニューとちやんと作って食べているか確認の写真を送らなきゃならないんだけれど……。うーん、今日は仕方ないからお昼ご飯の画像はインターネットで拾った画像を加工して送って、夕食はおそくなつたけれどキッチンと作るう。

とりあえず収束魔法と呼んでもおかしくはないモノが出来たんだけれど、試し撃ちを何処でやろうかなあ。そこから術式の甘い部分や上手く構築できていない部分の手直しとかをしなければならぬし、何時何処でやるべきか。

まだ公共魔法練習場は完成していないからお家の庭でブツパしちやえばまた怒られるし。スターライトブレイカーもどき(仮)と”拳銃型魔法射出装置”の威力とじゃ桁違いのものになるはずなので怒られるだけじゃ済まない気もするし。ちよつと時間が掛かるけれど公式魔法練習場に行ってそこで試し撃ちをしましょうか、とロゼさんに伝えた。

「マスター、いつ行きましようか？」

と。なんだかしつぽをぶんぶんふってるロゼさんの幻が見える。

嗚呼、うん。これ一週間後にだなんて言えば確実に気落ちするロゼさんが目に浮かぶから、明日早起きして無限書庫へと出勤する前にどこかの公共魔法練習場を借りましようかね。その時間帯なら空いているだろうし、その方が危ないだろうし。そうと決まれば早くご飯を済ませて、お風呂に入って一日の疲れを落としてベッドにインしなきゃ。

手早くパパツと、とまではいかないけれどなるべく早くご飯を作って食べてお風呂そして歯磨きにトイレを済まして目覚ましをセット。念の為にロゼさんに目覚ましのアラームと同じ時間に起こしてもらう様をお願いして、今日という日に幕を閉じた。

◇

翌朝、早朝。太陽が昇る頃合いにはお家を出て、お家から一番近いけれど遠い公共魔法練習場へと足を踏み入れてた。平日の早朝だから人の姿はまばらで、試し撃ちにはもってこいの環境かなあ。誰かが怪我をしちゃったりすると大変なので、結界を張るけれどあんまり慣れていない魔法だからきちんと使えるかどうか心配だったりするんだけど、うつきうき状態のロゼさんを見てると失敗できないなあ、つてプレッシャーが。もちろん術式の構築の方も心配だったりする。確認は何回もしたし、撃つまでには至ってないけれど何度か少量の魔力を通して詰りがないかどうかも確かめた。

でも何が起こるか分からないから。科学も魔法も、ね。でも迷っていても仕方ない。試さなきゃ始まらないし、此処は覚悟を決めなきゃね。それにこれで完成って訳でもなくて不具合を洗い出してから、さらに高みを目指さないと。

きん、と耳に音が響き何かがずれるような感覚。

「はじめましようか、ろぜさん」

周辺に影響がないように結界を張ってロゼさんに声を掛ける。

「マスター、了解です」

その言葉と同時にロゼさんの足元には黒く丸い魔方陣が現れて、術式が発動される。取り敢えず今日はロゼさんの魔力と周囲に自然に存在している魔素を利用して撃ってみようって話をしてるんだ。ど

のくらいの威力があるかどうか分からないし、五割程度の力でつて話もしてる。最初から全力全開は怖くて試せないもの。

すつと一つ深く息を吸い込んで起動詠唱が始まる。基礎術式は私が組んだんだけど、その発動に関してはロゼさんの魔法センスや感性とかが色々加わるから、同じ術式を使用しても全く同じ威力や効果を得られる事はない。要するに魔法を使用する術者の得手不得手やらセンスやら努力やらが加味されて、同じだけれど同じじゃない魔法になるんだよね。不思議だ。

「群衆の影の中 秘密裏に事は成り 憎悪の声が歓喜する」
んー、あれ。おかしい……。

「さあ 逸脱の民を撃ち 逃亡の夢すら砕け」

なーんで、そんな物騒な詠唱になっちゃってるんですかー！
参考にしたのはなのはさんのスターライトブレイカーなんだから、もつとこう正義の味方らしく明るいものにしましょうよう。そんな言葉だとお先真つ暗な未来しか見えないじゃないですかあ。

「遍し潰せ」

なんで悪そのものみたいな、暗黒面に落ちちやってるんですかあ。
私、私の所為なのか、ロゼさん、私の暗黒面に引つ張られたのおお。
スカさんの所為もあるのかああああ。というかその詠唱だとミナゴロシじゃないですか、気の所為ですか。誰か気の所為だと言って下さい。

「Dark light breaker」

つ。ロゼさんの超問題のある魔法詠唱はさておいて本来の威力の五割しか出力していないというのに、凄いな、コレ。身体が余波で押し飛ばされそうになるから、周りに生えてる一番大きな樹に触手魔法を発動させて巻きつけて飛ばさないように固定しているんだけど、根っこからひっくり返りそうで怖い。

でも結界魔法はきちんと機能しているみたいで、外に漏れている様子は無いから一安心。これさ、外に居る人が知ったらビビるだろうね。現実逃避したい気分になるけれど、色々とチエックしとかなきゃいけない事があるので気を逸らす訳にはいかない。術者であるロゼ

さんの肉体的、精神的負担軽減も試みなきやいけないし、威力が足りないなら足しこまなきやだしねえ。

「これは……凄まじいですね」

です。ねえ。なのはさん、こんなものを放つつもりだったんだ、未来の娘に。映像越しで見ると直に体感するとスターライトブレイカーの凄さがまじまじと解つてしまう。これは本当に奥の手だよねとロゼさんと話しながら、一応ロゼさんの必殺技リストに追加される事となったのだけれど、使い道……あるのかなあ。

私の心配を余所にロゼさんはロゼさんでスターライトブレイカーもどきである”ダークライトブレイカー”がいたくお気に召した様子で、喜々として改良を重ねようとするものだから、さあ大変。止めるにも止められず、相談されると答ええない訳にはいかなので通称DLBは早々にして完成しちゃいました。しかも私の悪癖が発動して、周囲の魔素と戦闘で散らばった魔素、そして私の魔力もついでに吸い取る仕組みにしちゃった。

暫く私は戦闘に参加できないから後方支援のみの予定なので、魔力が底をついても状況的には不味い事にはならないだろうし、オン・オフの切り替えも出来るから。威力をもっと簡単に増やしたいなら、デバイスを作ってカートリッジシステムを組み込めば更に倍ドンが出るんだけれど、この事をロゼさんに教えちゃうと多分止まらなくなるだろうから、ロゼさん自身が気が付くまで黙っておこう。その方が世の中の為だし私の精神衛生上も平和になるからね。決して現実逃避なんかじゃない。

「試し撃ちがしたいです……マスター」

で、DLB。試し撃ちから三日後には完成して良い事なんだけれど、試す相手がいらないからロゼさんがちよつと不機嫌になってた。もともとロゼさんはナンバーズの武闘派の皆と戦闘訓練をたくさん積んできているから、身体を動かす事や魔法を使って魔導師としての腕を磨くことは楽しいのだろう。JS事件からは、拘置所生活の後に更生施設で生活。そして機動六課での一ヶ月間はあまり運動自体していないから、もしかするとストレスが溜まっているのかなあ。

それなら早く我が家の敷地内に建設中の公共魔法練習場と格闘技リングの建設完成を急いでもらおうか、どうしようか。あんまり業者さんのお尻を叩いて急かしちゃうと不良施工になっちゃいそうだし難しいなあ。模擬戦できる相手が簡単に捕まれば良いけれど、生憎と魔導師の知り合いは居ないし、居たとしてもなのはさんたちだから。忙しいだろうし、我儘で簡単にお願ひするわけにもいかない。お願ひしちゃうと二つ返事で言葉が返ってきそうだから余計に、ね。

仕方がないので、試し撃ちがしたいというロゼさんの気を逸らす為に、ちよつと違う魔法にも手を出して戦術の幅を広げようと誤魔化しながら。その効果は多少はあったのかロゼさんが興味を示してくれたので助かった。ロゼさんは魔法指南書を読み込んで自分で考えて魔法を使えるようになった訳なんだけれど最近のロゼさんはダークライトブレイカーを私と一緒に構築したのが嬉しかったのか、他の魔法もやたらと私と一緒に組みたいって顔には出さないけれど身体に表れてる。毛並の良い大型犬がしっぽをぶんぶん振ってる姿が幻視できるので。そして私もそんな姿のロゼさんに弱いのだし、お互いにどうしようもない主従なのだろう。

心の中で愚痴りつつも、私に甘えてくれるロゼさんは好きだし魔法術式を組み上げることも楽しいから全然問題はない。ロゼさんと私で喜々として作業をしているから止めに入る人が居なくてちよつと不味いかなあ。前にお昼ご飯の画像を誤魔化したヤツは保護司の人から怪しまれてたし。うーん、流石にこの生活が続けられなくなるのは不味いから、きちんとした食生活を送らなきゃね。

「いきましようか、ろぜさん」

「はー」

そうして今日も、無限書庫へと出勤時間の前に家から一番近くて遠い公共魔法練習場にロゼさんと二人仲良く歩いて行くのだった。

第十話：例の二人。／なのはさんvsロゼさん。

無限書庫でのお仕事から帰宅してから一時間くらい経った頃だった。来客を告げるチャイムに今日は誰も来る予定はないから、新聞の勧誘だろうと決めつけてロゼさんにインターフォン越しに対応をお願いしたんだけど、どうやら違うご様子。私に用があったようで、誰かとロゼさんに聞いてみれば意外な人物の名前が上がって驚いた。重々しい雰囲気息を飲む。

——家はそんなに広くないから、大柄な男性が二人訪れれば狭いなあ。

というかむさ苦しいなあ、って方が本音だったり。だって、だってね。私の対面に座るソファーにはレジアスさんとゼストさんが居るんだよ。この光景をむさ苦しいと言わずして何と云うのだろうか。手土産にクラナガンで有名な洋菓子屋さんのケーキを頂いたのだけれど、レジアスさんがケーキの箱を幼女に渡すって絵面を想像すると可笑しくて可笑しくて、噴き出さなかった私を褒めて欲しいくらいだ。しかも二人とも饒舌って訳でもないから、自然と沈黙の方が多くなるし。レジアスさんと一緒に家に来たオーリスさんはこの状況に慣れているのか素知らぬ顔をしているのだから、肝の太い人だよ。でも気を使ってレジアスさん達と一緒に来たのだから有り難い事だよね。知ってる人達だけれど、密室で男性二人と私だけってのは色々問題がある気がするし。もちろんロゼさんが居るから間違いなんて起こりえる事はないけれど。

「お前さんの考えた『拳銃型魔法射出装置』を地上本部に配備しようと思う。だが問題が山積みだ……」

渋い顔でレジアスさんが本題を話し始める。レジアスさんがこの話を持って来たという事は、レジアスさんが地上本部に関わる力をまだ有しているという事。本局から地上本部の扱いが劣悪だった為に強硬な手段に走りレジアスさんは罪を犯してしまった人だけれど、決して無能なんかではなくむしろ有能な部類。関わってしまった人が

最悪だっただけで、本人自体は無害な人とも言えばいいだろうか。

で、レジアスさんが危惧する問題点は「盗まれた場合」魔力切れを起こした場合、非殺傷設定を解除された場合」だった。その辺りについては全て対策を取ってある。局員から強奪すると、ID認識させているから自動で機能がOFFになるし、陸特有の縄張り意識を逆手にとって管轄区から一步でも出るとこれも機能OFFされるから、悪意のある局員が使用する事も防げるはず。魔力切れについてはカートリッジシステムを応用させた予備の魔力電池に切り替えるだけだし、非殺傷設定解除も強制的に術式に介入しようとする機能OFFになるのと共に一部機構が壊れる仕組みになってるから、専門知識がないと直す事は難しい。

「出会ったのが最高評議会やスカリエツティでは無く、お前さんだったら……と想ってしまうよ」

「レジアス。過去ばかり見ても仕方あるまい。俺たちが成し得なかった事を、彼女はやろうとしている。ならば俺たちが成す事も自ずと決まってくるのではないか？」

ずっと黙って聞いていたゼストさんがレジアスさんに熱く語る姿はちよつと感動ものだった。そうして試験部隊を立ち上げて運用するらしいのだけれども一つ問題が上がる。前代未聞の魔導師ランクを取得していない局員が現場に立つのだから、訓練方法から戦術まで白紙状態。そんな事なので、一応調べておいた地球の軍隊の運営方法や基本理念なんかをレジアスさんにデータを渡して参考にしてもらう事に。

魔導師みたいに専門的に魔法を習わなければならぬ事はなくて引き金を引くだけだから、撃つ事だけに限っては凄く簡単。あとは命中精度の上昇や残弾数とかの確認や基礎的な事を確立すればいいだろうと思う。それに銃型のデバイスを使う魔導師の人だって居るから、ノウハウは少しくらいはあるんだよね。そんな魔導師の人を引っ張ってきて指導してもらおうのもアリだし。どうとでもなるんじゃないかな。

他にもレジアスさんから頼まれ事をいくつか貰って。何か見返り

は欲しくないか、と言われたただけでそう欲しいモノなんてないし。一つだけお願いがあるのなら、設備の整った研究施設を使いたいくらいだったんだけど自分の城があるんだし他の人が使ってる場所にお邪魔するのも気を遣うから言うのは止めた。

その代わりに、以前に造ったものを改良して完全に魔力で動く巨大ロボット兵器要らないって持ちかけてみたけれど、管理世界の人たちにとって私の発想が突飛過ぎるのか即行で却下されちゃった。仮に地上本部の正門に配備すれば市民の皆様が混乱するだろうし、操縦者の育成にもお金が掛かるんだから量産できない物は不要だつて。言いは分かるけれど、レジアスさん達に浪漫は理解できないみたいで残念。

「本質はあの男と変わらん」

「……」

レジアスさん何気に酷い台詞じゃないかな、ソレ。私はスカさんにそっくりですが、中身まで似たつもりはないです。うーん、横でレジアスさんの言葉に無言で頷いていたゼストさんが微妙な顔をしてる。なんでさ。

それとゼストさんはめでたく管理局員に戻ることが出来るそうだ。配属は教導隊かなって思ってたんだけど首都防衛隊なので古巣に戻るみたい。ちよつと嬉しそうなゼストさんの顔は以前の険しさは全くないから心配は無さそう。レジアスさんに似ても似つかない娘さんのオーリスさんも再就職先が決まったそうで、皆新しい道にそれぞれ進み始めてる。そんな姿を見てると自分ももつと頑張らないとなーって気合が自然と入る。

——色々やる事はあるし、出来る事もまだまだあるよね。

家を後にした三人の背中を見ながら、自然に笑みが出た。

◇

——へくち。

ここ数日、回数が多くなつたくしやみにずずと鼻をすすって息を整える。なんだろう花粉でも飛んでいるのかなあ。だとしたら嫌だなあ、アレルギー持ちになつちゃうのか。前世で体験した事はないの

で関わる事はないかなーって軽く考えてたのがいけなかったのかしら。取り敢えず酷くなる感じはしないから当分の間は様子見しよう。病院はあんまり好きじゃないし、お金が掛かっちゃうから行きたくないし。

やる事は沢山あるんだけど、この身は一つなので出来る事は限られる。分身でも出来れば作業効率が一気によくなるけれど、魔法で分身した所で不都合が生じるのでゆっくりだけけど少しずつ自分に課せられた課題を片づけてる最中だ。

家の庭に建設中の魔法練習場ももうすぐ完成するし、無限書庫での無償奉仕も慣れてきて役に立っていると思いたい。聖王教会にも医療技術や医療魔法の提唱を色々と持っていてるし、地上本部にも拳銃型魔法射出装置の納入がそろそろ出来そうだし、簡易型バリアジャケットも数を揃えてる最中だ。

もう一つやりたい事があって魔導師ランクの取得ができれば嬉しただけけども、四歳って歳が邪魔をしている所為なのか周囲の人たちがそれを許してくれない。でも魔法を使う事には慣れておけると言われ、管理局と聖王教会が主催する子供向けの魔法講座に行ってみてはと助言を頂いたのだけれど、幼児向けの講座は私の心が全力でそれを拒否したから断った。

で、断った代わりに何故だか、なのはさんとフェイトさんによる魔法講座が開催されるハメになっちゃったのである。しかもお二人が非番の日に。プライベートの貴重な時間を奪ってしまう事に申し訳なさで一杯になるのだけれど、何故かノリノリのお二人の勢いに押される形になってしまいついにその日が来てしまった。それでもつて場所は適当な公共魔法練習場って思ってたのだけれど、リンディさん辺りが無茶を通したのだろう本局の訓練場を貸してもらえたそうさ。

「いらっしやい、ゼロ」

「久しぶりだね、元気にしてた？」

非番だけれど職場だから制服姿のお二人。制服姿を見るのは六課でお世話になっていた頃だけでその後は私服姿だったからお二人の制服姿を新鮮に感じる。本当時間が流れるのは早いもので、既に

五ヶ月近くも経ってる。

「ゼロー!!」

お二人の陰からひよつこりと現れたヴィヴィオさんも一緒に魔法講座を受けるみたい。何度も会っているけれど、偶に日数が空いて久しぶりと挨拶を交わす事が偶にある。私に抱きついてくるヴィヴィオさんなんだけれど、体重を預けられると支えきれない。一応二歳差くらいはあるので成長著しい幼児だとその体格の差は大きいから倒れそうになって危ない。

「マスター」

そういう時はこうしてロゼさんが当たり前のように私の背中を支えてくれて、最終的にはヴィヴィオさんを私から引っぺがす事が常態化してる。

「ぶうー! ロゼのケチっ!」

「では、マスターに抱きつくのはお止め下さい」

ロゼさん、ロゼさん。身長差がヴィヴィオさんにとってもあるので知らない人を見ると、滅茶苦茶大人げない発言ですよ。ロゼさんはヴィヴィオさんよりも後に生まれましたが、使い魔だから成長速度は人間と違うのですからもう少し大人になりました。あ、ちょロゼさん、そんなしよぼくれた顔をしなくても良いじゃないですか。怒っている訳ではありませんから、ね。

そんなやり取りをしながら、なのはさんとフェイトさんから魔法についての基礎講座が始まった。

ヴィヴィオさんが居る為に分かりやすいように噛み砕いて説明してくれているのだけれど、そういうえば魔法の基礎なんて受けずに独学で魔法を使ってたから基礎を習うには丁度いい機会だったかも。この世界の魔法の成り立ち、歴史、魔法体系や基礎術式とか色々結構濃密な内容で。ヴィヴィオさんについてはいけてるのかなーって心配して横を見ると、真剣な表情で聞いているから取り越し苦労だった。

しばらくして実技に入って色々魔法を教わったけれども、危険だし使いどころの判断とかはまだ難しいだろうからって攻撃魔法をお二人から習う事は出来なかったけれど、代わりに防御魔法を教えるも

らった。なのはさんの防御は固いと言われるだけあって、魔法術式はかなり確りしたものだ。原作無印で天才って言われてたけれど、その上に努力まで重ねた真面目な人だから術式は完璧で突っ込みどころなんて全くない。でも私には向いてない部分もあるから後からちよつとだけ手直しをしよう。

授業開始から一時間ほどしてヴィヴィオさんの集中力が切れたのか疲れたのか、小さい子供特有の飽きた仕草を見せ始めた。それを察知したなのはさんとフェイトさんはちよつと休憩しようかってなつて、小休止。フェイトさんが一瞬で四人分の飲み物を買って行って手渡してくれた。この近くに自動販売機なんてあつたかなーって思つたけれど野暮な事は言うまい。

「タカマチ一尉。頼みがあります」

「うん？ 珍しいねロゼさんから話しかけてくれるなんて。あ、あと”なのは”でいいからね？」

なのはさんの言う通り、ロゼさんが誰かに自分から話しかけるなんて珍しい。後半部分の言葉をロゼさんは華麗にスルーして本題をなのはさんに伝える。それは”貴女と模擬戦をしてみたい”とぽつりとロゼさんは言い、その言葉を受け取つたなのはさんは一瞬だけきよんとした表情を浮かべ、次の瞬間には目に闘志を浮かべてる。

——バスターの件が後を引いてるのかな。

模擬戦だから訓練用の魔法に切り替えるので問題はないけれど、なのはさん強いしロゼさんは大丈夫かなと不安がよぎる。フェイトさんはフェイトさんで”なのはが羨ましい”だなんて小声で零してるし、バトルジャンキーな皆様には敵わない。

「えつと、模擬戦をするなら映像データを取りたいんだけどいいかな？ あとそのデータを教材として使う事にもなるかも知れないから、その許可も欲しいかなあ」

ん、それはロゼさん次第だと思うので……どうしますか、ロゼさん。

「マスターが構わないのであれば、私は気にしません」

なら問題は無いでしょうかね。

「わあ、ありがとう。二人とも。それじゃあ準備しよつか」

そうしてコントロールルームへと軽い足取りで向かうのはさんの背中に炎が宿っているのは気のせいでしょうか。きっと気のせいでしょうね。そしてウチのロゼさんは生きて帰れるのでしょうか。一応なのはさんのバスターを凌いだ実績はありますが、魔導師対魔導師の戦闘経験はほぼないと言っているいいロゼさん。

ナンバーズの皆さんと一緒に訓練に勤しんでいましたが、あの方たちも正確に言えば魔導師ではないですからねえ。なので一抹の不安があるのですがこれも経験かな、と思いい腹を括ろう。ロゼさんが負ける所なんて想像したくないけれど、相手はなのはさんで主人公でSランクオーバーの魔導師さんだもの。心配しないはずは無い。

「ヴィヴィオとゼロは危ないから、こっちに行こうか」

フェイトさんに手を引かれてガラス越しに訓練所を見渡す事ができる控室に通された。コンクリートで囲われた訓練所の中心には開始線が一応引かれてあるから、その線に沿ってなのはさんとロゼさんが立っている。なのはさんはバリアジャケットを纏い左手にはレイジングハートさんを握りしめて。一方のロゼさんは無手で突っ立って数度跳躍して身体の具合を確かめる。

こんな事ならロゼさん用にデバイスを組んでおくべきだったと頭を抱えるけれど、もう遅い。フェイトさんにロゼさんの勝率はどれくらいあるでしょう、と聞いてみたんだけど……。

「うーん。ロゼの魔導師としての資質を知らないから何とも言えないかなあ。ゼロには悪いけれど、魔導師ランクでいえばなのはが勝ちちゃうだろうし……」

やっぱりそうですよねえ。ロゼさんに勝ち目がある気がしないんですもん。

「ゼロが信じてあげなきゃ、ロゼも頑張る事ができないよ?」

もちろん、ロゼさんが強いのは知ってますし、信じているんですけど。戦い慣れたなのはさんに勝つ未来が見えないだけで、出来る事ならば勝って欲しいって願ってますよ。

「そっか。……………それじゃあなのは、ロゼ。準備は良いかな?」

控室に設置させているマイクを手にフェイトさんが訓練所内の二

人に問いかける。既に二人は戦闘モードに入っているのかフェイトさんの言葉に声を出す事は無く、一つ頷くだけ。

それを見届けたフェイトさんは、大きく息を吸って開始の合図を声高にただ短く『開始』とだけマイクに向かって叫んだ。

——数瞬だけ遅れたフェイトさんの声が訓練所にも響いて、模擬戦は始まった。

合図早々、なのはさんは空中へと飛翔しロゼさんは大きく後ろに二・三度跳躍して距離を取る。砲撃、ようするに遠距離攻撃主体なのはさんにロゼさんの行動は悪手なのではと思うけれど、何か策はあるのだろうか。

「なのはママ〜！ がんばれ〜！」

「……どつちも頑張れ〜」

無邪気になのはさんを応援するヴィヴィオさんと気を使ってくれているフェイトさんを余所に、私は気が気じゃない思いを抱えていた。なのはさんに勝つ方法って存在するのかなあ。どうにも活路を見出す事が出来そうにない未来に、何か良い方法ってないのかなーって考えてるけれど、私って戦闘向きじゃないし戦術とか戦略を学んだ訳でもないからロゼさん自身の力や機転に期待するしかないんだろう。

『さて、行こうか。レイジングハート』

《——All right, my master!》

集音されて控室にあるスピーカーからはなのはさんとレイジングハートさんの声が響く。その声を合図に桃色の魔方阵がなのはさんの足元に大きく展開して、なのはさんのリンカーコアが活性化する。ゆりかごでバスターを撃たれた時になのはさんの魔導師としての凄さって余りわからなかったけれど、近くで見ると気圧される感じがする。多分私の横でこの状況を見ているフェイトさんも同じくらいに強いだろうし、はやてさんは魔力量だけで言うなら最多量を誇る人だから未恐ろしい人たちだと思う。

そしてなおも強くなろうとしてるのだから、本当に凄いやね。スカさんはこんな人たちに挑んでたんだねって思うし、無謀な事をした

なあ。十年でも早く行動を起こしていれば、もしかすればスカさんが目指した恐怖の管理世界っていうのを実現できたかもしれないね。

《――Acceler Shooter》

レイジングハートさんの声と共に発射台が現れて十二個の誘導弾が次々に動き始める。そうして三発の誘導弾が地面に立ったままのロゼさんに向かって加速し、着弾。立ち込める土煙にロゼさんの様子が判らなくなるけれど、小手調べだろうしこんな事くらいで早々に倒れてしまう程ロゼさんは柔じゃない。

右手を伸ばして防御魔法を展開していたロゼさんは傷一つなく無事。そしてその展開させた防御魔法はさっきなのはさんから教わった魔法で、術式もなのはさんと全く同じものを使ってる。にやり、と口を歪にゆがめたロゼさんは展開させた防御魔法を霧散させ、身体強化魔法を自身の足に纏わせてなのはさんに向かって開いた距離を一瞬で詰めるほどの跳躍を。

『っー』

なのはさんの一瞬の隙をついたロゼさんは右ストレートを容赦なく顔に向けて放つ。インパクト直前に顔近くに小さく展開された魔法陣に阻まれてロゼさんの渾身のストレートが炸裂する事はなく。

ちつと舌打ちをしたロゼさんを尻目に、にこりと笑ってなのはさんは言葉を紡いだ。

『へえ……い・重い攻撃だ、ねっ！ 油断してると危なかったよ、ロゼっ!! アクセルっ!』

防がれる事をわかっていたのか、ロゼさんは一瞬にしてまた距離を取り、残り九発のアクセルシューターから逃れようと訓練所の床をぴよんぴよんと跳ねて避ける。速度に緩急を付けたシューターがなのはさんの意思を乗せ自由に飛び回りロゼさんを追い詰め、逃げ場のない訓練場の端に追いやる。リングを使用して競技するボクシングや格闘技なんか例えればロープ際に追い込んだ絶好のチャンスをも、なのはさんが看過する訳もなく。チャンスとばかりに九発のアクセルシューターが逃げ場のない様に間隔をあけてロゼさんへと向かった。

『……うそー！ そんなのアリなのー!!』

セインさんのディーブダイバーの下位互換スキルであるロゼさんの壁潜りが発動して、床へと消えるロゼさん。ちよつと奇妙な光景に驚くけれど、すぐに慣れるから問題はない。これは魔法というよりも^{レアスキル}稀少技能に相当するものだから、なのはさんの驚きは不思議でもないんだけれど知らないとやっぱりびつくりするよね。

「ロゼの稀少技能みたいだから、そのまま続行だね」

フェイトさんの落ち着いた状況判定になのはさんが『そんなー!』と叫んで嘆いていた。しばらくして床からによつきりと生えたロゼさんは訓練場に姿を現してすました顔をしてるし。ロゼさん、ちよつと意地悪な部分も持つてるお茶目さんだから、なのはさんをびつくりさせたかったんだらうな多分。本気で倒すつもりならなのはさんの直下にも現れて、そのまま反撃に移る事も出来るから。それを行わなかったのはロゼさんなりのプライドなんだろうなあ。

そうしてなのはさんとロゼさんの攻防は拮抗したまま続いて、このまま永遠に模擬戦が終わらないのではと思ひ始めた頃だった。濃密に散りばめられた二人の魔力素が訓練所内に充満している。

——あ、コレってフラグじゃない。

「なのは……撃つつもりなの……?」

お互い一か所で立ち止まり、肩で息をする姿はこの戦いが終盤にもつれ込んだ事を如実に表している。フェイトさんの言葉に確信する。

『レイジングハート……!』

《——Ok, my master》

うわ、ゆりかごでスターライトブレイカーを撃つ寸での所までは見てたけれど、まさか模擬戦で見るとは思ってた。ロゼさんもロゼさんで引き下がる気はない様で、足元には大きな丸いミッドチルダ式の魔方陣が現れているし。

というか、私の魔力がロゼさんに吸い込まれていつてるし。まあ、私は魔力を消費しても問題はないから良いけれど。あれ、よくないよつ。ロゼさんにごつそり魔力を持っていかれると自分で防御魔法も張れないじゃないかつ。

『スターライトオ……』

『……ダークライト』

「……え、あ、駄目だよ、駄目、駄目っ！ ちょっと待ってっ!!! 落ち着いて二人ともっ!!! そんなの撃っちゃたら訓練場が吹っ飛ぶよっ!!! ヴィヴィオ、ゼロ私の後ろに隠れてっ!!!」

あまりのフェイトさんの必死さに驚いて、言われるままに行動する。バルデイツシユさんを起動させたフェイトさんは防御魔法を展開。あまりの忙しなさに頭が一瞬回らなくなるけれど不味い状況だつて事だけは理解出来た。

『ブレイカー……!!!』

《——Starlight Breaker!》

『ブレイカー』

訓練所一杯に広がるロゼさんの黒色の魔力光に私の赤黒い魔力光が混じった少々汚い色と、なのはさんの魔力光である桃色がぶつかりあう。正直模擬戦で使う魔力量ではないし、二人とも大人げないと言うかなんと言うか。

フェイトさんの防御魔法の陰に隠れてはいるものの、二人の魔力の熱量が凄すぎて室内の気温が少しだけ上がってる。二人の魔力光によつて塞がれた視界は暫く晴れる事はないまま、私たちが居る控室までには被害はなかったんだけど訓練場の様子が解るまで少しの間を要した。

第十一話：模擬戦の後。

本局内の一角にあるフェイトさんの執務室にお邪魔してソファ―にちよこんと座っているのだけれど、ちよつとだけ居心地が悪いかも知れない。

「なのは、スターライトブレイカーはやりすぎだよ！ それにシヤマルからも無理しちや駄目だつて言われてるよねっ!!」

「にやはは……。つい熱くなっちゃって……やっちゃった……」

頭の後ろを搔きながら苦笑いをしているのはさんと、怒っても凄みがあんまりないフェイトさん。十年來の付き合いだから、言いたい事は言える仲みたいで羨ましい限り。いつも仲の良い二人だから、今のやり取りをヴィヴィオさんにはみせられないので、騒ぎを聞きつけてやってきたリンデイさんの所に預けてる。

吹き飛んでしまうかと思われた訓練場はどうか無事だったんだけれど、二人の尋常でない魔力の放出に本局内ではちよつとした騒ぎになってた。ロゼさんは、いろいろとあつて今は私の影の中で大人しくしてる。

——時間は少しだけ前に遡る。

目が眩んでしまうほどの魔力光で覆われた視界はやつとの事で見えるようになり、コンクリートの床と壁でできた訓練場の様子が露わになる。

……ロゼさん。

あちやあ……。ロゼさん、魔力を限界まで使い果たして人の形を保てなくなってしまったのか元の姿、ようするにスライムさんの姿に戻っているんだけれど普段よりも弾力性が失われてべつちよりと床にへばり付いた状態になつてる。

使い魔契約のリンクは切れていないからあわてる必要はないんだけれど、本当に魔力を使い果たしてみたみたいで無茶をするな〜と。あとでロゼさんと無茶した件について話し合わないとね。無理はして欲しくないから。

『え、え？ えええええええええええええええ!!』

ロゼさんのあられもない姿を見たなのはさんは驚いて声をあげる。あれ、なのはさんってロゼさんがなんちゃってスライムさんだっけ。事知らないんだっけ。

よくよく考えてみれば伝えなかった気もするし、さつきロゼさんが使った希少技能レアスキルの事も知らなかったみたいだから、そういう事なんだろう。

『あ、ああ……ロ……ロゼが………とけ、ちゃった……』

あーうん。説明不足が誤解を招いてなのはさんが混乱してるよ。不味いなあ、完全に勘違いしちゃってなのはさんの表情が闇落ちしそうな感じになってる。ヒロインにそんな顔をさせる訳にはいかないためにロゼさんに念話を飛ばそう。

ロゼさん、ロゼさん、生きてますかー。あ、よかった、生きてるんですね。流星になのはさんをこのままで放つてはおけないので、少しでも動いてもらえると助かるのですが出来ませうかねえ。え、あ、面白いからもう暫くこのままで良いかって、駄目ですよーなのはさんがかなりテンパっているみたいなので念話でもなんでもいいので何かアクションをしてあげて下さいな。しぶしぶ私の言葉に了承してくれたロゼさんは、べつちよりとなった身体をどうにか動かしてくれました。念話でも良かったはずなのに、身体をわざわざ動かしたのはロゼさんなりの意思表示なのだろうか。

『いや、にやああああああ!! う、動いたあ!! あ、あれって本当にロゼなの?!』

確かに今のロゼさんはコールドミみたいになって黒くてねちよねちよした液体状態なだけけれど、ロゼさんはロゼさんなのです。時々毒舌を吐き、ちよこつとお茶目な部分がありますが良き私の相棒さんなのです。

『……うそおつー!』

うーん、そんなに驚くことなのかとも思うけれど見た事のない人にとっては、摩訶不思議な光景なのかなあ。取り敢えずロゼさんは大丈夫な事を説明して納得して貰いロゼさんは人の形を保てないほど魔

力を使い果たしてしまったそうなので、ひとまずは私の影の中に居てもらう事に。スターライトブレイカーとダークライトブレイカーの余波が外に漏れていたのか、訓練場は様子を確認しに来た職員さんや野次馬さんたちで騒がしくなり始めた。

「なんだ、タカマチ一尉とハラオウン執務官か……」

「……ああ、そういう事か」

と、本人たちには聞こえないように囁いて納得した表情を見せながら、何事もなかったように帰って行く人たち。その言い分だと、過去にお二人は何かやらかしている事になるのだけれど、ちよつと気になつたりして。

なのはさんとロゼさんの模擬戦だったからフェイトさんは完全にとぼつちりを受けて、勘違いして自分の部署に戻っていく局員さんたちの誤解を解こうとして止めた。わざわざ違う噂を広めることもないだろうし。フェイトさんには悪いけれど、他の人たちには一時しのぎでもこの騒ぎがなのはさんとフェイトさんの仕業だと勘違いしてもらつてた方がいいかなつて。

「どうして模擬戦なんてしてるのかしら……？ ヴィヴィオさんとゼロさんの魔法講座、だったはずですよね？」

あらあら、と言いながら訓練場に姿を現したリンデイさんだったけれど、背中に背負っているオーラが真っ黒だった。どこかの闇黒卿がゴゴゴゴゴ、と音を立ててるみたいに。以前に見た優しい顔でお孫さんと楽しそうに遊んでいるリンデイさんは何処かへ飛んでいき行方不明になつてしまった。そうしてひらひらと手を招いて私たちを呼ぶ。呼び寄せた後は堰を切つたようにリンデイさんの小言が始まり、なのはさんとフェイトさんがしょんぼりし始めた。なんだろうリンデイさんはストレスでも抱え込んでいるんだろうか。

人手の少ない管理局だから有能な人材を手放す事はないだろうし、高い地位に就いている人だから権力も伝手もあるだろうから色々と気苦労が絶えないのかも。私の保護責任者になってくれている一人でもあるし、あまり迷惑を掛けないようにしなければと気を付けてはいるけれど、スカさんアジトで過ごした三年間はミッドチルダの常識

を知ることがないまま過ごしたから時々やらかして迷惑を既に掛けているのか。

話を元に戻すけれど、なのはさんと模擬戦を望んだのはロゼさんだし、なのはさんはソレを受けただけなので悪くない。なので止まらないリンディさんの小言に終止符を打つために話に割って入った私。私の言葉を聞いたリンディさんは、ぐぬぬと微妙に顔をしかめたその後には納得してくれたのかどうにか止まって、なのはさんとフェイトさんが解放されたので良かった良かった、のだけれど何でかフェイトさんの小言がなのはさんに炸裂し始めた。

ここじゃあ人目もあるからとリンディさんがヴィヴィオさんを預かり私はなのはさんがどうなってしまうのか心配だったので、二人に着いていきフェイトさんの執務室にお邪魔した訳なんだけれどフェイトさんの愚痴はまだ止まる気配がない。母娘似た者同士なのか血は繋がっていなくとも、こういう所は似るんだねーって感心しちゃう。そうして冒頭のシヤマルさんから無理をするなど言われている事と、なのはさんはいつもの時もいつも無茶をする事を何度も口酸っぱく言ってる。

心配なのは解るけれど、なのはさんもそろそろいい大人でこうして社会人として働いているのだし、ましてや命を天秤にかけなければならぬ公務員さんなのだから。というかフェイトさんもなのはさんと同じ土俵に立っているはずなのに自分の事は棚の上に行っているから、ちよつとおかしい光景でもある。フェイトさんだって誰かを助ける為なら、全力を持って無茶をしちゃうタイプだろうしなあ。

ようやく怒りが収まったのか、それとも怒りが長続きしないタイプのフェイトさんなのか険悪な空気は既に霧散してて。いつの間にか空間モニターを浮かべてさっきの模擬戦のデータを見てる。教導隊に所属しているだけあってなのはさんの考察が面白い。場面場面で悪手に出てるのか、どうすればいいのかとか、この展開には驚いたとか。きつとロゼさんも私の影の中で聞き耳を立てている事だろう。

「なのはと対等に模擬戦を出来る人なんて数少ないんだけど。……ロゼって何時訓練してたの？」

機動六課に居た頃はそんな様子を一切見た事がないし、とフエイトさん。スカさんのアジトでナンバーズの皆さんと一緒に訓練は欠かしていませんでしたし、近接格闘や魔法の本を読み漁って貪欲に知識を吸収してましたし、本人の才能の部分も大きくあるんじゃないのかな。

魔導師戦に関しては私よりロゼさんの方が確実に強い。私は引き籠もりのもやしでしかないから真面目に訓練なんてものは積んでいないし、面白そうな魔法を解析や分析をして自分流にアレンジして使ってみては直ぐに飽きて使わなくなってしまっし。唯一長続きしているのが、六課でデバイスを作った時に発動させた触手魔法なんだよね。自分の手足の代わりに自在に動かす事が可能だし、重い荷物とかも自分の筋力関係なしに魔力で持ち上げられるから超便利。

まだ身体が未熟で出来る事が少ないから触手魔法に頼りきりっていう情けない状況なんだけれども、これはご愛嬌だ。あと十年も経てばなのはさんたちみたいバリバリ働くことも出来るようになるだろうから悲観することはない。日常生活の中でこの触手魔法の使用許可を管理局から貰っているので、家の中限定で使いたい放題なのでアレンジして別の事も出来るようにと画策中だ。

「ロゼの魔法は基本を踏襲してるね。それに私の知らない魔法を使ってもいたし……」

私はミッドチルダや次元世界での魔法運用を誰かから師事した訳でもないから、ロゼさんの魔法戦術がなのはさんの言ったように基本を踏んでいるのかどうかなんて判らないけれど。魔法についての教本や指南書を読み漁って魔法について勉強していたロゼさんだから、なのはさんがそう言っっちゃうのも仕方ないのかな。変な癖が付いちやうと癖を直すのに苦労する羽目になるだろうけれど、ロゼさんにはソレがないみたいで一安心。私が興味本位で色んな魔法を使ってみてはすぐに飽きて使わなくなってしまっしけれど、ロゼさんは私が興味を失った魔法でさえ術式を覚えて戦闘に利用できたり、便利なものになるなら積極的に取り入れているから心配だったんだよね。イロモノ魔導師になっっちゃわなかつて。

私はスカさんのクローンなので自分が感じていない所で常識から踏み外している所があつて、それに気付くのは後になってからだし気を付けなきゃならないんだけど、言われてから気付く事が多いからね。

なのはさんさえ知らない魔法を使っていた理由は無限書庫が原因じゃないかな。奉仕勤務で魔法に関しての書物に触れることは多々あるし。

私も有益な情報があれば、覚えて帰ってレポートに纏めているからロゼさんも同じ事をしてても不思議じゃないもの。ロゼさんは魔法ならば取り敢えず覚えて戦闘に仕えるものなら、色々と試してみるみたいだね。

「私もロゼと模擬戦してみたいなあ。シグナムとも忙しくて中々手合わせ出来ないから……」

自分の使い魔を褒められて悪く思う主人なんて居ない。ましてや管理局のエース・オブ・エースとか金色の閃光だなんて言われる人にこんな台詞を言われちゃうとは。正直嬉しいよね。ロゼさんはフェイトさんの言葉に反応してて、なんだか嬉しそうな雰囲気を感じ取る事が出来たからそのうちフェイトさんとの模擬戦もあるかなあ。

——あれ、ロゼさんも戦闘狂にカテゴライズされちゃうの？

うーん。そんな四六時中危険の中に居るつもりはないし、ロゼさんには幸せに過ごして欲しいから無茶や無理をすることを望んでいないんだけど、ロゼさんがそうしたいのなら主人としてこの考えは失格なのかな。それなら魔法練習場も完成間近だから、ちよつと思いついた事を実行してみようと心の中で決める。もちろんロゼさんに了承を得てからになるけど、多分反対はされないだろうし今からちよつと楽しみなんだよね。

今日の模擬戦の内容をしばらく三人であーでもないこーでもなあって協議していたらいつの間にかお開きの時間になって。別れ際になのはさんから模擬戦の映像を教材として使う事を宣言された。

私が映っちゃってるわけじゃないから問題はないけれど、一部の局員さんの間でロゼさんの事が囁かれるようになる。そりゃなのはさ

んと対等に模擬戦をやつてのけたのだから仕方ないけれど、一悶着を起こす種を蒔いてしまつている事なんて、この時の私は考えてもいなかった。

——ちなみにこの映像、SLBとDLBの部分は意図的に削除されたそうなの。

削除された理由はなんて事はない、この映像を見て恐怖した人たちが多数居たからだそうで。なのはさんの魔王伝説に新たなページが刻まれた……のかも知れない。

◇

「スバルとっ!!」

「……………ティアナの」

「ストライクアーツっ、特別講座っ!!」

「すーとらいくあーっ、特別講座…………」

テンションのすごく高いスバルさんとげんなりしている対照的なティアナさん。最後の台詞は二人合わせて同調させるつもりだったのだろうけれど、思いつきりズレててティアナさんは完全にやる気のない棒読み状態。

そんな二人が私の目の前に立って、ここクラナガン郊外のとある公共魔法練習場に今日はやって来てる。自然豊かで緑溢れる場所なんだけれど、魔法練習場ってだけあつて周りでは子供たちのじやれ合い程度から真剣に取り組んでいる人まで様々。久しぶりに長時間日の光の下に居ることになるかもしれないなーなんて考えている私。ま、そんな私を見かねたのか隣に居る王様が心配してこうなつた訳なんだけれども。

「わ〜〜い!」

私が外に出ているって事は、私の隣には王様、もといヴィヴィオさんがもちろん居て。今日はさつきお二人が言つたように”ストライクアーツ講座”を受ける為。興味が全くない私をヴィヴィオさんが『やってみようよ、ゼロ。運動がてらにいく』とかかなり必死な感じで誘ってくれるので、それなら一度くらいは受けてみても良いかと半ば諦めて今日になってしまった。

ストライクアーツに関してスバルさんから時々教わっているはずのヴィヴィオさんなだけけれど、私が加わってしまったので多分いつもの授業よりもレベルが下がるからつまらなくなるんじゃないかな。大丈夫かなーと心配しながら、さっそく二人による講座が始まる。うん、テイアナさんってストライクアーツ習得してたっけか。嗚呼、スバルさんから無理矢理呼び出された可能性が大きそう。

——ひい、へえ、ひい、へえ……。

額から落ちる汗に息が乱れて呼吸が整わず、思わず動きを止める私。……アレ、変だな。ココまで体力なかつた事はないんだけれど。まずは軽くウォーミングアップだねと言われて基本の形を教えてもらって、それを何度か繰り返し。ヴィヴィオさんは涼しい顔をしているというのに、私は既に大汗をかいて息を乱して動きがつい止まったところ。……オカシイ、ナゼダ。

「取り敢えず……なんだろう、あースタミナなさすぎだねゼロ」

「そうね。格闘技を習う以前の問題だわ……」

「ゼロお……」

超微妙な顔になるお二人と、悲しそうな顔をしているヴィヴィオさん。いや、そんな眼で見つめないで下さい。引き籠もりのもやしに体力なんて求めては駄目なんです、と開き直りながら本気で不味い気がするのには気の所為なんだろうか。

そういえば最近は無限書庫への無償奉仕と午後からは研究室に引き籠もってばかりだったから。ヴィヴィオさんは学校に通っているから以前よりも遊ぶ回数は少なくなっているの、今思えば運動なんて全くやっていないのが現状なのかも。一緒に私と格闘技が出来る今日のイベントを大層喜んでいたヴィヴィオさんなだけけれど、私に高望みし過ぎじゃなからうかと。

大体最近の小学生の体力があり過ぎるんだよ。外で長時間きやつきやと遊んでいる姿をよく見掛けるし、お金に余裕のあるご家庭ならスポーツとか小さい時から始めて英才教育を受けている子も多いし。娯楽の増えた現代社会。最近の子供はゲームばかりしていると大人たちは愚痴っているけれど、案外大人よりも子供たちの方が忙しいん

じやなからうかと、前世の記憶持ちがぼやいてみる。

「よっし！ ゼロはちよつとヴィヴィオとは別メニューをしようか。ティア、ゼロのことよろしくっ！」

「えっ？ ちよつとっ、スバルっ!!」

そんな二人のやり取りを見ているんだけど、息がまだ整わない私。うーん、引き籠もり生活がこんな所で悪影響を及ぼしていたとは。アジト生活でも外に出た事は滅多になかったから余計に拍車を掛けているんだろうか。でも小さい頃に無茶な運動をするのは成長を阻害しちゃうから駄目だと聞いた事もあるし、どうなんだろうね。その辺りのさじ加減がわからないから難しい所かも。

『ちよつとどうすんのお馬鹿スバル！ 私格闘技の知識なんてないんだけどッ』『いや、私もまさかあそこまでゼロが体力がないとは思ってなかったよ』と聞こえない様に小声でやり取りしているつもりのお二人さん。

ばつちりと会話の内容が聞こえていますよ、とふて腐るけれど自分が招いた事だから自業自得としか言いようがない事に気付く。今度運動がてらに通勤は走って行こうかなーだなんて考えるけれど、多分やらないだろうなあ。歩くので精一杯だし、本局まで転移してもらえらるポーターまでは結構距離があるから、仕事前に疲れるような事はしたくないもん。

「ほら、ゼロ。飲みなさいな」

「ありがとうございます、ティアナさん」

苦笑いしながら手渡してくれたものはスポーツドリンク。ぐいつと一気に飲み込んだつもりなんだけれど、子供の口だから量はそんなに減っていない。ふいー生き返る。ヴィヴィオさんは先ほど言った通りスバルさんと続きをやってる。きついだろうに、でも楽しそうな顔してるんだよね。vividの知識はあんまりないけれどこれから格闘家としての道を歩んでいくであろうヴィヴィオさん。私が競技選手として一緒にヴィヴィオさんと高みを目指す事はしないう。

研究と開発、そして管理局の無償奉仕とか色々やる事が山積みだ

し、沢山手を出して全部手中に収めるのは難しいだろうから。だからこうして観客として見守っていくくらいしか出来ないだろう。ま、カッコいい事を言うつもりはなくてただ単に原作の道筋を変えてしまふ事が怖いだけなんだけどね。ドウエさんやゼストさんにレジアスさんを生きながらえさせた一因を担っている私が言う事じやないかもしれないけれど。

「それで、どうしてアンタがこんなことを？」

「？」

特に深い理由はないし、しいて言うなら誘われたからって言うのと将来に何か役に立つ事があるのかもしれないって考えてだったんだけれど。ティアナさんはどう思っちゃったのだろうか。

「どう言えばいいのかしらね。アンタは基本、無駄な事はしないでしょ？」

そう、なのかな。そんなつもりは全くないけれど。無駄な事をしないというなら、多分今この場所には立っていないだろうし、他にも今までやって来た事もやらないだろうし。ティアナさんと私が考えている”無駄”な物の解釈に乖離があるのならそうなんだろうけれど。

——へくちっ！

んー神妙なシーンでお気楽そうなくしゃみが出てしまう。真面目に問い掛けられているというのに、相手の人には失礼に当たる事だから『済みません』と伝える。ティアナさんは気にしなくて良いっていつてくれるけれども、やっぱり失礼だもの。でも出ちゃったものは戻せないから仕方ない。それならちゃんとはぐらかさずに答えなきやね。

「かくとうぎにきょうみがまったくない、というわけではありませんから」

うん。ヴィヴィオさんと試合を観戦する事が何度かあったけれど、観るのは楽しいし競技中に使用される魔法に興味を示して家に帰って術式を真似してみたりするのも役に立つんだよね。

身体を動かす事は苦手だし苦痛なんだけれど、誰かとうして一緒に何かをやるのも楽しいしね。でも、本気でその道を目指すなら片手

間でやる事は出来ないだろうし、そこまで器用でもないから。それでも今回の件を断りきれなかったのは、心の何処かで”やってみたい”って気持ちがあつたのかも。

「なるほど、ね。まあ、気になるから聞いただけで深い意味はないの。でももう少しアンタは外に出るべきね、体力、なさすぎよ」

呆れた視線を向けてくるティアナさん。あ、はい、それに関しては言い訳のしようもなくただ単に引き籠もりのもやし故にという事で、体力をつけたい所存であるんだけど時間も時間取れるかなあ。取れると良いなあ。遠い目をしていると、更に呆れた視線を向けてくれました。ごめんなさい。

「自覚できただけでも良い事なのかしらね？」

「……………」

反論もなにも出来ずに、一度仕方ないヤツみたいな感じで笑ったティアナさんにぐにぐにと頭を撫でられる。恥ずかしいけれど、触れられるのは嫌いじゃないから甘んじて受ける。

そのあとはティアナさんのデバイスや使用している魔法について聞きこんじやった。拳銃型魔法射出装置に転用出来ることがないかなーって。銃型のデバイスを使用している人は少ないし、ティアナさんの意見や考え方や戦術を聞くのは楽しいし。なにより実践を経験している人だから答えが的確なんだ。聞いた話を元にレポートに纏めなければと頭の中はその事で占領されていたから、ヴィヴィオさんとスバルさんのストライクアーツ講座も終わったようなんだけどヴィヴィオさんが不機嫌なんだよね。どうやら一緒に出来なかった事が不満な様なんだけれど、体力が違い過ぎるから一緒にメニユーをこなす事は出来ないって伝えただ。心苦しいけれど、そのうちにコロナさんが一緒に競技を行うようになるんだし心配はいらないだろう。

少しの間だったけれど体を動かした所為なのか、その日の夜は一瞬で深い眠りに就いた私だった。もう少し体力を付ける為に頑張ろうと。

第十二話：お披露目会にて。

拳銃型魔法発射装置と簡易バリアジャケットを運用する試験部隊が時空管理局地上本部陸士部隊で発足したり、お家の庭に建設中だった公式魔法練習場がやつと完成して実験に勤しんだり、無限書庫の無償奉仕勤務に空いた時間に皆との面会に行ったり。ヴィヴィオさんと遊んだり、四歳児というのにかなり充実した時間を過ごしてた。

今日は今日でその試験部隊設立の御披露目会なので、地上本部にお邪魔しているんだ。

装備を設計、開発をして納入から部隊運用の基礎部分を発案とか色々関わってしまったのでわざわざ招待状が届いていたし、地上本部の現中将さんやレジアスさん、はやてさん他諸々の人たちからも出席をお願いできないか、と遠回しに電話やメールを頂いたものだから『はい』と言うしかなくなった訳である。

いつもと同じでロゼさんと一緒に地上本部にやって来た訳なんだけれど、周囲の視線が刺さつてとても痛いです。一応何度か訪れた事がある場所なので、記憶に残っている人たちは私を見るモノの直ぐに興味を失せてしまうか、視線を元に戻してくれるんだけど知らない人はぎよつとして驚いてるし。

それは仕方のない事なんだと自分に言い聞かせて諦めてしまった方が楽なので気にしない。地上本部ロビーの受付で招待状を見せると、とある会場を教えられた。ロゼさんと一緒に広い地上本部をどうにか迷わずに会場へと辿り着いた先は、外に併設されている訓練場の一段高くなった見学席だった。すでにそこには地上本部のお偉いさんたちが居るし、本局の高官さんたちもちらほらと見かけるんだ。何処に座ろうかとキョロキョロと周りを見渡していると、現中将さんに声を掛けられた。

「久しぶりだ。まさかまた君に会う事になるとは思わなかったよ」

「おひさしぶりです」

ペこりと一度お辞儀をして挨拶を交わす。中将さんは私の作ったものに気乗りしていない感じだったから望みは薄いのだろう、と思っ

ていたのですが。レジアスさんが突然私の家に訪れて配備決定の知らせを受けたのでびっくりしましたよ。

「そうか、濟まなかった。だがやはり人手の足りぬ陸士部隊で非魔導師が現場に立てる事になるのならば、このミッドチルダを守るべき組織としての面子が立つ」

でしょうねえ。人手があるのならやれる事も沢山増えますし、今現場に立っている人たちの負担軽減も出来るのなら作った甲斐があるってものだし、ミッドチルダの治安が良くなるのなら尚良い事だもんな。スカさんがやらかしてミッドも地上本部も混乱してしまつたから、部隊再編の役に立てば嬉しいんだけどね。

「さて、そろそろ模擬戦が始まる。君の実力と試験部隊の真価、是非確かめさせて貰おう」

中将さんは部下の人たちからの報告しか聞いていないだろうから、試験部隊の評価は書類の情報しか持っていないだろうから今日実際に自分の目で見て判断するのかな。まだ試験部隊だし、潰そうと思えば中将さんの短い一言でどうにでもなるだろうから安心はできない。なんでもか中将さんの隣に座る羽目になつたけれど、これって解説役でも期待されているのかなあ。あまり話は得意ではないけれど自分が作つたものだし、この試験部隊の立ち上げにも関わっているから真面目に解説役を務めましようかね。

そう決意した瞬間に私の後ろには本局の高官さんたちも揃つて腰を据えるものだから、内心焦る。ヤバいなあ。この装備は陸士部隊用について考えていたんだけど、海の人たちも目を付けちゃつたのか。

海も海で人手不足なのは知っているんだけど、陸士部隊用にカスタマイズしたのだから海には向いていない気がするんだけど。そうなつたら自分で作るのは面倒だしライセンス契約でもして、しれつとモンキーモデルでも渡しておこう、そうしよう。そんな事を考えて自分が楽出来るようにと現実逃避していたら、お披露目会が始まつた。

『さあ、お集まりの皆様っ！ 本日は御足労頂きありがとうございますー！』

拡声器を通して客席全体に響く声は、地上本部広報の人だろうか。ノリノリの声と共に聞き手の人たちが聞き取りやすいようにと少し大きめに抑揚をつけた声は会場によく通る。まずは新兵器の説明と運用方法。そして試験部隊の面子が入場と同時にアーチェリー競技なんかでよく見るカラーターゲットがいくつも不規則に現れる。部隊メンバーの魔力量を計測した数値がリアルタイムで大型モニター上に表示されて、客席にどよめきが走る。

聞こえてくる声は『本当に非魔導師だったのか』とか『本気……なのか』とか結構驚いているみたいで。低ランクの魔導師の人たちにも装備する計画も密かに進んでいるんだけど、機密情報なので言えないんだよ。まずは非魔導師の人たちで運用できることを証明しようって気持ちで地上本部側は先行しているみたいで、人員選抜に結構時間を割いていたし。なのでデスクワークを主体として業務をこなしていた人たちの筈なのに、ガタイが結構良いから魔法を使わなくてもいいスポーツ経験者でも探し当てたんだろうね。地上本部に勤める人はかなりの数だし。

『では新しく試験運用される部隊によるデモンストレーションをまずはっ、ご覧くださいっ！』

司会者が片手を振りかざした事を確認して部隊員は行動を開始。と言っても適当な距離からトリガーを引いているだけだから難易度は凄く低い。そしてもちろんこれだけで終わる筈はなく仮想敵も用意されているだろう。

「さて、これで終われば肩透かしだが……しかし……」

そりゃ、これだけで終わるはずなんてない。これだけの為にこの人数を集めたっていうのなら響感を買っちゃうのは目に見えてますもん。彼等の実力を発揮すべき時間はこれからだろう。中将さんの思惑通り仮想敵部隊が現れるんだけど、その構成は陸士部隊から選ばれた犠牲者、もとい魔導師さんが二人。

手元のモニターからの情報によるとB+ランクの陸戦魔導師さんで一人は近接魔法がメインの人、もう一人は遠距離・支援型の魔導師さんだから相性は良さそうなんだよね。対して試験部隊から選出さ

れたのは全十二名の内から六名。全員が非魔導師さんなんだけれども、拳銃型魔法発射装置と簡易バリアジャケットを装備している。他にもヘルメットや肘宛なんかも装備しているので見た目は地球の軍隊そのもの。女性でも扱える事を想定して作ったので、選ばれた十二名の中に女性が居ないのは残念だけれど、体力面で優れているのはやっぱり男性だから仕方ないかな。装備の数が揃えば護身用として配備する事も出来るし、女性が扱うようになる事になるのはそう遠くない未来だろうから、悲観する事でもないだろう。

『それでは私の隣に居る魔導師二名に犯人役になつてもらい、試験部隊には彼等二名を確保する事を目標としてもらいましょっ！』

その台詞と同時に、関係者は所定の位置につく。客席のモニターにはそれぞれを追跡するように監視魔法のサーチャーが付与されて、リアルタイムで何処に居るのか何をしているのかが私たちにわかるようになってる。犯人役側にももちろん同じものが付与されていて、こちらもありリアルタイムで行動が客席に入る人たちには分かるようになっていた。

「始まる、か」

小さく呟いた中将さんの声と同時に訓練場では犯人を捕まえる為、試験部隊六名による犯人捕獲作戦が始まった。さて、上手くいけばいいけれど、どうなることやら。まるで他人事のような考え方だけれど、一応色々調べて警察の逮捕術とか軍隊方式のやり方とかのデータを手渡しておいたから、大丈夫だとは思う。作戦指揮を執る部隊長や小隊長クラスの人のセンス次第だろうなあ。

——…うくん。

試験部隊の装備が完全に地球にある軍隊の特殊部隊を模したような感じだったから、私が渡したデータを元に参考に装備を選んだのだろうって思ってたから、行動自体も特殊部隊そのものだったでござる…。魔法が使えないからハンドサインを使う事は提案していたんだけど、まさか作戦行動まで真似をするとは。犯人役の人たちに見つからないように建物の壁際に沿って移動したり、出入り口で犯人が居ないかどうかの確認と『クリア』と言う台詞。

嗚呼、まさに特殊部隊そのものです。これなら拳銃じゃなくて自動小銃にデザインを起こしていればもつとカッコよく決まってたのに。今度作って新装備として売り込もうかな。外見だけ変えて機構自体は中身をそのままでもいいんだし。

「ん、頭を抱えてどうしたね?」

「いえ、どのせかいのおとこのこでもかつこよいものはすきなんだな、と……」

「はははっ！ 確かに男は何時までも子供だ、と言われる生き物だからね。君は女の子だから理解し難いのもかもしれんが、車や飛行機、憧れるモノは沢山あるよ?」

珍しいなあ、ずつとしかめつ面で笑った所なんて見た事がなかったけれど中将さんが可笑しそうな顔をしているんだもの。変な事を言っちゃったのかなあ、気分を害してはいけないけれど、まあ大丈夫だろう。

「私もあと十年若ければ、あの部隊に参加してみたかったよ」

いや……それは、どうなんだろう。中将さんには立場つてモノがあるのだから。でも童心を忘れられない男の子が私の隣にも居るだなんて思わなかった。

もちろんこの言葉は褒め言葉だし、私だつて厨二病をこじらせた兵器を作っているのだから、ロボットとかに憧れる男の子の気持ちも十分に出来るから。逆に私の方が異端なのかもしれないね。

「そろそろ決着がつくかな」

モニターを見ていた中将さんの台詞で気が付く。そうだった試験部隊の人たちの事を忘れかけていたのだけれど、既に状況は犯人役二人を追い込んで逮捕寸前になっていた。大事な場面を見逃してしまった気がするけれど、あとで映像データを貰つて改善案を提出しなきゃね。一応、発案者だからその辺りの尻拭いとか責任はちゃんと負わないと。無責任に放置はできないし、新装備も色々と考えている最中だからこの試験部隊をポシヤる訳にいかないし。

『でりゃあああああああ!』

犯人役の一人に飛び掛かり背負い投げを披露する試験部隊員一名。

『取り押さえろおおお！』

その声と共に残りの五人が不条理に残りの犯人役一名にのしかかる。

「最後、魔法が関係していないな……………?」

——ヤバイ。あの人たち脳筋だ……………。

床に手足を付けて跪き頭を垂れるポーズを取りたくなるけれど、場所が場所だけに我慢。そういえば攻撃する事だけに囚われてて捕縛の事を考えていなかった。物理的手段を取った彼等に責任は無いと言いたい。

「これだとあぶないですね……………。ほぼくけいのまほうがつかえるように、なにかかんがえます」

「そうしてくれ、このままでは現場には立たせられんな。だが先は明るい。なにせ非魔導師が魔導師に勝ったのだから、な。もしかすれば歴史の転換点を私は見たのかもしれない」

大げさですよ、中将さんは。そんなモノを作ったつもりはありませんし、地上本部の状況が今より良くなれば御の字くらいで考えて発案した装備ですし。てか歴史に名を残すだなんてことは考えていないから、スカさんの名前だけで十分にお腹いっぱいなんだよね。でもまあ、そう言われて悪い気はしないし、これから私は囑託魔導師として現場に呼ばれるようになるだろうから、出動する回数が少しでも減る事を願って作ったのだし。善意なんてものは存在してなくて、私心が大部分を占めてるし。危ない現場になんて立ちたくはないですし。

もう何度かデモンストレーションは行われ、結果は二勝一敗で可もなく不可もなくという結果。試験部隊の戦術が知れ渡れば、対抗措置を取られそうだからその辺りも課題だなあ。今日の改善点をデータに纏めて提出しなきゃね。それにこういう事って思った通りにはなかなかないかないし、部隊が本格的に運用されるのはもう少し後になりそうな予感がする。

◇

——お披露目式後の夜

地上本部からクラナガン市内にあるとある高級ホテルの最上階ラウンジには、地上本部の制服を着込んだ高官の人たちに、本局の制服を着た高官の人たち。さらには聖王教会上層部の人たちに管理局に関わっている一般企業のお偉いさんたちまでがこの場に居る。

お披露目会は最終戦となりホテルで豪華な立食会となったんだけど、面倒な事この上ない。本当ならお昼の試験部隊のお披露目会が終われば家に戻る為にトングラする予定だったというのに、中将さんやら他の高官の人たちに捕まり夜まで色々と話し込んで、結局は最後まで付き合う羽目になってしまった。

「ウチにも君のような人材が欲しいのだが、働いてみないかね？給料は優遇するぞ？」

「私の養子にならないか？ 苦勞はさせんし、やりたいことをやってもいいから」

「……………私と結婚しないか？」

とまあひつきりなしに勧誘される訳である。最後に社会的に超問題がある台詞を言い放った小父様は周囲の人たちから私刑に処されていたけれど、そんな事を平気で言っちゃう輩は放置、放置。

管理局の人たちは見て見ぬふりをしていないで仕事をして下さいよ、と視線を送って見たものこんなくならない理由で仕事なんてしたくないかあ。遠い目になりながら、精神リンクで私の感情が伝わってしまったのか隣で控えているロゼさんが不機嫌最高潮になってから、そろそろヤバイ。こんな事ならロゼさんに新聞の勧誘を断る時みたいに男装をお願いして強面の中年男性にでもなっってもらえば良かった。

「元氣だったかしら？ 久しぶり、とまではいきませんが本局以来ですわね」

柔和に笑いながら私の下にやって来たのは制服姿のリンデイさんだった。私服姿も良いけれど制服姿も良く似合っつて羨ましい限りだ。スーツの似合う女の人はカッコいいし。

「あら、ありがとう。…………癖って怖いわね。小さな子供を見るとどうしても抱っこしたくなるんだもの」

一瞬手を伸ばして私を抱きかかえようとしたけれど、場所が場所だけにどうにか堪えて苦笑いをしてた。そんなリンディさんに遅れること少しカリムさんの上司さんも私の下へとやって来て二人が見張ってくれているから、さつきよりも状況は落ち着いた。

やっと料理に手が付けられるとテーブルを見てみると、白い布しか見えない。身長が足りなくて料理の内容が全然わからない。いつもならロゼさんに頼んで抱っこをしてもらい、おいしそうな品を見繕うんだけれどこの状況じゃ出来ないなあ。仕方ないのでロゼさんには適当に料理を小皿によそってもらおう事に。隣でリンディさんとカリムさんの上司さんが笑っているけれど気にしな—い。あと数年我慢すればきつと今の身長よりも成長しているはずだから。けれどもなんでリンディさんたちが此処に居るんだろう。

「はやてさんにお願ひされて、ね。仕事が入って来れないから代わりにお席してくれないかって頼まれたのよ」

「私もカリムから頼まれてね」

二人とも忙しい身だということにこんな場所に借り出して申し訳ないです。お仕事が別にあつたでしょうし、もつと有意義な事に時間を使って欲しいものだけれど、お人好しの人たちに言っても聞いてくれないんだろうなあ。

「気にしなくて良いの。それに悪い事ばかりでもないわ」

にっこりと笑ったリンディさんの顔の裏には何かあるんだろうな、と思うけれど詮索するような真似はしない。人脈を広めるつもりならこういう場所はうってつけでいい機会だろうし、他の人たちも談笑しながらその笑顔の裏には個人の思惑が色々とあるんだろうしね。

「ああ、そうそう。管理局に貴女の魔導師としてのデータが仮登録してあるのを見ました。嘱託魔導師になる気があるのは知っていますが、誰があんな事を？」

陸の中将さんですねえ。さつき色々と話していたら、これから先の話も出て将来どうするのかを聞かれたから。無償奉仕の一環として嘱託魔導師に登録するつもりだって言ったら、話が勝手に盛り上がってて仮登録しておこうってなったんだもん。嬉しそうに話す中将さ

んに嫌だなんて言える訳はなく、現在使える魔法の登録をした訳で。前線に出る気はないから、結界魔法や検索魔法に治癒魔法をメインで登録したけれど。

「はあ……。陸の人たちも困ったものね……………」

陸も海もどつちもどつちで変わらない気がするけれど、敢えて言わないでおく。九歳のなのはさんを囑託魔導師にと誘ったリンデイさんが言えることなのかなあと。まあ、なのはさんの場合は本人の意思が強かったから仕方ないにしても、元日本人としては高等学校を卒業してからでも遅くないと思っちゃうんだなあ。それに危険が付き物の仕事なんだから、飛べなくなる可能性もある。管理局を辞めて故郷に帰るってなったときに、大変なおもいをしなきゃならないのは本人なんだしねえ。管理世界というか、管理局を事故や怪我で退役した人たちの保障ってどうなってるんだろ。まあ、こんな事を考えても前に進まないし、その時はその時、なんだろうけれど。

「マスターどうぞ」

「ろぜさん、ありがとうございます」

思考の海に沈んでいた私を引き上げたのはロゼさんだった。そんなロゼさんから手渡されたお皿の上にある料理はどれも美味しそう。流石首都に建設された高級ホテルの料理だ、一口含んだだけだというのにすんごく美味しい。

作った人に意見を聞きたくてきよろきよろとしてみるんだけど、シェフの姿は見当たらない。んー社交界みたいな感じだから、料理の説明とかしてくれないのか、残念。代わりに確りと自分の舌と頭に料理の味を覚えさせて、家に帰ったら再現できるように頑張らなきゃね。上手くいかなかった時は悔しいけれど、上手に味を再現できると嬉しいんだな。

「……失礼。ゼロ・S・フリーランダー君で間違いないかな?」

リンデイさんとカリムさんの上司さんの鋭い眼光をすり抜けて一人の若い男性が私の下に現れた。高級スーツを着込んだ男性からはオーデコロンの匂いが。少し苦手な感じの匂いなんだけど我慢できなくはないし、黙っているのも失礼なので私も挨拶を返した。

「ご丁寧にどうも。小さい子供だというのに感心するよ。やかましい餓鬼こどもは嫌いでね、皆みな、君のような子供ならと思うが……まあ、いい」
そう言つて彼は彼の来歴を話し始める。黙つて時折相槌を打ちながら聞いているのだけど、長いので要点をまとめると中堅デバイス機器メーカーの次期社長さんだそう。ようするに良い所の御坊ちゃま、とか、ボンボンとか言われる類の人になるのかな。彼が付けてるオーデコロンの匂いと共に小物臭まで漂つてくるのは気の所為だと思いたいんだけど、どうなんだろう。

「殴つて良いですか……？」

何度か指を鳴らして物騒な事を言つちやうロゼさんはいつも通りの平常運転。

「気持ちには理解出来ませんが……我慢してください貴方の主人だつて我慢しているでしょう。ロゼさん」

リンデイさんの言うとおりですよ、ロゼさん。周囲の人たちには見えていないし聞こえていないようなので、好きに彼の理想の世界とやらを語つて貰いましょう。興味のない事からでも何か発明に役立つ切つ掛けを頂けるかもしれませんし、この世界に生まれて必要のない人なんて存在していないでしょうから、彼もきつと何かをもたらしてくれる筈なんです。

——うそくん！

滅茶苦茶長い彼の台詞をずっと聞いていたのだけど、言いたい事から全く有益なことを見いだせなかつたよ。私に人の話を聞くセンスがないのかしら、だつてスカさんのクローンだからその可能性が捨てられない。

この世界に生まれ変わつてこの手の人と会うのは初めてだけれど”勉強はできるんだけど仕事はできない人”っぽいんだもんなあ、目の前でまだ喋つている彼。実際に仕事をしている姿を見た訳じゃないから、断言はできないけれど。大口を叩いちやう人は大体二種類に分けられるよね。本当に実力を持っているか、虚勢や見栄でそう言つて行動に移せない人。

彼が伝えたい事を要約すると”リンカーコア所持者の優位性”そ

れと”魔法世界における大気中の魔素含有量について”。ようするに魔力持ちの人は優遇されるべきって事と、自然界に存在する魔素を使い過ぎていく傾向があるから自粛しようって。

鳥が先なのか卵が後に生まれたのか解らないけれど、どうしてそんな考えに至ったんだろね。地球の石油と同じように、ここ管理世界では魔素の枯渇が心配されているけれど自然保護活動や企業努力、管理局による大気中の魔素量観測等によって維持されているからそんなに心配は要らないから過剰に反応する必要は今の所ないのだけども。

大気中の魔素を吸収し魔力変換をして、これまた非魔導師の人たちに使ってもらおう兵器を考えていたんだけど、耳が痛い。今の所は心配ないんだけど、これから先の未来で魔素が枯渇しちゃうこともあるだろうし。

その辺りのバランスも考えながら作ってはいるものの、難しくて難航してる。私は彼の話あまり聞かないまま、遠い目をしているんだけど良く喋れるなあ。喋る事は苦手だから、ちよつとその口を分けて欲しいけれど彼の口だと余計な事まで言ってしまうそうなので止めておこう。

最終的には自然に頼らずリンカーコアを所持している人たちだけで成り立つ社会を望んでいる、と言い放った。いや、それだと大方の人が淘汰されちゃいますよ。社会として成り立たないよ。それにリンカーコアを所持していない人だって有能な人は幾らでも居るんだから。レジアスさんや現中将さんなんかがそうだし、局員の人たちにも大勢居る。だから目の前の彼の選民意識が高目の理想はあまり好きにはなれないなあ。

「君が造りだしたモノも素晴らしいが、魔導師の人間自体を強化する事も考えてみないか？」

私もリンカーコアを所持しているし、スカさんから魔改造を受けているので一応高魔力保持者ってことになるから彼に目を付けられたのだろうか。多分私が非所持者なら彼の視界にすら入ってなさそうな気がする。直前の彼の言葉にザワつきはじめる周りの人たち。お

祝いモードで浮かれていた非魔導師で出世してきた陸の高官の人たちのこめかみに青筋が浮かんで向けられた視線が超痛いんだけど、私が言っただんじやないんですよ。

厳しい視線を受けながらも彼の事を無視するわけにはいかないの
で、頭を絞る。魔導師の人たちの強化も勿論考えている事だけれども、取り急ぎ非魔導師の人たちに自分の身を守ることが出来るモノを作りたいんだよね。魔導師の人たちに頼りっきりの現状をまずはどうにかしたいから。だからこそ今日のお披露目されたモノを作って管理局に売り込んだんだから、その事についてはまだまだ先の話だろう。

「な、何故だ……私の意見は素晴らしい、と思わないのか君は？」
確かに素晴らしい理想だとは思いますが、人の意見はそれぞれですから。それに一度にたくさんの事を取り組めるほど私は器用でもありませんし。

「では、考えてはくれないのか……？」
考えるだけでいいのなら。絶望に染まったような顔になっちゃってる彼に流石に『嫌です』とは言えず濁した返事になっちゃった。ま、考えてみて良い案が浮かべば開発に取り掛かるだろうし、どうなるかわからないけれど努力はしてみますかね。

絶望に染まった顔色から微妙な顔に変わり、やつのことで自己紹介をした時の自身に満ち溢れている顔に戻る。そうして彼は私の下から去って行ったんだけど、もう関わる事はないかな。リンディさんとカリムさんの上司さんに『あまり気にするな』と言われ心配されたけれど、もう会わない人だから大丈夫、大丈夫。

——あの餓鬼……。

そんな彼の心情を知らぬまま試験部隊御披露目会は幕を閉じた。

第十三話：カゼ。

——あへえ。

頭が重い熱い、身体が痛い寒い、鼻が詰まる苦しい、という事で私
は見事に風邪を引いちやうってベッドから起き上がれないでいる。最
近のどの調子がおかしいなって思っていたらコレだ。

生まれてから四年間、風邪なんて掛からなかったし大きな病気も
患ったことはないというのに。なんだろう、スカさんの所でお世話に
なって事件があつて捕まつて。それから一定の期間を経て一応独立
したし、張り詰めてた糸でも切れてしまったのだろうか。こりやもう
駄目だ、と諦めて今日の無償奉仕はお休みする事を上司であるユーノ
さんには伝えておいたから、このまま眠つてしまつても何も問題はな
いんだけれども、寒さと頭痛と筋肉痛で眠れる気がしない。

「マスター」

かなり心配した顔で布団を被り込んでいる私を覗き込むロゼさん。
風邪を引いた私を見るのは初めてだから困惑しちやうのは仕方ない
んだけれど、死んじやうつて訳でもないし気にしないで欲しいんだけ
れど無理だろうなあ。精神リンクで色々と私の情報がダダ漏れだろ
うからね。申し訳ないとは思いつつ、何も出来ないので情報を垂れ流
すしかないつていう次第。

「大丈夫ですか？」

大丈夫かと聞かれると、大丈夫じゃないと答えたいんだけど口が
重くて開かないし頭も回らないから、ロゼさんの問いかけを無視する
形になってしまふ。そんな私を見て更に顔をしかめながら、どうすれ
ばいいのか困り果てるロゼさんの姿は珍しいかも。問い掛けを無視
することは出来ないから取り敢えず平気だからこのまま眠つて治れ
ば儲けものだと言話で答えておいた。

「ですが……」

だよねー。熱は上がっている最中だし呼吸は普段よりも荒いし時
折咳込んでるのだから『平気』と言つても信じてもらえないのは当た
り前なんだけれど。病院には行きたくないし、歩いて行くのも不可能

だからこりや耐えるしかないかなーって。その旨をロゼさんに伝えて私は眠りの淵へと誘われた。

——なんだろうコレ。

コレが夢である事は理解しているし、現実じゃない事も分かる。けれど自分が体験した事でもないし、これから起こるであろう未来でもない。

ただただ一人の男性が世界に絶望していく様を強制的に見せつけられていた。何処かで見えた事がある人だと夢の中で余り動かない思考で、嗚呼、そうだと頷いた。スカさんだ、コレ。最高評議会の凝り固まった思考の辿り着いた先の答え、ジェイル・スカリエツティが生み出された後。聡明なスカさんの頭脳をしようとして画策し失敗に終わったけれど。

『二歩と半分……、二歩と半分だ』

時折口癖のように呟いていたスカさんの台詞。今よりも若い時に既にそう言っていたんだね。研究者として魔法や科学を追求していったスカさんの姿。そうして余りの人類の馬鹿さ加減に気が付いてしまったスカさんは、どうやら絶望してしまっただけ。己の能力を生かしても、そこから先に進む事は難しいのだと。それならばいつその事、倫理もなにもかもを無視してしまっただけが人類はその先の希望に辿り着けるのではないかと。

狂ってしまったスカさんの考え方の一端を覗かせる夢だった。

其処から先のスカさんは度を越した非道を繰り返してた。人間の尊厳もなにもない実験を行っていたし、動物実験もしてた。

例え失敗しても、これが先へと繋がるのだからと希望を捨てない執念があった。人間としては褒められた行為ではない、けれど探究者としてなら至極まっとうな行動なのかもね。ただ世間や常識や倫理を無視できないからこそ、人間としての理性が捨てられない私は彼のように成りたいとは思わないけれど。

『足りない、足りない、足りない』

なにもかも足りない、と腹の底から低い低いスカさんの声が聞こえる。スカさんの人生を強制的に見せられていただけだというのに夢

の中のスカさんと私の視線がバッチリと合い、ぞわりと身体が総毛立つ。視線に宿すモノは狂気。

オカシイな、三年間一緒に暮らしていたけれど、あんなスカさんの視線は見た事がない。夢だから都合よく解釈しちゃっているのか、それともあの三年間で感覚がマヒしてここ最近の平和っぷりに通常の感覚が戻ったのか。どちらなのか、どうなのかは判らないけれど。そんなスカさんの視線に悪酔いしてしまったのか、どんどん気分が悪くなっていく。嗚呼、なんだか不味いなーと思った矢先。

——自主規制。

強制的に夢から覚めてベッドの上に吐瀉物をブチ撒いた、筈だった。

『マスター……』

ロゼさん、なんてことを。私がリバースしたものをべろーんと引き伸ばしたスライムさんの姿で受け止めてくれたんだけど、そこまでしなくてもいいんじゃないのかな。実際、汚いし。風邪の菌が存在しているだろうから、ロゼさんにうつってしまう可能性も。ロゼさんが倒れたら私が困るのでそんな事態にはなって欲しくない。

『私に細菌やウイルスの類は無効ですから』

そうだったのかと納得しつつ、だんだんと受け止めてくれたアレが消えていく。ロゼさんは食事を摂る必要がないから”食べる”という行為はしないんだけど、た、食べたのかなあ。私のアレ。なんだか複雑な心境になりながら、まじまじとスライムさんの姿で波打っているロゼさんを見つめる。

『消化吸収したというよりも吸収分解した、という方が正確かも知れませんが』

はへーと一瞬理解するけれど、やっぱり人のゲロを飲み込むのは如何なものだろうか。

『マスターのモノですから。なんともありませんが』

いや、うん。嬉しいのやらなんなのやら、複雑な気持ち湧いてくる。ロゼさん、だんだんお茶目さんを通り越して変態の領域に入っているんじゃないのかなあと心配になってくるんだけど、またしても

リバースしそうな気が。

風邪ってやつかいだよ。自力で治らないなら素直に病院に行くだけけれど、数日すれば快方に向かっていくんだもん。寝てればいいか、と考えてしまうのは仕方ないんだ。綺麗さっぱり吸収分解されて、丸みを取り戻した黒いスライムさん姿のロゼさんを抱き枕代わりに手を回して、口の中を綺麗にしなきゃと起き上がろうとした時だった。

「ゼロ、起きたの？」

私の部屋にひよつこりと顔を出したのは私服姿のフェイトさん。突然の登場に私は驚いて眠気が吹っ飛んでいくんだけど、身体がなかなか脳味噌の命令を受け付けてくれなくて困る。起き上がろうとするんだけど、腕に力が入らないし。

「無理はしないでいいから」

ぱたぱたとスリッパの音を立てながらベッドの近くまで来て、やりわりと起き上がる事を止められたんだけど、フェイトさんはお客さんだからおもてなしをしないと。

「動いちゃ駄目だよ」

めっ、と怒っていない優しい顔でそんな事を言われてしまうと泣きそうになる。どうにも前世でこういう場面に遭遇した事がなかったから、誰かの優しさが身に染みて。熱の所為で潤んでいる目に余計に水が溢れそうになるけれど、どうにか我慢。それに今ここで泣いちゃうとフェイトさんが困惑することは確かだからね。

「吐いたのゼロ？」

知られたくない事実を簡単に看破されてしまい、仕方ないので素直に頷く。頷いた私に驚いて慌てるフェイトさんに『大丈夫』と伝えても効果は薄く、急いで洗面台へ連れて行ってくれてスッキリする事が出来た。

甲斐甲斐しくお世話をしてくれるフェイトさんに感謝しながら、ふと思う。家の鍵は渡してあるしフェイトさんが我が家に居ることはかまわないんだけど、なんで居るんだろう。

「保護司の人から母さんに連絡が入ってて。さっきまで母さんも居

ただだけれど、用事があるから戻っちゃったんだ」

あ、忘れてた。今日は保護司の人の訪問日だったんだ。寝込んでやってたしロゼさんが対応してくれたんだろうけれど、それならそれで起こしてくれれば良かったのに。フェイトさん曰くさつきまで一緒に居たとの事。次の訪問日にはお礼と謝罪をしなきゃなあ。すっかり来る事を忘れていたし、リンデイさんに連絡が入っていきやこのまま寝てただろうし悪い事をしちゃった。それにリンデイさんにも。久しく会っていないし顔を見たかったんだけど。

フェイトさんにリンデイさんから伝言を預かっている言われ、聞いた内容は『無茶したら駄目』と厳しめの御言葉でした。手間をかけさせて申し訳ないとは思うものの風邪はどうにもならないから許して欲しい。

フェイトさんはフェイトさんで私を病院に連れて行く為に残ってくれてたんだって。私の移動手段ではちよつと遠い近場の総合病院に連絡を入れて、電話をした時は混雑していたからそうだから予約した時間まで待ってたそう。その時間が来たので私の部屋に顔を出してみれば、私が目を覚ましてちよつと驚いたって苦笑してるフェイトさん。話もほどほどに私はフェイトさんに抱きかかえられて車に乗り病院に連れて行かれたみたい。

みたいっていうのは、どうも熱にうなされていたらしくあんまり記憶がないんだよね。覚えているのはフェイトさんの腕の中はとても暖かかったことと、フェイトさんが使ってるシャンプーの良い匂いがしたことくらい。診察が終わってそのまま我が家に戻るのかと思えば、心配だからなのはさんとフェイトさんのお家に行こうねって言われて。二、三日お世話になってました、ハイ。

たぶんあの場でなのはさんの家でお世話になる事を固辞すれば、もつと私のプライベートに踏み込んでくるのが確実になっちゃいそうなので素直に頷いておいた。二人とも小さい頃に抱えたモノのお陰で、困ってる人をみれば放っておけない性質みたいだし、六課で一ヶ月間お世話になった時に実感してます。断れば確実に強引な手段で連行されてたと思う。

それでも四歳という身で出来る事は少ないので有難い事だ。本当に申し訳ないと心の中で何度も謝りながらも、甲斐甲斐しく看病されるのは初めての体験で恥ずかしさとなのはさんとフェイトさんとヴィヴィオさんの優しさが身に染みしました。あとロゼさんの過保護ぶりが更に加速してます、どうしましょう。

◇

「熱、下がらないね」

なのはさんのお家でお世話になりはじめて二日目。熱が下がる気配はありません。なのはさんは管理局員として出勤しているしヴィヴィオさんも学校に通ってる時間だから、お家に居るのはフェイトさんと私だけ。ヴィヴィオさんが居るのだからなのはさんのお家でお世話になるのはどうなのかなーと思っただけだけど、フェイトさんもフェイトさんで緊急の呼び出しの可能性もあるので、なのはさんの家の方が安心だと言ってた。

ハウスキーパーとしてアイナさんも居るから大抵の事には対処できるしね、と笑顔で言われればお世話になる身なので文句も何も言えない。ロゼさんは私の影の中で大人しく待機中なのでカウントには入らず。フェイトさんは次元航行から戻ってきたばかりなので、長期休暇中なんだってさ。本当、管理局って忙しいよね。だというのに人材不足で大変みたいだし。どうにかならないものかなーなんて考えてはいるものの、簡単に打開策が浮かぶなら誰かがやってるだろうなあ。

ベッドに潜り込んでいる私を心配そうに見つめるフェイトさんは、熱が下がらない事が気にかかるみたい。病院のお医者さま曰くただの風邪だそうだから、薬を飲んで安静にしてれば治るだろうって。インフルエンザもミッドチルダに存在するそうなので、地球と似ているんだなーって回らない頭で感心してた。身体が怠くて仕方ないんだけど、我慢我慢。

「……だいじょうぶ、です」

本当は大丈夫なんかじゃないんだけど泣き言なんていえば目の前の人はきつと余計に心配しちゃうだろうし迂闊に弱音は吐けない

し。喉も痛いからあんまり喋りたくはないから念話で済ませたいけれど、そんな事をすればフェイトさんは……以下同文。でも手で髪を梳いてくれる手は温かいし、優しいし。前世でこんな事をされる機会はなかったし、私に母親が存在していればこうしてくれてたのかなーとか余計なことを考えていれば目が重くなってきた。

「寝てていいよ。しばらくこうしてるから」

うつらうつら、頭の上からフェイトさんの声が聞こえたのを最後に私は随分と眠っていたらしい。お日様が真上にいたはずだというのに、次に目が覚めた時にはもうお月様の光が部屋の中を優しく照らしている。

晩御飯は定番の卵粥だった。懐かしいな、と思いつつ誰かに作ってもらったものを食べるのは初めてだと感慨深く思いながらも、熱の所為で味がわからない。ヴィヴィオさんが横で『おいしい』って嬉しそうに食べてるんだけれどね。ちなみに作ってくれたのは仕事帰りのなのはさん。『味わかるかな?』って聞かれたんだけど嘘を吐く訳にもいかないので正直に答えると、やっぱりかみたいな顔をして笑ってた。明日はフェイトさんが朝とお昼と夜に御飯を作るから楽しみにしててね、って。

早く回復すればいいんだけど、頭はまだ重いまんまだし鼻も詰まったままでこの感じだと明日は確実に寝込んでいそうな気がする。御飯が終われば病院で処方された薬を飲んで、そそくさと客室に連れて行かれて寝かされました。一日中寝ていたから寝れないかなって考えは間違えて、また直ぐに寝ちゃってた。途中なんか目を覚ましなからだったけれども。

「ゼロ、眠れない?」

差し込んだ明かりで目が覚めると、なのはさんとフェイトさんの姿。時間が気になって部屋の時計を見るんだけれどいつもの場所に時計はなくて。そっかココは自分の部屋じゃないんだった。

「熱、お昼の時間より上がってる……」

やんわりと私のおでこに添えられたフェイトさんの手が少し冷たくて気持ちいい。

「んー。フェイトちゃん」

「どうしたの、なのは」

なのはさんとフェイトさんが小声で話してて内容までわからない。話し終わるとフェイトさんが部屋を出て行き、なにかを手に持って直ぐに戻ってきた。

「……熱下がらないと辛いから。」座薬、イれようか」

座薬ってなんだっけか。座って飲む薬で座薬、だよな。そっかそか、それなら簡単。……いや、現実逃避は止めよう。入れようの文字が挿入れように聞こえたのは、きつと熱の所為だ。座薬を入れること自体は構わないんだけど、今の状況だと確実になのはさんかフェイトさんの手によって施されるだろうから、全力回避しなきゃ。見てくれば子供だけだけど、心は一応大人を自負しているので恥ずかしいですってば。

「いやです」

顔だけ出していたんだけど、ぼふつとお布団を被って逃げる。そんな私の様子にお二人は少し驚いたみたいで。あーそっか。基本私って言われた事は『YES』っていつも返事をしているから、『NO』って言っちゃった事にびっくりしたのかなあ。ご飯の後に飲んだ薬も嫌がらずに素直に飲んだし、なのはさんとフェイトさんが驚くのは無理もない。ないんだけど、今回はどうしても自分の精神衛生上拒否したい。

「はいはい。お手洗いにいこうね、ゼロ」

ぼふつと被ったお布団をいとも簡単に引っぺがされて、なすすべもないままなのはさんに抱きかかえられてトイレにドナドナされる。いや、うん、まあ。トイレに行かなきゃならないのは理解出来る。

排泄物と一緒に座薬が出ちやう可能性があるから、済ませておかなければならないことも。だけれど、なのはさんまで一緒に入って来るとはコレ如何に。便座に座るのは体格が足りなくて少しばかり苦労するけれど、ゆっくりと時間を掛ければ座れるし。なので全力でお断りして心の整理がつくまでトイレに籠城してたら、なかなか出てこなかった為にフェイトさんがドアを蹴破ろうとしたので慌てて出る羽

目になっちゃった。

「ゼロ、カんじゃ駄目だよー」

結局トイレから客室のベッドへと戻って、なのはさんに寝間着のズボンを強制的にずり降ろされ下着まで下げられた私は、まな板の上の鯉ならぬベッドの上の幼児で抵抗も何も出来ないまま。ロゼさんに助けを求めたけれど、ロゼさんも私の今の状態が気になっているのか私が少しでも楽になるのならば我慢して欲しい、と言われ。なんだか裏切られたような気もするけど、怒る気も起る気力もなかったので諦めの境地に陥った私。

——あひん。

声にならないうめき声を一度だけ上げて、羞恥心と共に空気の中へ無理矢理に溶け込ませて。遣り遂げきつたとなのはさんはドヤ顔をしてるし、フェイトさんはフェイトさんで眉尻を下げたまま心配そうな顔をしているし。理由も理由で怒れる訳なんてないし、明日の朝まともにお二人の顔を見れるか、そっちの方が心配だった。しばらくの間お尻の違和感に惑わされながら、結局は熱にうなされながら眠りに就いていた私。

座薬が効いたのか一時のものだったのか、翌朝になれば大分熱は引いていて。ちよつと怠いけれど昨日よりも全然マシだし、これなら明日には平熱に下がり切っているだろう。

朝一番に私の様子を伺いに来たなのはさんとフェイトさんも、ほつとしていたからきつともう大丈夫。それでも今日一日は安静にしているようにと言われ、なのはさんとヴィヴィオさんは仲よさげに家を出ていき。フェイトさんも安心したのか、昨日みたいに難しい顔をしていない。味覚もちよろつとだけ戻ったのか、御飯の味がわかるので『美味しいです』って伝えると、へにやりとフェイトさんが笑ってくれた。

回復した後日、リンデイさんを始めなのはさんフェイトさん、そして何故かヴィヴィオさんまで加わり、『通信端末を渡していたのに何故使わなかったのか』と問い詰められるし『心配するから連絡を寄越して』と泣きつかれて。私が無茶をする事に頭を抱えていた皆さんな

んだけれど、皆さんこそ無茶を目一杯やっちゃう人たちなんだから、どっちもどっちだよなーって口には出さないで心の中に留めておきました、マル。

◇

公式魔法練習場が完成してからしばらく、契約内容には一般の人たちにも開放する事が建設条件にも入っていたので敷地内にフェンスを設置したり家から入る道とは別方向の場所にちゃんとしたり入口を業者さんに作って貰ってただけけどやつとそれが完成した。近所に魔法練習場がなかった為に御近所様には好評で、休みの日の昼間は結構人が集まっている。その集まっている事を良い事に、日差し避けで作った屋根とベンチが設置されている場所にはこんな張り紙がある。

”魔導師の挑戦者求。勝者には金一封”なにも見返りがないものに人は寄り付かないのは理解しているから、金一封はまさしく客寄せパンダ効果を狙って書いたんだよね。それに大した額でもないし、挑戦者を求めているロゼさんが早々負ける訳はないし。その一言の効果は抜群で挑戦者は後を絶えない。しかも勝った人が居ないから噂が余計に拍車を掛けて結構な自称腕自慢の人たちが集まってくるけれど、ロゼさん一人だから流石に一日に何十人も捌く事はできないから一日一人って制限があるけれどね。

ルールもちゃんと作ったよ。

一に、挑戦者は一日に一人まで。再度の挑戦は一年以上の期間を経ってから。

一に、魔導師ならば年齢・性別・人種問わず。使い魔との共闘も可。召喚獣との共闘も可。

一に、使い魔、召喚獣のみでの参戦も可。魔導兵器（傀儡兵等）のみの参戦も可。

一に、用意したダメージ判定測定器を両者必ず装備する事。

一に、デバイス使用も可。個数制限無し。

一に、勝負が判定されるまで時間無制限一本勝負。

尚、未成年者は保護者の許可を必ず取る事。

とりあえずこのルールで運用して問題が出ればルールの改定や追加を行う事も記しているから、何か問題が起こっても大抵の事には対応出来る筈。あ、ちなみに公式魔法練習場にも使用ルールがある”私闘は固く禁ず”それだけなんだけれど、大事な事だ。

ちなみに私闘を起こすとロゼさんが問答無用で割り込んで止める手筈となっている。今の所、御近所の人たちが利用しているだけだし、ガラの悪い人たちが集まったりしていないから平穩そのもの。私も時々、体力作りと新作魔法の練習を兼ねて利用している。これでもやく大手を振って魔法の練習ができるから安心だ。

迷惑を掛けることはないのが良いんだし、どうやらこの辺りの地区は陸士一〇八部隊の管轄みたいだから気を付けなきやね。お姉ちゃんズのパリリンになる予定の人の不興を買ってはいけないもん。

「よろしくお願いします」

無表情のまま一礼するロゼさん。髪が長くて邪魔になるだろうか。らと簡単に纏めて上げたんだけど、気に入っている様子で。ロゼさんも洒落に興味があるみたいだから、今度お買い物に行つて色々見繕わなきやね。

ロゼさんは長身巨乳の金髪碧眼の美人さんだからどんな格好をしても似合うだろうし。今だって白のワイシャツと黒ジーンズに皮のブーツ姿で至つてシンプルな格好なんだけれども、着こなしているからなあ。

私はスカさんのクローンなので羨ましいと嫉妬心を抱きつつも、スカさんの因子を持っていた一女さんから四女さんまでは美人とかの部類に入る人達だったので、自分の将来にちよつとだけ期待していたりもする下心。モテるのは前世では無縁だったからね。ちよつとくらい希望を持ってても良いじゃないか。

と、余所事を考えている間に本日のロゼさんの対戦相手は額に青筋を浮かべてた。

「噂はマジだったのか。女だなんて舐めてやがる……」

社会不適合者の烙印をポンつと押されてしまいそうな雰囲気のがタイの良い不良少年。彼が今日の挑戦者だった。自分の事は柵の上

に上げておいて、人様を容姿で判断するのは良くありませんよーと心の中で叫んでおく。

私も私でロゼさんに挑戦者が現れれば一緒に練習場に繰り出してるんだ。一応ダメージ判定器や訓練場の設備はD S A Aのシステムを流用して改良したもだから怪我を負う事は早々ないだろうけれど、事故が起こって怪我をしちゃったらこんな事やれなくなっちゃおうので”治癒魔導師”として控えてる。

『――Ready Go!』

柱に設置されているスピーカーから人工音声が流れる。お互いにミッドチルダ式の丸い魔方陣を発動させてロゼさんは動く様子を見せず、相手の少年はロゼさんの様子を伺いつつも機を狙って。逆にロゼさんはすました顔で、彼が仕掛けてくるまで何もしない戦法だ。何時もの事だけけどね。

「……しゃらくせえっ!!」

状況が全く動かない事にしびれを切らしたのか、足に身体強化魔法と跳躍魔法を発動させた少年がロゼさんに飛び掛かかり、右ストレートを撃ち込もうと腰を捻り回転運動を加えて威力上げてロゼさんの左顔面に容赦なく叩きこむ。ロゼさんはその勢いを利用して、撃ち込まれる筈だった少年の右手首の部分に手刀で軽くいなした。弾道はそれで空振りに終わる。

「なっ! くそっ!!」

一度で決まると思っていたのか少年は驚いた表情を見せ、近接格闘戦で挑み続ける。んーちよつと手数が少なすぎるかなあ。得手不得手はあるだろうし、それが彼の戦闘スタイルだというのなら仕方ないけれど。

何度か近接戦で打ちあいをする二人なんだけれど、実力差は素人の私から見てもはつきりとしていた。武闘派のナンバーズの皆さんと手合わせしていたロゼさんだけあって、そこらに居るちよつと力自慢の青年じゃ力不足だったかあ。ちらつとロゼさんが私に視線を向けたので、私は一度頷く。そんなロゼさんと私のやり取りを、ムキになっっている青年は気付く様子は微塵もない。

「……決めます。御覚悟を」

そう言ったロゼさんは、相手の最初に放った技を模倣して倒してしまった。うーん、挑戦者に失礼だから余り手を抜いて遊んじや駄目だと伝えていたんだけど、今の所実力者は現れそうにないなあ。

よし、今回の賞金は次回の賞金に加算しておこうかな。そうしておけばこの挑戦に興味を持つ人が沢山現れる可能性がある。でもちやんとこの辺りはロゼさんと相談しなきゃ。戦うのはロゼさんなのだし、私の一存で決められる事じゃないもんね。噂がミッド中にまで広がってくれば強い人が現れるかもしれないけれど、まだまだ先の話だろうと遠い目になる私だった。

第十四話：善は急げ、急がば回れ。

ヴィヴィオさんと遊んだり、医療系の魔法を習得したり、デバイスマイスター資格をやつとの事で取得できたりと色々やれる事が増えてきてはいるものの、身体がついていきません。

四歳児、不便です。

早く大人になりたいなーと願いつつ、陸の囑託魔導師に仮登録なんてしたものだから各所からの勧誘が凄いな事になってるし。荒事には巻き込まれたくなくて、治癒魔法とか補助魔法系しか登録しなかった筈なのにどうしてこんなに引手数多なのか。管理局の人手不足の深刻さに頭を抱えながら、それを改善できるようにと心底思いながら大気中の魔力素を利用した魔導兵器の改修作業を行っているのだけけど、難点が多いんだよね。

大気中の魔力素が薄い場所じゃ運用がなかなか難しい。チャージするにも時間が掛かるし、連射も出来ない。逆に多すぎても撃てる回数が多くなって砲身が持たないとか……。

砲身を強化すればいいと思うけれど、それだと持ち運びが難しくなるから余りやりたくないけれど、やらなきゃ撃てないっていうジレンマ。バランスとか考えるのって大変だ。魔素が枯渇して資源がなくなっちゃうと元も子もないし、そのあたりのバランスも難しいよねえ。でも作ると決めたんだし、採用されなくても形にだけはしておきたい気持ちが大きいから頑張ろう。

この間やつとの事で御披露目会となった試験部隊に配備されている拳銃型魔法射出装置なんだけれど、拳銃型を自動小銃型に変更できるように渡りをつけた。地球の軍隊を参考にした形になるからもしかすれば両方装備するようになるかも知れないし、まだまだ先のことではわからないけれど。もう一つ捕縛用に刺又や投網、捕縛魔法を特定ワードで発動させて犯人を確保する投擲型ボール。これにはイメージ元があつて、ポケットモン○ターのモン○ターボールをイメージして作つたんだよね。

持ち運びに邪魔にならないからたくさん携帯する事事も可能だし。

特定ワードでソフトボール大の大きさになって犯人に投げつけて当たると捕縛魔法が作動する。ちなみに特定ワードは『お前に決めた』だ。もちろん、この特定ワードは変更できるからお遊びで付けたもの。配備されるようになれば、皆この事実を知ってとっとと特定ワードを変更すると思うから安心、安心。

「マスター、よろしいでしょうか？」

おや、ロゼさん。珍しいですね。研究室で私が作業をしている時は火急の用か、知り合いや事前にアポのある来客があった時くらいにか声を掛けてこないというのに。

「申し訳ありません、どうしてもマスターに会いたいという方がいらしてのですが……」

あまり歯切れのよくないロゼさんのそんな様子は本当に珍しいなと思いつつ、もう家に訪ねているのなら迎えるしかないだろうと思いついて作業を中断して玄関を目指す。玄関を目指す間しよんぼりしている様子のロゼさんにその理由を聞くと、「追い払いたかったけれど無理だった」との事。これまでは無言の圧力で追い出していたんだけれど、ロゼさん強面中年男性に立ち向かえた人は誰だろうと玄関に目をやる。

—— 居留守を使えばよかったなあ。

そんな事を心の中で愚痴りながら、今私の目の前に立っている人は以前試験部隊御披露目会で初めて出会った中堅デバイス機器メーカーの次期社長さんだった。相変わらず白い高級スーツを纏い、手には小さな白い箱と花束。後ろには護衛だろうガタイの良い黒スーツの男性が二人。取り合わせの違和感が凄くて鳥肌が立つけれど我慢。表情が薄いと言われている私の顔の表情筋を総動員させてどうにか笑顔を張り付ける。

一度会った事のある男性だけれど流石に家の中に招く訳にはいかず、玄関で対応する事は許してほしい。というか家の中を彼に見せたくないのが本音。どうも前回の接触で苦手意識が植え付けられているんだよね。一方的に話を聞かされるだけだったし。というか何で私の家の住所を知っているのか謎である。

「先日ぶりだ。突然驚いただろう？ 私は忙しい身でね、なかなかこうした時間が取れないのだがこうして忙しい間を縫って君に会いに来た訳だ」

感謝したまえと言いたげに彼は両手を広げて肩をすくめたんだけど、一方的過ぎな理由で返事をどう返したものと悩む。そして何故我が家の住所が判ったのか、これが一番の問題だった。

「……どうして住所が分かったか？ いろいろと手を回させてもらった。少し時間が掛かってしまったが、何、分からぬ事はない。君も調べようとすれば特定の人物の個人情報などいくらでも手に入る立場だろう？」

ええ、そうですね。伝手やお金を厭わなければ出来る事ですが、せめてアポを取って欲しかったですよ。住所も割れているのなら、連絡先も知っているでしょうに。それなら家ではなく外で会っていたでしょうし。

「君の事情は理解しているつもりだ。かの次元犯罪者、ジェイル・スカリエツティ”のクローンでその能力を余すことなく引き受けた君。……そして先日の試験部隊設立の立役者。聞けば彼等の装備は全て君の発案だと言うじゃないかっ！」

やっぱり私がスカさんのクローンだって事実は調べる人が調べれば直ぐにバレるのか。管理局や聖王教会の誰かがワザと漏らしている可能性もあるんだけど、今の所は追及する気はない。というか私はバレちゃっても一向に構わないし、スカさんや刑務所組の人たちや厚生施設組の人たちと面会してるし、見る人が見れば私が彼等の関係者だと推測するのは簡単だもん。そのうちに周知の事実になってそうだなあ、コレ。ま、それは置いておいて。

確かに装備の売り込みは私ですが、それでも試験部隊が設立されたのは色々な方々の助力と部隊の方々の努力の賜物ですよ。部隊に選ばされたメンバーは立候補者とデスクワーク主体の非魔導師の職員を引き抜いたと聞いていますから、あそこまでの形になったのは部隊の人たちの努力です。

「そうかそうか、君は謙遜する子なのだねっ！ これは結構。不遜

な人間は私は大嫌いなのだよ。ははは、やはり君は逸材だ。私が目を付けただけの事はあるっ！」

んー。手に持つている花束と小さな箱が彼の大仰な身振り手振りで振り回されて可哀そうになってくる。渡すために持つて来たのじやないかと思うけれど、未だに手渡す素振りはなく。……余計な事を言うど墓穴を掘りそうなのでお花と小箱の中身には悪いのだけれど黙っておこう。

「で、だ。なにか進展はあったかね？」

ちよ、気が早すぎるでしょう。私の目の前に立つ青年は。あのお披露目会から三週間しかたっていないし、風邪も引いてぶっ倒れていたから手がけている作業は進捗なんてしてないし、考える時間さえなかったのだから。現状はあのお披露目会から何も変わっていないんだよね。それを伝えると彼は顔をしかめて、だんだん不機嫌オーラをだしてるんだよね。困ったなあ、と心の中で深い溜息を吐きながらも嘘は言えないから。嘘を吐いちやうと回り回って自分に返ってくるからなるべく言いたくないんだ。それは前世のやさぐれていた子供時代に経験積みで痛い思いをしたので反省してる点なんだな。

「ごめんなさい」

「……………っ！」

ぺこり、と私が頭を下げれば一応は納得してくれたのか言葉をぐつと飲み込んだ、ように見えた。

「わ、分かった。だがしかし、私も忙しい身でね。早々に君の下に何度も訪れることは出来んのだよ。だからこそ急いで欲しいと言っているのだが……」

無理ですよ。私は便利な猫型ロボットでもないから、一晚寝て完成なんて荒業は出来ない。なんの変哲もない日常の一瞬で、ふと思いついたネタを吟味して考えて試行錯誤して形にし、試験運用をしてやっど誰かに手渡せる状態に持って行かなきゃ。開発と設計だけを行って、あとのバグ取りはそっちでよろしくね、と中途半端な事もしたくはないし。そんな事をして誰かが怪我を負ったりすれば、私はこうしてスカさんの真似事なんてしなくなるだろう。

「だが君にはその力がある。私の為、いや、この世界の為なんだよ。リンカーコアを持ち選ばれた人間が不条理を受けなければならぬ現状をなんとも思わないのか、君は」

なんだろう、どんな言葉を彼に投げても無限ループをしそうな気がしてきた。私の話を聞いてくれているのか聞いてくれないのか解らないまま、彼は彼の持論を垂れ流す。面倒になってきて彼の扱いがぞんざいになってしまってるのは、悪い気がするんだけど。後ろの護衛の人たちも彼の演説に呆れ返っているから、何時もの事なのかもしれない。喋るだけ喋って満足したのか『また来る』と言って欲しくない一番の台詞を残して白い高級スーツの青年は立ち去って行く。

「マスター」

「もどきましょう、ろぜさん」

後姿を見送った後、ロゼさんが心配そうに私の顔を覗きこむけれどもなにもない事を願うばかりだ。もし彼が暴走するなら管理局のお偉いさんに声を掛けて暴走を止めてもらおう。私は誰かを傷つけられる程の強さを持っていないから、他の人に丸投げだけれど。

———そういえば彼が手に持っていた花束と白い小さな箱は何だったのだろうか。

謎は謎のまままで終わってしまったなあ。

◇

地上本部から”拳銃型魔法発射装置”を量産配備をしたいんだけど、れど調達生産を私の所で任せても構わないかと、問い合わせが来た。お話の内容自体についてはすごく嬉しいことでも、自前の研究室の設備で大量生産は不可能と返答しておいた。そんな理由からなのか、それじゃあライセンス生産をしたいから利権を売ってくれないかと相談を持ちかけられたついでに、それが可能ならば業者さんの選定はどうしようかって相談を受けたんだよね。正直ここまで関わると思っ
ていなかったのが驚いていたんだけど、自分で手掛けたもの行く末は見届けたいからアドバイザーって立ち位置で最近は地上本部に結構顔を出してた。

「何度も足を運んでもらって済まないね」

現中将さんが苦笑いをしながら私に謝ってくれるんだけど、気にしないで欲しい。試験部隊結成後あまり試験部隊の有用性も実用性も立証していないまま量産配備に踏み切ったのは偏に目の前の中年の小父さんのおかげなんだから。どうも目の前の人は、現場に立たなければならぬ非魔導師の人たちの事を憂いていたみたい。犯人とかとぼったり鉢合わせした時などは、丸腰で立たなきゃならないのは危険極まりないし人質に取られる可能性がぐんと上がっちゃう。それなら少しでも身を守る術として拳銃型魔法発射装置を配備したいんだそう。あと現場からも声が上がっていることも配備を急ぐ理由の一つみたいで。

そりゃ誰だって足手まといにはなりたくはないだろうし、身を守る術が少しでもあるのなら武器を持ちたいよね。管理世界は質量兵器が禁止されているから、ナイフ等は魔法技術を応用したものだから非殺傷設定が付与されている為に武器にならないもんね。違法で手に入れることもできるんだけど、法を守らなきゃいけない管理局がソレをやっちゃうえば世間様から厳しい目で見られるのは当然だし。

「だいじょうぶです」

だって、ここまで関わっても良い事に感謝しなきゃ。ライセンス生産をとり行う業者さんや企業さんが手を抜けば出来るものは欠陥品だから、選定はゆっくりじっくり吟味して慎重にね。そうして地上本部のとある一室で陸の高官の人たちと私が選定した複数の業者さんたちで入札をもらう予定。最高評議会の件もあるので、クリーンな企業さんを選ばねばと躍起になってる陸の人たちを余所に私はのんびりと書類に目を通してた。

この後はこの後で、ピックアップした会社の工場見学と名目をうった下見がある。個人的には書類による選考よりも、こっちの方が気になってるんだ。設備が不十分だとマトモなもの作れないし、無いならないうで設備投資が可能かどうかも知っておかなきゃならないからね。

陸の高官の人たちは私の視点も含めて他にも気にしなきゃならな

いことが多いみたい。ブラック企業じゃないかとか、法を遵守してるかとか、社会貢献度とか、資本規模とか色々。ぶっちゃけしがらみがあり過ぎて面倒臭いと言ってしまうそうになるけれど、無視出来ない大事な事なんだよね。まあ、ブラック企業中のブラック企業と言つてもおかしくはない管理局に其処を突かれるのは向こうからすれば嫌かも知れないけれど。管理局は公の機関なので、お給料や福利厚生あたりはしっかりしているんだけど、忙しすぎてなかなか取れていない人が多いってのが現状らしい。だから陸の高官の人たちもどうにかできないかーって苦心している訳で。

ソコで私が開発した拳銃型魔法発射装置が目についたそう。非魔導師の人たちを訓練して、正規の魔導師と非魔導師の人たちの混成部隊を作ってみようって意見があるみたい。その辺りの兼ね合いから、私が納入する分だけでは間に合わない為に今回の助っ人要求だったりするんだよね。もちろん現場に出る非魔導師の人たちにも配備する事も急いでるみたいだけれども。

「さて、次に行こう」

老眼鏡を掛けて書類審査をしていた中将さんが丁寧に書類を揃えて机の端に置いて席を立つ。それを見た他の人たちも彼に倣ってぞろぞろと席を立った。私も遅れて椅子から下りようとするんだけど、なにぶん体が小さい為に時間が他の人たちよりも掛かってしまう。そんな様子を見てこの部屋に居た人たちが扉の傍で立ち止まり微笑ましく笑っているんだけど、恥ずかしいなあ。

そうしてそれよりも恥ずかしいのがロゼさんに抱っこされて移動する事だ。大人の歩幅と私の歩幅だと全然違うから、普通に歩くとかなりの差がついちゃって遅れるし迷惑を掛けるだけなので移動はロゼさんに任せているんだけど。これまた微笑ましそうに見られて恥ずかしいったらありやしないよ。自分で歩きたい所では有るんだけど、皆さん忙しい身分の人たちだし個人の我儘でその時間を奪っちゃうのはもっと駄目だろうから。

お値段が張りそうな黒色の公用車に乗り込んでクラナガンの街を御上りさんのように眺めながら、大手デバイス機器メーカーの工場に

着く。さつき言った通り、これから視察が始まるんだよね。きつと流れ作業だろうから職人技とか見たければ中小企業に行くべきだろうけれど、本日の視察には残念ながら含まれてはいない。けれども得るものがあるだろうし楽しみにしている所の一つ。

大手って凄いんだよね。効率化を図るために立ち位置とか立幅とか決められてて、一分一秒でも短くするための努力がそこらかしこに見られるから。そういうのを探すのも楽しいし、教えてもらうのもまた一興で。どんな発見があるのかなーって今からわくわくしてるんだ。

企業のお偉いさんと綺麗どころの受付嬢さんが笑顔で査察隊一行を笑顔で出迎えてくれるんだけど、きつと鬱陶しいんだろうなあ。私が逆の立場なら早く帰れって気持ちを抱いている事だろうし。それでもお仕事はお仕事なので、きちんと勤めを果たさなきゃいけないのがサラリーマンの辛い所。笑顔の仮面を張り付けて私たちを迎えてくれて、さつそく工場見学開始。一人ちんまいのが居るために驚いた様子を見せたけれど、誰も突っ込みを入れないのは優しさなのか、それとも私が陸の高官さんたちの誰かの子供だとも勘違いしているのだろうか。ちよつと腑に落ちない心を持ちつつも、大病院の院長回診よろしく大人数で工場に入ってラインで作業する従業員の人たちを見ればその気持ちは直ぐにどこかに吹っ飛んでいた。

—— 流石、大企業。

どこを見ても整理整頓されているし綺麗で安全面も配慮されているし流石だねえ、と一人で納得してた。ラインでも熟練者さんと初心者さんの人がすぐにわかるように腕章で色分けされているし、慣れてない人には指導員が付いている。

さつくりとラインを見た後は、企画開発部をちよろつと覗かせて貰えたんだよね。見ちゃ不味いものとかは隠してあるだろうけれど、見る人が見れば内容がわかつちやうからハラハラしていたんだけど、重要な事とかはちゃんと何処かに仕舞いこんでたみたいで深い溜息を一つ吐いた。気になるものを見ちやうとスカさん譲りの血が騒いじやうから、危ない危ない。その会社のトップシークレットを知らず

知らずのうちに盗んでいたとか洒落にならないんだもん。

本当、管理がきちんとして行き届いている会社で良かったよ。訴えられると確実に負けそうだし。残りの時間は企業のお偉いさんたちとの雑談で。これまた私の存在を誰も突っ込まずスルーされてただけれど、これが普通なのかなあ。触らぬ神にたたりなしと思われているのか、誰かが社会見学ついでに子供を連れて来たと思われているのか本当に謎。

この企業が終われば、また違う企業に赴く。今度は中堅メーカーさ。んで本社も工場も併設されて、さっきの企業とは全く違う趣で。違いを比べるの楽しいよね、と気楽に小父さまたちの後姿にくつついて行っていると思知った顔に出会ってしまった。

「ん、君は……。何故、此処に？」

白い高級スーツを着込んだ中堅デバイス機器メーカーの次期社長さんだった。私も同じ台詞を彼に言い返したい所だけれど、嗚呼、そうだったと思ひ出す。この会社、彼の所だったんだ。ぬかったなあ、と頭を抱えても時すでに遅し。あんまり会いたくなかつたんだけれど、会いたくない人物に出会ってしまうのは万物の法則みたいで。

「おひさしぶり……。でもないですが、こんにちは」

偶然だったのか必然だったのかはわからないけれど、挨拶を交わして一礼する私。驚いた様子を見せているから知らなかつた可能性の方が高いかな。彼の場合、知っていたら喜々として最初に出迎えてくれそうだし。

「嗚呼、そうだな。先日振りだ。それよりも進捗はどうだね？」

中将さんが彼の言葉を訝しむように聞いているんだけど、私たちの会話に割り込むような無粋をするような人ではないので突込みは入らないんだけど、結構厳しい顔をしてるんだよね。今は手一杯だから彼が言う事は全く持つて手つかずのまま取り掛かってもないから、彼の勇み足なんだけれども。

んーどう答えたものか。何も進んでないと返答すれば、彼はまた自分の持論をこの場で長々と繰り広げそうなんだよね。それを中将さんを始めとした人たちは、場の空気の変化に怪訝な顔をしている。

「なにをしているっ！」

と足早に私たちの下へとやって来たのは、くたびれたツナギを着込んだ白髪交じりの男性だった。次期社長にそんな台詞とどうどうと吐ける人は限られてくるから、身内の人なのかな。すぐさま『失礼しました』と深く頭を下げる男性は油まみれの手を彼の頭の上に置いて無理矢理に一緒に頭を下げた。

「愚息が失礼を。申し訳ありません」

申し訳なさそうに中将さんに言うツナギ姿の小父さまは、彼を何処かにやりそのまま工場の説明に入ってくれた。社長さんだつていうのに今だ社員さんたちと一緒に工場に入っているそうで、一緒に開発やら生産に携わり四苦八苦しているんだって。

機材の新設なんかもやりたいそうなんだけれど、従業員を抱えている最中だからなかなか踏み切れないでいるらしい。こういう声を聞くと大企業と中小企業の差がでてくるよなーって。下請け事業も受けているだろうから、大手に逆らう事は中々できる業ではないから。取引先の無理を聞かなきやならない事もあるだろうし、会社運営って大変だ。

そんな社長さんは、職人としての腕は超一流。手先は器用だし、デバイス機器についての知識も豊富。豊富な知識からの新しい技術や革新へ繋げる発想も聞いてて面白い。この会社が一代でここまで大きくなれたのは偏に、ボロボロのツナギを着込んだ社長さんの手腕なんだろうね。無理を言われる事もあるみたいだけれど、働いている人たちが楽しそうなんだもん。

いいなあ、こういう雰囲気と目を細めながら眺めていたら『次に行こう』と中将さんの一声が。もう少し見ていたかったのだけれど仕方ないか。結構、スケジュールを詰めているみたいだし私の我儘で忙しい中将さんたちが困る事になつてもいけないし。

落札する企業がどこになるのかはわからないけれど、こういう人の所なら安心して任せられそうだなあ。